多久市歴史文化基本構想

平成 30 年 3 月

多　　久　　市

序

歴史の遺産、文化の輝きは一朝一夕には成り立たず、また、歴史・文化は短兵急な金銭投資で瞬時に獲得できるものでもありません。歴史があるからこそ醸し出される独特の風格などは、初めて訪れる人にも貴重な印象を残すものになります。まして、歴史と文化を良く知ることは地域への「誇り（プライド)」「愛郷心」の礎としても重要です。

創建 310 年を迎える孔子廟（多久聖廟）を擁する多久市。その市域にある文化財・歴史遺産を後世に継承していくために、そして温故知新の観点からも貴重な資料として未来へつなげるためにも、歴史と文化に関する基本的なマスタープランが重要です。

多久市は、佐賀県の中央部に位置し、市の北東部にそびえる脊振山系の天山をはじめ、東部は両子山、北西部には八幡岳・女山(船山)、また南部には鬼の鼻山山系が位置するなど、市境の四方を山に囲まれた盆地状地形をなしています。

市域の各所には、絶滅危惧種の生物等の生息をはじめ、今なお多様で豊かな自然が残り、それは市民や訪れる人に四季折々の多彩な様相を見せてくれます。

歴史に目を向ければ、当地では、石器製造の素材となる安山岩が豊富に産することから、旧石器・縄文時代にはすでに人の営みが始まっていたとみられており、西日本最大規模の石器工房群があったとも分析評価されています。

さらに、近世においては、佐賀平野側から県北西地域や県西地域につながる往還及び分岐点が整備されていたことにより、人の往来が盛んであったことが想像されます。

しかも財政難の時代に、学問所と孔子廟の建立整備が発起され、学びの気風を地域に生み出しています。困難な中に人づくりに大きな力を注ぎ、人材を輩出しました。

そのような自然と歴史の環境のなか、多久の人々は他地域からの文化流入を受容しながら、またその時々の恵みを活かしながら独自の文化を育んできました。

市内各所に残されている多くの文化財や遺跡は、その歴史と文化を現在に伝えてくれるものです。それらは、今日の私たち多久市民の暮らしに密接に関連もしており、時代が移り、歳月を経た今日でも「多久らしさ」を支える基礎をなすものと言えます。

多久市では、郷土ならではの「歴史文化」を後世に継承し、多久らしさを基にまちづくりに活かすため、平成 28 年度から 29 年度にかけて多久市の文化財保護と活用の方向性を示すマスタープランとして「多久市歴史文化基本構想」を取りまとめました。

この基本構想が、市民の皆様にとっても郷土に抱く誇りにつながり、また、魅力あるまちづくりにも広く活用されていくことを切に願うものであります。

結びに、この基本構想策定にあたり、熱心に議論賜りました多久市歴史文化基本構想策定委員会の委員の皆様はじめ、ご意見をお寄せいただいた関係者、ご協力頂いた多くの嘱託員、市民の皆様に心からの御礼を申し上げ、ご挨拶と致します。

平成 30 年 3 月

多久市長　横尾　俊彦

例　言

１．本書は多久市の歴史文化を保存・継承し、まちづくりに活かすことを目的として策定した『多久市歴史文化基本構想』です。

２．本構想は平成 28 年度文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした地域活性化事業）・平成 29 年度文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産総合活用推進事業）国庫補助を受け策定しました。

３．本構想の編集、執筆は多久市教育委員会教育振興課及び、事務局から委託を受けた株式会社修復技術システムが行いました。

【表紙の写真】

「平成 29 年度第 1 回多久百景写真コンテスト入賞作品」（公益財団法人孔子の里主催）

写真奥左の「川打家住宅」（国重要文化財）および右の「森家住宅」（市重要文化財）は、旧伊万里往還女山宿の景観を伝える「肥前くど造り民家」である。市民に憩いを提供する場の中心として、周囲の自然とともに親しまれている。

目　次

第１章　歴史文化基本構想策定の目的と行政上の位置づけ 1
１．策定の背景と目的 1
（１）背景　―多久市内の歴史文化の現状― 1
（２）本構想の目的 2
２．策定作業の経緯 2
（１）策定組織 2
（２）歴史文化に関するアンケートの経緯 4
（３）パブリックコメント 4
３．行政上の位置づけ 5
（１）国の諸制度による計画・事業 5
（２）多久市の上位・関連計画 5
１）上位計画 5
２）関連計画 5
４．策定の効果 7

第２章　多久市の概要と歴史文化の特徴 8
１．自然・社会環境 8
（１）位置 8
（２）自然環境 9
１）地形 9
２）気象 10
（３）社会環境 10
１）人口・世帯 10
２）土地利用 11
３）産業 12
４）交通網 14
５）文教施設等 14
６）公園・スポーツ施設・観光施設等 16
２．歴史環境 17
（１）原始（旧石器～古墳時代） 17
（２）古代（飛鳥～平安時代） 18
（３）中世（鎌倉～安土桃山時代） 19
１）初代宗直と「前多久」 19
２）元寇から南北朝期、その後の少弐氏の衰退 19
３）前多久氏の滅亡と「後多久」の起こり 19
４）文禄・慶長の役と「後多久」 20

（４）近世（主に江戸時代） 20
１）後多久歴代領主とその事績 20
２）島原の乱と多久 21
３）長崎警固と多久 21
４）戊辰の役と多久 21
５）「東原庠舎」・「多久聖廟」の創建 21
６）肥前磁器陶器の源流としての多久 21
７）筑紫箏（つくしごと） 22
８）多久の交通・駅、石炭 22
（５）近現代（明治、大正、昭和、平成） 22
１）村の成立と多久市の誕生 22
２）東原庠舎の閉鎖とその後 23
３）炭鉱の町多久 23
４）多久の交通 24
５）文教の里を目指したまちづくり 24
３．歴史文化の現況 25
（１）多久市の歴史文化 25
１）指定・登録文化財 25
２）主な祭り行事 29
３）有形文化財 31
４）その他 34
（２）各町の歴史文化の現況 35

第３章　歴史文化把握の方針 45
１．文化財調査の経緯とその履歴 45
（１）これまでの文化財調査 45
１）文化財調査以前 45
２）多久における文化財調査と保護の契機 45
３）市史編さん事業による市内の文化財総合調査 46
４）市内埋蔵文化財調査のはじまり 47
５）文化財保護審議会設置と文化財指定に向けた調査 48
６）資料館を拠点とした古資料等の調査 49
（２）文化財調査の評価と課題 50
１）多久で特に進められた文化財調査 51
２）未指定文化財等を含む文化財把握の今後の課題 51
（３）本構想策定における基礎調査の成果 53
１）基礎調査実施の経緯 53
２）行政区など調査対象地域と調査地点に関する整理 53
３）基礎調査の方法と調査時期 55

４）基礎調査結果の概要 56
５）分析 57
２．市内文化財を捉える視点の導入　郷土学：「ふるさと多久学」 64
（１）「ふるさと多久学」の提唱 64
１）ふるさと多久学の契機 64
２）ふるさと多久学の広がり　【ふるさと多久学】と【多久学】への展開 65
３）多久学・論語に学ぶ教育活動 66
（２）「ふるさと多久学」の新視点と深化の方向性 68
（３）地域・学校・行政の連携 69
１）地域からの保護推進 69
２）学校との連携（体験学習等を通じた情報収集） 69
３）行政による文化財パトロールほか 69
３．把握のための情報共有と防犯・防災 70
（１）文化財情報の受信と共有システム 70
（２）文化財を見守る仕組み 70

第４章　文化財の保存・活用の基本方針 71
１．目標と基本方針 71
２．基本方針１　文化財を総合的に把握し、新たな価値をみつける 72
（１）「ふるさと多久学」の深化 72
（２）文化財の掘り起こしと未指定等文化財の計画的な指定・登録 72
（３）文化財と周辺環境の一体的把握 72
（４）文化財の修理・補修 72
３．基本方針２　文化財を守り、継承するための基盤を整備する 73
（１）担い手の役割 73
（２）協働の場づくり 73
（３）文化財の担い手情報の整備 73
（４）担い手の育成と活動資金 73
（５）文化財活用諸施設と環境の整備 74
４．基本方針３　文化財を効果的に利活用して、まちづくりに役立てる 74
（１）歴史文化を活用した学校教育・生涯学習の拡充 74
（２）公開と情報発信 74

第５章　関連文化財群 75
１．関連文化財群のテーマの設定 75
（１）基本的な考え方 75
（２）関連文化財群の５つのテーマ 76
２．ストーリー 77
（１）石器づくりの大遺跡群 77

１）ストーリー 77
２）構成している主な文化財とその周辺環境・担い手 77
３）現況と課題 77
（２）多久領主の文化遺産 78
１）ストーリー 78
２）構成している主な文化財とその周辺環境・担い手 78
３）現況と課題 78
（３）儒学を中心とした里づくり 80
１）ストーリー 80
２）構成している主な文化財とその周辺環境・担い手 80
３）現況と課題 80
（４）旧往還の沿道景観 82
１）ストーリー 82
２）構成している主な文化財とその周辺環境・担い手 82
３）現況と課題 82
（５）炭都・多久 84
１）ストーリー 84
２）構成している主な文化財とその周辺環境・担い手 84
３）現況と課題 84

第６章　歴史文化保存活用区域の考え方 86
１．区域の基本的な考え方 86
（１）区域の必要性とその要件 86
（２）歴史文化保存活用区域とその位置 86
（３）各区域の概要 89
２．歴史文化保存活用区域の特徴 89
（１）鬼の鼻山山麓区域 89
（２）桐野区域 90
（３）西ノ谷区域 90
（４）唐津往還の沿道区域 91
（５）伊万里往還の沿道区域 91
（６）多久聖廟・多久（若宮）八幡神社とその周辺区域 92
３．歴史文化保存活用区域の保存活用の方向性 93
（１）関連行政計画における区域の扱い 93
（２）区域の保存活用の方向性 93
（３）各区域の保存活用の担い手 95

第７章　保存活用（管理）計画の考え方 96
１．基本的な考え方 96

（１）基本的枠組み 96
（２）保存活用（管理）計画を策定する主体 97
（３）文化財（群）とその周辺環境の整備方針 97
２．関連文化財群と歴史保存活用区域の保存活用（管理）計画に関わる事項 98
（１）関連文化財群の保存活用（管理）計画に関わる事項 98
（２）歴史保存活用区域の保存活用（管理）計画に関わる事項 98

第８章　文化財の保存・活用を推進するための体制整備の方針 99
１．関係団体の活動 99
２．中心組織の必要性と役割 100
３．行政の役割 101
４．学校の役割 102
５．市民の役割 102

関係資料
［第２章　２．歴史環境（補足）］ 104
［第２章　３．歴史文化の現況（補足）］ 110

第１章　歴史文化基本構想策定の目的と行政上の位置づけ

１．策定の背景と目的

（１）背景　―多久市内の歴史文化の現状―

「歴史文化」とは、文化財とそれに関わる様々な要素とが一体となったものを指す。
文化財に関わる様々な要素とは、文化財が置かれている自然環境や周囲の景観、文化財を支える人々の活動に加え、文化財を維持・継承するための技術、文化財に関する歴史資料や伝承等であり、文化財の周辺環境と言い換えることができる（文化庁「歴史文化基本構想」策定ハンドブック）。

佐賀県のほぼ中央に位置する多久市は、昭和 29 年に旧 1 町 4 か村を合併して誕生した。現在、市内は 5 か町からなり、本多久の通称がある多久町に加え、市域内の所在位置から「東南西北」を付した東多久町・南多久町・西多久町・北多久町の 4 町がある。それぞれの町には、地域が辿ってきた、特色ある歴史に培われた多種多様な文化財が多く所在する。平成 30 年 3 月現在、市内には 46 件が国・県・市の文化財に指定されており、また 2 件が国の登録文化財である。

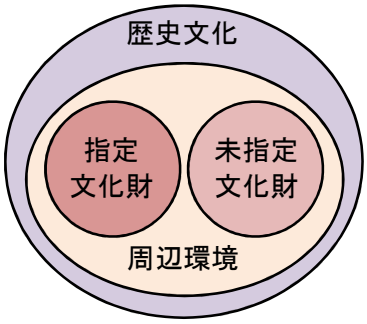
この文化財は、各地域で長い歴史を経て育まれてきた地域の歴史や文化の理解に欠くことができない財産であり、それは地域のみならず広く国民および人類が共有すべきものである。

これまで多久市では、当市の歴史と文化の特色を示した、重要性の高い文化財について指定・登録を行なうことでその保護に努めてきた。そして、文化財の所有者や、地域における維持・管理等の負担軽減のため、必要に応じて予算措置や、補助制度の活用によって、文化財の適切な保護に取り組んできた。また、市民が文化財を通じ郷土の歴史と文化に親しむことで市民生活の向上に資するため、公開等の活用事業を推進してきた。これらの取り組みについては、時代のニーズとしてみても一定の成果をあげてきたと考えている。

しかしながら、一方では、文化財を指定・登録することによって、文化財自体の価値のみが評価強調され、本来、文化財が備えている歴史的経緯や置かれた周辺環境のもつ価値などから、切り離されて認識されるという状況もみられる。また、結果として指定文化財だけが価値を有するものとの印象を、市民に広げてきた可能性もある。

本市には、古くは旧石器時代からの遺跡をはじめ、有形・無形、また指定の有無を問わず、多くの文化財と、その周辺環境を含む歴史文化が所在しており、その件数は 2,544 件（平成 20 年刊行多久市史第 6 巻「集落史編」集計）におよぶ。この数に対し、指定・登録文化財 48 件は全体の 1.9%にとどまっており、大半が未指定ということができる。

現在の歴史文化は、それぞれの所有者、または地域がその保存に努めているものの、少子高齢化や人口減少の影響により、地域に古くから継承されてきた文化財や、これを取り巻く周辺環境の維持・管理の継続が困難になりつつある。それら多くの歴史文化を将来にわたり保護・継承していくために、新たな取組みを示す時期と考えられる。



資料 1-1　文化財と歴史文化の関係

（２）本構想の目的

「歴史文化基本構想」とは、地域に存在する文化財を、指定・未指定にかかわらず幅広く捉えて、的確に把握し、文化財をその周辺環境まで含めて、総合的に保存・活用するための構想であり、地方公共団体が文化財保護行政を進めるための基本的な構想となる。（文化庁 HP）

近年、社会の急速な変化は、地域における歴史文化の担い手の減少や、見守り手の不在による防災・防犯上の問題等、保護のうえでのさまざまな課題を浮き彫りにしている。

これまで多久市には、地域の歴史文化を総合的な視野でとらえ、その保護と継承、地域づくりへの活用を目的とした構想や計画はなく、文化財それぞれにおける個別的な対応にとどまっていた。

しかし、上記のような課題等を受け、多くの歴史文化を有している多久市にとって、地域の変化を踏まえた上での、考えを明らかにする必要性が生じている。それを広く市民に示して共有するために、文化財保護を推進するためのマスタープランとして歴史文化基本構想を策定する。

本構想は、様々な歴史文化を、現代の多久市につながる視点から把握し、地域の魅力をわかりやすく伝える、関連資産群からなるストーリーに整理・再構成し、そのストーリーを活かして歴史文化の認知と向上を図り、保護・継承に取り組んでいくこととする。また、重要な地域に関して「歴史文化保存活用区域」の考え方を適応した、地域・まちづくりに活かすうえでの重点的地域を設定すると共に、その保護と管理（活用）の方針を含めて基本的な考えを示すものである。

２．策定作業の経緯

（１）策定組織

歴史文化基本構想策定については、多久市全域の歴史文化に係る保存・管理や整備・活用を念頭に基本構想を定めるため、考古学や文化財保護審議委員の専門家などで構成する「多久市歴史文化基本構想策定委員会」を設置した。

多久市歴史文化基本構想策定委員会

委　員　長	武田　耕一	多久市文化財保護審議委員	
副委員長	吉浦啓一郎	多久「孔子の里」芸能保存会顧問	
委　　員	西村　隆司	多久市郷土資料館長（平成 29 年 4 月まで）	
〃	服部　政昭	多久市文化財保護審議委員 公益財団法人孔子の里常務理事	
〃	田島　龍太	多久市文化財保護審議委員 （唐津市末盧館館長〔兼〕唐津城館長　平成 29 年 3 月まで）	
〃	野田　義雄	多久市嘱託員会会長	
〃	野中　保圀	多久市観光協会会長	
〃	杉原　敏之	多久市文化財保護審議委員 （福岡県教育庁総務部文化財保護課）	
〃	上瀧幾久生	多久市商工観光課長	
〃	松尾　　智	多久市教育委員会生涯学習課長	（平成 29 年 3 月まで）
〃	陣内　紀朗	多久市教育委員会教育振興課長	（平成 29 年 4 月から）

指　導　助　言	文化庁文化財部広域文化観光・まちづくりグループ		
	佐賀県教育庁文化財課文化財指導・世界遺産推進担当		
助　　言	角縁　　進	佐賀大学教育学部 教授	
	福井　尚寿	佐賀県立博物館・美術館 副館長	
	三島　伸雄	佐賀大学大学院工学系研究科 教授	
	小野　将史	佐賀県教育庁文化財課所属	
事　務　局	田原　優子	多久市教育委員会 教育長	
	菊池　清隆	多久市教育委員会教育振興課長補佐	
	福島　　健	〃	教育振興課文化スポーツ係長
	岩永　雅彦	〃	〃　文化スポーツ係主査
	高塚　啓介	〃	〃　文化スポーツ係主査
	藤井　伸幸	多久市郷土資料館長（平成 29 年 6 月から）	

第１回多久市歴史文化基本構想策定委員会

日時：平成 28 年 10 月 27 日　　場所：多久市中央公民館　2 階　視聴覚室

内容：委員委嘱状交付・歴史文化基本構想についての説明

第２回多久市歴史文化基本構想策定委員会

日時：平成 29 年 1 月 10 日　　場所：多久市中央公民館　2 階　視聴覚室

内容：基本構想構成案について

第３回多久市歴史文化基本構想策定委員会

日時：平成 29 年 2 月 28 日　　場所：多久市中央公民館　2 階　視聴覚室

内容：ふるさと多久学との関係性、市内の現況、行政区域内文化財等の所在確認調査について

第４回多久市歴史文化基本構想策定委員会

日時：平成 29 年 5 月 12 日　　場所：多久市中央公民館　2 階　視聴覚室

内容：第 1 章～第 4 章について

第５回多久市歴史文化基本構想策定委員会

日時：平成 29 年 7 月 12 日　　場所：多久市役所　2 階　第三委員会室

内容：第 3 章～第 4 章について

第６回多久市歴史文化基本構想策定委員会

日時：平成 29 年 9 月 7 日　　場所：多久市中央公民館　2 階　視聴覚室

内容：第 4 章～第 5 章・アンケート調査結果について

第７回多久市歴史文化基本構想策定委員会

日時：平成 29 年 11 月 1 日　　場所：多久市役所　2 階　第三委員会室

内容：第 6 章～第 7 章について

第８回多久市歴史文化基本構想策定委員会

日時：平成 29 年 12 月 14 日　　場所：多久市中央公民館　2 階　視聴覚室

内容：第 8 章について

第９回多久市歴史文化基本構想策定委員会

日時：平成 30 年 1 月 18 日　　場所：多久市中央公民館　2 階　視聴覚室

内容：基本構想全体について

第 10 回多久市歴史文化基本構想策定委員会

日時：平成 30 年 3 月 6 日　　場所：多久市中央公民館　2 階　視聴覚室

内容：パブリックコメント実施報告・最終確認について

（２）歴史文化に関するアンケートの経緯

『多久市歴史文化基本構想』の策定にあたって、平成 28 年度に実施した「行政区域内文化財等の所在確認基礎調査」の結果を基礎とした。減少したが顕著であった「祭り・行事」に関し、その取り止めに至った理由や、あるいはそれ以前に維持・継承のため、どのような工夫や試みが地区内で行なわれているのか、アンケートにより地元の声を聞くことを試みた。

アンケートは、平成 29 年度策定事業で先の基礎調査結果の再確認（補足調査）と同時に多久市嘱託員に配布依頼し、のち回収したものである。

依 頼 日：平成 29 年 7 月 27 日（木）

場　　所：各町嘱託員会（各町公民館）

結果報告：平成 29 年 9 月 7 日（木）

（平成 29 年度 第 3 回 多久市歴史文化基本構想策定委員会）

（３）パブリックコメント

多久市歴史文化基本構想について市民に幅広い意見を聴取し、より良い構想策定の参考とするため、パブリックコメントを募った。

閲覧・意見提出期間：平成 30 年 1 月 30 日～平成 30 年 2 月 28 日

意 見 提 出 方 法：多久市ホームページならびに多久市役所、中央公民館、各地区公民館、多久市教育委員会教育振興課で原案を公開し、E-mail、ファックス、郵便、窓口で意見を受け付けた。

３．行政上の位置づけ

（１）国の諸制度による計画・事業

歴史文化基本構想の他に制度・事業として、国土交通省・農林水産省・文部科学省の「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり法)」（平成 20 年施行）に基づく計画の認定、さらに文化庁の「日本遺産（Japan Heritage)」の事業がある。

（２）多久市の上位・関連計画

１）上位計画

「多久市総合計画」（平成 23 年）

多久市で策定された「第 4 次多久市総合計画前期（平成 23 年)」および「同後期（平成 28 年）において、まちの将来像「―緑園に輝く― みんなで創る　文教・安心・交流のまち　多久」の達成を図るために定めた４つの基本目標の 1 番目に、『人と文化が輝く　孔子の里・文教のまち　多久』が掲げられ、実現のための、「学校教育の充実」、「伝統文化の継承と文化芸術活動の推進」の 2 つが施策項目となっている。

「学校教育の充実」では、既に取り組まれている「ふるさと多久を知る・学ぶ・体験する・発見する地域学習」等の「多久学」を推進するとしている「伝統文化の継承と文化芸術活動の推進」では、歴史的建造物・先覚者資料・古文書資料・天然記念物・民俗文化財・埋蔵文化財等の文化遺産の保存・保護に努めるとし、『文化財保存活用計画』を策定し、多久聖廟を含めた文化財の活用について計画的な取り組みが必要であると示されている。

２）関連計画

「多久市生涯学習のまちづくり推進計画」（平成 11 年 3 月）

「ふるさと多久学」を核とした生涯学習のまちづくりとして示されている。その推進のための、「多久まるごと学び舎」システムづくりの施策において、多久市自体がまるごと美術館や博物館であり、それらを学習の場・学習資源として活用すると共に、また、「魅力ある地域づくり」を推進するために、郷土伝承芸能の保存・育成、地区の資源を活用した魅力ある地域づくりの取組みが掲げられている。

「多久市都市計画マスタープラン」（平成 16 年 3 月）

４つのまちづくりの目標のうち、「歴史や自然、文化を活かした美しいまちづくり」では、「“孔子の里”づくりの推進」、「豊かで美しい自然環境の保全・活用」が示されている。

“孔子の里”づくりの推進では、史跡・旧跡・伝統芸能などの歴史・文化遺産が本市には多く残っており、特に多久聖廟はシンボル的存在になっている。それら歴史遺産を保存・活用するとともに、本市の観光資源として活用し、後世へ伝承する歴史と文教の里づくりが、挙げられている。

豊かで美しい自然環境の保全･活用では、本市は市街地を囲む山々、大地に恵みをもたらす河川、広大な田園地帯、山間部の果樹園地、棚田等、豊かで美しい自然に囲まれている。これらは、水と緑に囲まれた本市の田園景観を形成する重要な要素となっている。

「多久市観光振興計画」（平成 23 年 1 月）

同計画において「孔子の里の観光振興　①多久聖廟・東原庠舎、②西渓公園、③聖廟・西渓公

園周辺」が、観光振興戦略の一つに示されている。具体的には、聖廟の開廟・公開の推進、東原庠舎出身の偉人の情報発信、同舎の宿泊・交流の場としての活用、史跡唐人古場窯跡の整備、梶峰城跡の活用等の検討、等があげられている。

「多久市環境基本計画」（平成 26 年 3 月）

5 つの環境目標をもつ多久市環境基本計画（平成 26 年 3 月）において、その一に「潤いのある生活の土壌となる快適環境の創造」と、そのなかの基本施策に、「文化財と歴史的まちなみの利活用」が掲げられている。その具体的な施策として、「文化財の保全」と「文化的資源の活用」があり、その具体的な取り組みでは、「祭りや年中行事の実施など、活きた文化財の保全の継続」、「文化財の保存事業の推進」、「公益財団法人孔子の里事業への支援」等が示されている。

「多久農業振興地域整備計画書」（平成 26 年 3 月）

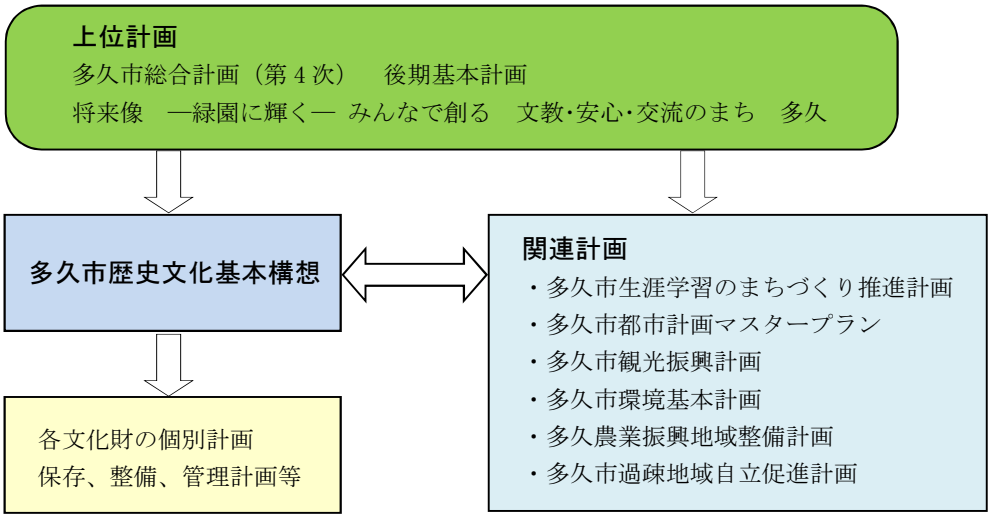
山麓・山間に点在する小規模な水田や棚田、樹園地など、土地条件が悪い農地についても、農地の集団化、高度利用を図るため、中山間地域総合整備事業や小規模土地改良事業等を推進し、区画整理、農道整備等により農業生産の省力化及び近代化を図る必要があるとしている。

「多久市過疎地域自立促進計画」（平成 28 年 3 月）

地域文化の振興等の項目の中に、「多久市文化連盟と連携を深め、文化環境の醸成、郷土文化の振興を図ります」「有形・無形の貴重な文化財の保護・保存・公開を推進し、伝統文化の保存・継承に努めます。また、それらの文化財や本市の賢人を生かしたまちづくり・ひとづくりを推進します」「美しい景観の保存や整備を図ります」と述べられている。

主要施策として、文化連盟・各種団体との連携・支援、公益財団法人孔子の里事業への支援、地域の文化・伝統芸能の保護の推進、文化財の保護・保存・公開、ふるさと賢人の顕彰事業の推進、文化財の保存事業の推進、多久聖廟周辺の歴史的雰囲気の醸成の 7 点が挙げられている。

事業計画として、多久市の主体による、過疎地域自立促進特別事業の文化振興事業（文化振興に寄与する団体や事業運営を支援し、学芸文化の振興を図る）がある。



資料 1-2　多久市歴史文化基本構想と他の計画との関連

４．策定の効果

各地方公共団体が「歴史文化基本構想」において、文化財保護の基本方針を定めること、さらに、文化財をその周辺環境も含めて総合的に保存・活用するための方針等を定めることにより、「歴史文化基本構想」が文化財保護のマスタープランの役目を果たすことが期待されます。加えて、文化財を生かした地域づくりに資するものとして活用されることも期待されます。
（文化庁 HP）

本歴史文化基本構想は、多久市総合計画を補完し、他の関連計画と併せて、実効的に推進させていくことができ、以下の事項について役立つと期待できる。

・文化財の保護・継承では、多様な歴史文化を顕在化させ、その価値を見出し、それらの適切な保存・活用計画を図る指針となり、住民の地域への理解、コミュニティの再生のきっかけづくりに寄与できる。
・地域の魅力増進で、「歴史文化保存活用区域」を整備することにより、文化の薫り高い空間の形成に寄与できる。
・学校教育では、郷土学習の基礎的資料として提供し､授業に役立てることができる。
・観光振興では、その振興計画と連携して、歴史文化を楽しんでもらう交流人口の増加をはかり経済的な地域の活性化に貢献できる。
・開発等では、行政の開発部局や民間開発業者、地域住民に対して歴史文化の保存を明示して、抑制も含めた開発の誘導ができる。
・策定の過程およびその後の各事業の推進において、他の行政分野との連携が求められ、組織内で総合的なまちづくりの体制が可能となる。
・「歴史まちづくり」や「日本遺産」などの事業に取り組む際には基礎資料として活用ができる。

また、本構想策定に関する国の支援方策として、平成 29 年度より文化遺産総合活用推進事業があり、文化財調査や文化財データベースの作成、普及啓発のためのワークショップ、シンポジウムの開催、文化財の適切な管理を行うための研修の実施等、「歴史文化基本構想」の策定に伴う取組のみならず、策定後の取組についても歴史文化基本構想を活用した観光拠点づくり事業による支援を受けることができる。

第２章　多久市の概要と歴史文化の特徴

１．自然・社会環境

（１）位置

多久市は佐賀県のほぼ中央に位置し、東は小城市、北は唐津市、南から西にかけては江北町、大町町、武雄市と接している。多久市中心部から県都佐賀までは自動車で約 30 分、福岡市までは自動車で高速道路を利用して約１時間の距離にある。市内は、東多久町・南多久町・多久町・西多久町・北多久町の 5 か町からなり、昭和 29 年に旧町村を合併し市制を施行している。

多久市の総面積は 96.93 km^2 で、東西 14.96km、南北 11.60km の距離を有している。

四方を山に囲まれた盆地のまちであり、市の中央部に広がる平坦地には牛津川（うしづがわ）をはじめとする大小の河川が大地を潤し、緑豊かな田園地帯を形成している。このような地勢的特徴によって、本来は陸路の要衝として発展してきたのである。

資料 2-1　多久市の位置

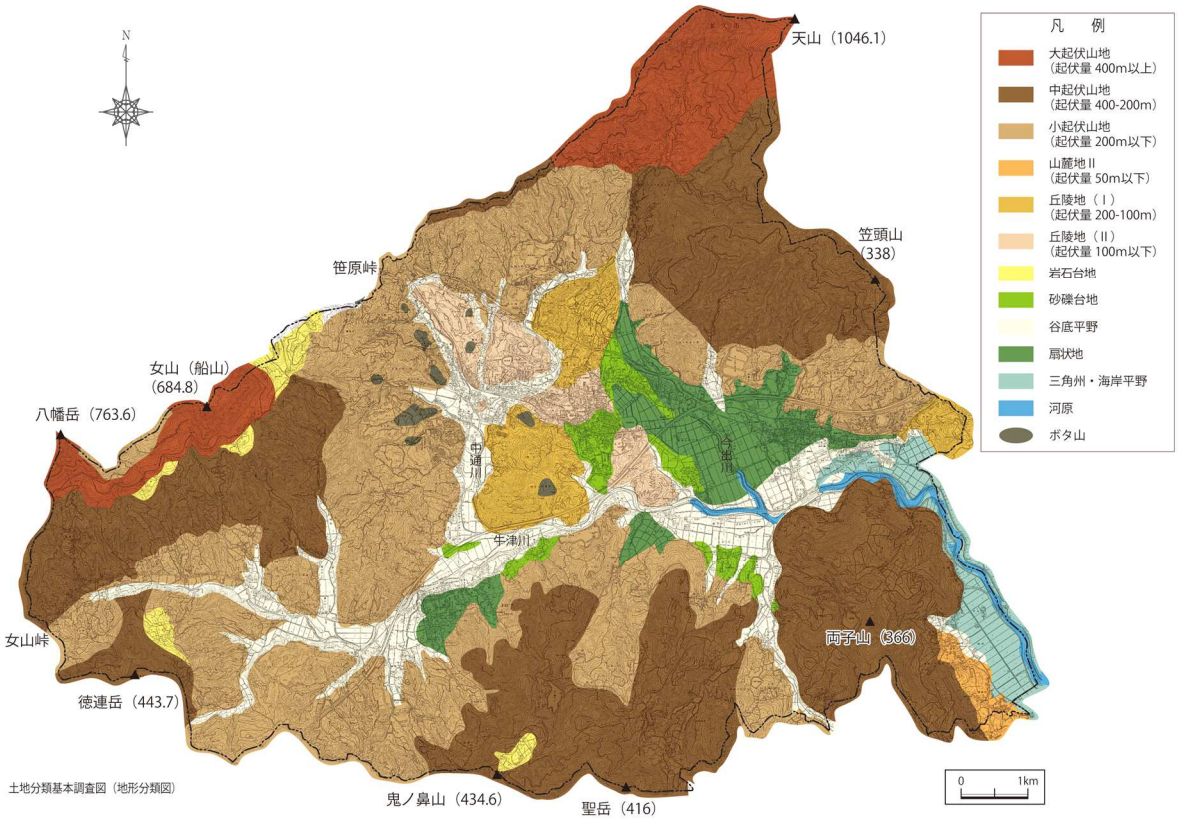
（２）自然環境

１）地形

多久市は、北の市界に位置する天山（1,046m）、東の笠頭山（338m）、南の両子山（366m）、聖岳（416m）、鬼ノ鼻山（434.6m）、徳連岳（443.7m）、西には八幡岳（763.6m）、女山（船山）（684.8m）などの山々に四方を囲まれた盆地状の地形となっている。

中央部は牛津川によって開かれた谷底平野の平坦地が広がっているが、周辺部にかけては丘陵地や山間地と変化に富んだ地形となっている。また、市域の西側と南側には岩石台地が形成されている。

本市の南東部には佐賀平野が広がり、そこを流れる六角川水系の水源域に近い山よりの場所に位置し、流路方向も様々な支川が存在している。これらは牛津川に合流し、全体的には西から東に向かって流れ下りながら、六角川と合流し、最終的には有明海に注いでいる。

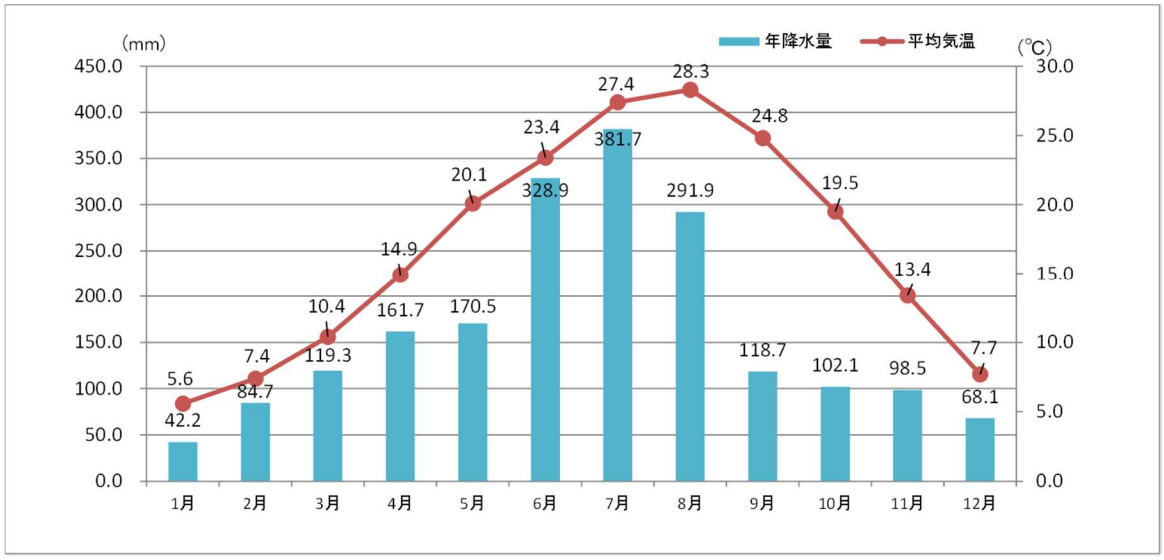


資料 2-2　多久市地形分類図

写真 2-1　女山（船山）から望む多久の景観
（北多久町方面）

２）気象

多久市の気候は大きくは内陸型気候区に区分される。平年値（2007～2016 年）における年間平均気温は 16.9℃で全般に暖かく、温和な気候である。また、年間降水量は 1,968.3㎜ で降雨にも恵まれている。



資料 2-3　気象状況（2007～2016 年の平均値）（気象庁 HP 白石アメダス）

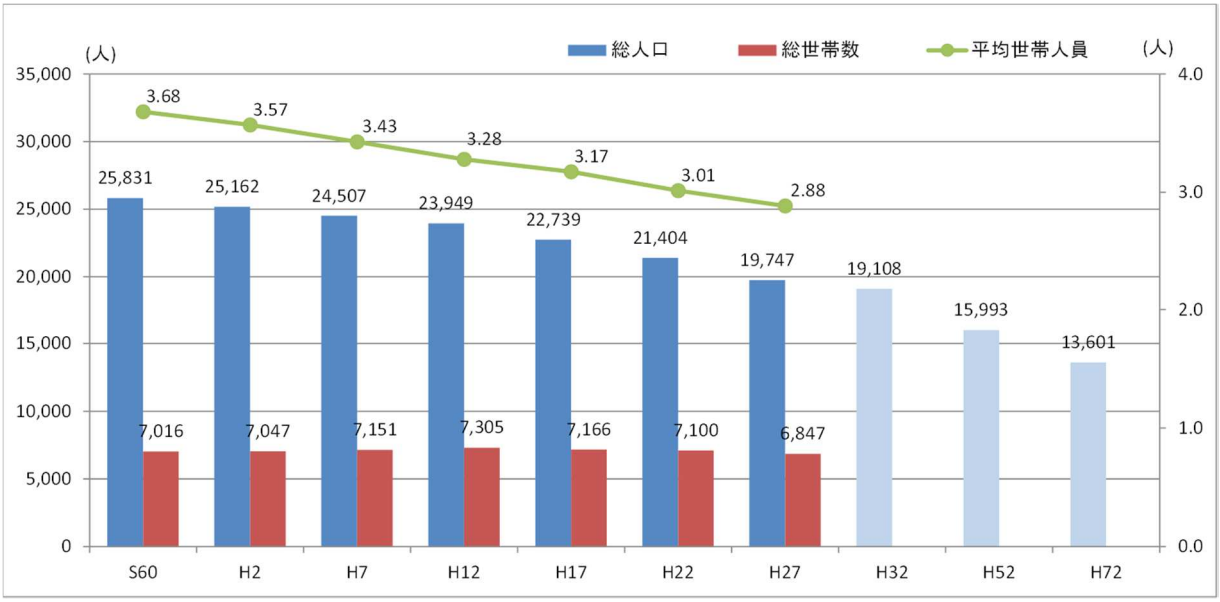
（３）社会環境

１）人口・世帯

平成 27 年の国勢調査によると、多久市の総人口は 19,747 人で、平成 22 年より 1,657 人減少している。20 年前の平成 7 年と比較すると 4,760 人少なく、約 19%の減少となる。

平成 27 年の世帯数も平成 22 年から 253 世帯減少し、近年最も多かった平成 12 年の 7,305 世帯より 458 世帯の減少である。平均世帯人員も平成 27 年には 3 人を割り、2.88 人と共に減少傾向である。

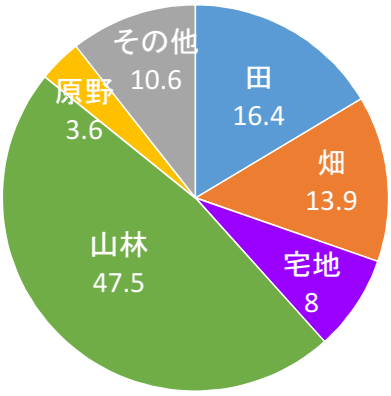
第 4 次多久市総合計画（後期基本計画）では、平成 72 年度には人口が 1.3 万人と予想され、今後も人口減少が続くことが予想されている。



資料 2-4　多久市の人口及び世帯の推移（各年国勢調査）

２）土地利用

多久市の土地利用の状況(平成 26 年 1 月 1 日現在)をみると、「山林」が 47.4%と最も多く、次いで「田」の 16.4%、「畑」の 13.9%などの順となっている。土地利用の経年変化としてみると、平成 19 年以降、利用地目面積に大きな変化はみられない。

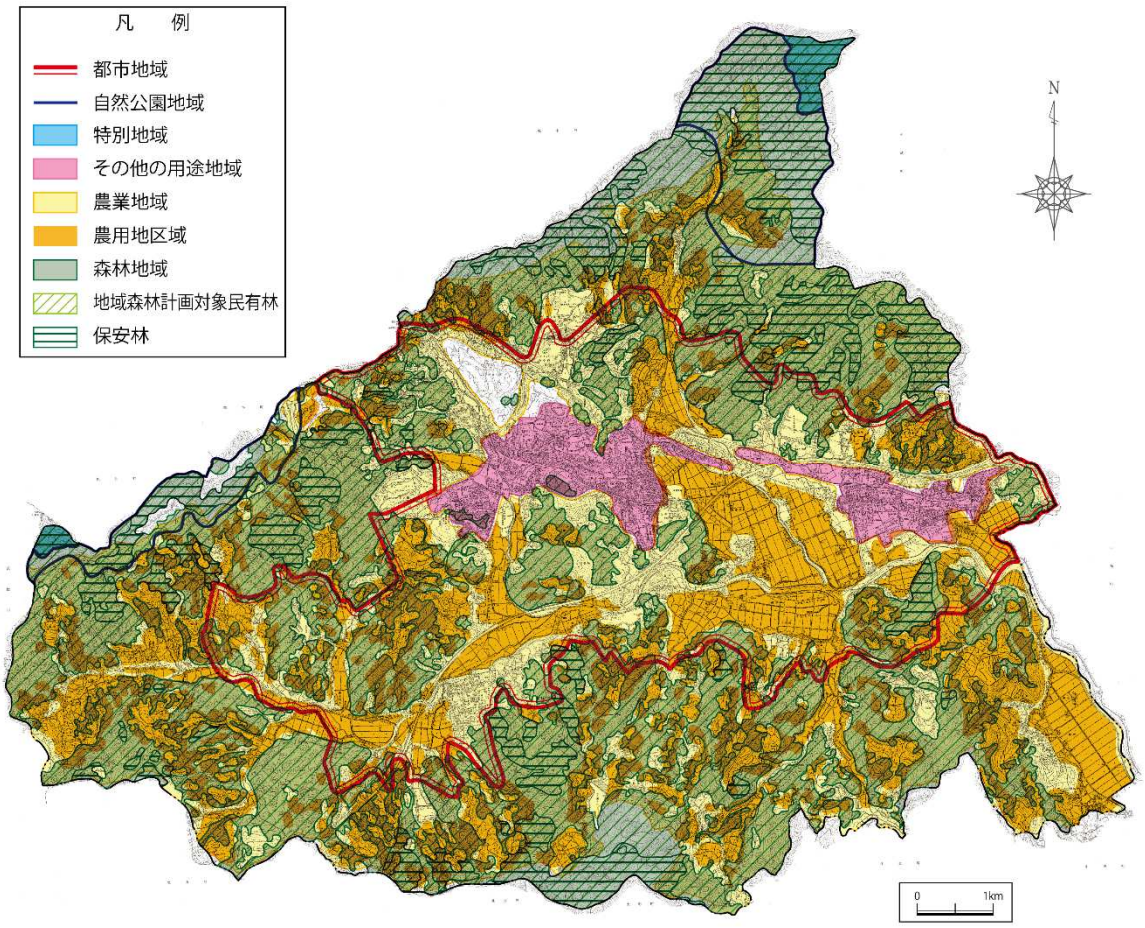


資料 2-5　多久市の土地利用
（民地・佐賀県統計年鑑）

土地利用規制では、平坦部を中心に都市計画区域が設定され、東多久、北多久の市街地に用途地域が設定されている。また、農業地は中山間部や山間部にも設定され、農用地区域も広がっている。平地では、ほ場整備が進んでいる。

山間部は森林地域となっており、ほとんどが地域森林計画対象民有林で、主に南部と北部、西部には保安林が指定されている。

北部の天山山麓には天山県立自然公園、西部の女山・八幡岳にかけては八幡岳県立自然公園が指定されている。



資料 2-6　多久市の土地利用規制図

３）産業

①就業人口

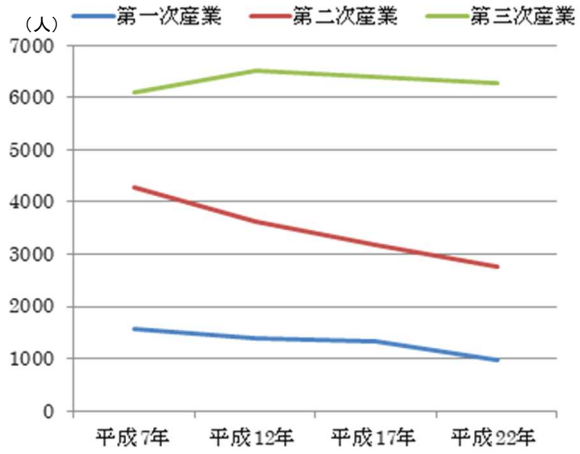
本市の産業別就業人口を見ると、平成 12 年から平成 22 年にかけて第 1 次産業、第 2 次産業、第 3 次産業のいずれも減少し、市全体の就業人口も、平成 12 年の 11,539 人から平成 22 年の 10,112 人へと 12.4%減少している。

産業別にみると、平成 22 年の第 1 次産業は 9.7%、第 2 次産業は 27.7%、第 3 次産業は 62.6%となっており、第 3 次産業の比率が最も高くなっている。経年的には、第一次産業割合が減少傾向にあり、逆に第 3 次産業の従事者割合が年々増加している。

資料 2-7　産業別人口推移

	第一次産業	第二次産業	第三次産業	就業総人口
平成 7 年	1,332(12.2)	3,164(29.0)	6,401(58.7)	11,935(100%)
平成 12 年	1,383(12.0)	3,635(31.5)	6,521(56.5)	11,539(100%)
平成 17 年	1,370(12.5)	3,125(28.5)	6,461(59.0)	10,956(100%)
平成 22 年	971(9.7)	2,769(27.7)	6,271(62.6)	10,011(100%)

多久市資料より



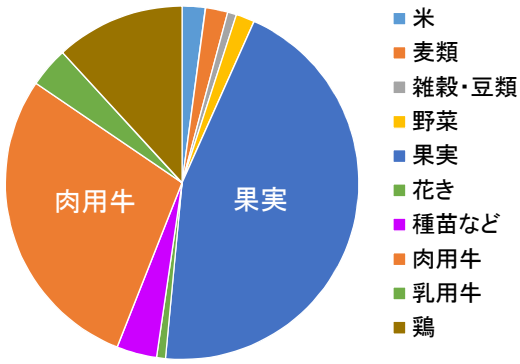
資料 2-8　産業別人口推移

写真 2-2　長崎自動車道と多久北部工業団地、農地

②農業・工業・商業

農業総産出額は、348 千万円であり、その内訳は右図のようにナシ、ビワ、モモなどの果実が約半数を占め、次いでブランドとして定着した肉用牛となっている（農水省市町村別統計より）。

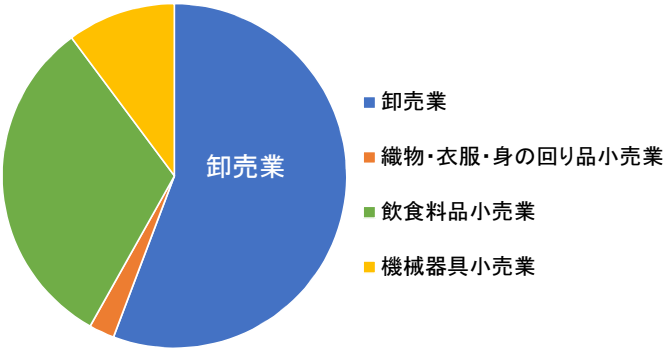
工業の製造品出荷額は、6,561 千万円（平成 26 年）であり、従業員総数は 1,990 人となっている。特に、公表されている出荷額では、自動車製造業の関係で金属製品製造業が最も多く、次いで高速道路のインターチェンジ近くに立地した印刷･同関連業となっている。（経済産業省工業統計より）



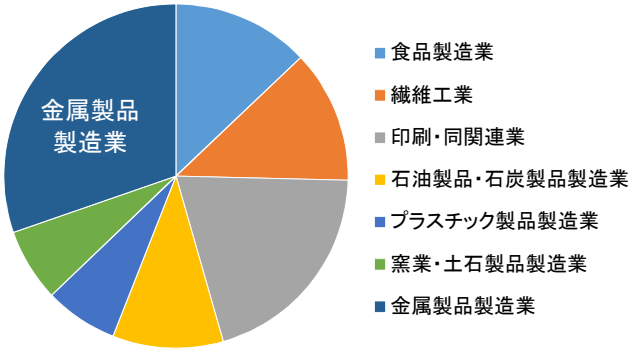
資料 2-9　農業産出額の内訳
（平成 27 年）

さらに、商業の年間商品販売額の総額は 19,447 百万円、　従業員数は 853 人となっている（平成 26 年)。

販売額は食肉などの卸売業が半数以上を占めている。（経済産業省商業統計より）



資料 2-10　年間商品販売額の内訳



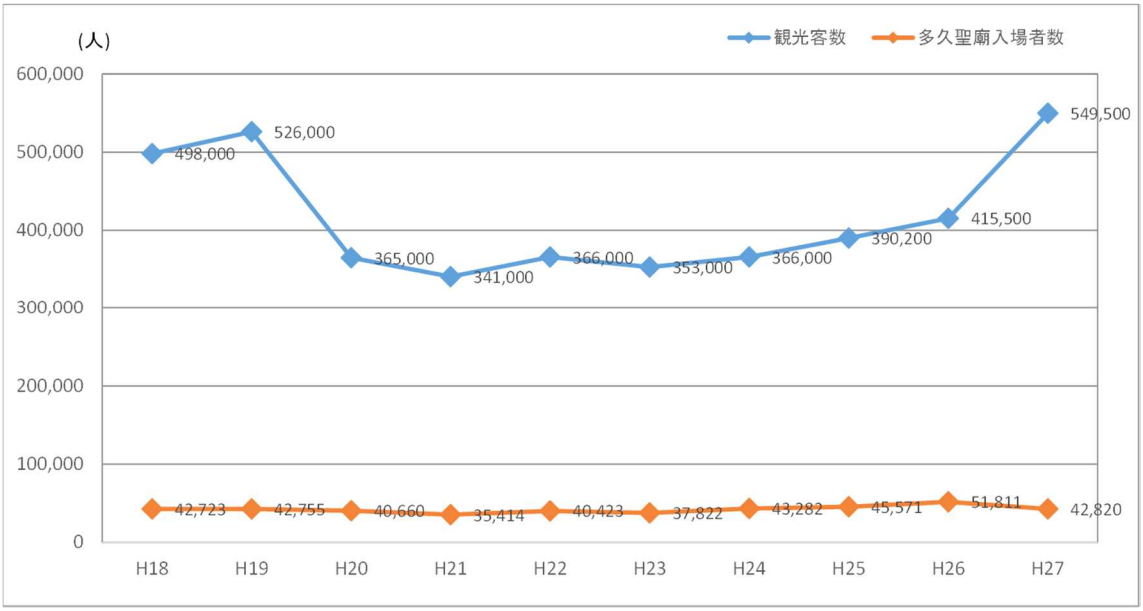
資料 2-11　製品出荷額の内訳

③観光

多久市に訪れる延べ観光客数は平成 19 年には 52 万人を超えていたが、平成 20 年から平成 25 年までは 40 万人を下回っている。その原因として民間保養施設の閉鎖がある。またその後平成 26 年には 40 万人に回復、平成 27 年には駅前施設「あいぱれっと」開館により約 55 万人に戻った。

資料 2-12　多久市の観光客数と多久聖廟入場者数（H27 佐賀県観光客動態調査）

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
観光客数	498,000	526,000	365,000	341,000	366,000	353,000	366,000	390,200	415,500	549,500
多久聖廟入場者数	42,723	42,755	40,660	35,414	40,423	37,822	43,282	45,571	51,811	42,820



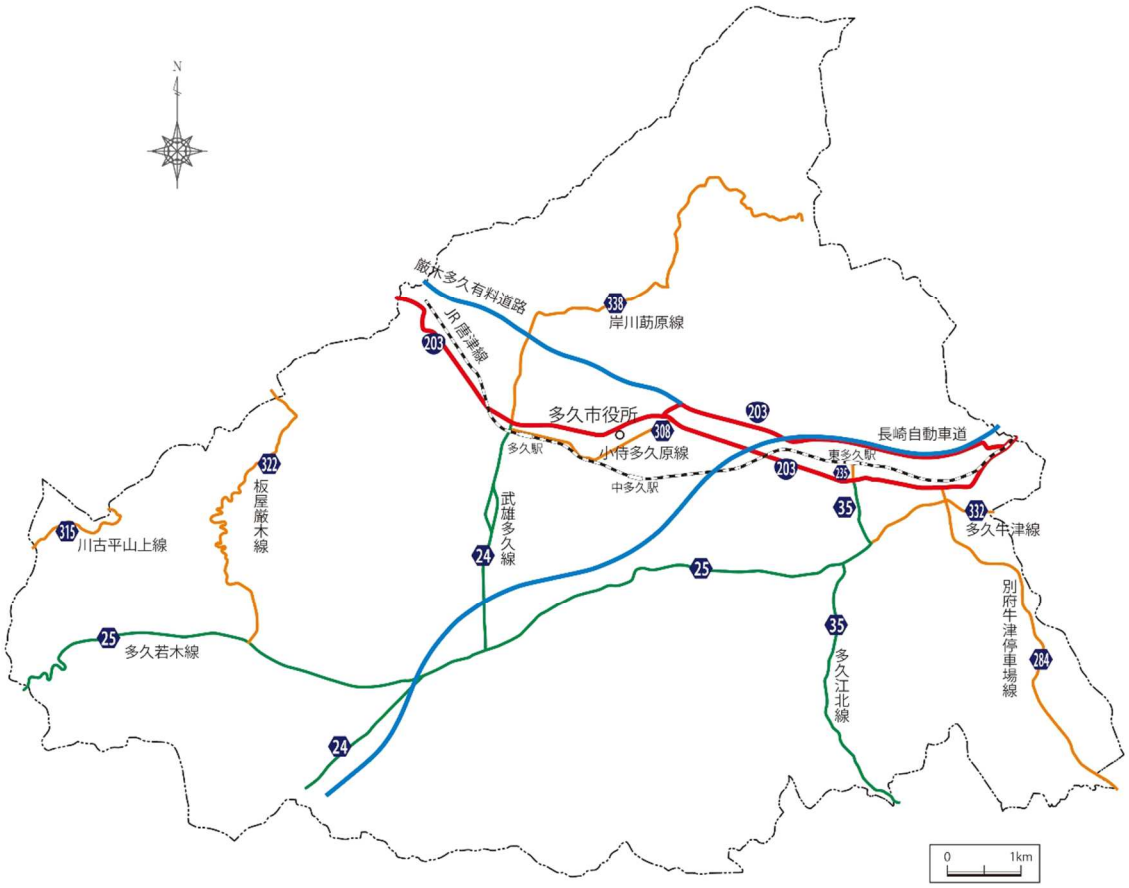
資料 2-13　多久市の観光客数と多久聖廟入場者数

４）交通網

多久市の道路網は、長崎自動車道（多久インターチェンジ）、厳木多久有料道路、国道 203 号と 3 路線の主要地方道等を主軸として構成されている。

このうち国道 203 号はかつての唐津往還の一部路線が含まれる。また、県道 25 号多久若木線は旧伊万里往還であり、西側は女山トンネルを通り武雄市と接している。

鉄道については、佐賀駅と唐津駅を結ぶ JR 唐津線が市内を東西に横断しており、東多久駅、中多久駅、多久駅の 3 つの駅がある。



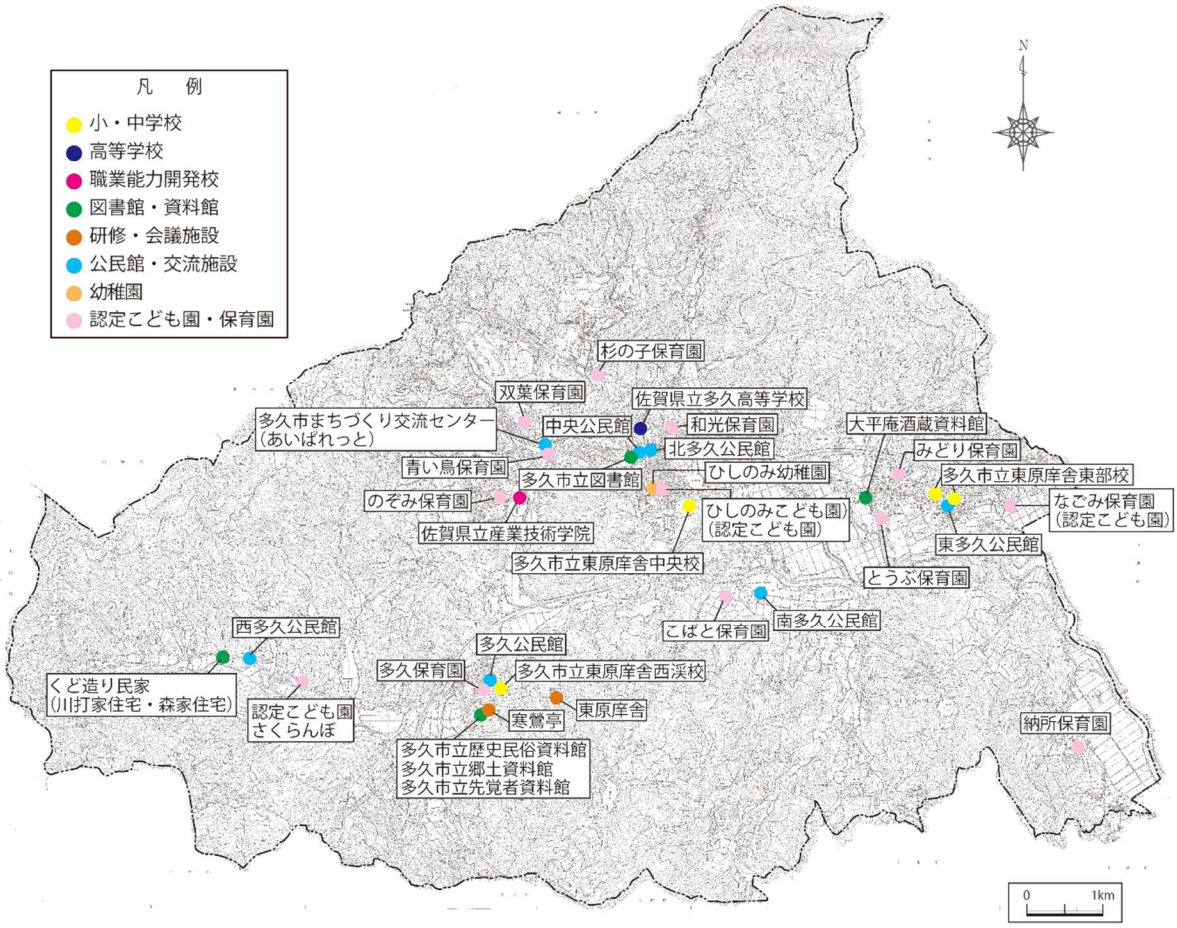
資料 2-14　多久市の交通網図

５）文教施設等

市内の小中学校は、義務教育学校多久市立東原庠舎東部校、東原庠舎中央校、東原庠舎西渓校がある。高校では佐賀県立多久高校、職業能力開発校として佐賀県立産業技術学院がある。

中央公民館をはじめ各地区には公民館がある。情報施設としては中央公民館 2 階に図書館があり、多久町西渓公園内に資料館（郷土資料館・先覚者資料館・歴史民俗資料館）がある。近接する東原庠舎や寒鶯亭は研修・会議施設としても利用できる。また、くど造り民家（川打家住宅・森家住宅）や大平庵酒蔵資料館では近世から伝わる住まいや酒造技術などを見ることができる。

そのほかに保育園が 10 園あり、うち 3 園は認定こども園となっている。



資料 2-15　多久市の文教施設等位置図

写真 2-3　あいぱれっと

写真 2-4　多久市立東原庠舎西渓校

写真 2-5　中央公民館

写真 2-6　宿泊研修施設　東原庠舎

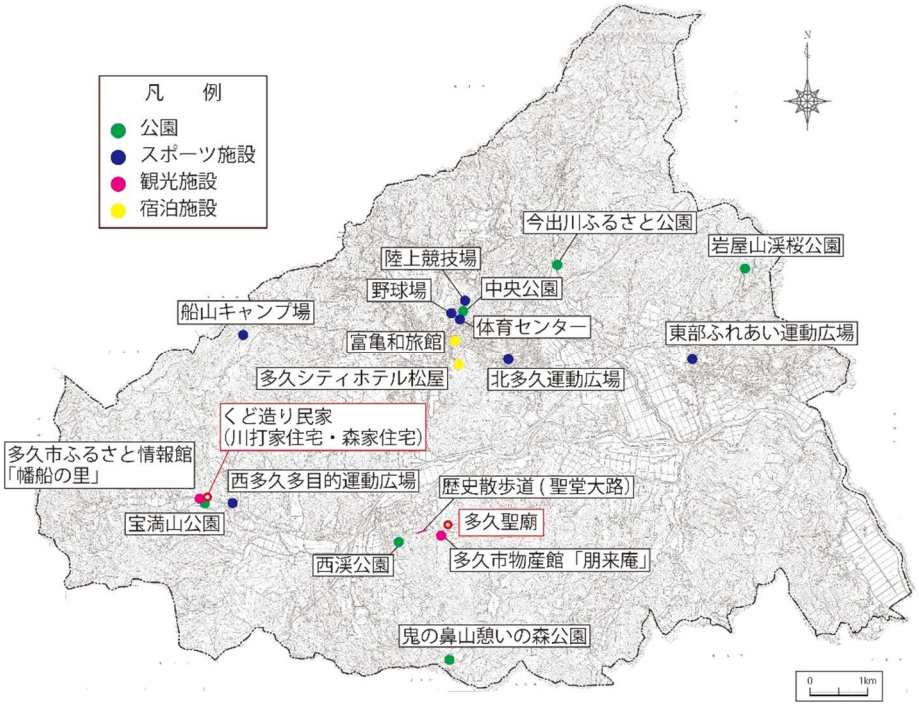
写真 2-7　多久市郷土資料館

６）公園・スポーツ施設・観光施設等

市内には中央公園をはじめ、自然に触れ合えるものとして今出川ふるさと公園や岩屋山渓桜公園、宝満山公園などがあり、歴史や文化と親しめる西渓公園がある。運動公園や施設としては、中央公園周辺に陸上競技場や野球場、体育センター等があり、各地には北多久運動広場、東部ふれあい運動広場、西多久多目的運動広場、船山キャンプ場がある。

観光施設には、多久町の国指定史跡多久聖廟の近辺に多久市物産館「朋来庵」があり、これらから西渓公園に向かう道は歴史散歩道（聖堂大路）として整備されている。

また、西多久町の指定文化財のくど造り民家に隣接する多久市ふるさと情報館「幡船の里」がある。なお、宿泊施設は北多久に富亀和旅館と多久シティホテル松屋がある。



資料 2-16　多久市の公園観光施設等位置図

写真 2-8　今出川ふるさと公園

写真 2-9　西渓公園

写真 2-10　歴史散歩道「聖堂大路」

写真 2-11　多久市ふるさと情報館「幡船の里」

写真 2-12　西多久多目的運動広場

２．歴史環境

多久市が位置する北部九州地域は、大陸や朝鮮半島に近接する地理的特質から、古より対外交流の拠点であった。本来においても、人々の営みの足跡として歴史的文化的遺産が数多くみられる。多くの遺跡から石器や土器などが出土し、弥生時代の大規模集落や古墳、中世の山城などが確認されている。さらに古文書類、窯跡、建造物、社寺、工芸品、石造物、歴史資料なども豊富に残されている。

先史時代から現代に至るまで、人々が社会と文化を営み、多種多彩な文化を創出してきた。

（１）原始（旧石器～古墳時代）

多久市の南、鬼の鼻山は安山岩（サヌカイト）の産地で、この北麓に多数の大型尖頭器をはじめとする石器製作遺跡が存在し、本市の旧石器時代遺跡の特徴を示している。その中で茶園原遺跡、三年山遺跡は九州を代表する遺跡として著名である。また同性格の遺跡として、多久石器原産地遺跡群、長尾開拓遺跡などがある。

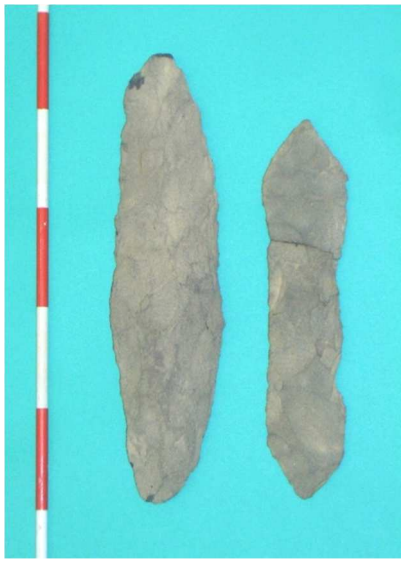


写真 2-13　大型尖頭器
（多久市郷土資料館）

綿打遺跡と四下大丹遺跡からは縄文時代早期の押型文土器が出土しており、岡遺跡や西ノ原西遺跡は、扇状地に立地する縄文時代後期の集落であると考えられている。さらに、牛津川に面した長尾倉富遺跡、両子山中腹にある天山遺跡からは縄文時代晩期の遺物が出土している。

牟田辺遺跡は、まとまった住居跡や墳墓が確認され、同集落が弥生時代中期の多久盆地における拠点集落であったと考えられている。他にも、撰分遺跡からは竪穴住居跡、鴻ノ巣遺跡からは鉄製手斧の刃先など弥生鉄器、また、原田遺跡では弥生時代の甕棺墓などと祭祀遺構からなる墓地が発見されている。

写真 2-14　茶園原遺跡

写真 2-15　安山岩の露頭

写真 2-16　三年山遺跡遠景（写真中央）

古墳時代の主な集落遺跡は、羽佐間四反田遺跡、久保田遺跡、摺ケ本遺跡、今出川A遺跡、撰分遺跡などがあり、いずれも平野部に立地している。これまで確認されている市内の古墳の規模は径10m前後の小型のものが多く、現時点では約150基が認められる。ほとんどが横穴式石室をもっていることから、6世紀から7世紀初期にかけて築造されたものである。このような小円墳は群集墳と呼ばれ、山の上古墳群は、その代表的なものである。また、この石室には線刻画が認められ、古墳の内外からは、武器・馬具・農工具・装身具、須恵器・土師器等が出土している。

写真2-17　牟田辺遺跡

写真2-18　山の上14号墳（郷土資料館敷地内に移設復元、線刻画あり）

（2）古代（飛鳥～平安時代）

記録によれば多久地域は松津国造の支配を受け、7郷20里からなる小城郡の中の高来郷に属していたと推定されている（『肥前風土記』より）。小字名から、別府には奈良時代の条里制（班田収授法の土地利用）が施されていたと想定されている。

妙覚寺は、天平13（741）年の勅命による、僧行基の開山とされ、弘法大師（空海）の手によるものとされる両界曼荼羅図[県重]と石製四天王像があった。その後、一時廃れたが、平安時代の大同元（806）年に勅命により再興された。

写真2-19　妙覚寺（南多久桐野）

平安時代中頃から末法思想が広まり、僧侶や有力者は仏教経典を地中に埋納するようになった。多久町山崎ではそれらを埋納した経塚が発見され、銅製経筒・陶製外筒・台石他が出土した。その筒の毛彫銘によると天治元（1124）年の埋納であったことが分かる。

写真2-20　山崎経塚の経筒（多久市史より）

このほかにも、平安時代の中小路増富遺跡の遺物では、土師器皿および鉄製品の製作が行われており、工輸入陶磁器の出土から12世紀多久の先進地であったことを示している。

平安時代末期、在地の管理者である地頭として紀州から諸松村に赴任してきた秋田氏は、長徳年間（990年後半）にこの地を、納所村に改めたとされ、両子神社などを創建している。

古代の交通制度の道は、駅制と伝制からなるが、駅路は都と諸国の国衙（役所）を結ぶもので、本市では小城町より、渋木、山犬原、番所を通り、厳木町へ抜けるルートと、その途中の別府付近から分かれて、坊山、桐岡を経て北方町に出るルートが想定されている。

また、河川交通も発達したが、牛津川上流にあたる別府の小字の船津は、その地名より高来郷の中心的な津（港）であったと考えられる。

写真2-21　両子神社（東多久町平林）

（３）中世（鎌倉～安土桃山時代）

１）初代宗直と「前多久」

相浦氏はもと相神浦氏といい、現在の佐世保市域を本拠とした松浦党の一族であったが、一族不和のために、治承３(1179)年同地を捨て、現在の北多久町相の浦に住みつき、その後、縁戚となった多久氏（前多久氏）に仕えたとされている。

そして、鎌倉時代初期、摂津の御家人である津久井宗直が多久の地頭として下向し、入部当初、下多久荘陣内に館を構え、のちに上多久の梶峰城を構えたとある。宗直は津久井氏から多久氏と改名し、若宮八幡宮を創建したと言われている。

写真 2-22　多久八幡神社（多久町東の原）

２）元寇から南北朝期、その後の少弐氏の衰退

元寇を契機とした鎌倉幕府の滅亡、その後の南北朝時代と足利氏による統一を経て、室町時代、多久氏は筑前を支配している大宰府の少弐氏に従っていた。戦国時代に入って少弐氏は、山口の大内氏に押されて衰えていき、梶峰城に逃れたが、多久氏の助勢を得ることができず、政資は専称寺にて自刃、後にその子である資元も同地にて自害している。

写真 2-23　専称寺（多久町東の原）

なお、多久荘という言葉は、南北朝期中頃の文書に表れている。また、多久氏は麓に建つ上多久の梶峰城（前期）の他に、戦国時代には山頂に梶峰城（後期）を建てて、守りに備えていた。

３）前多久氏の滅亡と「後多久」の起こり

龍造寺隆信は、永禄 2（1559）年、小城郡を勢力下に収めて、東肥前を支配した。永禄 5（1562）年隆信は多久氏を追放し、ここに十四代続いた前多久氏の時代は終わった。

元亀元（1570）年、兄隆信の命により龍造寺長信は梶峰城に入城して、多久の領主となり、後多久氏の祖となった。

写真 2-24　龍造寺長信像

秀吉による島津討伐の先陣を務めた長信の子家久（後の安順）の功績により、天正 18（1590）年 3 月 7 日、豊臣秀吉より御知行の御朱印を賜り、

【小城郡の内】多久、別府、納所、北浦、深河、江里山、初田ケ里、
【杵嶋郡の内】北方、医王寺、福母、喜佐の木、大渡、焼米、
　　山口、砥川、椛嶋、
【佐嘉郡の内】尼寺ノ内、上嘉瀬、萩野、八戸、真木、竹藤、
　　南里、新郷、鹿子、
【三根郡の内】矢俣、

以上合わせて、知行高 3 万 2 千 8 百余石を領有することとなった。

しかし、慶長 16（1611）年 1 月に佐賀本藩より領地の 3 分を差出す命を受けて、尼寺村、八戸、鹿子、飯盛、木原、竹藤、袋、末次、真木、南里、新郷、矢俣、江里山、北浦、深河、初田ケ里、山口の内、以上合わせて 17 村地米 4 千 9 百余石を返納した。

更に元和 7（1621）年 8 月には、3 年間の 3 部上地が行われ、上嘉瀬、砥川、福母、喜佐木、大渡、の 5 か村合わせて 3 千 4 百 50 余石を差上げるが、ついに戻らぬ土地となった。

残るところの郷村は、多久、別府、納所、砥川の内、北方、志久、椛嶋、医王寺、山口の内、以上 9 か村は長信公御伐取の地。竹藤の内（岩松軒の寺地）、焼米、2 か村は慶闇尼※御譲地の内萩野、（八戸、嘉瀬、萩野は、八戸宗暘の領地を長信公伐取の地）合わせて 12 か村地米 8 千 6 百余石となる。但し、水ヶ江東西城館の地（槙三十町の内）、康家公※以来代々水ヶ江家の館地として多久家に伝えられている。これらの領地は、明治 2（1869）年の版籍奉還に至るまで続き、明治 4（1871）年の廃藩置県を迎え新たな行政区域として出発した。

※慶闇尼：龍造寺隆信・長信兄弟の母。
※龍造寺康家：水ヶ江龍造寺家の祖。隆信・長信兄弟の先祖。

4）文禄・慶長の役と「後多久」

文禄・慶長の役にも安順は多久の兵を率いて朝鮮に従軍し、戦功をたてた。その後、姓を龍造寺から多久に代え、後多久の初代となった。

（4）近世（主に江戸時代）

江戸期、龍造寺氏の家臣であった鍋島氏（外様大名）が佐賀本藩を治め、多久領の領主である多久氏は本藩の親類同格の立場として藩の請役家老など重要な職務に就くことが例になっており、佐賀城内に館を構えて生活することが多かった。

領内の多久御屋形には、要職の家臣が勤務しており、御構内に武家屋敷を構え居住していた。

1）後多久歴代領主とその事績

主な領主の事跡は表に示す通り。

資料 2-17　後多久歴代領主事跡表

領主名	事　　跡
初代　安順 	秀吉の命により、2 度の朝鮮出兵に従う。 陶工李（金ヶ江三兵衛）氏、筑紫箏の創始者諸田賢順の援助を行う。 姓を龍造寺から多久に改める。
2 代　茂辰 	佐賀本藩請役家老、島原の乱にて領内の兵を率い従軍する。
4 代　茂文 	佐賀本藩請役家老を担う。 孔子を祀る聖廟（恭安殿）及び邑校東原庠舎を創建する。 「文廟記」を著し、儒学を中心に政教一体の施政を試みる。

領主名	事　　跡
7 代　茂堯 	本藩の要請により、領内の兵を率い諫早騒動の平静化に寄与する。
9 代　茂鄰 	長崎警固として、ロシア・イギリス船の入港に保護と応対を行う。
11 代　茂族 	戊辰の役にて、将・参謀として会津藩をはじめとした東北・北関東の遠征軍を指揮する。後に明治政府より、伊万里県権令を任じられる。

２）島原の乱と多久

島原半島有馬の郷民が圧政に対して反抗し、キリスト教徒と共に原城に立てこもった。この反乱に対して、老中板倉重昌の命のもとに、茂辰は多久の兵 2,300 人余りを率いて島原へ出兵し、さらに初代の安順も従軍した。この島原の乱で、多久勢の死者 99 人であり、帰郷後、茂辰は通玄院を建てて、死没者の追善を行った。

３）長崎警固と多久

島原の乱後、幕府はいわゆる鎖国体制を厳重にするとともに、唯一の開港地である長崎に鎮を設けその防衛の強化を図った。寛永 19（1643）年に佐賀藩主鍋島勝茂に長崎警備の任を下した。その番役は、多久の領主にとっても重要な任務の一つであった。

４）戊辰の役と多久

慶応 3（1867）年大政奉還によって生じた戊辰の役にて、茂族は最新鋭の銃や砲を用い、洋式に訓練された佐賀藩の兵を率いて、宇都宮、今市、白河口などで歴戦し、若松の会津藩との戦いに力を尽くした。

５）「東原庠舎」・「多久聖廟」の創建

儒学に熱心であった茂文は、元禄 12（1699）年、東の原椎原山（後の昌平山）の西麓に東原庠舎を建てて、儒者の川浪自安を初代教授とした。

本舎は、幕末までの約 170 年間一貫して文武両道の科目を課して、日本の近代化や郷土のために尽くした人材を多く輩出した。

一般に、藩校、郷校では武士の子弟の教育が第一であり、当初本舎も彼らのみであったが、中期以降には農民、町人にも入学が許され、主に分校や、時には本舎で学ぶことができた。漢学を中心としながら和学さらには諸武技を学んだ。さらに、茂文は、東原庠舎内に置かれていた孔子像に代わり、新たに像を鋳造し、それを安置するための聖廟を建てることとした。

写真 2-25　東原庠舎跡（多久町東の原）

廟は、宝永 5（1708）年、東原庠舎の五十間東の椎原山の麓に落成して、恭安殿と名付けられた。現在の多久聖廟[国重文]である。

写真 2-26　多久聖廟（多久町東の原）
[国重文・史跡]

廟内中央奥にある聖龕[国重文]と呼ばれる八角形の厨子の中には、儒者中村惕斉に製作依頼した孔子像が安置されている。

春と秋の年に2回儒学の先哲を祀る釈菜[佐賀県指定重要無形民俗文化財]の儀式は、現在まで続いている。

６）肥前磁器陶器の源流としての多久

朝鮮への出兵後、連れ帰った韓人李氏（帰化後、金ヶ江三兵衛と記録に残る）を引き受けた安順は、慶長 4（1599）年、彼に窯を作って試焼させた。これが、現在の国史跡である肥前陶器窯跡の一つ唐人古場窯跡（多久町西の原）である。その後、彼はそこを閉窯し、西多久の高麗谷、大山に移って多くの焼き物を作ったが、満足できず、多久を去り有田に向かったという。

写真 2-27　唐人古場窯跡（多久町西の原）

この点からみると、多久は肥前磁器の源流の地の一つであるともいえる。三兵衛が去った後、彼の技法を学んだ保四郎は、道祖元にて開窯して幕末まで続けられた（保四郎窯（多久町道祖元））。他に、大山新窯（西多久町藤川内）や前田窯（北多久町前田）などが作られた。

７）筑紫箏（つくしごと）

筑紫琴は筑紫流箏曲のことであり、現代箏曲の源流といわれる。この創始者として知られる諸田賢順（1534～1623）は筑後国に生まれ、戦乱を避けて逃れていたが、多久に招かれ移り住んだ。賢順自作の箏は市立郷土資料館に所蔵されている。また、安順妻千鶴の愛用箏と伝えられる立葵蒔絵螺鈿箏がある。

写真 2-28　立葵蒔絵螺鈿箏［県重文］

８）多久の交通・駅、石炭

江戸期には往来が盛んになり、道が整備された。その主要なものは街道や往還などである。往還とは、街道につぐ道路である。多久には、唐津往還と伊万里往還が通っている。牛津より長崎街道から分かれた唐津往還は別府、多久原、山犬原を通って現唐津市に抜ける。また、伊万里往還は別府にて唐津往還から分離し、上田町、長尾、多久城下、道祖元、板屋を経て、伊万里に至る。この伊万里往還の道筋は、現在の道路に踏襲されている。

また領内には、別府、多久、志久（現武雄市）の三つの駅があり、旅人のために宿や馬が準備されていた。別府は、相当数の戸数があり、六斉の日に市が開かれ（月 6 回）、商業や宿場町として邑※内でも一番大きい町であったと思われる。多久は、伊万里往還の宿場町として、さらに多久御屋形や東原庠舎があり、多久の政治的文化的な中心を担っていた。

多久邑では、寛永年間（1750 年頃）には石炭が採掘されており、その後重要な産物となっていった。現在の北多久町、東多久町である。石炭採掘は農民の生活の補いとなり、多久領の財政運営に益するなど、近世末期における重要産業として発展していった。

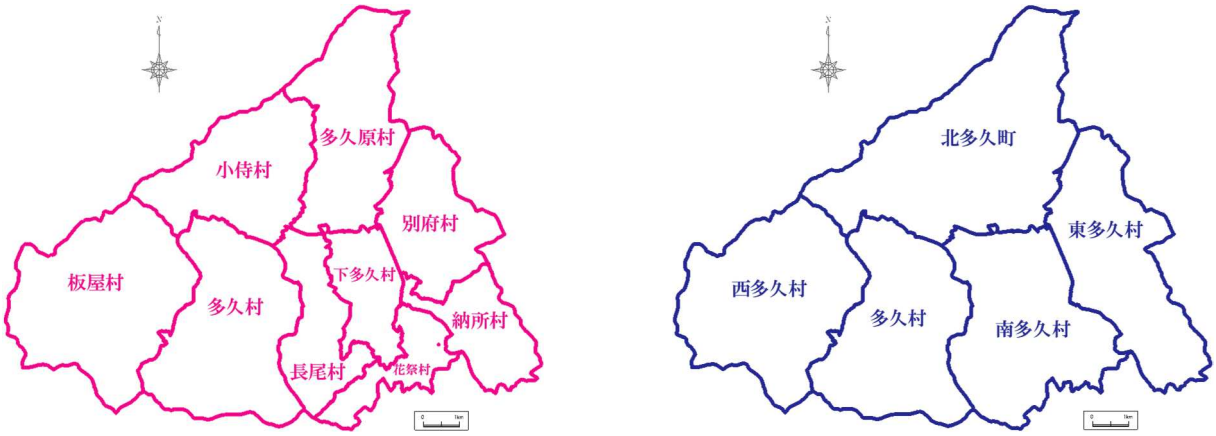
※邑（ゆう）：村と同じ意味、特に多久などでは、村とよばず邑と称した。

（５）近現代（明治、大正、昭和、平成）

１）村の成立と多久市の誕生

明治 2-4（1869-1871）年、版籍奉還を契機に旧来の郷村制を改め、多久地域では、8 か所の村がつくられた。さらに、明治 22（1889）年以降、北多久村（小侍村と多久原村が合併、昭和 24 年町制施行）、東多久村（別府村と納所村が合併）、南多久村（下多久村、長尾村、花祭村（杵島郡より））、多久村、西多久村（板屋村が改名）の五つ行政組織となった。

昭和 29（1954）年、多久 5 か町村合併による多久市が発足し、現在に至っている。



明治 4 年　　昭和 24 年

資料 2-18　明治以降の多久の行政区域

２）東原庠舎の閉鎖とその後

明治 2（1869）年、東原庠舎は多久郷学校と改称され、さらに、明治 4（1871）年には多久小学校となり、明治 6（1873）年には東原庠舎は民間に払い下げられ、閉校した。

平成 3（1991）年には、東原庠舎の名をもつ研修宿泊施設ができ、平成 25（2013）年、多久市立の小学校、中学校は統廃合され 3 つの小中一貫校、さらに平成 29 年には義務教育学校となり「東原庠舎　東部校・中央校・西渓校」と称せられている。

３）炭鉱の町多久

多久地域は、江戸時代より石炭の採掘が行われ、明治時代に小規模炭鉱経営が行われ、石炭需要が高まった大正時代になると、大手資本による規模の大きい炭鉱が出現した。三菱古賀山炭鉱、明治鉱業多久炭鉱などである。

大正後期から昭和初期の不況の影響で閉山もあったが、その後の軍需生産体制に伴って、採掘が再開された。

敗戦後の佐賀県の復興の担い手として炭鉱は重要な役割を果たし、昭和 35（1960）年には 306 万トンを出炭し、佐賀県のそれの約 4 割を占めていた。人口も 45,600 人余りとなり、このうち約 35%が炭鉱関係の人々であった。

その後、エネルギー源の中心が石油へと移行し、石炭産業は衰退して各地で閉山が相次ぎ、多久市でも昭和 47（1972）年にはすべて閉山した。

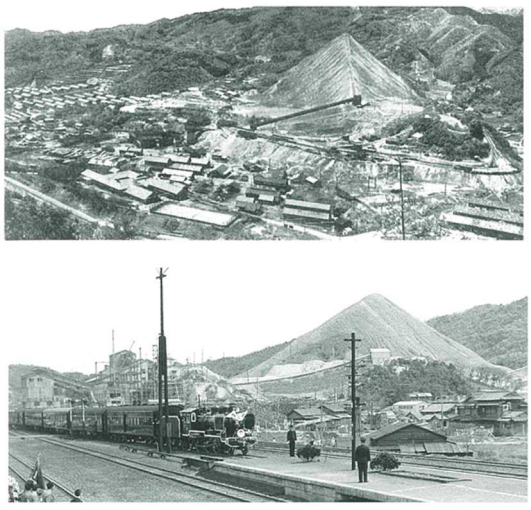


写真 2-29　上：立山炭鉱　下：三菱古賀山鉱業所とボタ山（多久市史より）

写真 2-30　竪坑櫓跡（東多久町）

写真 2-31　JR 唐津線とホッパー跡（北多久町）

写真 2-32　炭鉱関係資料
（多久市歴史民俗資料館）

写真 2-33　旧馬神隧道（多久町）

４）多久の交通

大正末期、多久郷内の主要な 3 本の路線が県道に編入され、これに付随して、村道が設置され、新設改良が進められてきた。その後、佐賀市と唐津市を結ぶ国道 203 号が本市地域の中央部より東西に走る基幹道路となり、そこから分岐する主要地方道や接続する県道が建設された。また、昭和 62（1987）年には九州横断自動車道（長崎自動車道）が開通し、多久市にはインターチェンジができ自動車の利便性が高まった。

明治 36（1903）年鉄道は唐津から延伸し、多久地域内を西から東に通り、長崎本線の久保田まで開通した。この唐津線には、各炭鉱から専用の運炭線が多久駅、別府（後に東多久）駅に敷設され、石炭積み出しの大きな役割を担った。明治 42（1909）年には国鉄唐津線となり、石炭産業が盛んであった昭和 20 年代から昭和 30 年代にかけて最も利用された。その後、昭和 39（1964）年に中多久駅が開設され、昭和 61（1986）年には、国鉄から九州旅客鉄道株式会社の唐津線となった。

５）文教の里を目指したまちづくり

多久聖廟を核としその周辺地域を含めたまちづくり、という市民からの意見に応えて、市では多久聖廟の大改修（平成 2 年終了）を実施し、歴史公園とする丹邱（たんきゅう）の里（さと）整備事業、東原庠舎の建設計画を進め、「文教の里」づくりを推進している。そのため、財団法人孔子の里を平成 2（1990）年に設立し、市民の協力を得ながら、事業を進めてきている。

写真 2-34　多久聖廟周辺区域

写真 2-35　西渓公園と資料館

３．歴史文化の現況

（１）多久市の歴史文化

１）指定・登録文化財

多久市の指定・登録文化財は、全体で 48 件である（平成 29 年現在)。その内訳は、国指定・登録は 8 件（うち登録は 2 件)、佐賀県指定は 9 件、市指定は 31 件となっている。

国指定では重要文化財（建造物）2 件、重要有形民俗文化財 1 件、天然記念物 1 件、史跡 2 件、なお、「多久聖廟」は、重要文化財と史跡の両方の指定である。県指定では、重要文化財（建造物・出土品・書籍・絵画・工芸品）6 件、重要無形民俗文化財 1 件、史跡 1 件、天然記念物 1 件であり、市指定では、重要文化財 26 件、史跡 2 件、天然記念物 3 件である。

市指定重要文化財の内訳は、歴史資料 12 件、彫刻 5 件、建造物 4 件、工芸品 4 件、考古資料 3 件、絵画 2 件、書跡 1 件、他に、有形民俗文化財 1 件、無形民俗文化財 1 件である。

これらの所在が確定できる指定・登録文化財 48 件（多久聖廟は 1 件とする）の内訳は、多久町 18 件、次いで西多久町 9 件、東多久町 9 件、南多久町 7 件、北多久町 4 件となり、4 割近くが多久町に集中している。その中でも東の原、西の原の地区に 14 件集まっている。

また、全体の 5 割近くの 22 件が近世（安土桃山時代、江戸時代）のものとなっており、さらに 3 割にあたる 14 件が江戸時代前期（ほぼ 17 世紀）のものである。江戸時代前半は、まさに、多久地域の文化の華が開いた時期であると言ってよい。

資料 2-19　町別・時代別の指定・登録文化財件数の内訳

時代	東多久町	南多久町	多久町	西多久町	北多久町	多久市
旧石器･縄文時代					1	1
弥生・古墳時代	2	1			1	4
飛鳥～平安時代		1	2			3
鎌倉時代		1	3			4
室町時代	2	1	3	2	1	9
安土桃山時代			1			1
江戸時代	3	3	8	7	1	22(46%)
明治時代	2					2
大正時代			1			1
その他						1
計	9	7	18（38%）	9	4	48（100%）

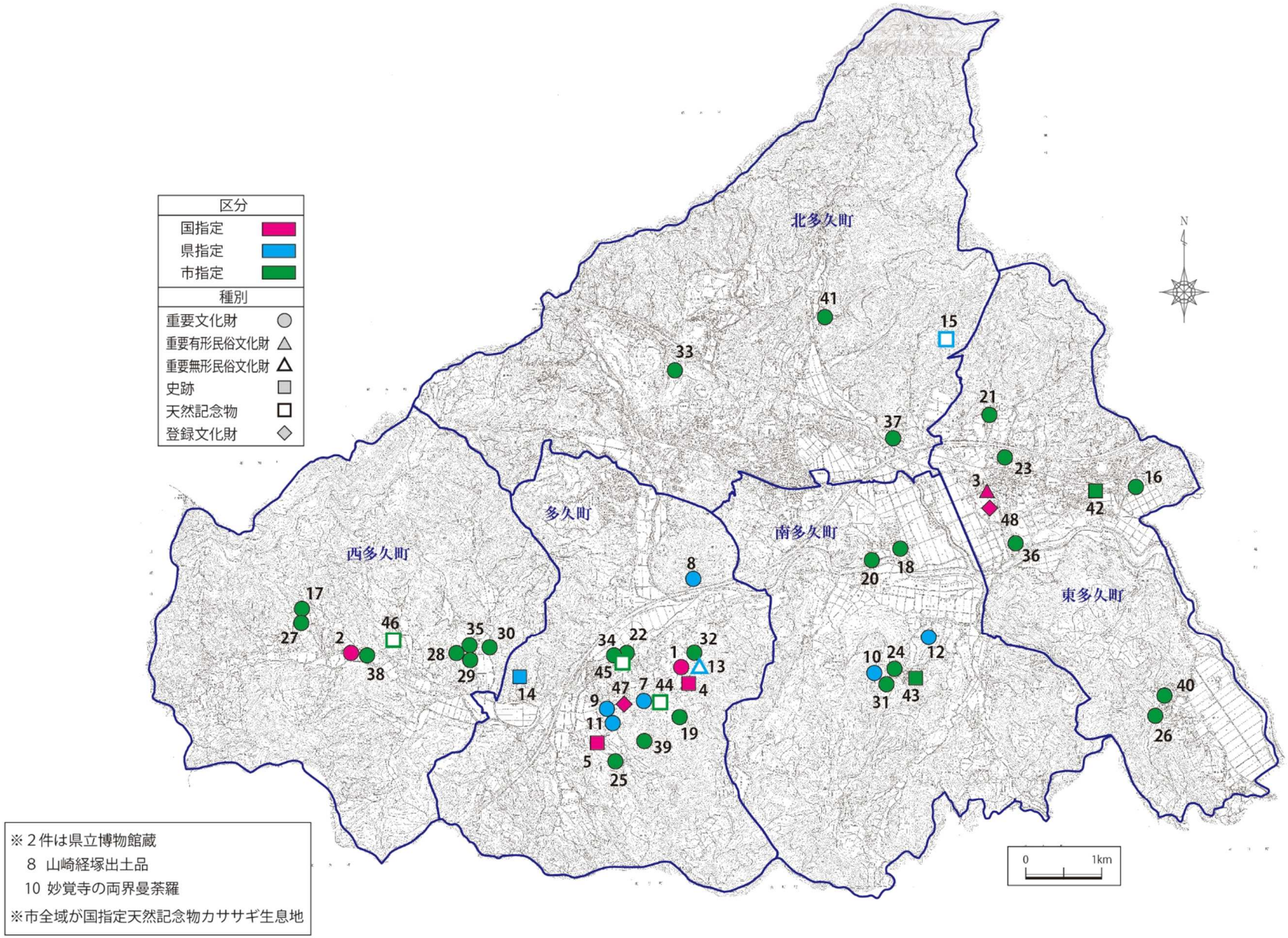
※多久市の合計にはカササギ生息地（国天然記念物）を含む。

なお、佐賀県立博物館に佐賀県指定文化財の 2 件（山崎経塚出土品、両界曼荼羅図)、多久市郷土資料館には県指定文化財の 3 件（多久家資料および後藤家文書、立葵蒔絵螺鈿箏、牟田辺遺跡甕棺墓出土品）と市指定文化財の 2 件　（内行花文鏡、大工田 6 号古墳出土遺物一括）の 5 件が所蔵されている。

資料 2-20　多久市指定･登録文化財一覧

（平成 29 年現在）

	位置番号	文化財の名称	種別	指定年月日	所在地
国指定（6件）	1	多久聖廟 附聖龕（S32）	重要文化財（建造物）	S8.1.23	多久町
	2	川打家住宅	重要文化財（建造物）	S49.2.5	西多久町
	3	肥前佐賀の酒造用具	重要有形民俗文化財	S63.3.25	東多久町
	4	多久聖廟	史跡	T10.3.3	多久町
	5	肥前陶器窯跡（唐人古場窯跡）	史跡	H17.7.14	多久町
	6	カササギ生息地	天然記念物	T12.3.7	全域
県指定（9件）	7	若宮八幡宮神殿	重要文化財（建造物）	S33.1.23	多久町
	8	山崎経塚出土品	重要文化財（出土品）	S34.3.20	多久町
	9	多久家資料及び後藤家文書	重要文化財（書籍）	S53.3.20	多久町
	10	両界曼荼羅図	重要文化財（絵画）	S59.3.21	南多久町
	11	立葵蒔絵螺鈿箏	重要文化財（工芸品）	H10.3.26	多久町
	12	牟田辺遺跡甕棺墓出土遺物	重要文化財（出土品）	H15.3.10	南多久町
	13	多久聖廟釈菜	重要無形民俗文化財	S55.3.21	多久町
	14	保四郎窯跡	史跡	S52.3.11	多久町
	15	相の浦の球状閃緑岩	天然記念物	S46.6.23	北多久町
市指定（31）件	16	石造六地蔵	重要文化財（彫刻）	S53.7.10	東多久町
	17	正善寺の紙本着色仏涅槃図	重要文化財（絵画）	S53.7.10	西多久町
	18	前多久家石造供養塔	重要文化財（歴史資料）	S53.7.10	南多久町
	19	石製先家君自安先生墓誌	重要文化財（歴史資料）	S53.7.10	多久町
	20	高野神社石造肥前鳥居	重要文化財（建造物）	S53.7.10	南多久町
	21	銅製鰐口	重要文化財（工芸品）	S55.1.28	東多久町
	22	少弐政資・資元の墓	重要文化財（歴史資料）	S55.1.28	多久町
	23	島原の乱戦死者供養碑	重要文化財（歴史資料）	S56.3.20	東多久町
	24	諫早墳	重要文化財（歴史資料）	S56.3.20	南多久町
	25	西の原大明神一字一石経一括資料	重要文化財（歴史資料）	S57.3.21	多久町
	26	両子神社の肥前鳥居	重要文化財（建造物）	S58.3.30	東多久町
	27	島原の乱女山多久家戦死者供養碑	重要文化財（歴史資料）	S58.3.30	西多久町
	28	龍造寺長信の逆修供養塔	重要文化財（歴史資料）	S61.8.19	西多久町
	29	円通寺の逆修六地蔵	重要文化財（彫刻）	S61.8.19	西多久町
	30	藤川内の観音講石祠	重要文化財（彫刻）	S61.8.19	西多久町
	31	妙覚寺の刻像青面金剛石祠	重要文化財（彫刻）	S61.8.19	南多久町
	32	青銅造孔子像	重要文化財（工芸品）	H1.2.28	多久町
	33	諸田賢順の墓	重要文化財（歴史資料）	H1.2.28	北多久町
	34	木造阿弥陀如来坐像	重要文化財（工芸品）	H2.3.2	多久町
	35	大応山円通寺山門木額	重要文化財（工芸品）	H2.3.2	西多久町
	36	内行花文鏡	重要文化財（考古資料）	H3.4.22	東多久町
	37	大工田6号古墳出土遺物一括	重要文化財（考古資料）	H6.3.18	北多久町
	38	森家住宅	重要文化財（建造物）	H8.3.29	西多久町
	39	青銅製雲版	重要文化財（工芸品）	H22.3.31	多久町
	40	百万遍念仏塔	重要文化財（歴史資料）	H22.3.31	東多久町
	41	弁財天石祠	重要文化財（歴史資料）	H22.3.31	北多久町
	42	古賀山１号墳	史跡	S53.7.10	東多久町
	43	皇塔（おおやけのとう）	史跡	S55.1.28	南多久町
	44	若宮八幡宮の三本杉	天然記念物	S53.7.10	多久町
	45	専称寺の大つつじ	天然記念物	S61.8.19	多久町
	46	正蔵寺のまき	天然記念物	H2.3.2	西多久町
国登録 2件	47	多久市西渓公園寒鶯亭	登録文化財（建造物）	H11.7.8	多久町
	48	木下家住宅	登録文化財（建造物）	H23.10.28	東多久町



資料 2-21　指定・登録文化財位置図

資料 2-22　多久市における指定文化財と登録文化財

		東多久町	南多久町	多久町	西多久町	北多久町	件数
原始	旧石器・縄文時代					県）相の浦の球状閃緑岩	1
	弥生時代	市）内行花文鏡 【市郷土資料館】	県）牟田辺遺跡甕棺墓出土遺物 【市郷土資料館】				4
	古墳時代	市）古賀山１号古墳				市）大工田６号古墳出土遺物一括 【市郷土資料館】	
古代	飛鳥～平安時代		県）両界曼荼羅図（妙覚寺） 【県立博物館】	市）木造阿弥陀如来座像（専称寺） 県）山崎経塚出土品【県立博物館】			3
中世	鎌倉時代		市）皇塔（妙覚寺）	県）多久家資料及び後藤家文書（～近世末） 【市郷土資料館】 県）若宮八幡宮神殿 市）若宮八幡宮の三本杉			4
	室町時代	市）渋木の石造六地蔵 市）百万遍念仏塔	市）前多久家石造供養塔 （延寿寺）	市）専称寺の大つつじ（専称寺） 市）青銅製雲板（専称寺） 市）少弐政資・資元の墓（専称寺）	市）正蔵寺のまき（正蔵寺） 市）龍造寺長信の逆修供養塔（円通寺）	市）弁財天石祠	9
	安土桃山時代			国）肥前陶器窯跡			1
近世	江戸時代	市）島原の乱戦死者供養碑（通玄院） 市）両子神社の肥前鳥居（両子神社） 市）銅製鰐口（妙海寺）	市）妙覚寺の刻像青面金剛石祠 （妙覚寺） 市）高野神社石造肥前鳥居 （高野神社） 市）諫早憤（妙覚寺）	県）保四郎窯 県）立葵蒔絵螺鈿箏【市郷土資料館】 市）青銅造孔子像 国）多久聖廟 附聖龕 国）多久聖廟 県）多久聖廟釈菜 市）石製先家君自安先生墓誌 市）西の原大明神一字一石経一括資料 （等覚寺）	市）島原の乱女山多久家戦死者供養碑 （正善寺） 市）正善寺の紙本着色仏涅槃図 市）藤川内の観音講石祠 市）円通寺の逆修六地蔵（円通寺） 市）大応山円通寺山門木額（円通寺） 国）川打家住宅 市）森家住宅	市）諸田賢順の墓	22
近現代	明治	国）肥前佐賀の酒造用具 国登録）木下家住宅（主屋・離れ・つなぎ屋）					2
	大正			国登録）多久市西渓公園寒鶯亭			1
計		9	7	18	9	4	47

２）主な祭り行事

市史では、全部で 26 件の祭り行事が挙げられている。

このうちもぐら打ちは 37 の行政区で現在行われている。論語カルタ大会は３つの義務教育学校にて回り持ちで、桜の花見も 3 か所（岩屋山渓桜公園・西渓公園・中央公園）で実施されている。

冬に開催される祭りイベントは、全国ふるさと漢詩コンテスト・七草がゆ・もぐら打ち、春は、桜の花見・高野神社春祭り・熱田神社春祭り・聖廟春季釈菜、夏は、聖光寺二千年ハス・専称寺大つつじ・諸田賢順を偲ぶ会・多久山笠・砂原二十三夜祭・岸川盆綱引き、秋は、論語カルタ大会・両子神社祭り・八幡神社秋季例祭・高野神社秋祭り・熱田神社秋祭り・聖廟秋季釈菜・孔子祭り・孔子の里紅葉まつり・多久八幡神社例大祭・七郎神社祇園祭・西多久ふれあい祭りなどとなっている。

①祭り行事

多久市内の主な祭り、行事は関連資料一覧の通りである。

祭りの件数は市全体で 291 となり、最も多い町は東多久町の 80、最も少ないのは西多久町 47 である。

行事の件数は市全体で 255 であり、最も多い町は西多久町の 59、最も少ないのは東多久町 44 となっている。

祭りと行事の件数を行政区別に概観すると、件数が多い行政区はほぼ重複しており（ただし、東多久町の一部の行政区を除く）、逆に催されていない行政区も重複しているといえる。

写真 2-36　多久山笠（北多久町）

写真 2-37　七郎神社祭り（西多久町）

写真 2-38　孔子祭り 腰鼓（ようこ）

写真 2-39　もぐら打ち

写真 2-40　釈菜（多久町）[県重無形民俗]

写真 2-41　釈菜の舞

写真 2-42　中国獅子舞

②郷土芸能

多久市史では、ヤーホーハイ（弥奉拝）、太鼓浮立、鉦浮立、面浮立、銭太鼓、女相撲甚句踊り、鍬踊りの７件をあげている。

開催場所は全体でみると偏在しており、市の東側・南側の市境に近い場所に多くある。また東多久町の南に８件と多久町の東の原・西の原の４件と集中している。

太鼓浮立は、東多久町裏納所・北坊・平林・大門、南多久町桐野、西多久町白仁田の６か所と最も多く、次いで女相撲甚句踊りの３か所となっている。

写真 2-43　ヤーホーハイ

写真 2-44　銭太鼓

写真 2-45　面浮立

写真 2-46　太鼓浮立

写真 2-47　鉦浮立

３）有形文化財

①神社

市全体で 42 社、最も多いのは北多久町の 14 社となっている。

両子(ふたご)神社は、天徳元年(957)に秋田宮内大輔豊定が勅命により納所へと赴任する時に創建した熊野権現社と、長徳元年(995)豊定の子秋田納所次郎豊次とまたその子、豊忠が両子山山頂に創建した両子山王権現(のち参詣が困難なため現在地に移転)を起源とする、明治 43 年合併して現在の両子神社となった。このうち両子神社の肥前鳥居が市重要文化財になっている。

多久（若宮）八幡神社は、多久の祖多久太郎宗直が、鎌倉の鶴ヶ丘八幡宮の若宮八幡を勧請して、建てたと伝えられている。境内にある三本杉は八幡神社の建立時に植えられたと伝えられており、県内でも最大級のもので市天然記念物に指定されている。

多久神社は、弘化元年（1844）多久茂族(しげつぐ)が先祖の家兼、長信、安順を祭祀するための新宮を創建、梶峰社と名付け京都より御神体を遷座して遷宮式を行った。昭和 26 年多久神社と改めた。

西ノ原大明神は、7 代領主多久茂堯(しげたか)の長女・林姫(りんひめ)を祀る神社。その他の神社については関連資料一覧のとおり。

写真 2-48　多久神社（多久町）

写真 2-49　岸川熊野権現社(北多久町)

写真 2-50　高野神社（南多久町）

写真 2-51　藤川内天満宮（西多久町）

写真 2-52　西ノ原大明神（多久町）

写真 2-53　両子神社（東多久町）

②寺院

市全体では、31 寺院であり、東多久町が最も多く 9 寺院となっている。最も古い創建は平安時代に行基により開山されたと伝えられる桐野山妙覚寺（南多久町桐野）、次いで光明山専称寺（多久町東の原）となっている。宗派では曹洞宗が 10 と最も多い。

写真 2-54　正善寺（西多久町谷）

写真 2-55　専称寺（多久町東の原）

写真 2-56　妙海寺（東多久町仁位所）

写真 2-57　等覚寺（多久町西の原）

写真 2-58　聖光寺（多久町東の原）

写真 2-59　妙覚寺山門（南多久町桐野）

③堂と社

市内には先に述べた神社や仏閣が多くあるが、各集落には堂や祠などの社が祀られている。

現在、市全体で堂は 82、社は 35 となっている。堂が最も多い町は西多久町で 19 であり、最も少ないのは多久町の 14 である。

社が最も多い町は東多久町の 11 であり、最も少ないのは南多久町の 4 である。

写真 2-60　野間口薬師堂（西多久町）

写真 2-61　弁財天社（北多久町松ヶ浦）

④石造物

多久市の東に位置する小城市牛津町を中心に室町時代の末期から江戸時代初期にかけて砥川石工が活躍し、佐賀県内には肥前鳥居をはじめとした多くの石造物が残されている。肥前鳥居の特徴は、笠木と島木が一体化し、木鼻が流線形に伸びている。笠木・島木・貫・柱の各 部分が継材となっており、原則的には各部分が 3 本継ぎとなっている。柱の下部に亀腹を設けず、柱の下部を削り出して、生け込みになっている。柱の上部には、台輪をつけ 楔を設けないなどがあげられる。また肥前狛犬も独特なもので、一般に小形で姿態は極めて静的であり、彫法は簡潔にして素朴である。肥前狛犬が姿を消す江戸時代中期前後から大型で躍動的な唐獅子系狛犬が出現する。

市全体では、3 千体以上が存在したと思われる。現在 1,292 体が確認され、その主なものは以下の通りである。

町別にみると、北多久町が最も多く 378、多久町が最も少なく 147 である。

行政区別の石造物を概観すると、かつて或いは各町の中心の行政区に多く存在しており、一方、市域の境界にある行政区では相対的に石造物の数は少ないといえる。

郷土資料館では調査した石造物の展示イベントを行っており、これは公開の意味とともに、石造物の戸籍づくりの側面もあり、その保護へつながる基礎資料となっている。

写真 2-62　肥前狛犬（東多久町）

写真 2-63　大黒像（東多久町）

写真 2-64　石造物（南多久町）

写真 2-65　市重)肥前鳥居(東多久町)

写真 2-66　六地蔵(東多久町)

写真 2-67　恵比寿像(東多久町)

４）その他

多久市内には往還などの道沿いを中心に、多くの言い伝えや伝説が残っており、主な伝説は 17 ある。そのうち多久町が 11 か所に関係しており最も多い。

ある程度時代が特定できるのは、鎮西八郎為朝の古代末期から、林姫哀話の江戸時代までである。

資料 2-23　主な伝説と関連地域

町　別	伝　　説	関連する地域
東多久町	百合稚伝説と鬼神社 我兄弟の供養塔と虎御前 太閤の腰掛水	仁位所 渋木 古賀二区
南多久町	多久太郎宗直と陣内城 荒谷万吾と源太の力比べ 孝子吉之助と目達原仇討ち	高野神社・中小路 谷下・牟田辺 瓦川内
多久町	鬼の鼻伝説 核(さね)割れ梅 柴折峠 兵糧小路 金ケ江三兵衛伝説 多久聖廟と龍 林姫哀話	中野 専称寺 桐岡・岡 下鶴・東の原 西の原 東の原 西の原大明神・宮ノ浦・地福寺
西多久町	林姫哀話 女山の女盗賊	円通寺 山口・平古場
北多久町	松浦佐用姫と長者原 鎮西八郎為朝と小伝塚 太閤秀吉と原巻坂・茶屋原	横柴折 多久原・四下・申川内 山犬原

その他に以下の伝説などもある。また主だった伝説の概要は関係資料に示す。

仏光江（常應寺）、遠永塔（納所）、かまかけさん（長尾）、為朝の矢の根石（高野神社）、妙覚寺山内二十坊（桐野）、鐘掛け松（妙覚寺）、桐野古戦場（桐野）、詫田の番匠（万福寺）、夢想流捕手術（黒髪権現）、高麗権現（東の原）、青竜玉五郎（下鶴）、鶴掛け松（板屋）、陣の辻（中山）、夜泣きの松（相の浦）　など

写真 2-68　「核割れ梅」（専称寺）

写真 2-69　「西の原大明神」

写真 2-70　「女山（船山）」

写真 2-71　聖廟天井画「蟠龍」
（御厨夏園画）

（２）各町の歴史文化の現況

東多久町の概要と歴史文化

東多久町は市の東側にあり、小城市に接している。多久盆地の東の切れ目であり、古くから佐賀への通行口となっている場所である。長崎街道から分かれた唐津往還がさらに、伊万里往還と分岐する場所で古来より交通の要衝であり、現在も国道や県道、ＪＲ唐津線が通っている。

東多久町　（大字別府・大字納所）　面積：16.2㎢　人口：4,767 人（H29 年）行政区数：28

指定文化財	主なイベント・祭り	郷土芸能
3 国)肥前佐賀の酒造用具　16 市)渋木の石造六地蔵　21 銅製鰐口　23 島原の乱戦死者供養碑　26 両子神社の肥前鳥居　36 内行花文鏡　40 百万遍念仏塔　42 古賀山１号古墳　48 国登録)木下家住宅 主屋、離れ、つなぎ屋	桜の花見（岩屋山渓桜公園） 八幡神社秋季例祭(別府二区) 両子神社祭り（平林）	太鼓浮立（北坊・大門・平林・裏納所） 鉦浮立（大畑） 面浮立（別府一区・平合） 銭太鼓（平林） 女相撲甚句踊（大畑）

伝説

百合稚伝説と鬼神社（仁位所）
曽我兄弟の供養塔と虎御前（渋木）
太閤の腰掛水（古賀二区）

航空写真（平成 10 年） 別府地区・羽佐間・古賀地区・平和町

石造物

恵比須像 聖徳太子像 大黒天像 宇賀神像
弾丸除観音像 観世音菩薩像 奉納馬像
新四国八十八ヵ所地蔵菩薩像　地神石塔
新四国八十八ヵ所不動明王像
天神丸彫坐像石祠　猪像　沖大明神石祠
天山宮石祠　宝満社石祠　弁財天石祠
龍王三蛇石祠　山王社石祠　石原空照師像
金毘羅大権現石祠　白山大権現石祠　宝塔
稲荷社石祠　二十三夜石祠　読涌塔　鳥居
大日如来石祠　四仏塔　宇佐八幡神社塔
栗嶋大明神割石塔　板碑　木花開耶姫命塔
題目塔　刻像大黒天塔
太良嶽大権現石塔　力石　文字蛭子塔
諏訪大明神塔　百万編念仏塔　一字一石塔
子安観音塔　南無観世音菩薩塔
馬頭観世音塔　西国三十三所観音の諸仏
六地蔵塔　三十番神塔　真言十三仏　灯籠
石敢當　耕地整理記念碑　二十三夜塔　他

神社	寺院
両子神社　松瀬天満宮　渋木妙見社　鬼神社 皆木天神社　別府八幡神社　羽佐間妙見社	常応寺　清心寺　真宗寺　高徳寺(廃)　本覚寺 通玄院　虎渓寺　妙海寺　宝蔵寺
堂	**社**
観音堂（4）大通院観音堂　不動堂　大師堂　地蔵堂 本覚寺跡観音堂　別府三区観音堂　古賀山観音堂 別府山観音堂　川西観音堂　桜木観音堂	天満宮　合六天満宮　八天宮　天山神社　番神社 下天神社　天神宮　秋葉神社　白子円稲荷社　弁財天堂 山王権現社　熊野権現社　稲荷堂
祭り　80 件	**行事　44 件**
宝満社祭　大般若さん祭り　恵比寿祭り　春の祈願祭 六体地蔵尊祭　水神祭り　風祭り ムラ祭り 壱日祭り 薬師寺祭り　地蔵さん祭　彼岸祭り　十三日祭り 大黒天祭り　弁財天祭り 鬼子母神祭り 龍王さん祭り ぼんたん祭り　満手餅祭り　天山社祭り　巳て祭り むつごろう夏祭り　阿弥陀様祭　風通夜祭	もぐら打ち　灯篭付け　村祈祷　風籠り　鬼火焚き さなぼり　彼岸籠り　権現さんお籠り　宝満さんお籠り 花煎り　天山さん籠り　風通夜　お供日 両子神社供日　風籠り灯夜　風透夜

資料 2-24　東多久町の指定・登録文化財

南多久町の概要と歴史文化

南多久町は、多久盆地の南縁を形成し、多久町と東多久町の間に位置する場所にあり、盆地中央には平坦な農地が広がり、山間部の北向き斜面には谷筋にそって棚田が連なる山村の景観がある。

南多久町（大字下多久・大字長尾・大字花祭）　面積：17.5㎢　人口：2,847 人（H29 年）行政区数：17

指定文化財

10 県)両界曼荼羅図 12 牟田辺遺跡甕棺墓出土遺物 18 市）前多久家石造供養塔 20 高野神社石造肥前鳥居 24 諫早憤 31 妙覚寺の刻像青面金剛石祠 43 皇塔

主なイベント・祭り

高野神社春祭り・秋祭り（西ノ谷）
熱田神社祭り（春・秋）（平原）
ふいご祭り（花祭）

郷土芸能

太鼓浮立（桐野）

伝説

多久太郎宗直と陣内城
（高野神社・妙覚寺・延寿寺）
荒谷万吾と源太の力比べ（谷下・牟田辺）
孝子吉之助と目達原仇討ち（瓦川内）

航空写真（平成 10 年）西ノ谷・庄・牟田辺・桐野

石造物

恵比須像　大黒天像　多々良観音堂猿像
六体地蔵像　三十三観世音菩薩像
奉納牛像　新四国八十八ヵ所観世音菩薩像
新四国八十八ヵ所の諸仏像　弁財天石祠
菅公像石祠　金毘羅社石祠　稲荷社石祠
妙見大菩薩石祠　宮地嶽三柱神石祠
秋葉神社石祠　天満宮石祠　愛宕神社石祠
天山宮石祠　蚕神社石祠　太神宮石祠
多聞天王塔 妙見大菩薩像塔 毘沙門天像塔
六地蔵塔　層塔　庚申塔　庚申六地蔵塔
観音講塔　大日如来像日待塔　五輪塔
百万遍念仏塔　一字一石塔　三界万霊塔
道標　七地蔵塔　天満宮石殿　山王社石殿
名号塔
天照皇太神宮碑　農会設立五十年記念碑
伊勢講碑　明神鳥居　庚申石憧　石橋　他

神社

西山天満宮　熱田神社　高野神社　印鑰社
中小路天満宮　牟田辺太神宮

寺院

大梅寺　覚円寺　福聚寺　延寿寺　長生寺
妙覚寺　龍照寺

堂

薬師堂　天ヶ瀬地蔵堂　多々良観音堂　文殊堂
感応寺観音堂　なきびすさん　観音堂（3）　大師堂（2）
片桐大師堂

社

八龍神社　柳内熊野権現社　多峯権現社
日吉山王権現社　白山権現社　天満宮　太神宮

祭り

風祭り　ナマス祭り　水の出口弁財天祭り　風通夜祭
厄神さん祭り　12 月 15 日祭り　大神宮祭り　ムラ祭り
初祭り　二十五日祭り　地蔵さん祭り　宝満さん祭り
弁財天祭り　勘太郎慰霊祭　弁財さん祭り巳て祭り
大黒さん祭り　天神さん祭り

行事

花煎り十五日　彼岸　村祈祷　お諏訪さん参り　さなぼり
彼岸籠り　地蔵さん祇園　もぐら打ち　鬼火焚き　豆茶籠
彼岸道作り　春酒盛り　風籠り　大般若さん　虫祈祷
お茶や　秋の彼岸籠り

31 妙覚寺の刻像青面金剛石祠

43 皇塔

資料 2-25　南多久町の指定・登録文化財

多久町の概要と歴史文化

多久町は、市の南側中央部にあり、古くから領主の城や屋敷がおかれた政治、文化の中心であった。文化財としては、東の原に置かれた多久聖廟を中心に多くの指定・登録文化財がある。近世には伊万里往還が東西に通っており、かつての往還道の線形を残している。牛津川南側の平地には古くからの町並みが残っており、その町割りは絵図の名残を色濃く残している。

多久町	面積：16.8km² 人口：2,888 人（H29 年）行政区数：15	
指定文化財	主なイベント・祭り	郷土芸能
1 国）多久聖廟 附聖龕 2 肥前陶器窯跡 4 県）若宮八幡宮神殿 8 山崎経塚出土品 9 多久家資料及び後藤家文書 11 立葵蒔絵螺鈿箏 13 多久聖廟釈菜 14 保四郎窯跡 19 市）石製先家君自安先生墓誌 22 少弐政資･資元の墓 25 西の原大明神一字一石経一括資料 32 青銅造孔子像 34 木造阿弥陀如来坐像 39 青銅製雲版 44 若宮八幡宮の三本杉 45 専称寺の大つつじ 47 国登録）寒鶯亭	桜の花見（西の原西渓公園） 聖廟春季釈菜 聖廟秋季釈菜（東の原） 専称寺大つつじ（東の原） 聖光寺二千年ハス（東の原） 諸田賢順を偲ぶ会（東の原） 孔子祭り（東の原） 孔子の紅葉祭り（西の原～東の原） 聖廟お火焚き（東の原）	ヤーホーハイ （東の原・西の原） 鍬踊り（東の原・西の原） 女相撲甚句踊（岡）
伝説	航空写真（平成 10 年）浦町・西町・東町・西の原・東の原・撰分	
鬼の鼻伝説（中野） 紫折峠（桐野・岡） 兵糧小路 李参平伝説（西の原） 多久聖廟と龍（東の原） 林姫哀話（西の原・石州分）		
石造物		
恵比須像 大黒天像 中央神石祠 八天狗社石祠 道祖神石殿 金毘羅大権現石祠 金比羅神社石祠 天満宮石祠 厳島神社石祠 黒髪権現石祠 妙見大菩薩石祠 諏訪大明神石祠 淡島大明神石祠 山神石祠 浮彫弁財天舟形塔 水天宮塔 三十番神塔 西乃宮大明神塔 中央塔 中央大日如来塔 刻像弁財天塔 名号塔 青面金剛塔 妙見大菩薩像塔 猿田彦大神塔 天照皇太神宮塔 宝篋印塔 三界万霊塔 毘沙門天浮彫像塔 真言十三仏 道祖神社石殿 石敢當 板碑道祖神 兵糧小路舊跡碑 大宝聖林碑 多久茂族碑 斗南雀田君碑 草場佩川生誕地碑 灯籠 折衷型鳥居 水盤 番号石 他		
神社	寺院	
栗山権現社 多久八幡神社 多久神社 天徳天神 西ノ原大明神 岡妙見社 高松社 七面神社 熊野権現社 石州分妙見社 三吉神社	瑞応寺 聖光寺 専称寺 万福寺 等覚寺 顕証寺 地福寺	
堂	社	
大日堂 毘沙門堂 山廉薬師堂 山手観音堂 イボ地蔵さん 観音堂 不動堂 撰分観音堂 西山観音堂 西山番神堂 松山地蔵堂 大師堂	黒髪権現 下川権現社 伊勢講祠さん 道祖神社 浦町天満宮 天満宮 吉丸弁財天社	
祭り	行事	
兵糧小路祭り 宝満祭り 弁財天祭り 八天祭り 厄神さん祭り 観音さん祭り 宝満宮祭り 風祭り 八天さん祭り 宝満神社祭 ふれあい夏祭り 子供みこし祭り	もぐら打ち お火焚き 彼岸籠り 岡相撲踊 さなぼり おくんち 江隅墓地無縁仏供養 シメ縄作り 田植え籠り	

7 若宮八幡宮神殿

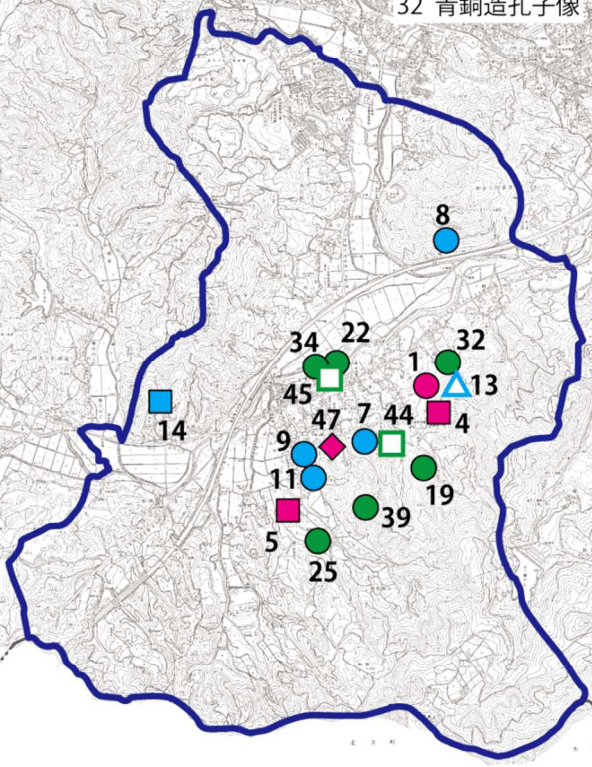
44 若宮八幡宮の三本杉

22 少弐政資・資元の墓

32 青銅造孔子像

1 多久聖廟 附聖龕

45 専称寺の大つつじ



47 多久市西渓公園寒鶯亭

1・4 多久聖廟

14 保四郎窯跡

19 石製先家君自安先生墓誌

5 肥前陶器窯跡（唐人古場窯跡）

25 西の原大明神一字一石経一括資料

39 青銅製雲版

資料 2-26　多久町の指定・登録文化財

西多久町の概要と歴史文化

西多久町は、平地が少なく、伊万里往還が東西に走り、女山峠を境に武雄市と隣接している。山間部の谷あいには多くの棚田が形成され、往還道沿いの古い街道集落と山村集落の景観を見ることができる。

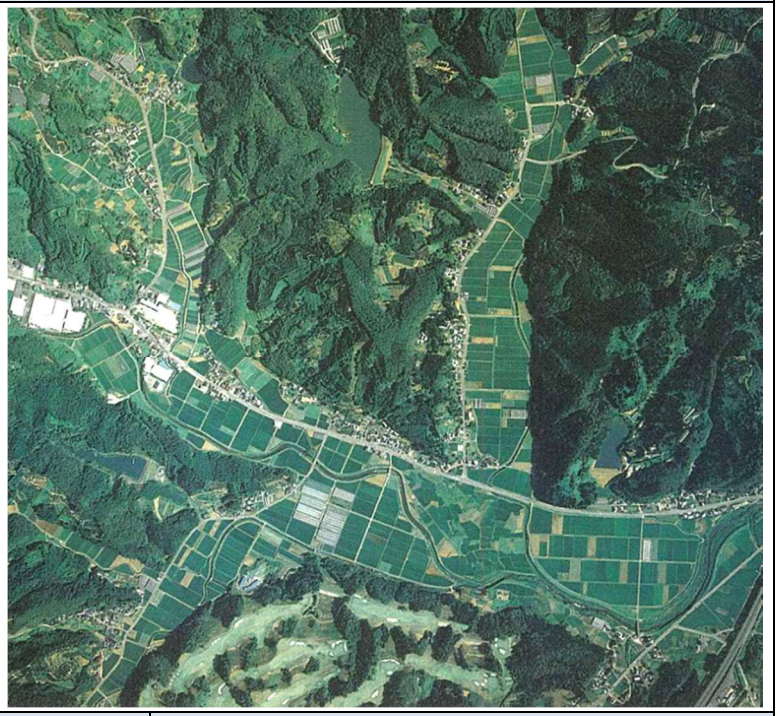
<table>
<tr><td colspan="3">西多久町（大字板屋）　　面積：19.1km²　　人口：1,041 人（H29 年）行政区数：15</td></tr>
<tr><td>指定文化財</td><td>主なイベント・祭り</td><td>郷土芸能</td></tr>
<tr><td>2 国)川打家住宅
17 市)正善寺の紙本着色仏涅槃図　27 島原の乱女山多久家戦死者供養碑　28 龍造寺長信の逆修供養塔　29 円通寺の逆修六地蔵
30 藤川内の観音講石祠　35 大応山円通寺山門木額　38 森家住宅　46 正蔵寺のまき</td><td>七郎神社祇園祭（板屋）
西多久ふれあい祭り（板屋）</td><td>太鼓浮立（白仁田）</td></tr>
<tr><td>伝説</td><td colspan="2">航空写真（平成 10 年）板屋・宿・藤川内・道祖元</td></tr>
<tr><td>林姫哀話（藤川内）
女山の女盗賊（山口・平古場）</td><td colspan="2" rowspan="5">  </td></tr>
<tr><td>石造物</td></tr>
<tr><td>恵比須像　大黒天像　西国三十三所観音像　薬師如来像
弁財天石祠　八大龍神石祠　船山霊神石祠　八幡大神宮石祠　天満宮石祠　宝満社石祠　摩利支尊天石祠　疫神石祠　風大明石祠
龍王石祠　八幡大神社石祠　大日如来石祠
地神塔　地主大明神塔　五穀神五角柱塔　中央塔　山神宮塔　船山霊神塔　五穀神塔　穀神乃主塔　逆修供養塔
天照皇両太神宮塔　読誦塔　三界万霊塔　地蔵菩薩塔　六地蔵塔　慈眼視衆生観音塔　天照皇太神宮碑
灯籠　肥前狛犬　丁石　他</td></tr>
<tr><td>神社</td></tr>
<tr><td>藤川内天満宮　七郎神社　鈴鹿神社　平野熊野権現社</td></tr>
<tr><td>寺院</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>円通寺　正蔵寺　正善寺</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2">堂</td><td>社</td></tr>
<tr><td colspan="2">薬師堂　野間口薬師堂　船山観音堂　二重観音堂　大日堂　備後・山古場地蔵菩薩堂　松葉地蔵堂　　観音堂（6）
杉馬場地蔵堂　山口観音堂　大師堂（3）山下権現社</td><td>剖石権現社　竹臺社　疫神社　熊野権現社　太神宮　毘沙門様</td></tr>
<tr><td colspan="2">祭り</td><td>行事</td></tr>
<tr><td colspan="2">弁財天祭り　天神祭り　八大龍王祭り　村祈祷・祇園祭り　社日　五穀神祭り　風祭り　五穀神さん　村祭り
風神様祭り　他</td><td>鬼火焚き　もぐら打ち　さなぼりさん　彼岸　お日待　お茶講　二百十日風籠り　神待ち　村祈祷と新年会
神待ち透夜　風籠り　お大師さん茶講　うどん打ち　宮地嶽供日　つくりあがり籠り　風待ち通夜　他</td></tr>
</table>

写真 2-72　西多久町宿の民家群

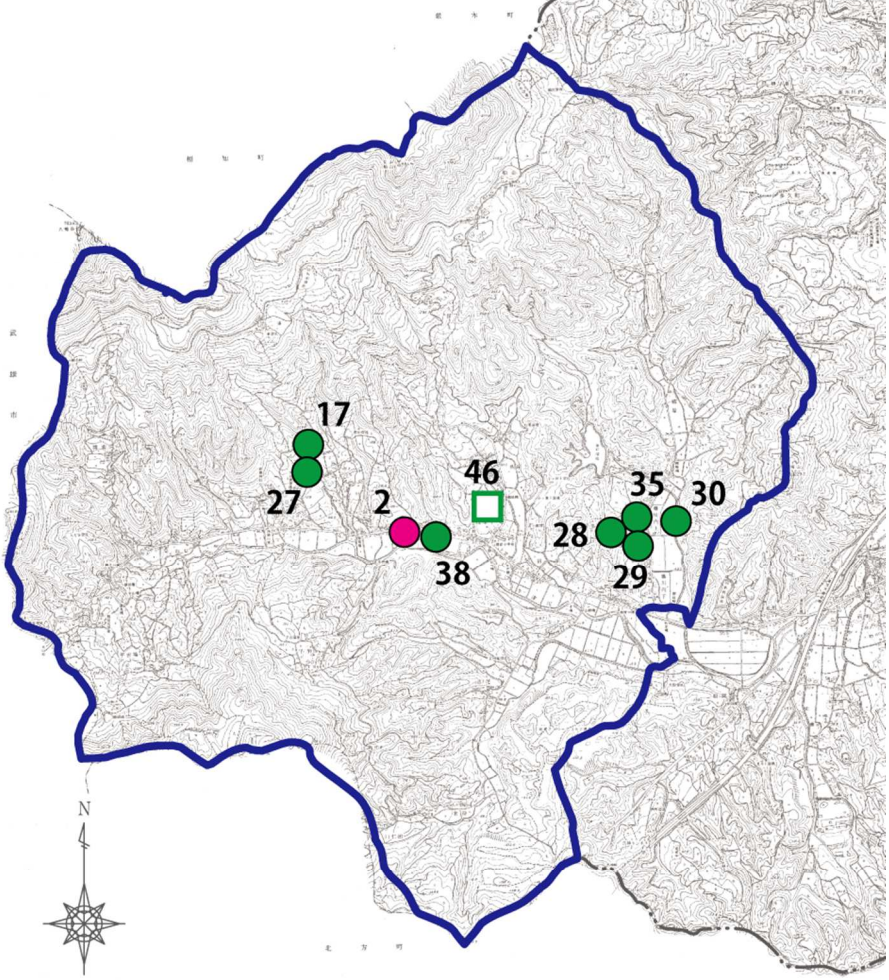
写真 2-73　尾崎地蔵堂(西多久町谷)

46 正蔵寺のまき

35 大応山円通寺山門木額

30 藤川内の観音講石祠

27 島原の乱女山
多久家戦死者供養碑



2 川打家住宅

38 森家住宅

29 円通寺の逆修六地蔵

28 龍造寺長信の逆修供養塔

17 正善寺の紙本着色
仏涅槃図

資料 2-27　西多久町の指定文化財

北多久町の概要と歴史文化

北多久町は、多久市の北部に位置し平野部には市街地が形成され旧唐津往還やＪＲ唐津線が通り、市の中心部となっている。北側は脊振山系につながる山並みが続き、市域は標高 1,046ｍの天山まで続く。

JR 多久駅、市役所、などの主要施設が立地し、市の交通、行政の中心地であり、近年再開発が進み多久の新たな顔となりつつある町である。

北多久町（大字小侍・大字多久原）　面積：27.2km²　人口：8,384 人（H29 年）行政区数：27

指定文化財	主なイベント・祭り	郷土芸能
15 県)相の浦の球状閃緑岩 33 市)諸田賢順の墓 37 大工田６号古墳出土遺物一括 41 弁財天石祠	桜の花見（浦山・中央公園） 多久まつり（筋原）　多久山笠（砂原） 砂原二十三夜祭（砂原）　岸川盆綱引き（岸川）　天山記念碑祭（岸川）	銭太鼓（申川内） 女相撲甚句踊（岸川）

伝説

松浦佐用姫と長者原（横紫折・長者原）
鎮西八郎為朝とお伝塚（多久原・四下）
太閤秀吉と原巻坂・茶屋原（山犬原・茶屋原）

航空写真（平成 10 年）多久原・中多久・原口・四下・申川内 他

石造物

恵比須像　大黒天像　山王（猿）像
十一面観音像　弘法大師像　釈迦如来像
菅原道真浮彫像　弁財天石祠　天満宮石祠
熊野権現石祠　稲荷石祠　八幡宮石祠
毘沙門天石祠　疫神社石祠　秋葉大権現石祠
八天社石祠　三社合祀石祠　水神社石祠
観音講石祠　英彦神社石祠　宮地嶽神社石祠
疱瘡神石祠　毘沙聞天石祠　十一面観音石祠
子安観音石祠　合祀大黒天石祠　天神宮石祠
地蔵菩薩塔　六地蔵塔　鬼子母神塔　水神塔
摩利支天塔　土荒神塔　読誦塔　八天宮塔
豊満宮塔　宝満社塔　二十三夜塔　写経塔
宝満宮文字塔　六尊六地蔵塔　貳拾参夜塔
五輪塔　軍神塔
板碑　番所関所跡碑　紀念碑　鎮魂之碑
在日朝鮮人帰国記念樹の碑
日露戦争凱旋記念碑
熊野大権現石殿　肥前鳥居　小型鳥居
肥前狛犬　水盤　他

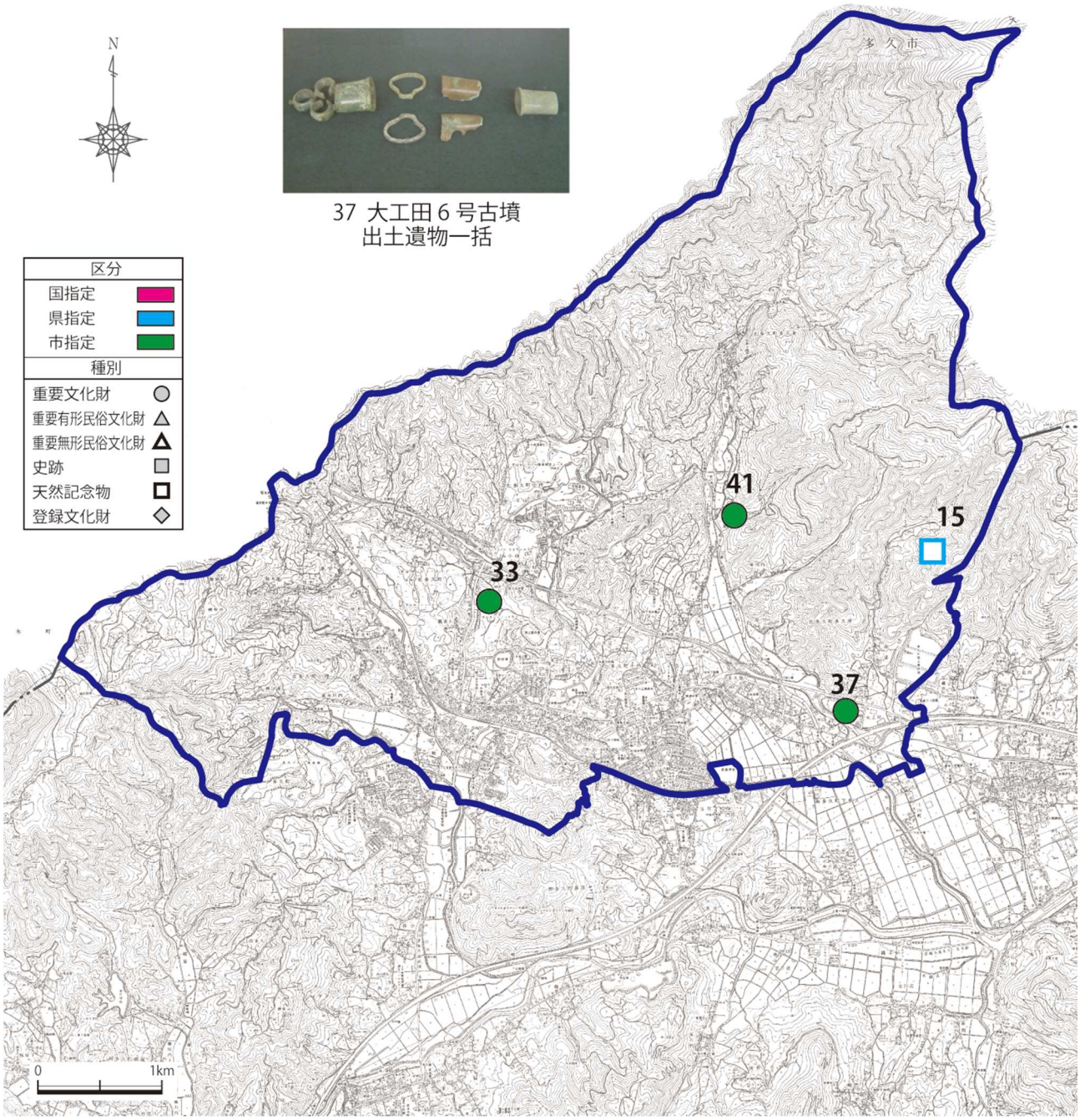
神社	寺院
飯盛神社　岸川熊野権現社　四下厳島社　中尾神社 厳島神社　宮地嶽神社　多久天満宮　海童社　番所天満宮 立山神社　山神社　鶴権現社　前山英彦神社　裏山英彦社	昌福寺　宝林寺　天徳寺　龍雲寺　湧泉寺
堂	**社**
東の内観音堂　西の内観音堂　岩部地蔵堂 大師堂　不動堂 観音堂(6)　永田大師堂　筋原稲荷堂　薬師堂（2） 中古場大師堂	八天社　弁財天社（2）　山神社　地蔵森　少貳神社 弁財天　宝満社　宮地嶽神社　純地原弁財天社
祭り	**行事**
権現さん祭り　中尾神社年末・年始祭　十五日祭り　彼岸祭り 宝満宮祭り　毘沙門天祭り　木村さん祭り　弁財天祭り 暮祭り　若宮さん祭り　土橋さん祭り　宝満さん祭り 少弐さん祭り　立山神社例祭　金毘羅神社祭り　八天祭 宝満社御田祭り　鬼子母神祭り　先祖祭り　厄神さん祭り 風神様祭り　社日	春餅搗き　むら祈祷　もぐら打ち　さなぼり 風籠り　シメ縄作り　彼岸行事　早苗ぶり 彼岸山道つくり　鬼火焚き　天満宮さん灯夜 阿弥陀さん灯夜　彼岸籠り　田植仕舞い御籠り 夏祭り子供みこし　盆踊り大会

33 諸田賢順の墓

41 弁財天石祠

15 相の浦の球状閃緑岩

37 大工田 6 号古墳
出土遺物一括



資料 2-28　北多久町の指定・登録文化財

第３章　歴史文化把握の方針

１．文化財調査の経緯とその履歴

過去に市内で行なわれた文化財調査の歴史を振り返ることは、多久の郷土史研究や文化財保護の経緯やその後の歩みを知る上でも大きな意味があると考えられる。また、今までに行われた調査や対象となった文化財の傾向を把握し、今後それを活かすことで歴史文化の活用、さらにまちづくりに発展させるなど特色のある成果を望める。このような視点から、調査の不足部分を補うために必要な新たな課題・テーマを見出すことにも繋がると考えられる。

（１）これまでの文化財調査

１）文化財調査以前

多久市立郷土資料館に収められた膨大な古文書等の歴史資料のうち、『丹邱邑誌※』と題した古資料は、近世多久家の儒臣深江順房（1771 -1848）の手による。全5 冊の線装本で、巻之一から最終巻之五までに沿革、地理、郷村宿駅、産物、年代記等も含め、多久邑に関する多くの事柄を書き収めたいわゆる地誌である。

内容は、詳細かつ多岐にわたり、現在においても多久の郷土史研究の基礎資料と評価されている。本書の執筆は、儒学者であった順房自身の学問的動機によるもので、彼の晩年まで推敲を重ねたとみられており、邑内のあらゆる事柄を総合的に把握しようという意志が感じられる。

多久には、江戸時代中頃、領主多久家によってその本拠地（多久御構内）に郷校東原庠舎と、孔子を祀る多久聖廟が創建された。以来、儒学（朱子学）を主体とした教育と、聖廟そしてその祭祀「釈菜」を守り伝えた歴史があり、その営みの中で多久の人々に培われた学問への希求が『丹邱邑誌』を生む背景にあったと思われる。多久の歴史・地域的気風を示し、現在の郷土史研究にも通じる先駆的取組みと捉えられる。

写真 3-1　深江順房著『丹邱邑誌』

写真 3-2　深江順房の墓（南多久町長尾）

※中国で「丹丘」とは昼夜常に明るい仙人が住む理想郷を意味する。
近世の多久において邑内を示す美称に用いたが、「丘」は孔子の名が「孔丘」であった為、差し控えて「邱」の字にあて代えたという。

２）多久における文化財調査と保護の契機

江戸時代の末頃にかけ、日本人の学問への志向は漢学から蘭学、洋学へと変わっていった。明治維新を迎えた後、加速した社会の近代化・西洋化のなかで、それまでの漢学は衰退し、その漢学で

ある儒学の象徴であった各地の孔子廟はやがて顧みられなくなり、数を減らしていった。

明治 16 年（1883）、多久の孔子廟である多久聖廟の荒廃に心を痛めた初代佐賀県令（県知事） 鎌田景弼（1842-1888）は、修理を呼びかける漢詩「以って謀る修理之事」をつくり、その翌年には、地元多久に聖廟保存会が結成された。聖廟の修理に向けた保存会の活動は、鎌田の逝去により一時頓挫したが、実業界で財を成した高取伊好（1850-1927）などの支援を受け、明治 40 年修理に着手、同 42 年に完了した。

写真 3-3　多久聖廟（恭安殿）と仰高門

聖廟保存会は以降、多久村議会、佐賀県議会議員を歴任したのち、生涯を儒学研究と聖廟の普及に捧げた大塚巳一（1869-1950）を中心に、旧多久邑史談会（多久史談会）としても活動を続け、大塚は大正 8 年に『多久聖廟沿革』、大正 13 年には『孔夫子の一生』を著した。彼らの聖廟調査と働きかけにより、鎌田の呼びかけから 38 年を経た大正 10 年（1921）、多久聖廟は内務省より県内初の国史跡指定を受けた。その後、昭和 8 年（1933）に廟建物（恭安殿）が特別保護建造物（国宝）の指定を受けている※。以来、多久聖廟は多久の文化財保護の象徴となり、この建造物の保存活動を契機として郷土史の調査研究と保護の動きは始まったと言える。

＜関連図書＞

『旧多久邑人物小誌』	昭和 6 年（1931 年）	旧多久邑史談会
『小城郡誌』	昭和 9 年（1934 年）	小城郡教育会

※昭和 25 年の文化財保護法施行に伴い、特別保護建造物から国重要文化財に指定変更。
昭和 32 年には孔子像を収めた八角形の厨子、聖龕が重要文化財に追加指定された。

３）市史編さん事業による市内の文化財総合調査

太平洋戦争の戦時体制下は、多久の郷土史研究にとって下火の時期だった。終戦後、戦争への反省から科学的分析に基づく新しい歴史教育の必要が生じた。昭和 25 年、大塚巳一の逝去で研究が途絶えつつあった史談会の村史発刊の意志を引き継ぎ、同年、学校（多久中学校）の校長と社会科教諭を中心とした多久部教育会・社会科班が発足した。

この研究班は、昭和 29 年 5 月に旧 5 か町村を合併し多久市が誕生した後には、多久市郷土史編纂委員会となり、研究書籍の発刊や若い研究者の育成に寄与した。

昭和 38 年には郷土史発刊への強い要望に応え、翌年の市制 10 周年を記念して『多久の歴史』の編集が企画された。多久市助役を長に市会議員、教育委員会や関係課の職員、先の郷土史編纂委員会のメンバーを委員

写真 3-4　『多久市史』多久市史編さん委員会

に含む多久市史編纂委員会が設置され、多久市域における初の総合的調査がおこなわれた。そして、39 年、史談会の頃からの念願だったともいえる郷土史書『多久の歴史』が刊行された。の刊行後、多久市史編纂委員会は解かれ、かわりに多久市郷土史研究会が発足したのである。

その後、市制施行 50 周年（平成 16 年）に合わせた事業として平成 10 年より市史編さん事業が開始され、『多久市史』が刊行された。『多久の歴史』が刊行されて 40 年余りが経過することから、新たな研究成果による市史内容の増補、刷新を図り、全 6 巻および人物編が制作された。

このうち『多久市史 第 6 巻 集落史編』（平成 20 年）は、地元住民の協力を得て市内全域の文化財調査が行われ、域内 102 地区（現行の行政単位では 107 地区）毎の所在文化財を記録するなど、より地域の在りようを詳しく記したものとなっている。

＜関連図書＞

『志田林三郎博士』	昭和 30 年	多久市郷土史編纂委員会
『水江事略安順公譜』	昭和 30 年	多久市郷土史編纂委員会
『封建時代の生活』	昭和 30 年	多久市郷土史編纂委員会
『国寶多久聖廟』	昭和 33 年	多久市郷土史編纂委員会
『丹邱概史』	昭和 35 年	多久市郷土史編纂委員会
『多久の歴史』 『資料編』	昭和 39 年	多久市史編纂委員会
『多久市史 第 1～6 巻・人物編』	平成 12～20 年	多久市史編纂委員会

４）市内埋蔵文化財調査のはじまり

昭和 35 年、東京明治大学の杉原荘介助教授（当時）率いる調査団により、多久市多久町にある三年山遺跡・茶園原遺跡の発掘調査が行なわれ、鬼の鼻山北麓一帯に産出する安山岩（サヌカイト）を用いた石器製作遺跡群の存在が初めて明らかにされた。

写真 3-5　明治大学による三年山遺跡調査
（昭和 35 年当時の写真）

当時、日本列島における旧石器文化の存在を証明した岩宿遺跡（昭和 21 年、群馬県）の発見により、全国各地で旧石器時代遺跡の発見が相次いでいた。日本考古学協会では、九州における様相を探るべく西北九州綜合特別委員会を設置して調査を計画し、その一環として多久市での旧石器文化を解明するための発掘調査に至ったのである。この調査は多久市のみならず九州における旧石器時代を対象とした初めての学術調査であった。

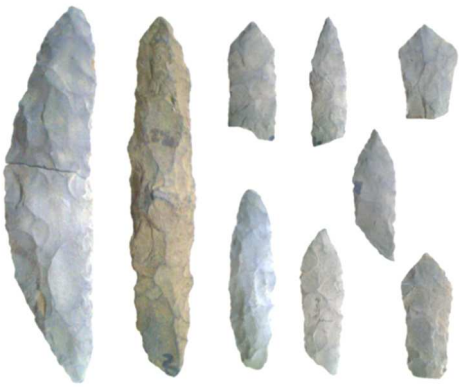


写真 3-6　多久産出安山岩の石器

多久が調査地に選ばれた理由は、地元の児童が同地より石器を採集した報告が教諭から佐賀県教委を経て、遠く東京にまで届いた事がきっかけであったと調査報告書には記されている。

この出来事によって、市内の先史時代研究も注目を集め、多久考古学会の発足（昭和 44 年）と、同会誌『鬼鼻山』の発刊など活動の契機となった。そして、市内の遺跡・古墳の分布や出土資料の紹介が盛んに行なわれるようになった。

昭和 49 年には行政による市内初の発掘調査が開発に伴い行なわれ、県内有数の弥生時代の環濠集落跡と 200 基を超す甕棺墓が出土した牟田辺遺跡（第 1～3 次）の発見に繋がった。牟田辺遺跡の第 1 次調査（昭和 49 年）は多久市が調査主体であったが、佐賀県教育委員会文化課文化財調査係を調査担当者としておこなわれた。そして、第 2 次調査（昭和 51 年）からは、多久市において最初の文化財専任の担当者（社会教育係）が発掘調査に参加した。

写真 3-7　牟田辺遺跡と復元住居見学のようす（昭和 52 年当時の写真）

その後、昭和 53 年の佐賀県遺跡地図刊行を機に、行政主体による埋蔵文化財の調査が本格的に進められていった。現在、市内に確認された遺跡は各時代 147 遺跡を数える。

＜関連図書＞

『佐賀県多久三年山における石器時代の遺跡』（考古学 第 9 冊）

	昭和 58 年	明治大学
『鬼鼻山 №1～3』	昭和 44～46 年	多久考古学会
『ふるさとの石』	昭和 52 年	多久考古学会
『多久市文化財調査報告書　第 1～57 集』	昭和 50～平成 29 年	多久市教育委員会

５）文化財保護審議会設置と文化財指定に向けた調査

多久聖廟の史跡指定翌年の大正 11 年、県に佐賀県史蹟名勝天然記念物調査会が設置され、翌 12 年にカササギ生息地が佐賀県天然記念物に指定された。同生息地域には多久市域も含まれている。次いで多久市内では、昭和 33 年に若宮八幡宮神殿（多久八幡）、34 年に山崎経塚出土品、46 年には相の浦の球状閃緑岩（天然記念物）が佐賀県指定文化財となり、多久市内において指定により保護すべき文化財が多く存在する事が知られていった。

写真 3-8　肥前佐賀の酒造用具

昭和 51 年には、多久市文化財保護条例の施行と多久市文化財保護審議会の設置により、多久市による文化財の指定に向けた選定調査が始まった。これにより昭和 53 年から平成 22 年にかけて、計 31 件が市指定文化財となっている。

また、既に指定を受けた文化財について内容把握、あるいは保存修理などに伴う調査が行われた。重要有形民俗文化財の肥前佐賀の酒造用具は、昭和 63 年の国指定に伴い資料総数 2,334 点の台帳整備が行なわれた。

昭和 62 年から平成 2 年、多久聖廟の廟内にかねてより虫害、雨漏りが生じたことを受け、国及び県の補助による半解体の本格的な保存修理が実施された。

写真 3-9　川打家住宅

その際、聖廟敷地における発掘調査（75 ㎡）で創建当時の瓦などが出土したことにより、それらの瓦を再現し、明治期の修理で銅板葺となっていた屋根を本瓦葺に改め、内部床を甎敷にして当初の姿に復元している。

さらに、昭和 49 年に国重要文化財指定を受けた肥前の代表的くど造り民家である川打家住宅と、平成 8 年に市の指定となった森家住宅は、所在地沿線の交通環境の変化で文化財の保存に不適正となったため、平成 10 年から 12 年にかけて解体移築修理が行なわれた。川打家住宅撤去後の敷地を発掘した際に、前身となる建物跡を検出したほか、解体した建築材の転用関係調査では旧来直屋の建物が後にくど造りに変遷したようすが明らかとなった。

＜関連図書＞

『重要文化財 多久聖廟保存修理工事報告書』　平成 3 年　多久市
『重要文化財 川打家住宅移築修理報告書』　平成 13 年　多久市

６）資料館を拠点とした古資料等の調査

かつて多久町西の原の西渓公園内に所在した旧村立図書館（大正 12 年建造）は、現多久市立郷土資料館（昭和 55 年開館）の開館以前、県内初の村立図書館として長く村民に親しまれた。

図書館時代の昭和 22 年、旧多久領主末裔から多久家が保有した古文書類が大量に持ち込まれたのが、後年多久市の特色ともいえる郷土史に係る資料の収集と古文書解読研究の契機となった。

現在、同資料は多久家資料および後藤家文書（昭和 33 年寄贈、53 年佐賀県重要文化財指定）として保存され、佐賀の近世史研究においても重要な位置をなしている。

写真 3-10　旧図書館書庫（レンガ造書庫）

特にそのうちの『御屋形日記』等の日記類は、江戸初期から明治維新に至るまで、連綿と多久家領主屋敷などにおける時事を記した膨大な資料であり、これを契機として主にその研究解読を目的とする研究者と民間による研究団体「多久古文書の村」が発足（昭和 53 年）した。その後に組織された多久古文書学校とともに現在も解読作業は鋭意継続されている。

資料が収蔵された郷土資料館に併設し、歴史民俗資料館（昭和 56 年）、先覚者資料館（平成 6 年）が開館すると、館の規模拡大と共に民間と協働した民俗資料や人物史に関する資料の調査収集、旧家の蔵に埋もれた資料の掘り起こし、東原庠舎の漢籍など儒学関係資料にも対象を広げ、その目録作成・把握調査が進んでいった。

また、昭和 55 年には市民の文化活動においても大きな動きがあった。多久市立中央公民館の開館を契機として、多久市文化連盟の発足、市内文化団体の結集化が行なわれ、多久市郷土史研究会と多久考古学会が統合し、あらたに多久市郷土研究会としてスタートした。会員は定例会により郷土資料館蔵資料の調査や、郷土史、考古、民俗、地理、自然など幅広いテーマの調査研究を行い、市制施行 30 年目の昭和 59 年から以降、それらの成果発表などを主にした会誌『丹邱の里』の発刊を行なっている。

＜関連図書＞

『多久古文書の村 村だよりNo.1～21』	昭和 54 年～平成 28 年	多久古文書の村
『水江臣記』	昭和 61 年	秀村選三・細川章・多久古文書学校編集・校註
『丹邱邑誌』	平成 5 年	深江順房撰　多久古文書の村・秀村選三・細川章校註
『丹邱邑誌漢文資料講解』（『丹邱邑誌』別冊付録）	平成 5 年	荒木見悟著
『佐賀藩多久領の研究』（多久古文書の村叢書 第一冊 ）	平成 12 年	三木俊秋著
『御屋形日記 第 1～4 巻』	平成 16～29 年	秀村選三監修・多久古文書の村編集・多久古文書学校校註
『丹邱の里　第 1～16 号』	昭和 59 年～平成 28 年	多久市郷土研究会

（２）文化財調査の評価と課題

前項では過去多久の文化財保護の起こりや調査の経緯、団体の調査活動などを振り返り、それらに関わった人や団体の存在と努力、今日までの流れを再確認した。現在の多久市の状況を鑑みて、多久ではどのようなテーマの歴史や文化財についての把握が特に行われてきたのか、また十分に取り組むことができなかったものは何かについて考えてみる。

資料 3-1　多久市郷土資料館蔵および民間研究団体を含む主な資料調査一覧

資 料 名	内　容	収 蔵 年 （調 査 年）	点　数	備　考
多久家文書	近世領主多久家の文書・記録を中心としたもの	昭和22年 （昭和36～45年）	3,184点	昭和53年3月、「多久家資料及び後藤家文書」佐賀県指定
鴨打家文書	多久家家老鴨打家の文書・記録を中心としたもの	昭和38年 （昭和38～39年）	481点	
副島家資料	明治初期戸長であった上酒造、石炭採掘当をした副島家の文書資料と多久家家臣中西、深江家文書	昭和39～47年 （昭和36～49年）	2,368点	
聖廟資料 （東原庠舎資料）	郷校東原庠舎所蔵の漢籍本を中心としたもの	旧村立図書館が当初から所蔵	5,482点	
旧町村役場資料	旧町村役場の行政資料（明治初期から昭和29年4月まで）	昭和38～43年 （昭和40～43年）	14,676点	
安倍氏文書	安倍宗五郎の明治期の石炭経営資料	昭和49年 （同年）	98点	
後藤家文書	長島庄塚崎に平安時代末から土着した武雄後藤氏の中世武家文書	昭和49年 （昭和53年）	118点	平成15年、多久家資料と目録合本作成
相浦家文書	多久家家臣相浦家の文書	昭和44年 （未調査）	一式	
炭鉱資料	昭和47年佐賀県最後の閉山坑、西杵坑・明治佐賀坑の用具類を含む	昭和43～48年 （未調査）	トラック2台分	
	ふすまの下張り、聞き取りテープ	昭和45～50年 （未調査）	一式	
歴史民俗資料館 所蔵国書	旧図書館時代からの国書和装本、明治初期の教科書等含む	当初から所蔵 （昭和63～平成元年）	621点	
廟山文庫蔵書	聖廟保存に尽力、故大塚巳一翁（明治2-昭和25）が蒐集した漢学を中心とした文庫	平成4年 （平成5～6年）	3,942点	

１）多久で特に進められた文化財調査

①多久聖廟とその周辺

多久では、江戸中期以降の歴史的特色とともに、保存会が保存運動を行った多久聖廟がいち早く注目を浴び、それに関連する文化財の調査把握が行われてきた。その後の調査研究の対象やテーマとしては以下がある。

・多久聖廟と釈菜
・郷校東原庠舎の設立と以降の教育の歴史
・同校の教育における基礎であった儒学（朱子学）とその祖孔子の人物史
・同校の教育が生んだ先覚者（出身者）と教育者や儒学者（儒林）の業績等
・東原庠舎と聖廟を創建した近世多久氏の歴史

特に早期にその価値が明確にされた多久聖廟を中心に、それに関連した文化財が重視されており、その経緯が今日多くの多久市民の郷土認識を形成したともいえる。

②古文書及び文献資料の収集

そのような中で、それらのテーマに関わる古文書・文献資料の調査収集及び整理・目録等の作成に係る実績は、その量・質において特筆すべきものである。

東原庠舎蔵書の漢籍類は、同校の歴史が明治 2 年（1869）に閉じたのち、やがて旧多久村立図書館に移り長く保管されていたが、昭和 22 年多久家文書の収蔵をきっかけに、膨大な歴史情報を今に伝えるものとして見直されることとなった。以来、整理が進みまた同様の文献類の収集も行われていった。そのほか、昭和 29 年の市制施行時に集積されていた合併前旧町村役場資料についても保存が行われるなど、多久の文書文献資料の重要性の再発見を経て、現代の資料にも対象を広げた取り組みが継続的に行われている。

写真 3-11　多久市郷土資料館（先覚者資料館）
漢籍等の保管展示状況

２）未指定文化財等を含む文化財把握の今後の課題

一方で東原庠舎や多久聖廟の他に所在する市内の文化財については、その把握なども含めて課題をのこした状況にあるといえる。

①民家等の歴史的建造物の保存

全体として多久市内にはある程度の古民家等建造物が残っているが、個人が所有する民家の保存に関しては、権利等で容易に立ち入れない面や、自治体の財政状況に絡む認識があったことから、保護等の取り組みは進んでいない。過去の調査においても一括的な調査は実施されておらず、近年でも、本市にゆかりのある近代の歴史的人物の生家が、十分な調査が行われることなく解体された例がある。今後は歴史的建造物のリスト化や市民・所有者への広報により意識を高め、建造物の登録等の拡充を図るための環境づくりを行う必要がある。そのためにヘリテージマネージャー等の活用も考えられる。（本項について、佐賀県教育庁文化財課 小野将史氏のご助言を頂いた。）

②炭鉱産業に係る建造物等の調査と保存

かつての旧 1 町 4 村を合併した多久市の市制施行の行動力として、明治以降活性し、昭和 40 年代の閉山により幕を閉じた多久の炭鉱産業があげられる。この鉱業生産時期の土地利用で残された関連の建造物は、坑道口構造や昇降機櫓、鉄道輸送にともなう積み出し関連施設、従業者の炭鉱住宅があり、減少しながらも今なお目にすることができる。

これらについてもほとんどが民有地に所在し、詳細調査は行われておらず全体的な把握はできていない。多久の炭鉱時代前半は、中小規模経営の炭鉱会社が乱立する様相であり、それぞれの推移の把握は難しく、また後期の三菱や明治鉱業など大手資本会社の経営した炭鉱も詳細な情報は残されていない。多久市の産業史を示す歴史遺産として保存を検討していくべきであり、市民共有の意識づくりとともに、建造物等のリスト化を図る必要がある。また、採炭から運搬、従業者の生活など、炭鉱産業における一連を網羅的に把握することが望まれる。

そのほか前記の大手鉱業会社は、炭鉱事業の合理化のうえで炭鉱周辺の都市計画整備も行っており、中多久地区や明治佐賀地区、あるいは多久駅周辺地域など現多久市の市街構造の形成において関連する点から、町並みや領域の保存について同地域も認識しておくべきと思われる。炭鉱関連遺跡については、将来的には周知の埋蔵文化財包蔵地として登録し、記録保存措置の実施も必要になると思われる。(本項について、佐賀大学大学院工学系研究科 三島伸雄教授にご助言を頂いた。)。

③域内文化財の総合的調査の継続

文化財の調査には、種別や時代などのテーマごとに把握を行なっていく場合と、文化財の種別・時代を問わず、一定域内を総合的に把握する総合調査などが考えられる。前述の古文書等の調査収集は前者にあたるが、多久市において文化財の総合的な調査は市史書籍刊行のための現状調査として行なわれている。本質的課題としてそれらが市史刊行のための調査であり、その完成後は次の市史刊行計画における調査まで文化財の状態や置かれた環境の推移等、継続的把握が十分になされていない点が挙げられる。昭和 39 年の『多久の歴史』から、平成 12～20 年『多久市史』までの調査の空白期間にも幾つかの文化財は消失していることが考えられる。市内に広く分布する様々な文化財の状態を継続的に把握する手段、方法の検討が必要と考えられる。

④文化財における美術的価値の把握

多久市内の神仏像、石造物、絵画や、絵唐津などの出土古唐津陶片、多久聖廟の装飾・天井画などは、歴史上の価値のほか美術工芸品としての調査と評価により新たな価値が見いだされる可能性がある。他にも、草場佩川など儒学者や多久出身人物が残した書画類、「多久家資料及び後藤家文書」（県重要文化財）に含む肖像画や絵図類、儒学関連資料「廟山文庫」には、孔子聖蹟図などの巻子、書冊などがある。膨大な資料のなかから拾い上げ、細かな調査把握と評価を行っていくことが望ましい。（本項について、佐賀県立博物館・美術館 副館長 福井尚寿氏にご助言を頂いた。）

⑤文化財を含む周辺の自然環境の把握

文化財が所在する周辺の自然環境といった側面の他に、郷土の歴史の中で人々に利用された自然の産物が多数みられる。それは、岩石や石炭、植物、または陶器に用いられた陶土等をはじめ、市内に今現在も存在しているものもある。これらと人との関わりを知る上で、その自然史的種別・性質等の把握が必要と考えられる。(本項について、佐賀大学文学部 角縁 進教授にご助言を頂いた。)

（３）本構想策定における基礎調査の成果

指定の有無を問わず、市内に所在する多くの文化財の継続的把握の必要性を前項で挙げた。

多久市では、『多久市史』刊行のため、地元協力を得て文化財の総合調査が行われた。各行政区単位で調査は実施され、行政区域内に立地する社寺や石造物などの文化財、また継承される祭りや行事、芸能などを総合的に拾い上げている。その成果は平成 20 年刊行の『多久市史 第 6 巻 集落史編』に市内文化財の多くとして紹介されており、本構想策定の趣旨から基礎的資料として参考にできる。

しかし、調査の開始から約 19 年、同書刊行から 9 年が経過(平成 29 年現在)した今、その間に総合的把握を意図した調査は行われておらず、指定文化財など行政が保護する文化財や主だって地域に知られるものを除いて、紹介された多くの文化財の現状は十分に把握されていない。また同書による紹介後、既に失われた文化財がある可能性もあり、本構想の策定に向けて、市内文化財の現状や残存数の確認が必要と考えられる。また、ここでの把握件数が以後、広く市内文化財の保護における基礎数としても捉えられる。この項では平成 28 年度歴史文化基本構想策定事業により主に実施した基礎調査で得た結果の概要を記す。なお、調査成果については、町別基礎調査整理簿としてまとめ、主だった内容は前章「第 2 章 多久市の概要と歴史文化の特徴」の各項に反映した。

１）基礎調査実施の経緯

多久市では国庫補助を受け平成 28 年度より、多久市歴史文化基本構想策定事業に着手した。策定に要する期間は平成 28 年度から翌 29 年度末までの 2 か年度に定め、同 28 年度は市内文化財ほか関連事項の事前把握・調査の実施と位置づけ、『多久市史 集落史編』を把握における基礎資料とした。

基礎調査は、まず同書に紹介された文化財等の一覧化を行ない、それを基に同構想策定委員会の構成団体である多久市嘱託員会に協力を依頼し、各地区の嘱託員にそれぞれ担当地区内において『多久市史』に記載がある文化財の現状確認を行なって頂くこととなった。

２）行政区など調査対象地域と調査地点に関する整理

現在の多久市は昭和 29 年の市制施行以来、東多久町・南多久町・多久町・西多久町・北多久町の 5 か町からなる。各町内には概ね集落単位を基礎とする行政区が行政単位としてあり、市内における行政区総数は現状 107 か所である（平成 29 年現在）。

行政区を構成する集落について、その多くは自然発生的な定着居住をその成り立ちとするが、過去には増減があり推移したことが知られている。小集落内の居住者が転居などで不在となり、存立しなくなる集落がある一方で、戸数の増加をみせる集落も一部ではある。昭和 20 年代以降には、炭鉱開発にともない、また山間部土地利用のため入植により新たに集落が現出した例や、また戸数の増加や集落の立地などで行政区の分離編成が行われることもあった。

そうした集落の変遷などにより、長い目でみると行政区の数にも若干の変化があるが、基礎調査は現行の行政区の状態を対象とした。

なお、調査の基礎資料とした『多久市史 第 6 巻 集落史編』では、地区の編成や歴史的観点から分離・統合された行政区を 102 か所の調査地点（地域）として認識整理しており、本基礎調査でもそれに倣うこととした。

資料 3-2　基礎調査対象調査地点（地域）一覧

多久市の行政区数　107行政区
基礎調査対象調査地点　102地点（地域）

東多久町		南多久町		多久町		西多久町		北多久町	
28地点		16地点		15地点		15地点		28地点	
1	裏納所	29	西山	45	下鶴	60	藤川内上	75	相の浦
2	大門	30	井上	46	東の原		藤川内下	76	大工田
3	大畑	31	駄道・天ケ瀬	47	西の原	61	宿	77	原口
4	平林	32	後野・平原	48	岡	62	板屋上	78	申川内
5	北坊	33	瓦川内	49	桐岡		板屋下	79	松ケ浦
6	平合	34	長尾	50	道祖元	63	八久保	80	岸川
7	松瀬	35	西ノ谷	51	浦町	64	船山	81	四下
8	柳瀬	36	庄	52	西町	65	駄地	82	多久原
9	天山	37	中小路	53	東町	66	谷	83	両の原
10	渋木	38	上田町	54	撰分	67	山口	84	中山
11	古賀一区	39	牟田辺	55	宮ノ浦	68	猪鹿	85	中の原
12	古賀二区東	40	桐野	56	石州分	69	平山	86	山犬原
13	古賀二区西	41	谷下	57	中野	70	平古場	87	東原
14	古賀平	42	笹原	58	栄町	71	平野	88	前田
15	山ノ上	43	大野	59	明治佐賀	72	白仁田	89	小侍
16	古賀三区	44	田柄			73	倉持	90	番所
17	別府一区					74	吉の尾	91	横柴折
18	別府二区							92	筋原
19	別府三区							93	高木川内
20	羽佐間							94	新栄町
21	石原							95	旭町
22	仁位所							96	立山
23	宝蔵寺							97	中多久団地一区
24	平和町								中多久団地二区
25	池ノ平							98	浦山
26	旭ケ丘							99	自由ケ丘
27	古賀山							100	砂原
28	両子							101	泉町
								102	メイプルタウン

写真 3-12　地元説明

※今回の基礎調査及び同補足調査の結果では、『多久市史 第 6 巻 集落史編』の記載に従い、60 藤川内上区・下区は「藤川内」、62 板谷上区・下区は「板屋」、97 中多久一区・二区は「中多久団地」とし、101 泉町は住所（大字）に従い南多久町の所属に加えた。

３）基礎調査の方法と調査時期

多久市では、各行政区に原則 1 名ずつ、市と行政区間の相互連絡補佐等を担う多久市嘱託員を定めており、現在その合計人数は 104 名となっている。嘱託員は一旦各町嘱託員会に組織されるが、最終的には多久市嘱託員会とし会長を置きまとめている。

調査では、『多久市史』に紹介された文化財の抽出一覧化作業を行ない、102 か所の調査地域について調査表を作成し、その資料を基に嘱託員が現地文化財や祭り行事の開催状況等、所在確認を実施、多久市が返却された調査表の取りまとめを行なう方法とした。

市は、町ごとに年 3 回のペースで嘱託員会の開催を行なっており、各嘱託員への趣旨説明及び調査依頼、調査表資料の配布はその場をもって行なった。調査時期については以下の表で示す。

調査時において「途絶」としたものは、かつて市内に古くから伝わっている文化財が市史編纂時には既に無くなった有形物や、行われなくなった祭りや行事を指している。

また、「滅失」は市史編纂時には存在したものや、行われていた行事や祭りが消滅したり無くなったものを指す。

資料 3-3　基礎調査　調査表

調査名	依頼先	調査に要した期間
行政区域内文化財等の所在確認基礎調査	各町嘱託員会(5町)	平成28年11月25日～平成29年2月10日
同調査再確認(補足調査)	各町嘱託員会(5町)	平成29年7月27日～平成29年9月27日

なお、平成 28 年度の基礎調査終了後に文化財の所在について、一部認識違いを市民及び策定委員よりご指摘頂いたことを受け、平成 29 年度中において先の調査結果を基にした再確認（補足調査）として再び嘱託員に確認依頼を行なった。本構想に掲載した数値に関しては補足調査後の数値であり、より市内の実情に近いものであると考える。

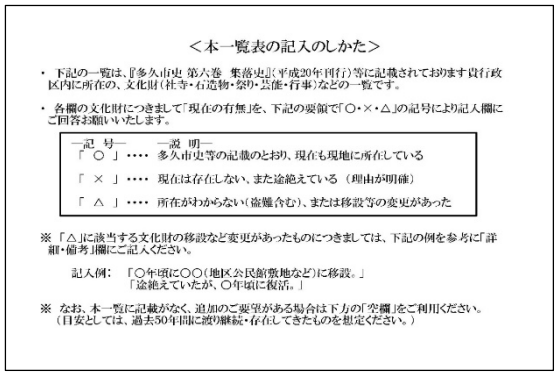
東多久町
裏納所区　嘱託員　様

行政区域内文化財等の所在確認基礎調査　一覧表

平成28年　11月　28日

：返却希望日　　平成28年　12月　15日(木)まで
：提 出 先　　各町公民館、または中央公民館(生涯学習課)

資料 3-4　行政区域内文化財等の所在確認基礎調査（調査表表紙）（例）



＜本一覧表の記入のしかた＞

・ 下記の一覧は、『多久市史 第六巻 集落史』(平成30年刊行)等に記載されております貴行政区内に所在の、文化財(社寺・石造物・祭り・芸能・行事)などの一覧です。

・ 各欄の文化財につきまして「現在の有無」を、下記の要領で「○・×・△」の記号により記入欄にご回答お願いいたします。

記 号	説 明
「 ○ 」	多久市史等の記載のとおり、現在も現地に所在している
「 × 」	現在は存在しない、また途絶えている（理由が明確）
「 △ 」	所在がわからない(盗難含む)、または移設等の変更があった

※「△」に該当する文化財の移設など変更があったものにつきましては、下記の例を参考に「詳細・備考」欄にご記入ください。

記入例：「○年頃に○○(地区公民館敷地など)に移設。」
「途絶えていたが、○年頃に復活。」

※ なお、本一覧に記載がなく、追加のご要望がある場合は下方の「空欄」をご利用ください。
（目安としては、過去50年間に渡り継続・存在してきたものを想定ください。）

資料 3-5　行政区域内文化財等の所在確認基礎調査（記入方法）

東多久町

1：裏納所

P.3/5

	史跡名・名称	場所	造立年	説明・内容	現在の有無	詳細・備考
石造物	こうしんとう 庚申塔	尾鷲宅裏	1682	庚申塔 ○奉拝請青面金剛□ 干時天和二壬戌年	△	現在、梅崎宅に変っている所の横に有る大地蔵塔の前に有る石像ではないでしょうか？
石造物	庚申塔	尾鷲宅裏	1880	猿田彦大神 明治十三年一月	○	尾鷲宅裏より松尾宅裏の方が分りやすい
石造物	てんまんぐうせきし 天満宮石祠	古賀宅裏	1767	天満宮石祠 天満宮 明和四丁年八月吉日	○	
石造物	だいこくてんぞう 大黒天像	公文宅前		大黒天像	○	
石造物	えびすぞう 恵比寿像	尾鷲健一宅		恵比寿像	△	
石造物	ろくじぞうとう 六地蔵塔	福地宅横		ほかに六地蔵塔が福地宅横、松浦宅横、尾鷲宅横にある。	○	
石造物	六地蔵塔	松浦宅横		ほかに六地蔵塔が福地宅横、松浦宅横、尾鷲宅横にある。	○	松浦宅ではなく七浦宅です。※前は尾鷲宅の宅地で宅地前の火袋に有る尾鷲宅は梅崎宅に変わっています
石造物	六地蔵塔	尾鷲宅横		ほかに六地蔵塔が福地宅横、松浦宅横、尾鷲宅横にある。	○	
行事	だいはんにゃきょう 大般若経			一月九日、区の最初の行事で、諸病が集落に潜入しないように、毎年一月九日に清心寺と常應寺の住職を招き、大般若経の転読と集落の入口となる一四ヵ所の道路に疫病除けの札を立てる。また集落の各戸にも疫病除けの護札とご飯	○	

資料 3-6　行政区域内文化財等の所在確認基礎調査（調査表）（記入例）

４）基礎調査結果の概要

『多久市史 第 6 巻 集落史編』を主として抽出選定した文化財等の総件数は 2,544 件となった。それらについて市史刊行以後の所在状況を確認するため、102 か所の調査地点（市内 107 か所の行政区）に対し、その存在の有無、継続状況等の調査を行なった。

・滅失率などの基準となる抽出数の内訳

市内の文化財 2,544 件の抽出総数全体を町別にみると、東多久町は 628 件、南多久町 423 件、多久町 372 件、西多久町 446 件、北多久町の 675 件に振り分けられる。それらは『多久市史』の記載を参考に「神社」「社」「寺院」「堂」「教会等」「石造物」「祭り」「行事」「宗教施設」「その他」の 10 区分に分類すると、石造物が最も数が多く 1,441 件（56.6%）と半数以上になる。次いで行事 420 件（16.5%）、祭り 331 件（13%）が多い。これら 3 区分のみを合わせた数のみで抽出総数に対して 2,192 件（約 86%）と大半を占めている。

全体の半数を超える石造物は、3,000 基にも届くと一部で予想もされており、実際は市内全体でかなりの数量になる可能性もあり、今後の文化財把握の留意点と考えられる。その数の多さの理由の一つとして、近世までに多久領内に発祥し、石工を生業にした「砥川石工」という職能集団の存在が考えられる。砥川村（地区）は佐賀本藩の財政施策により領地返還（三部上地）されて以来本藩領となり、現在同地は小城市牛津町に所属する。

資料 3-7　歴史文化の現存数（多久市）

多久市	平成 10 年時点	平成 29 年現在	約 19 年間の減少数	滅失率（%）
石造物	1,441	1,336	105	7.3
行事	324	253	71	21.9
祭り	316	290	26	8.2
社寺	73	71	2	2.7
堂	79	75	4	5.1
社	43	41	2	4.7
その他	142	109	33	23.2
計	2,418	2,175	243	10.0

減少数には不明、滅失を含む、滅失率は平成 10 年時点に対しての比率

・回答結果について

嘱託員に依頼した調査表の記載を集計した結果､調査総数 2,544 件から市内全体の合計で｢現存｣2,175 件、「不明又は移設」132 件、「滅失」111 件、「途絶」126 件との結果が得られた。

「不明」と回答されたものの中には盗難などの場合のほか、所在未確認の例が含まれていると考えられるが、一部文化財の所在に関する情報が地元から喪失されつつある現状を表しており、今後の文化財保存における検討課題といえる。

５）分析

回答「滅失」「途絶」を含めたところでは、『多久市史』刊行にあたり平成 10 年から各地区の調査が行われ、その時点で既に過去存在したが失われた、あるいは途絶えたとされた文化財は 126 件、その後現在までの 19 年間で滅失（不明含む）は 243 件であった。19 年間での滅失率は 11.5%となった。

これらを合わせた 369 件の内訳をみていくと、行事が 167 件と最も多く、次いで祭りの 41 件となった。特にこの 19 年間での場合は、行事の減少 71 件、祭りについても 26 件が消滅している。それぞれの滅失率は行事が約 21.9%、祭りは 8.2%だった。その原因として、人口減によるコミュニティの変化に伴う後継者、継承者の不足によるものと考えられる。

一方で全体の半数を超える石造物の場合は、19 年間のうちに 105 件が失われている。これらは破損や盗難による滅が考えられる。しかし基数が多いため滅失率 7.3%にとどまっている。

このことから言えるのは、文化財の種別それぞれに減少の傾向は見て取れるが、土地に所在する石造物や社寺などよりも、行事や祭りなどその維持において特に人が取り組み、参加する必要があるものが、市内の人口減少などの影響で危機的現状に置かれているものと考えられた。

資料 3-8　多久市各町の歴史文化の現存数と人口

	東多久町		南多久町		多久町		西多久町		北多久町		多久市（計）	
神社	7	17.1%	6	14.6%	10	24.4%	4	9.8%	14	34.1%	41	100%
寺院	8	26.7%	7	23.3%	7	23.3%	3	10.0%	5	16.7%	30	100%
社	13	31.7%	6	14.6%	7	17.1%	8	19.5%	7	17.1%	41	100%
堂	14	18.7%	16	21.3%	13	17.3%	17	22.7%	15	20.0%	75	100%
石造物	368	27.5%	210	15.7%	151	11.3%	206	15.4%	401	30.0%	1,336	100%
祭り	80	27.6%	55	19.0%	52	17.9%	48	16.6%	55	19.0%	290	100%
行事	43	17.0%	47	18.6%	45	17.8%	60	23.7%	58	22.9%	253	100%
その他	22	20.2%	7	6.4%	18	16.5%	22	20.2%	40	36.7%	109	100%
総件数	555	25.5%	354	16.3%	303	13.9%	368	16.9%	595	27.4%	2,175	100%
人口	4,767	23.9%	2,847	14.3%	2,888	14.5%	1,041	5.2%	8,384	42.1%	19,927	100%

歴史文化の件数：平成 29 年 9 月現在、人口：平成 29 年 1 月現在

人口比率と歴史文化の総件数比率を見ると、東多久町、南多久町、多久町は、ほぼ同一傾向を示しており、人口に比して西多久町の総件数は多く、逆に北多久町は少ないと言える。

東多久町は旧往還道の分岐点があり、宿場を置くなど近世から交通の要衝であり商業地が多い。明治以降は産炭地となり、炭鉱関連の跡も残っている。人口は 24%であり、寺院・社・祭りの件数が最も多い。

南多久町は牛津川の南北に広がる古い田園地帯で、北東部には条里制の跡が残されていると思われる。人口は 14%であり、社・その他の件数が他の町に比べ最も少ない。

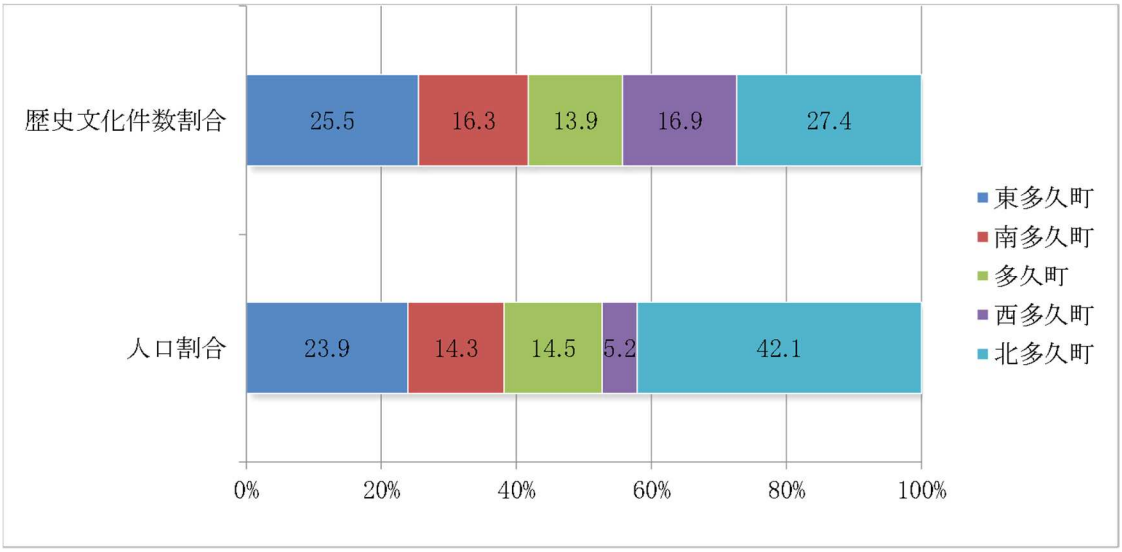
多久町は領主多久氏の城下町があった場所で、多久市域の中心となる町である。城下の絵図も残され当時の町割りや道筋が残されていることがわかる。現在の人口は 14.5%余り、総件数は 14%と最も少なく、堂・石造物が少ない。

西多久町は市内で最も古い町並みを残す農山村で、歴史文化が残りやすい環境である。南多久町と同様に石炭産業の影響を受けておらず、人口の増減が少ない。人口は 5%余り、総件数は 17%となっている。神社・寺院・祭りの件数は最も少ないが、堂と行事の件数は最も多い。

北多久町は近世までは唐津往還が通る町並みであったが、明治から昭和にかけて炭鉱産業の中心地となり、現在も市役所などがあり市の中心地である。人口は 42%であるが、総件数は 27%に過ぎない。神社・石造物・その他・総数の件数は最も多い。また、どの件数も人口の比率 42%を超えるものはない。

北多久町の人口は 42%であるが、総件数は 27%に過ぎない。神社・石造物・その他・総数の件数は最も多い。また、どの件数も人口の比率 42%を超えるものはない。

人口比率と総件数比率を見ると、東多久町、南多久町、多久町は、ほぼ同一傾向を示しており、人口に比して西多久町の総件数は多く、逆に北多久町は少ないと言える。



資料 3-9　平成 29 年　各町の歴史文化件数割合（%）と人口割合（%）

次頁以降、5 か町においてここ 19 年間にどのように変化したかを示す表と、そのうち特に数が多い石造物、祭り、行事をとりあげ棒グラフと円グラフに表した。

棒グラフの全体像を概観すると、5 町とも共通して石造物が多く、次に行事、祭りとなり（東多久町は祭りが行事より多い）、数は少なくなるが社、または堂の順になっており他は非常に少ない。減少が著しい行事は、町によっての偏りは少なく同じ傾向を示している。

東多久町と北多久町は、全体の数や分類の数値も近似値を示しており、石造物の比率はそれぞれ全体の 6 割を超えている。祭りと行事を加えた数でも石造物の 4 割程度に留まっている。

この 2 町に関しては、古くは唐津往還の沿道地域であった点がまず考えられ、商業活動の営みにより繁盛を願う石造物が造立され、また人口が増えるに従い講や新四国巡礼などの流行がそれに上乗せしたものとみられる。その他、同じくこの 2 町は近代以降の石炭産業で発展し産炭地多久を代表した地域であり、多久市域の中で早くに市街化していった経緯がある。炭鉱の勢い著しい時期、ここには外部から炭鉱従事者が流入し、急速な人口の増加があった。いわば都市的環境下で暮らす新入居者と、旧来からの住民が主体と想像される他 3 町とは、僅かな差ではあるが行事、祭りの保有に関しても意味合いが異なる可能性が考えられる。

他の 3 町の石造物数はそれぞれ全体の 5 割前後であり、祭りと行事を加えた数の石造物数の比率は 6〜7 割と高くなっている。今回の基礎調査の結果は、同じ市内であっても地域の発展経緯などを踏まえて多角的な視点で所在する歴史文化を捉え、把握していく必要があることを示していると考えられる。

資料 3-10　歴史文化の現存数（多久市内５ヶ町）

東多久町	平成 10 年時点	平成 29 年現在	約 19 年間の減少数	滅失率（%）
石造物	395	368	27	6.8
行事	52	43	9	17.3
祭り	83	80	3	3.6
社寺	15	15	0	0
堂	16	14	2	12.5
社	11	13	+2	－
その他	27	22	5	18.5
計	600	555	45	7.5

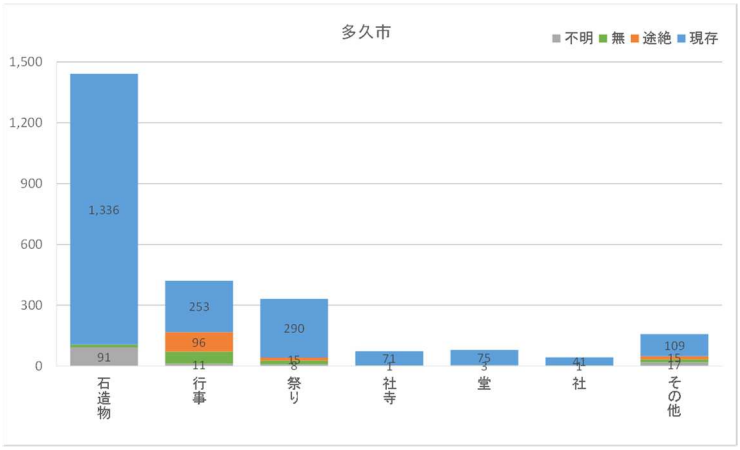
南多久町	平成 10 年時点	平成 29 年現在	約 19 年間の減少数	滅失率（%）
石造物	224	210	14	6.3
行事	62	47	15	24.2
祭り	64	55	9	14.1
社寺	13	13	0	0
堂	18	16	2	11.1
社	4	6	+2	－
その他	12	7	5	41.7
計	397	354	43	12.1

多久町	平成 10 頃時点	平成 29 年現在	約 19 年間の減少数	滅失率（%）
石造物	171	151	20	11.7
行事	60	45	15	25.0
祭り	56	52	4	7.1
社寺	18	17	1	5.6
堂	14	13	1	7.1
社	6	7	+1	－
その他	25	18	7	28.0
計	350	303	47	13.4

西多久町	平成 10 年時点	平成 29 年現在	約 19 年間の減少数	滅失率（%）
石造物	231	206	25	10.8
行事	78	60	18	23.1
祭り	49	48	1	2.0
社寺	7	7	0	0
堂	20	17	3	15.0
社	7	8	+1	－
その他	29	22	7	24.1
計	421	368	53	12.5

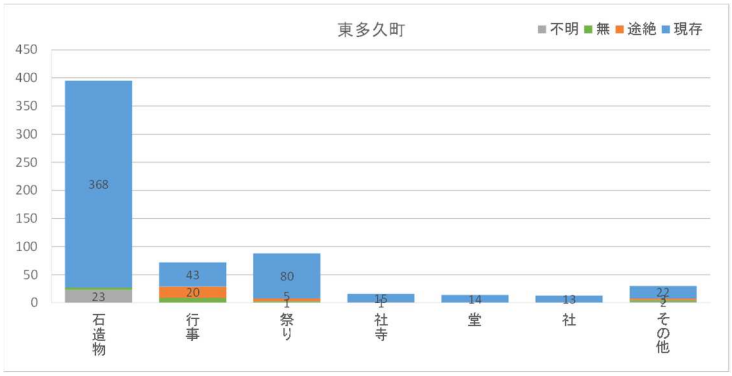
北多久町	平成 10 頃時点	平成 29 年現在	約 19 年間の減少数	滅失率（%）
石造物	420	401	19	4.5
行事	70	58	12	17.1
祭り	64	55	9	14.0
社寺	19	19	0	0
堂	18	15	3	16.7
社	8	7	1	12.5
その他	49	40	9	18.4
計	648	595	53	8.2

多久市	不明	無	途絶	現存	計
石造物	91	14		1,336	1,441
行事	11	60	96	253	420
祭り	8	18	15	290	331
社寺	1	1		71	73
堂	3	1		75	79
社	1	1		41	43
その他	17	16	15	109	157
合　計					2,544

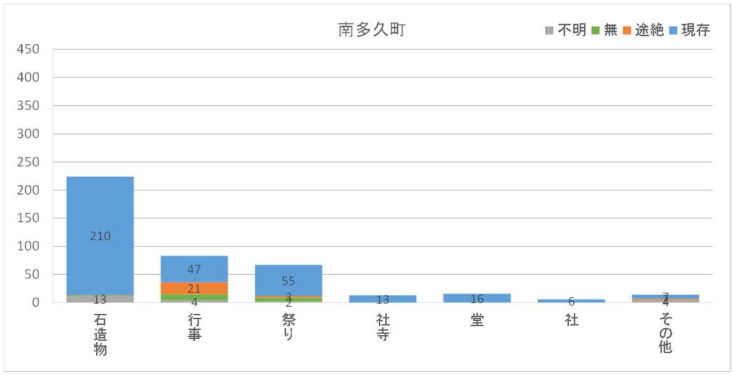


資料 3-11　多久市全域の歴史文化継続状況（平成 29 年）

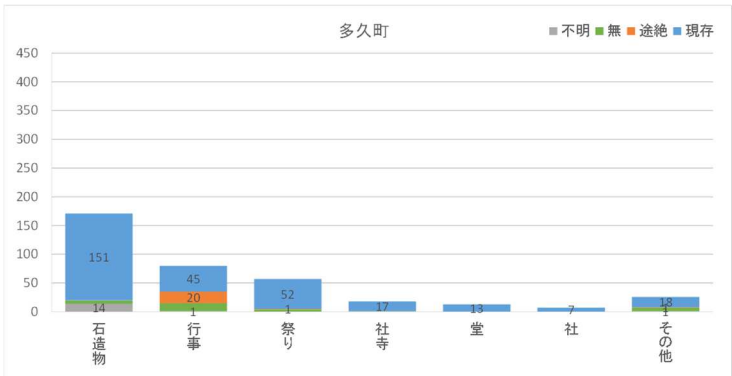
東多久町	不明	無	途絶	現存	計
石造物	23	4		368	395
行事		9	20	43	72
祭り	1	2	5	80	88
社寺	1			15	16
堂				14	14
社				13	13
その他	2	3	3	22	30
合　計					628



南多久町	不明	無	途絶	現存	計
石造物	13	1		210	224
行事	4	11	21	47	83
祭り	2	7	3	55	67
社寺				13	13
堂				16	16
社				6	6
その他	4	1	2	7	14
合　計					423

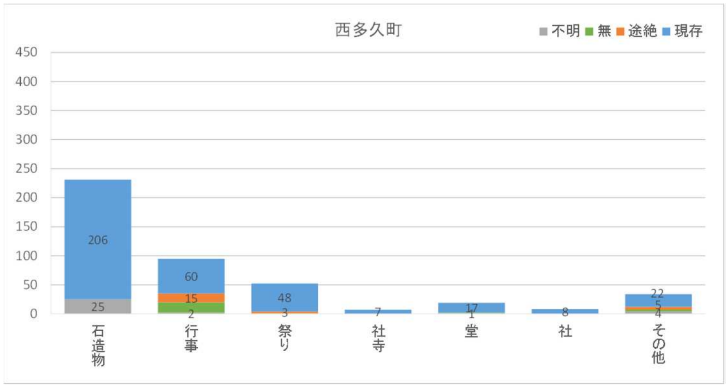


多久町	不明	無	途絶	現存	計
石造物	14	6		151	171
行事	1	14	20	45	80
祭り		4	1	52	57
社寺		1		17	18
堂				13	13
社				7	7
その他	1	6	1	18	26
合　計					372

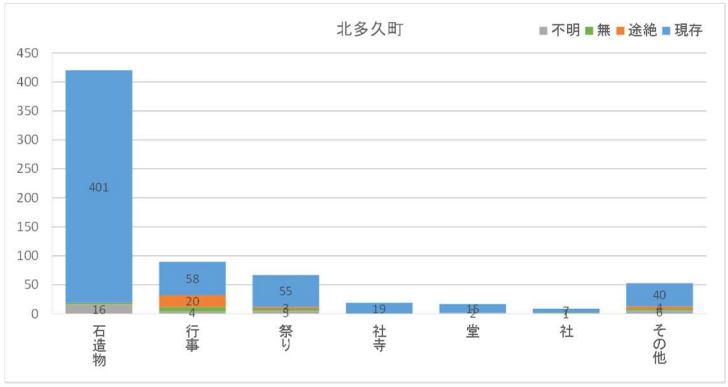


資料 3-12　歴史文化継続状況（東多久町・南多久町・多久町）（平成 29 年）

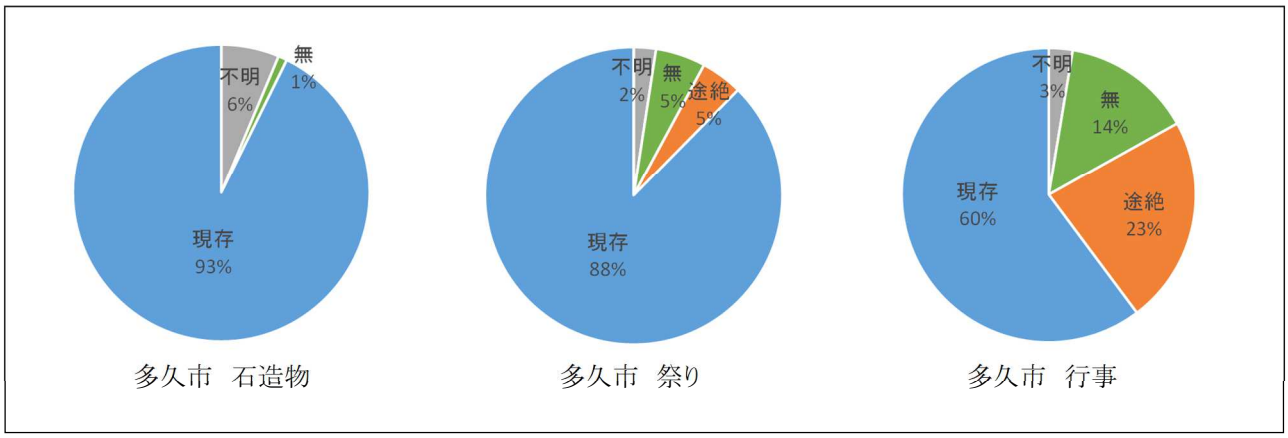
西多久町	不明	無	途絶	現存	計
石造物	25			206	231
行事	2	18	15	60	95
祭り		1	3	48	52
社寺				7	7
堂	1	1		17	19
社				8	8
その他	4	3	5	22	34
合　計					446



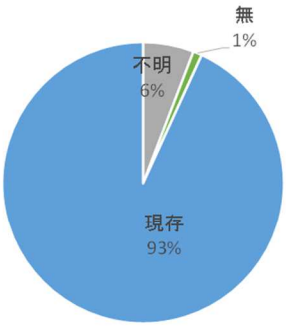
北多久町	不明	無	途絶	現存	計
石造物	16	3		401	420
行事	4	8	20	58	90
祭り	5	4	3	55	67
社寺				19	19
堂	2			15	17
社	1	1		7	9
その他	6	3	4	40	53
合　計					675



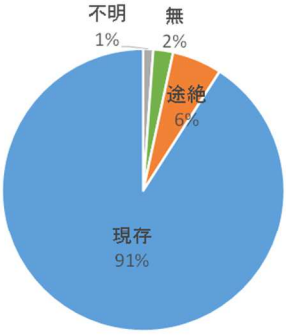
資料 3-13　歴史文化継続状況（西多久町・北多久町）（平成 29 年）



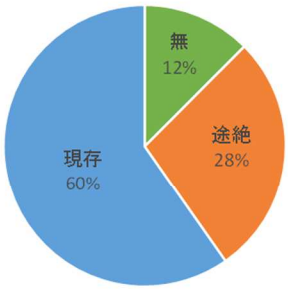
資料 3-14　石造物・祭り・行事の継続状況（多久市全域）（平成 29 年）



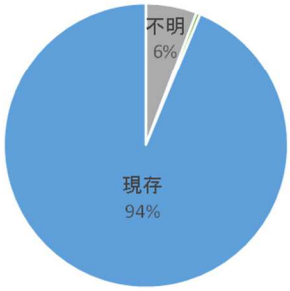
東多久町　石造物



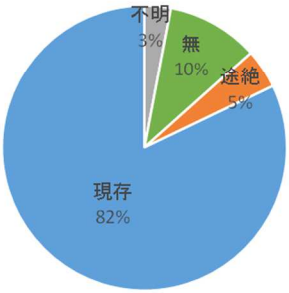
東多久町　祭り



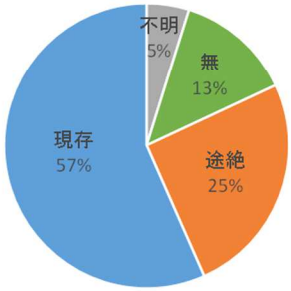
東多久町　行事



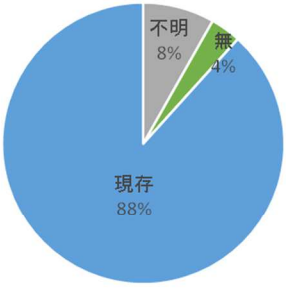
南多久町　石造物



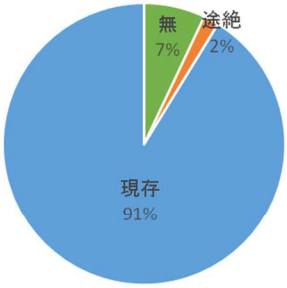
南多久町　祭り



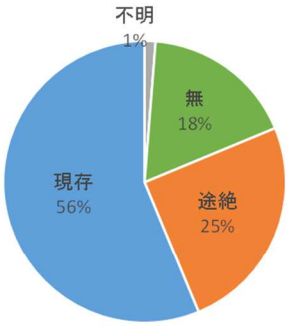
南多久町　行事



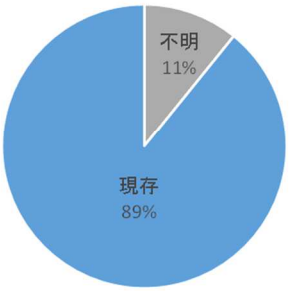
多久町　石造物



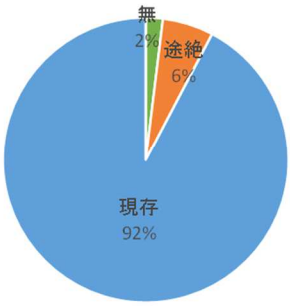
多久町　祭り



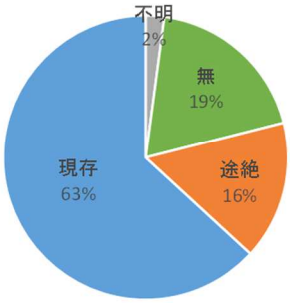
多久町　行事



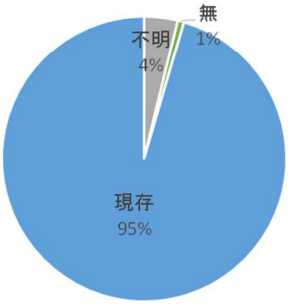
西多久町　石造物



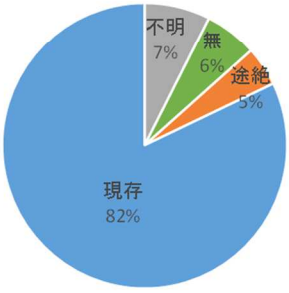
西多久町　祭り



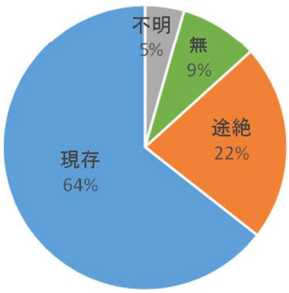
西多久町　行事



北多久町　石造物



北多久町　祭り



北多久町　行事

資料 3-15　石造物・祭り・行事の継続状況（多久市内 5 か町）（平成 29 年）

２．市内文化財を捉える視点の導入　郷土学：「ふるさと多久学」

市内の多種多彩な文化財を守り伝え、それらを一貫的に捉え活かしながら、多久地域やその歴史の独自性の理解を助け、さらに多久らしさと地域への誇りの醸成に繋げるための視点や考え方の導入が必要である。その役割を期待するものとして、現在市内で市民や児童向けに行われている郷土学習と徳育を合わせた学習活動である「ふるさと多久学」の振興がある。「多久学」とは多久における郷土学の取り組みであり、「郷土（多久）に学び」、その学びを地域の活性などに活かしていくことを意味する。

（１）「ふるさと多久学」の提唱

１）ふるさと多久学の契機

「多久学」は、平成３年に多久市郷土資料館に着任した館長によって「東原庠舎・多久聖廟に代表される多久の歴史や、近世の儒学を中心とした教育、またそこで育まれた文化・人物史から学び、郷土を知り、郷土の誇りと人格を育成する取り組み」を総括した言葉として初めて用いられた。

平成６年は、郷土資料館に併設して、多久市先覚者資料館が開館したが、これは大塚巳一が生涯をかけ収集した漢籍本など、3,941 冊（「廟山文　庫」）の市寄贈を受けその保管展示と、また多久の先覚者※の顕彰、そして上記の実現を目的として建設された。

開館にあたっては以下のように示された。

写真 3-13　高名な儒学者
草場佩川の生誕地碑（多久町西町）

【肥前多久学】の提唱

「多久の先人たちが、日本の歴史で果たした役割等を認識できる内容構成が必要」とし、「先人の偉業並びに、収集された資料を次代に継承していく文化の中枢的役割の施設であり、さらに、多久とは何か。多久とは何であったか。そして今何をすべきか。「肥前多久学」の一つのしるべともなるべき施設でなければならない。」　また「このことは今後の多久市のあり方を示唆するものである。」との考えが示された。

写真 3-14　日本初の工学博士
志田林三郎

多久市郷土資料館および歴史民俗・先覚者資料館は以後、この提唱に基づく資料館活動を進め今日に至っている。

＜関連図書＞

『肥前様式論叢』　　平成３年　　尾形善郎著

『「多久の歴史」断章−「肥前多久学のススメ」−』　平成４年　多久市郷土資料館　（講座資料）

「多久先覚者資料館−「肥前多久学」のしるべ−」　平成６年　尾形善郎　（『丹邱の里 第 10 号』収録）

※先覚者とは論語に「先づ覚る者は是賢かと」の一節があり、また今日では「人にさきだって道を悟った人、世を導く人」の意味。多久では東原庠舎の教師ほか、近世から近代に活躍した郷土の偉人・賢人を指す。また教師や儒学者を総じて儒林という呼び方もある。

２）ふるさと多久学の広がり　【ふるさと多久学】と【多久学】への展開

多久市の行政計画の一つ「多久市生涯学習のまちづくり推進計画」（平成 11 年）では、多久市民と行政が一体となり、多久市の魅力ある生涯学習のまちづくり計画が示されている。さらに、同計画では「ふるさと多久学」をキーコンセプト（核になる考え方）に位置付け、以下のように説明されている。

写真 3-15　「多久市生涯学習のまちづくり推進計画」（表紙）

「私たちの郷土多久は、豊かな自然や永い歴史・伝統を持つとともに、独自の文化を育んできました。そのようなふるさと多久を学習し、更に、多久の現在や未来についても学習を深めていくことを「ふるさと多久学」と呼ぶとともに、「ふるさと多久学」を進める中で、ふるさと多久の良さを再発見し、市民参加の中で、市民と行政が一体となったまちづくりを推進してまいります。」

写真 3-16　市内史跡探訪のようす

本計画では市民向け、また児童生徒向けの「ふるさと多久学」を核にした郷土学習システムづくりを通じ、生涯学習のまちづくり推進を示し、また美術館・博物館はなくとも、多久市全体を学習の場・学習資源として活用する「多久まるごと学び舎」構想の提案が行なわれた。この計画に基づき現在行われている事業として、中央公民館では市民向けの歴史を含む各種講座「いきいき大学」や、各町公民館主催による史跡探訪の開催、また市民のテーマ要望で移動講座を開催する「出前講座」がある。

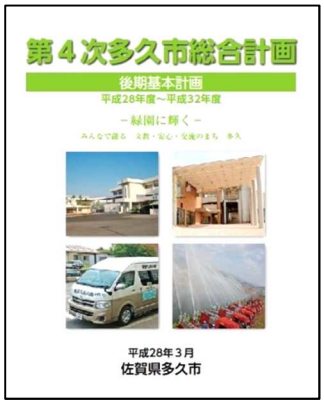


写真 3-17　「第 4 次多久市総合計画（後期基本計画）」（表紙）

この計画の策定から 18 年が経過した現在、「ふるさと多久学」を核として計画に掲げられた取り組みの多くは、既に公民館を中心とした市民活動や各種講座に、名称等の変更を経ながらも継続して取り組まれている。

＜関連図書＞

『多久市生涯学習のまちづくり推進計画』	平成 11 年	多久市
『第 4 次多久市総合計画』	平成 23 年	多久市
『第 4 次多久市総合計画後期基本計画』	平成 28 年	多久市

３）多久学・論語に学ぶ教育活動

これらの動きを受け、平成 23 年に策定された「第 4 次多久市総合計画（平成 23－32 年度)」前期基本計画（平成 23－27 年度）では、「第 1 節、1. 学校教育の充実」において今後重点的に取り組む施策の基本方向として、多久学（多久についての学習）を深めることがあげられている。

その後の同じく第 4 次総合計画後期基本計画（平成 28－32 年度）においても多久学の推進は継承されている。

多久学の学校教育への導入については、平成 21 年に策定された市の構想案により

「多久市の人、もの、ことを学ぶことによって、多久を知り、好きになり、さらには多久を良くしていこうと考えることができる人材を育てること」

と示された。

その後、『多久学のすすめ』等の独自教材をつかった多久の歴史や文化財、人物、産物、祭りなどを教える児童教育が行われている。

学校では、多久聖廟に祀られる孔子の言葉として人の生き方や道徳を記した「論語」を授業に取り入れ、日常的には「今日の論語」の暗誦や放送、論語カレンダーの掲示を行なっている。

また、楽しみながら論語を学ぶための「百人一首式論語カルタ」の教材化や同カルタ大会の開催、拡大版カルタを掲示した「論語カルタ通り」の校内設置など、視覚や体を動かしながら学ぶことによって論語の語句が自然に身に付く工夫がされている。

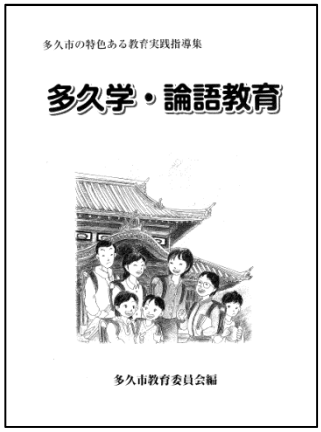


写真 3-18　「多久学・論語教育」（表紙）

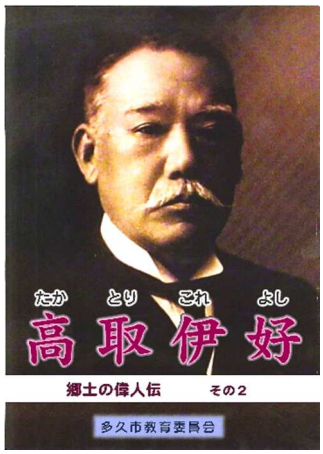


写真 3-19　「郷土の偉人伝」（表紙）

写真 3-20　論語カルタ大会

写真 3-21　百人一首式論語カルタ

写真 3-22　義務教育学校内に論語カルタを掲示した「論語カルタ通り」

多久には、江戸中期以降近代にかけて、郷校東原庠舎の存在と、そこでの教育が地域に及ぼした影響が色濃く残っている。輩出された学識者たち（多久の先覚者・儒林）が、当時日本の頭脳の一端を担うなど、多久はまさに日本の「学問の府」の一所であったと言え、そのことは市民の誇りにもつながっている。

この歴史から、日々学び自身を高めることと道徳的人間形成への信念は人々に深く根付き、培われた気風と土地柄をさし

「多久の百姓に道を訊ねれば、鍬を置いて倫（みち）を説く」
「多久の雀は論語をさえずる」

と言われるようになり、「丹邱」の里・多久を評したその声は江戸にも届いたという。

これらの気質は、多久聖廟や孔子への尊敬とともに今もなお市民に生き続けており、自然と「学び」を大切に思い、孔子の教えを尊ぶ地域的性格はここからもたらされている。

「多久学」の提唱には、多久ならではの歴史背景が要因としてあり、多久学を構想の核としてその視点に絡めて市内の歴史文化を関連づけ構成し、認識していくことは前項で述べた文化財の把握や、継承における課題に対しても有効な手段となり得る。

＜関連図書＞

『郷土の偉人伝 その 1 志田林三郎』	平成 10 年	多久市教育委員会
『郷土の偉人伝 その 2 高取伊好』	平成 18 年	多久市教育委員会
『多久学・論語教育』	平成 26 年	多久市教育委員会
『多久学のすすめ』	平成 27 年	多久市多久学編集委員会
『平成 29 年度 多久市の教育』	平成 29 年	多久市教育委員会

（２）「ふるさと多久学」の新視点と深化の方向性

前述のように、「肥前多久学」から始まり、「ふるさと多久学」や「多久学」として徐々に広がった多久学の考え方は、いま多久市民や児童生徒に共有され、また多久市総合計画においても推進されている。

資料 3-16　市内で行われている「多久学」の比較

多久学の種類	主体となる担い手	活用対象の捉え方	歴史文化の広がり
肥前多久学	郷土資料館	多久聖廟と周辺の歴史 先覚者の業績・人物史	限定的
ふるさと多久学	中央公民館・各町公民館	郷土の歴史や自然	市域全体
多久学	義務教育学校	郷土の歴史、人・もの・こと 論語（道徳教育）	市域全体

しかし、これらの多久学は主体として担当する部署がそれぞれ 3 つに分かれており、「郷土の歴史・文化財等を知り、そこに学び人を育む」という基本理念が共通していながらも、関連事業を独自に推進しているため、市文化財部局を含め文化財情報の相互確認的な連携等が少ない面がある。また文化財自体の保存や継承の取り組みに繋がりにくい点も課題としてある。

本構想の策定を契機として、それぞれの多久学とその担い手の取り組みに横断的連携や文化財部局等の関わりを創出し、多久学活動の範囲と内容を深めながら、また文化財の保護と活用を図っていくため、次のような視点と方向性を加えていく。

・「ふるさと多久学」の新視点

「ふるさと多久学」を構成し、その根拠となる市内に現存が確認された 2,175 件の歴史文化と、今後新たに見出されるすべての文化財を、地域の歴史と特色を伝える歴史遺産として保護する。

・「ふるさと多久学」の深化の方向性

「ふるさと多久学」は、郷土愛と人間的魅力のある人づくりをすすめるとともに、文化財を継承、保護する担い手の育成を図り、より良い郷土のまちづくりと環境育成をすすめる。

（３）地域・学校・行政の連携

「ふるさと多久学」の視点を活用して、市内における様々な、市内に所在する文化財を保護するために、年々の周辺環境や保存状態が変化していく文化財について、全域かつ継続して把握する。そして、異常があった場合など、早期の察知とその時点で考え得る必要な保護策を講じることが望ましい。以下より継続把握の枠組みづくりと、それぞれが連携し取り組む体制を築いていく。

１）地域からの保護推進

文化財に最も身近な人々とは、その文化財の所有者であり、また文化財が身近に所在する各地区の住民自身といえる。地区住民の手による文化財の見守りや地区行事の中での啓発活動等を提案していく。文化財自体や自然・社会環境の変化が文化財にもたらす影響等の早期察知につなぎ、文化財の消失に対する必要な保護策の検討機会と期間的猶予をつくる。また、保護継承に関する地元の自発的活動に対してはその活動がスムーズに行なえるよう様々な面で協力する。

写真 3-23　地区住民が独自に作成した地元の歴史文化の記録

２）学校との連携（体験学習等を通じた情報収集）

市内義務教育学校における児童生徒の学習「多久学」の一環として、地域の文化財のマッピングや住民への取材、地区の行事・祭りへの体験参加、またその模擬練習等の機会の創出を図る。学習の中で地域の文化財への理解が深まると共に、参加・保護意識が向上し文化財の把握にも繋がる。そうした授業の成果、文化財の現況情報について教員等を通じて共有するなどの連携体制をつくる。

３）行政による文化財パトロールほか

指定文化財を対象としてきたパトロール範囲を、未指定文化財やその周辺環境に広げ定期的に実施する。範囲が広がる事で生じる不足を地区・地域住民及び、学校の活動で補い、また行政はそれらの補足的調査を行なう等、相互的な情報の補完に努め、地域や学校の活動に対しては必要なサポートを行なっていく。

上記の取り組みによる全域的・継続的な把握を行なう中で、それぞれの文化財に対し指定を目標とした選定や再評価を行なっていくものとする。

３．把握のための情報共有と防犯・防災

（１）文化財情報の受信と共有システム

平成 28・29 年の基礎調査の結果を基に、市内全域の文化財のデータベース化を図ると共に、文化財の更新と地区別整理簿として配布し、前項の継続把握の取り組みで得られた情報を随時反映させ、情報の共有化を行なっていく。各行政区のどこに何があるのか、また基礎調査において滅失事例が多かった行事・祭りについては開催場所、日時、実施状況まで含めて地区・行政が共通の情報を把握し、文化財の保存上必要があれば相談を受け適切なアドバイス等を行なっていく。

1 下鶴

鬼の鼻山山系の北麓に形成され、集落の中を東西に県道多久若木線が走っている。

寺社	名称	祀神・本尊	祭礼/宗派	歴史・由緒	境内内工作物
神社	栗山権現社	熊野権現	7/14に近い日曜日 抵圏祭り 12/15 権現社祭り	寛永二十一年(1644)に創建され、天明二年(1782)に改修され、昭和49年に神殿が改築されている。（後略）	鳥居 1基 水盤 1基 燈籠 4基 石祠 1基
寺院	瑞応寺	聖観世音菩薩	臨済宗南禅寺派	天正十年(1582)庭木秀利が上多久に創建し、始めは高徳菴と称していた。明和九年(1772)参詣の便利を図るため現在地に移転した。	石塔 2基
	大日堂	六地蔵の尊像部 木造大日如来像 焼物の地蔵菩薩像		古洞溜池の南にある小さな堂で、『丹邱邑誌』に「二間半方草葺」とある。新四国八十八ヵ所の四十番札所となっている。（後略）	六地蔵塔 1基 木像 1体 焼物像 1体 石塔 2基
	毘沙門堂	木造毘沙門天像	12/3 毘沙門さん祭り →中止している	木造の毘沙門天像が祭祀されている小さな堂で、『丹邱邑誌』に「二間方草葺」とあり、四国八十八ヵ所の六十三番札所となっている。（後略）	石祠 1基 石像 1基

指定文化財	名称	種類	指定者	内容
	－			

遺跡等	遺跡名	遺跡番号	時代		
	茶園原遺跡	55	旧石器～弥生・中世		
	多久石器原産地遺跡群	56	旧石器・縄文・近世		

優れた樹木	－

伝承と民話	もぐら打ち	1月14日、子どもたちによりもぐら打ち。
	兵糧小路祭り	10月19日直近の日曜日、地区の代表が記念碑に参拝し、地区民は総出で集落内の清掃、堤の草刈りなどを行い、公民館で直会が行われる。（後略）

石造物等	基数
	6基

信仰	宝満社塔 1基 弁財天石祠 2基	
	宝満さん祭り	春は5月の第1日曜日、秋は彼岸の中日、宝満山山頂に祭祀されている宝満社に、酒・魚・塩・ゴックウさんを供え、農産物の豊作を祈願する。
	弁財天祭り	５月1日、現在5月第1日曜日に大谷山の中腹にある弁財天（上の方に男弁財、少し下に女弁財）に、酒・塩・イリコを供え、竹にシメ縄を張って清める。

その他	兵糧小路旧地碑	天正元年(1573)梶峰城の長信に対し叛乱が発生し、孤立籠城となった。その時、下鶴の長五人は、下鶴山の間道を通り、兵糧を城に送った。終息後、褒美として苗字帯刀を許し、士分の扱いとした。この事を、大正12年に多久龍三郎の題字で記念碑を建立。

P.1

資料 3-17　基礎調査に基づく文化財の町別整理簿

（２）文化財を見守る仕組み

行政は、文化財情報の共有化とともに、文化財の防災・防犯上の事例や対応策等の情報についても嘱託員会等の場で通知し、行政区内において注意喚起に努める。また連絡体制を整備し、行政区と情報を共有する文化財に防災・防犯上の異状が生じた場合などは、地区からの連絡に応じ公的機関への通報など必要な措置を講じるために協力する。

その他、地元消防団などとの連携を強化し、これまで指定文化財を主としていた文化財防火訓練を未指定文化財に広げ、消火栓・防火水槽などの水利把握と消火対処が円滑になるよう図っていく。

また、町別整理簿は大規模災害時にはチェックリストとして利用できるデータとなる。

第４章　文化財の保存・活用の基本方針

１．目標と基本方針

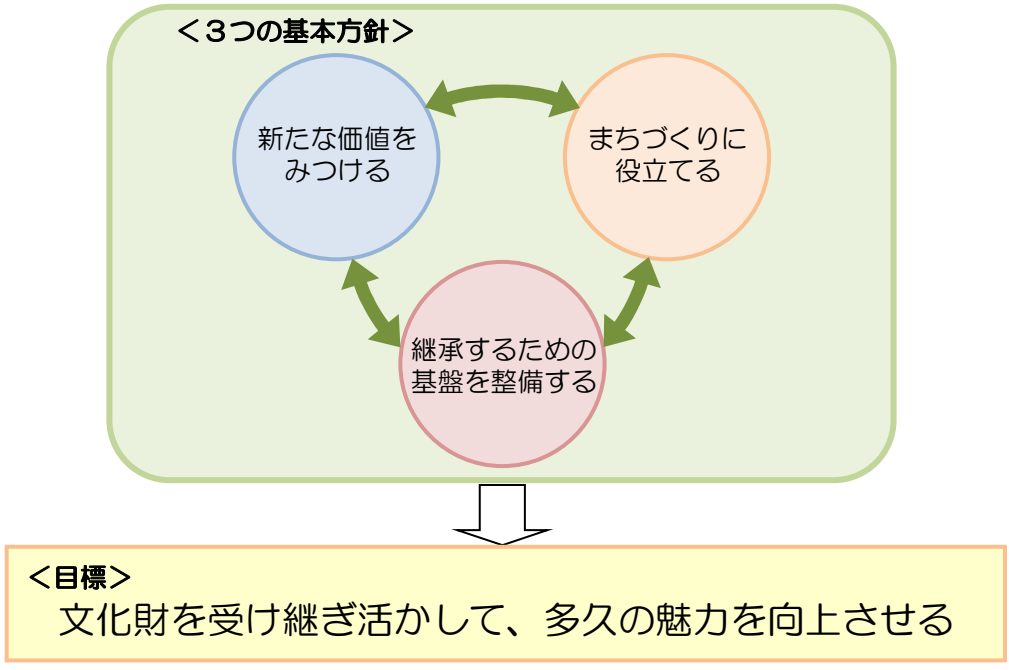
多久市内には、長い歴史のなかで、先人がその自然環境や立地を活かして創出した多くの文化財がある。それらは、地域共有の財産、市民の誇りとなっている。このような歴史や文化財を後世へ継承していくことは、現在生きている私たちの責務と言える。さらに、新たな価値を見出して、多久市の魅力を高め、地域のまちづくりに寄与することが求められている。

これまでの文化財調査、課題、とりまく周辺環境などをもとに、文化財の保存・活用による目標を以下のように定め、地域の活性化やまちづくりに展開していくことを目標とする。

目標：文化財を受け継ぎ活かして、多久の魅力を向上させる

この目標を実現するために、次の３つの基本方針を定めて、取り組みを推進していく。

基本方針１：文化財を総合的に把握し、新たな価値をみつける
基本方針２：文化財を守り、継承するための基盤を整備する
基本方針３：文化財を効果的に利活用して、まちづくりに役立てる



資料 4-1　目標と基本方針相互の関係

基本方針１は「何を（対象）」、基本方針２は「主に誰が（主体）」、基本方針３は「どのように（手法）」にそれぞれ相当しており、これら３つは相互に連携しながら、目標を目指すものとする。

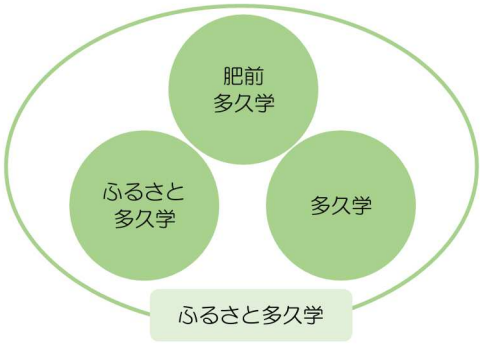
２．基本方針１　文化財を総合的に把握し、新たな価値をみつける

多久市の先人が、豊かな自然と歴史によって育んできた文化財がもつ特徴を把握して、文化財相互や文化財と周辺環境が一体となって生み出された新たな価値を、次世代に継承していく。そのために以下の取り組みを示す。

（１）「ふるさと多久学」の深化

聖廟の保存や孔子の教えを大事にするという「多久学」が、『多久市生涯学習のまちづくり推進計画』（平成 11 年）のキーコンセプト（概念）である「ふるさと多久学」へと発展し、行政・住民・学校関係者に影響を及ぼしてきた。現在、「ふるさと多久学」は深まり、学校教育、生涯学習などの多くの場で、地域を学ぶテーマや教材に文化財やその周辺環境が取り上げられてきている。

保護すべき文化財は、これまで主に個別、項目別のものを対象として把握されているが、「ふるさと多久学」の視点によって新たにテーマ別の文化財や文化財群を捉えることが可能となってきている。



資料 4-2　「ふるさと多久学」の関係

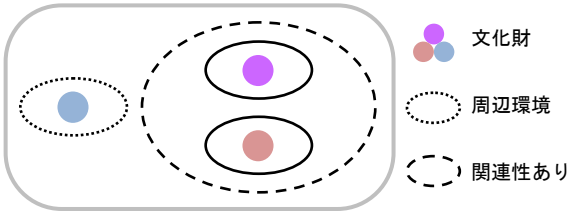
（２）文化財の掘り起こしと未指定等文化財の計画的な指定・登録

広く文化財を掘り起こしていくために、指定等を受けていない文化財の調査の推進が求められる。それらの価値を見出すには、多久市の歴史や文化の理解をさらに深めることが必要となり、そのために広域的な情報収集や関連団体等との連携を図っていく。この過程を通して、文化財保護に対する地域の意識の共有化を図って行くことも可能となる。

現在未指定等の文化財は、その調査・研究の成果をもとに評価し、適切な保護が求められるものについては計画的に指定等の検討を進める。指定することによって資料の散逸を防ぎ、後世に残すこともできる。

（３）文化財と周辺環境の一体的把握

有形・無形を問わず文化財は、単独で存在していることはまれであり、周辺環境とともに存在している。文化財相互が関連している例も見られ、これら一体のあり方や関連性を把握することにより、文化財の価値をさらに高めるものとする。



資料 4-3　一体的把握のためのモデル

（４）文化財の修理・補修

文化財全般については、老朽化や傷み具合を調査し、新たな発見や必要に応じて修理・補修することによって、その価値が維持され、その魅力を高めることができる。そのため市民・所有者からの文化財情報の提供を受け入れる体制づくりを行うとともに、修理・補修の専門技術者との連携や実現に向けての予算措置を図っていく。

３．基本方針２　文化財を守り、継承するための基盤を整備する

基盤を整備するためには、人づくり、体制づくり、情報収集のシステムづくりが、必要となる。

地域の子どもたちが文化財の学習を通して、周りの大人や親と交流していくことが人づくりの基礎となる。

（１）担い手の役割

文化財を守り、継承するための主な担い手に、市民・行政・学校・活動団体があげられる。

市民は、一人ひとりが多久の文化財を育んでいることを認識すると共に、文化財に関する行政や学校、活動団体への積極的な支援が求められる。

行政は、文化財の保存・活用推進において、情報収集・調査研究・制度利用・環境整備・普及啓発などの中心的な役割を担う。

学校教育では、既に孔子の教えを中心に多久の歴史・文化を学ぶ郷土学習を広げているが、さらに文化財にふれる機会を増やして、次世代の人材育成の取り組みを進める。

活動団体は、これまでの活動を進めると共にその成果を情報発信し、イベントや講演会などの多彩な企画を通じて、さらに交流と活動の拡充につとめる。

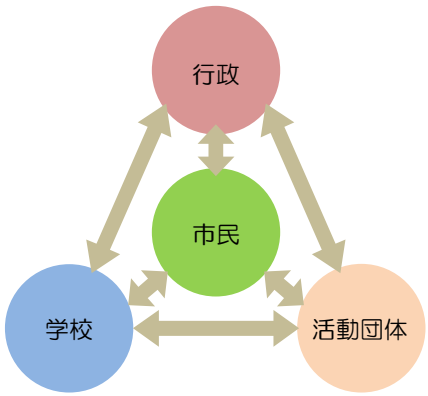
（２）協働の場づくり

担い手は、自らの役割を実践しつつ、相互に交流・連携することによって、より深いテーマや課題を見つけることができる。

また、支援や協力依頼もスムーズとなり、それらを各々の活動に反映させることが可能となる。

このような循環を図るための協働の場の設置を検討する。

既に「ふるさと多久学」を実践してきた経験を生かすことによって、この協働の場づくりは十分に可能性をもっているといえる。



資料 4-4　担い手の相互関係

（３）歴史文化の担い手情報の整備

文化財そのものの情報の他に、その文化財を保存・継承しているそれぞれ担い手と、その活動内容や成果などの情報を把握・整理し、データベース化を図る。

これは、どのような条件が備われば、歴史文化が維持されていくのかを検証する貴重な資料となり、また、同じ内容の文化財が近い将来消滅する可能性がある際に、存続に向けての方策を検討する可能性を有している。

（４）担い手の育成と活動資金

行政は、生涯学習等を通して市民への啓発、活動団体への情報提供・支援、学校教育への協力、協働の場の提供、など各担い手の育成の取り組みを進める。また、文化財を保存しうる個人・グループ（伝統技術者、地区の祭り・行事の主催者など）を発掘し、文化財保存・活用のため幅広い人材を把握する。

各活動団体等も自主的な活動を広げるとともに、次世代を担うリーダーの育成に取り組む。

各団体等は活動資金の確保、受け入れを図るための取り組みを推進していく。

（５）文化財活用諸施設と環境の整備

多久市では、多久聖廟を中心とする歴史公園の整備、西渓公園と各種資料館の整備、２つのくど造り民家や隣接したふるさと情報館「幡船の里」等が設けられている。このように文化財を基点として、魅力的な地域空間の創出、充実した観光施設の中核となっている。

これらのように文化財を顕在化することによって、その価値を広く知ってもらうことができる。指定文化財については、日頃目にする機会の少ない保存修理などを含め広く一般に公開することを基本として整備の推進を図る。

また、文化財を都市計画におけるまちづくりと連動させ、文化財とその周辺環境との一体的な整備の取り組みを推進していく。

これらの事業の推進に当たっては、関連諸機関・部署との緊密な連携、予算措置が必要となる。

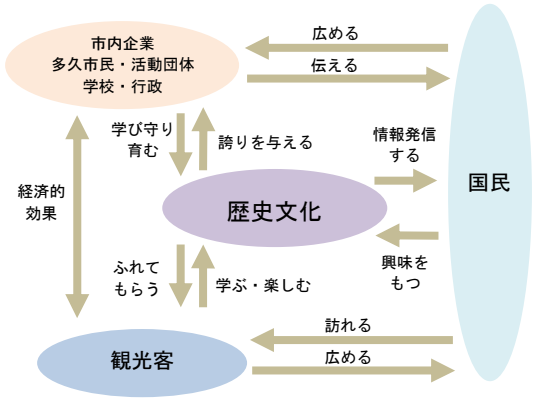
４．基本方針３　文化財を効果的に利活用して、まちづくりに役立てる

多久市の文化財、文化財とその周辺環境、を効果的に利活用して、市の魅力をさらに向上させて、市民の誇りの醸成、観光振興、地域の活性化などのまちづくりに役立てていく。

（１）歴史文化を活用した学校教育・生涯学習の拡充

小中学校の名称に**東原庠舎**を受け継ぎ、孔子の教え、聖廟釈菜の舞、腰鼓など、学校教育の場で、文化財は日常的学びの対象となっている。さらに、文化財とその周辺環境を学ぶ教育プログラムに取り込むように図る。

また、「たく市民大学」の講座などが宿泊研修施設である東原庠舎にて開催されている。他にも郷土資料館（先覚者・歴史民俗含む）では古文書の調査研究が行われ、生涯学習にも広がりを見せている。



資料 4-5　文化財を効果的に活用するモデル

多久の将来を担う子どもたちに、歴史文化への興味を促し、文化財を将来は引き継いでいくためのサポーターになってもらうために、さらに、歴史文化とその周辺環境を学ぶ教育プログラムに取り込むように図る。

また、日常における文化財の見守り・清掃・語りのボランティア活動に、高齢者の生きがい対策にも、文化財を活用できるような企画を推進する。この他にも、各所の文化財を探して歩く「多久文化財めぐり」や石造物八十八か所めぐりの再開など、親子で参加できるようなイベントを検討していく。

（２）公開と情報発信

文化財の価値そのものを知ってもらうには、所有者・管理者の理解を得て、直接本物に接してもらえるよう公開していくことが望ましいが、必ずしも全てが公開の対象にできるとは限らない。時期や人数の限定や、展示方法を検討するなど、できるだけ公開できるように推進する。

文化財の公開は、多久の魅力を拡充して、観光振興の重要な柱となりうる。

既に、文化財に関しては、多久市のホームページなどで指定・登録文化財の情報発信はしているが、さらに多様な媒体を通じて、他の文化財、一体となっている周辺環境、関連している文化財のまとまりなどの他に、文化財の担い手の活動状況、文化財個々の情報、場所とアクセス方法、関連文化財群のテーマとストーリー、などを取り入れた総合的な情報発信の取り組みを推進する。

これらは、観光情報になるとともに、学校教育・生涯学習の教材としても利用できる。

第５章　関連文化財群

１．関連文化財群のテーマの設定

（１）基本的な考え方

関連文化財群とは、有形・無形、指定・未指定に関わらず、地域に存在している様々な文化財を歴史的・地域的関連性に基づいて一定のまとまりとして設定するものである。これまで個別に認識されてきた文化財を、地域の歴史文化を物語る「群」として捉え直し、一体的かつ総合的に保存・活用していくことは、個々の文化財の価値をさらに高め、地域の魅力を発信し、まちづくりに貢献していくことが可能となる。

長い歴史を有している多久市には、時代ごとの歴史文化、さらに時代を超えて現在まで維持・継承されている文化遺産のうち、以下の条件に適合する文化財のまとまりを関連文化財群として設定する。

・共通のテーマを有していること。
・多久の歴史文化を物語るストーリー性があること。
・市民が文化財群を再認識でき誇りとして思えること。
・文化財群の保存・活用が多久のまちづくりに寄与すると想定できること

治　　政：各時代の統治者の政策と国内の情勢
文化・教育：信仰を基にした文化や教育
自然・資源：生活や産業基盤となる地勢や資源
流通・産業：産業の発展と人と物の流れ
生　　活：住居と人口の増減

資料 5-1　テーマ設定のための主な項目と時代区分

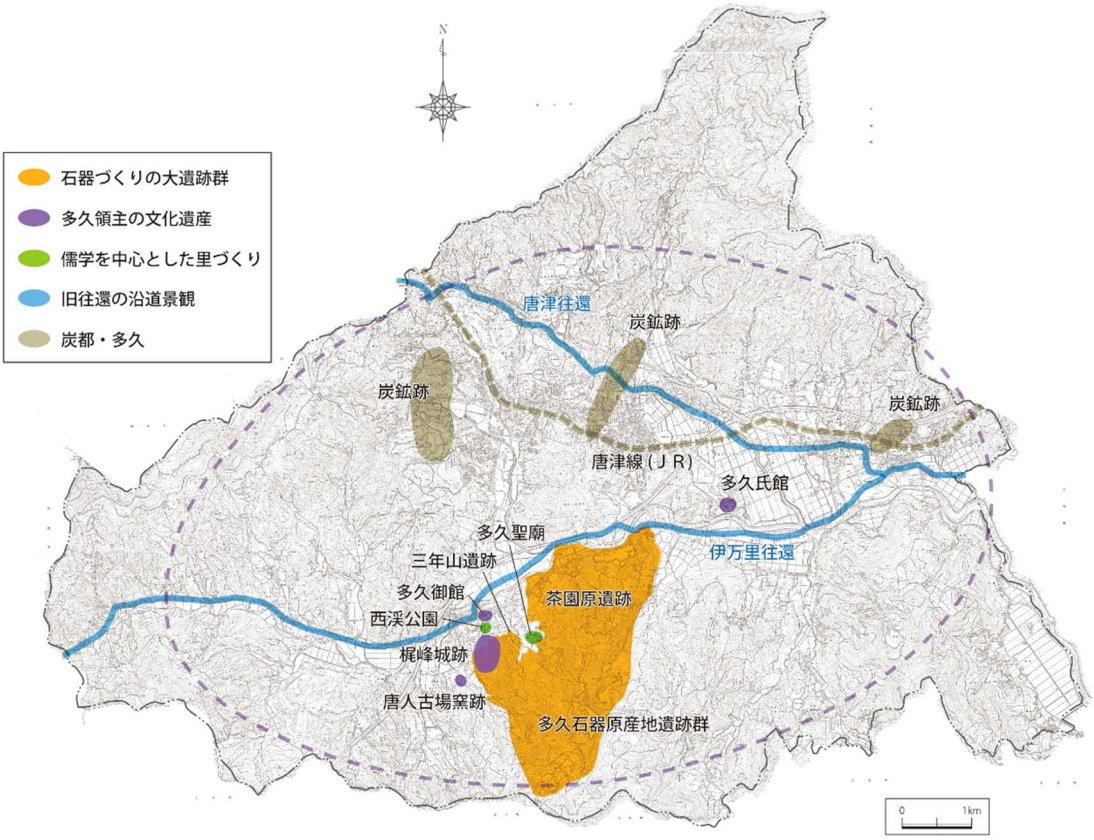
時代区分		治政	文化・教育	自然・資源	流通・産業	生活
原始	旧石器時代 (1 万 2 千年以上前)			サヌカイトによる大型尖頭器の製作	他地域でも尖頭器が利用された	人々の居住の始まり
	縄文・弥生時代 (1 万 2 千年前～3 世紀)	有力者の出現				
	古墳時代 (4 世紀～7 世紀)	古墳の築造				
古代	飛鳥～平安時代 (7 世紀～11 世紀)		末法思想の影響 行基による寺院の建立	河川	条里制　米作 古代の官道 河川をつかった運搬	
中世	鎌倉時代 (12～13 世紀)	津久井宗直の多久下向、前多久氏の統治の始まり	多久氏による神社の創建始まる			
	室町時代 (14～16 世紀後半)	前多久氏の追放 後多久氏の統治				
	安土桃山時代 (16 世紀後半)	秀吉による領土安堵	多久氏による文化人の保護		太閤行軍	
近世	江戸時代 (17～19 世紀中半)	多久氏、佐賀本藩を補佐して領地経営	多久茂文、聖廟及び東原庠舎を創建		唐津往還、伊万里往還と駅・宿の整備 石炭出土	くど造り民家 商家 武家屋敷
近現代	明治時代 (1868～1912 年)	版籍奉還と村の誕生	学制による東原庠舎の閉鎖	石炭	炭鉱経営 石炭運搬のため鉄道の開通	
	大正時代 (1912～1926 年)				炭鉱経営に大手参入	
	昭和時代 (1926～1989 年)	５つの町村が合併、多久市の発足			炭都・多久の成立とその後の閉山	人口の流入 人口減始まり
	平成時代 (1989～　　)		聖廟の修復と釈菜の継承			人口微減が続く

（２）関連文化財群の５つのテーマ

多久市の関連文化財群として、以下の５テーマを設定する。

資料 5-2　ストーリー・文化財など

テーマ名	ストーリー	構成する主な文化財	周辺環境など
石器づくりの大遺跡群 旧石器時代	安山岩を加工した大型尖頭器の一大生産地である旧石器～縄文時代の遺跡群が発見された。	遺跡 出土品 石材	立地環境 郷土資料館 多久市収蔵施設
多久領主の文化遺産 鎌倉時代～明治初期	多久氏（前多久、後多久）は計 680 年間、この地を統治し領民に多大な影響を与え、その政治・文化施策による多くの文化遺産が存在している。	神社　寺院　城郭跡 武家屋敷　館と城下 往還　文書資料　石造物 郷土芸能　祭り　伝説	歴代の多久氏の事跡 立地環境 郷土資料館 他
儒学を中心とした里づくり 江戸時代中期～現代	後多久 4 代領主茂文による儒学に基づく文教の里づくり。孔子の教えは、現在にも継承されており、中核をなす聖廟は多久市の象徴となる。	廟　小中学校　祭り 伝説 文書等資料	多久茂文 輩出された人材 立地環境 観光施設　他
旧往還の沿道景観 主に江戸時代～現代	古代の官道から発展し、江戸時代には宿・駅が設けられ整備された唐津往還、伊万里往還の沿道には、伝統的な民家などによる独特の景観をもつ。	往還　農家　商家 堂　石造物　農地 番所跡 伝説	立地環境 民家　農地　山林 整備された施設　他
炭都・多久 江戸時代後期～昭和 40 年代	江戸時代後期から採掘された多久の石炭。昭和時代の最盛期、炭都・多久と呼ばれ一大供給地となったが、昭和 47 年に最後の炭鉱が閉山した。石炭産業は、近代多久に大きな貢献を果たした。	炭鉱関連施設　寺院 まちづくり（道路・鉄道跡・炭鉱住宅跡など） 地名	立地環境 鉄道 郷土資料館 関連文献　他



資料 5-3　テーマ別関連文化財群の分布

２．ストーリー

（１）石器づくりの大遺跡群

１）ストーリー

安山岩の一種であるサヌカイトの大型尖頭器が、鬼の鼻山山麓の旧石器～縄文時代の遺跡群から大量に発掘された。この地は尖頭器加工の一大生産地であり、これまでに確認された石器原産地遺跡としては東西 2.5 ㎞、南北 3.5 ㎞に広がり、国内最大級の規模を誇る。これらの製作された尖頭器は、他地域でも広く利用されていたと考えられている。

地元児童の石器採取を受けて、昭和 35 年の三年山遺跡・茶園原遺跡の発掘によって発見された大量の石器は、九州における初の旧石器時代の学術調査の成果であり、この発見を契機として昭和 44 年に多久考古学会が発足され、会誌も発刊された。この調査は多久市における本格的な遺跡の発掘調査の始まりといえ、この後、佐賀県内の遺跡調査など多くの埋蔵文化財調査が展開していった。

２）構成している主な文化財とその周辺環境・担い手

構成項目	主な文化財	周辺環境	担い手
大型尖頭器の発見と旧石器遺跡	三年山遺跡 茶園原遺跡 多久石器原産地遺跡群　ほか同性格の遺跡 大型尖頭器　ほか石器・剥片・石核など	多久町鬼の鼻山麓 北斜面 安山岩	土地所有者 多久市 多久市郷土資料館

３）現況と課題

【公開と情報発信】

遺跡から発掘された大型尖頭器の一部は、多久市郷土資料館に保管され公開されている。

三年山遺跡は、多久町一体に認定された「新・日本歩く道紀行 100 選文化の道」の案内ポイントの一つとしてマップに搭載され、現地に説明版が設置されている。他の遺跡は現在地中に埋め戻されたまま未公開であり、今後は公開や情報発信が求められる。遺跡の価値が人々に認識されにくい。

写真 5-1　大型尖頭器

写真 5-2　茶園原西畑遺跡石器出土状態
（多久市史より）

資料 5-4　石器づくりの大遺跡群関連文化財群分布

写真 5-3　多久石器遺跡群の主要遺跡
（多久市史より）

（2）多久領主の文化遺産

1）ストーリー

多久領主であった前多久氏（鎌倉～安土桃山時代の 14 代）と後多久氏（安土桃山～明治前期までの 11 代）は都合約 680 年間、多久を統治し、領民に多大な影響を与え、現在の多久市の文化遺産の多くが、その治世・文化施策の成果によるものである。この多久領は、飛び地もあったが、多久町を中心にして、ほぼ現在の多久市域に広がっていた。このストーリーを構成する主な文化財の種類は、多岐にわたっており、文化的に価値の高いものが現在残っている。

なお、指定文化財の半数は、石造物であり、これらを含めて市内に所在している大量の石造物は、かつて領内であった砥川地区（現小城市）の石工集団によって製作されたものである。

2）構成している主な文化財とその周辺環境・担い手

県】：県指定文化財　市】：市指定文化財

構成項目	主な文化財等	周辺環境	担い手
多久氏の領民施策	県】若宮八幡宮神殿　市】高野神社石造肥前鳥居 市】若宮八幡宮の三本杉 高野神社　多久神社　天徳天神　中尾神社　渋木妙見社 西山天満宮　西の原大明神　鶴権現社　藤川内天満宮	各神社の 立地環境	神社の所有者と 氏子
	通玄院　大梅寺　福聚寺　延寿寺　聖光寺　専称寺 等覚寺　正善寺　妙覚寺　円通寺	各寺院の 立地環境	寺院の所有者と 壇家
	市】前多久家石造供養塔　市】龍造寺長信の逆修供養塔 市】島原の乱戦死者供養碑 市】島原の乱女山多久家戦死者供養碑　市】諫早墳	各寺院の 立地環境	所有者 管理者
	横土井跡　羽佐間水道（杵島水道）	農地・里山	管理者
多久氏の文化施策	国】肥前陶器窯跡　県】保四郎窯跡 県】立葵蒔絵螺鈿箏　市】諸田賢順の墓	立地環境 郷土資料館･墓地	多久市 所有者･管理者
多久氏の拠点づくり	梶峰城跡　御屋形跡　龍造寺長信館跡(天理様御屋敷) 御構内（武家屋敷）	立地環境	所有者 管理者
多久氏の歴史資料	県】多久家資料及び後藤家文書 市】西の原大明神一字一石経一括資料	郷土資料館	所有者 管理者
多久氏ゆかりの祭り・郷土芸能・民話	高野神社春祭り・おくんち　専称寺大つつじ 聖光寺二千年ハス　諸田賢順をしのぶ会	各神社・寺院	祭主催者 参加者
	ヤーホーハイ	開催場所	主催者と演者
	多久太郎宗直と陣内城　林姫哀話　兵糧小路	語りの場	民話の語り部

3）現況と課題

神社、寺院、石塔、城跡遺跡、屋敷、窯跡、イベント祭り、郷土芸能、伝説と多岐にわたり、その分布も市内全域に広がっている。特に石造物は約 3,000 基あると思われ、基礎調査の対象だけで約 1300 基(研究者によっては 2700 基)を数える。その多くは近世を中心としたもので、領主多久時代である。

【担い手】

所有者・管理者・行事の主体と主催者に関する情報の全体的把握が求められる。

【公開・情報発信】

個別に対応しており、祭りイベントは多久市ホームページに掲載されている。また、多久市郷土資料館に保管されているものは一部公開されている。

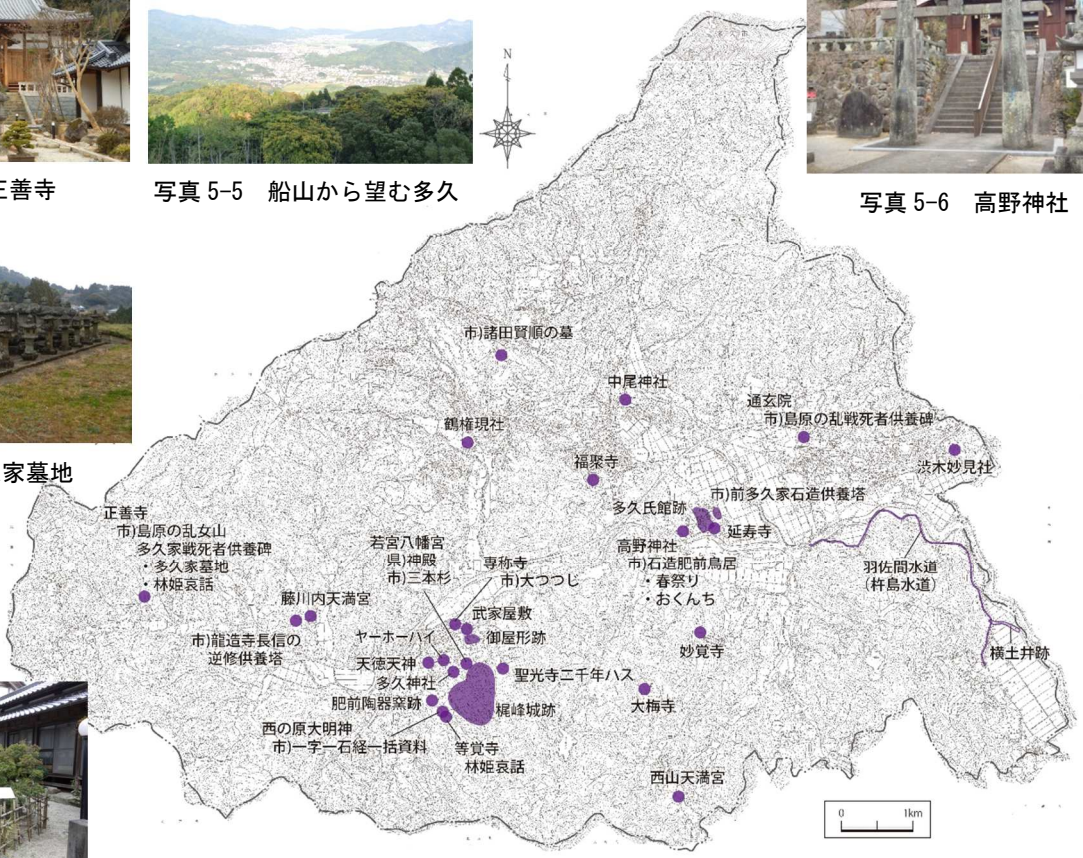
写真 5-4　正善寺

写真 5-5　船山から望む多久

写真 5-6　高野神社

写真 5-7　多久家墓地

写真 5-8　専称寺の大つつじ



資料 5-5　多久領主の文化遺産関連文化財群の分布

写真 5-9　多久神社

写真 5-10　多久八幡神社

写真 5-11　聖光寺

写真 5-15　多久御構内小路絵図

写真 5-12　妙覚寺

写真 5-13　西の原大明神

写真 5-14　一字一石経一括資料

写真 5-16　肥前陶器窯跡

写真 5-17 前多久家石造供養塔

写真 5-18　旧武家屋敷

写真 5-19　梶峰山

（3）儒学を中心とした里づくり

1）ストーリー

江戸時代中期、後多久 4 代領主多久茂文は東の原に多久聖廟、東原庠舎を創建し、多久領を文教の里として形成しようとした。孔子の教えである儒学を教授した東原庠舎では武家の子弟のみならず庶民も学び、漢文学なども盛んであった。のちにここから近世、近代日本をリードする多くの人材を輩出した。孔子を祀る多久聖廟の祭礼である釈菜は、現在も受け継がれており、多くの老若男女が参加している。また、孔子に関する学校行事や祭りが開催され、歴史公園や歴史散歩道などの整備事業も行われてきた。多久学を始めとするその後の動きから聖廟は多久の象徴となり、観光拠点ともなっている。

2）構成している主な文化財とその周辺環境・担い手

構成項目	主な文化財等	周辺環境	担い手
聖廟と孔子	国】多久聖廟　国】聖龕 市】青銅造孔子像 聖廟周辺区域　聖廟展示館	多久町東の原	多久市 観光協会 多久美化クラブ
	県】聖廟春季及び秋季釈菜 孔子祭り（釈菜）　聖廟お火焚き 孔子の里紅葉祭り	多久町東の原	学校関係者 釈菜委員会 観光協会
	伝説多久聖廟と龍	語りの場	伝説の語り部
教育の拠点づくり	国登録】多久市西渓公園寒鶯亭 市】石製先家君自安先生墓誌 東原庠舎跡 多久市立東原庠舎西渓校 東原庠舎（宿泊研修施設）	多久町東の原 多久町西の原 多久市郷土資料館	多久市　保管者 学校関係者 公益財団法人 「孔子の里」
聖廟と教育の統合	文廟記 多久市物産館「朋来庵」 多久市郷土資料館 歴史散歩道（聖堂大路）	多久町東の原 多久町西の原	多久市
	論語カルタ大会	市内３つの義務教育学校	学校関係者

国】：国指定文化財　国登録】国登録有形文化財 市】：市指定文化財

3）現況と課題

【担い手】

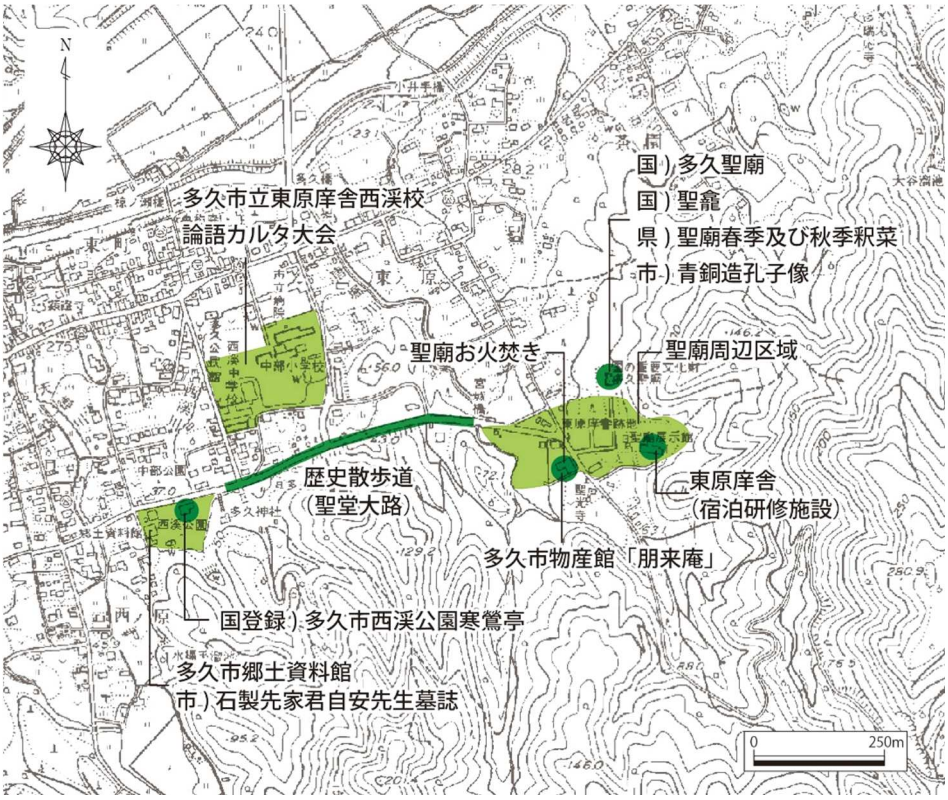
多久市が中心となっており、さらに、外部資金の受皿として平成 2 年財団法人「孔子の里」（後、公益財団法人）が設立された。また、学校の関係者も孔子の教えを引き継いでおり、行事などの重要な担い手となっている。

【公開と情報発信・整備状況】

国と県の補助金を受けて多久聖廟の大改修（昭和 62 年～平成 2 年）を行い、聖廟周辺を歴史公園とする丹邱の里整備事業（昭和 63 年～平成 3 年）などが進められた。市内の主要な道路には聖廟へのアクセスと距離を示した標識が立ち、市のホームページにも、聖廟関連の情報は掲載されている。

この中で、東原庠舎の名をもつ宿泊研修施設が設立され、多久市立の３つの義務教育学校にもこの由緒ある名前が継承されている。また、孔子の生まれ故郷の中国・曲阜市との提携・交流を進めている。

まとまった関連文化財群を示しているが、より適切な情報公開や文化財整備が求められる。



資料 5-6　儒学を中心とした里づくり 関連文化財群の分布

写真 5-20　聖龕

写真 5-21　青銅造孔子像

写真 5-22　多久聖廟

写真 5-23　釈菜

写真 5-24
石製先家君自安先生墓誌

写真 5-25　西渓公園寒鶯亭

写真 5-26　西渓公園

写真 5-27　歴史散歩道

写真 5-28
多久市物産館「朋来庵」

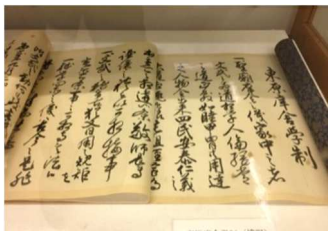


写真 5-29　東原庠舎学制

写真 5-30　東原庠舎（宿泊研修施設）

写真 5-31　多久市立東原庠舎西渓校

写真 5-32　論語カルタ大会

（４）旧往還の沿道景観

１）ストーリー

古代の官道から発展し、江戸時代には宿・駅が設置され整備された唐津往還、伊万里往還の沿道には、歴史的な民家を中心とした特徴のある景観を形成している。

二つの道は、佐賀と唐津、伊万里を結ぶ古代の官道から近世の往還（唐津往還、伊万里往還）へと発展し、さらに現在の国道、県道の基ともなっている。人とモノが往来する道、朝鮮出兵のための肥前名護屋城へ至る大軍が移動した道、現代にもつながる歴史的な道の沿道には、くど造り民家※とその周囲の農地、商家が集合して並び建ち、独特の景観を形成している。

※くど造り：曲屋（まがりや）の民家、上から見るとコの字状でくど（かまど）に似ていることから名付けられた。佐賀平野独特の民家建築様式。

２）構成している主な文化財とその周辺環境・担い手

構成項目	主な文化財等	周辺環境	担い手
旧往還	唐津往還・伊万里往還	谷道　峠道 農地や山林 宿場町　武家屋敷	国 県 所有者　管理者
	女山の女盗賊伝説	山間部	伝説の語り部
沿道民家	国】川打家住宅（くど造り民家） 市】森家住宅（くど造り民家）	農村部 往還沿道	所有者　管理者
	国登録】木下家住宅（商家）	往還沿道	所有者　管理者
	東多久町民家群 北多久町商家群 西多久町民家群	往還沿道	所有者 管理者
沿道施設	多久市ふるさと情報館「幡船の里」 小侍番所跡	農村部 往還沿道	多久市 所有者　管理者
	堂　石造物（記念碑、道標など） 道祖元徒缸（とこう：とびいし）	往還沿道　農地 牛津川	所有者
	宝満山公園	農地	多久市

国】国指定文化財　国登録】国登録有形文化財　市】市指定文化財

３）現況と課題

【担い手】

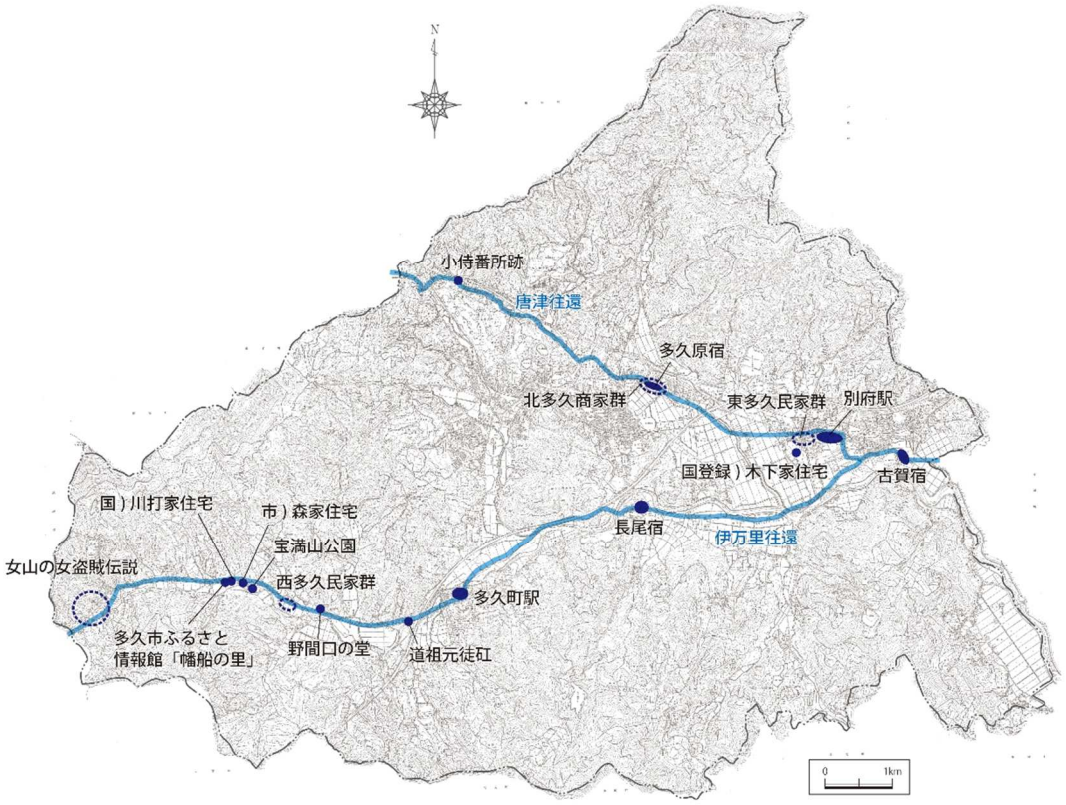
国・県・市、民家・農地等の所有者・管理者等である。

【公開と情報発信・整備状況】

指定文化財の川打家、森家は公開されているが、登録文化財の木下家住宅や他の民家は公開されていない。

多久市のふるさと情報館「幡船の里」では、所在している西多久町の情報パンレットを置き、地元で採れた農産物などを販売している。また近年空き家の増加が取りざたされる一方で店舗などへの一部利用も僅かながらみられる状況である。

写真 5-33　往還沿いの曲屋農家（西多久町）
「九州のかたち民家　草葺きの家を中心に」
（昭和 52 年発行）より



資料 5-7　旧往還の沿道景観関連文化財群の分布

写真 5-34　川打家住宅

写真 5-35　森家住宅

写真 5-36　木下家住宅 主屋

写真 5-37　北多久町多久原の商家

写真 5-38　北多久町多久原の商家群

写真 5-39　野間口の堂（西多久町）

写真 5-40　多久市ふるさと情報館
「幡船の里」

写真 5-41　西多久町宿の民家群

写真 5-42　道祖元徒矼
（とこう：とびいし）

（５）炭都・多久

１）ストーリー

多久の石炭採掘は、江戸末期に始まったとされる。それから昭和 40 年代まで採掘が行われ、一時期は県内における一大産炭地となった。掘り出された石炭は当初は牛津川を用いた川舟輸送が行われ、明治 32 年の筋原駅（現多久駅）の設置から鉄道（現 JR 唐津線）で運搬された。豊富な産炭量から「炭都・多久」と言われたが、石油へのエネルギー転換後は閉山が相次ぎ、昭和 47 年にはすべての炭鉱は幕を閉じた。

江戸時代には自家用の燃料や、農民の副業として石炭が採取されてきたが、明治期には小資本の会社が採掘を担い、大正時代になると大資本による会社が進出して本格的な産炭地となり、昭和期には多久の一大産業となった。石炭産業に関わる人も増加し、町は賑わいをみせ、山笠や盆綱引きなど、祭りも行われるようになったが、閉山後人口は減少に転じた。

炭鉱関連の遺跡そのものは多くは残っていないが、鉄道・道路区画整理などの町の骨格や住宅地が整備されたことで関連した地名も残り、近代の多久の歴史に大きな貢献を果たした。

２）構成している主な文化財とその周辺環境・担い手

構成項目	主な文化財等	周辺環境	担い手
炭鉱の跡	竪坑跡（竪坑櫓等） 坑口跡・ボタ山・ホッパー跡 炭鉱関連資料	東多久町別府 北多久町砂原 多久市資料館など	土地所有者 多久市郷土資料館
炭鉱関連遺産	真宗寺（各地から就労した炭鉱労働者が門徒衆になった） まちづくり（鉄道、関連道路、炭鉱住宅跡、他） 地名（明治佐賀など） 多久山笠・盆綱引き	寺院立地環境 現 JR 唐津線 東多久町 多久町 北多久町多久駅周辺	寺院所有者と檀家 JR 九州 多久市 土地所有者 祭主催者

国】国指定文化財　県】県指定文化財

３）現況と課題

【担い手など】

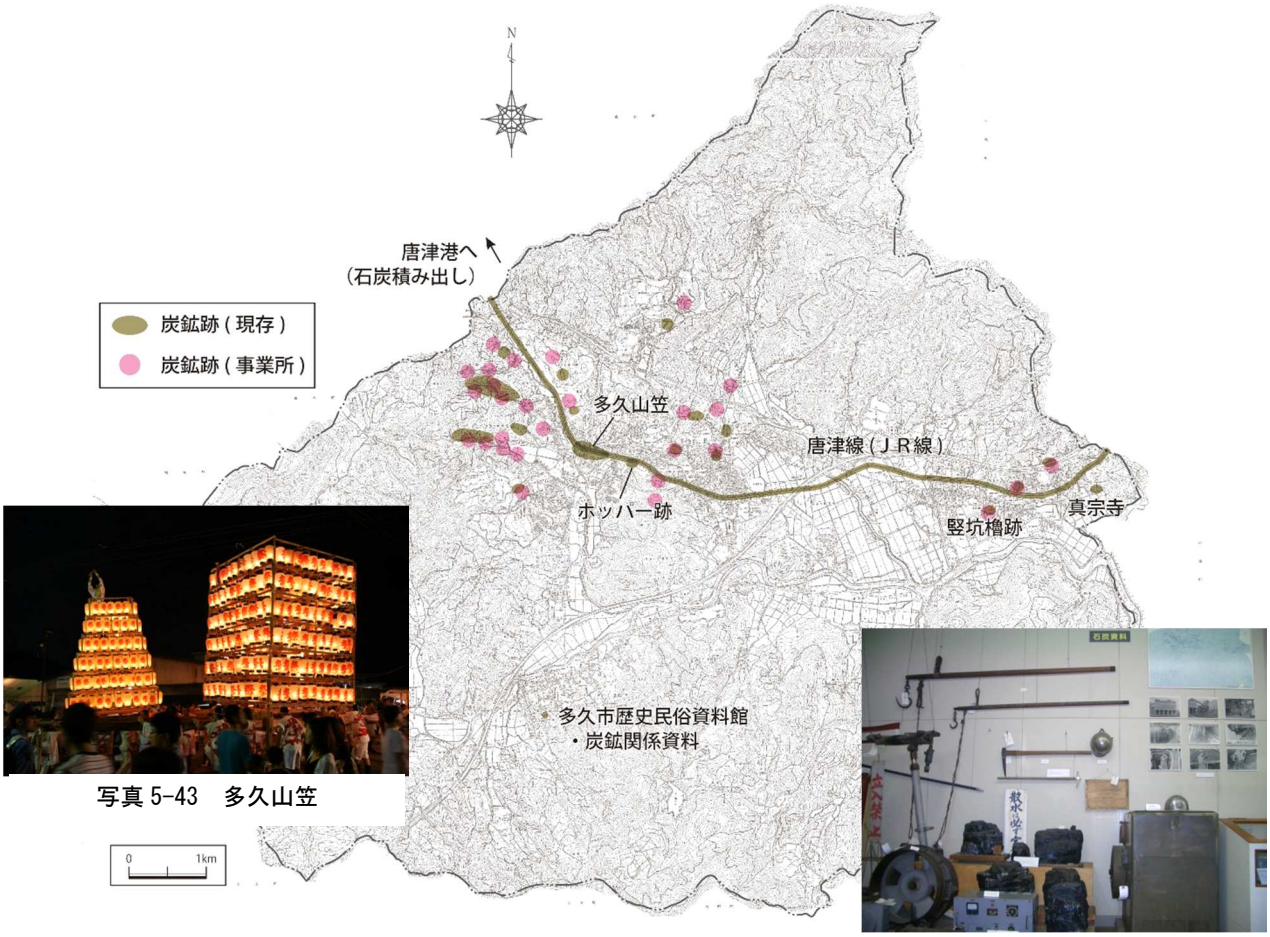
炭鉱関連では、その地の所有者が担い手であるが、積極的に保存・活用しているとは言い難い。

【公開と情報発信】

炭鉱関連の資料は、多久市歴史民俗資料館に保管され一部は公開されている。炭鉱関連遺構は保存が進んでおらず、現状でそのまま放置されているか、あるいは解体されているものも見受けられる。炭鉱の歴史を表した写真集「懐かしの多久の炭鉱写真集」（平成 27 年）や、「多久の炭鉱」（平成 29 年）が刊行されている。

【課題】

炭鉱跡地は、民間によって様々に利用されているものの、再開発の中で失われていく炭鉱の遺構をどう保存していくかが課題である。



資料 5-8　炭都・多久と近代関連文化財群の分布

写真 5-43　多久山笠

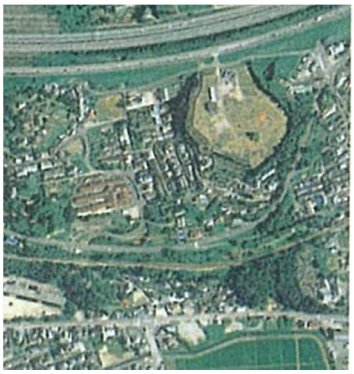
写真 5-44　炭鉱関係資料
（多久市歴史民俗資料館）

航空写真（昭和 40 年）

航空写真（昭和 23 年）

写真 5-45　ホッパー跡と JR 唐津線

航空写真（平成 18 年）
多久駅上空より東を望む



航空写真（平成 10 年）

写真 5-46　竪坑櫓跡

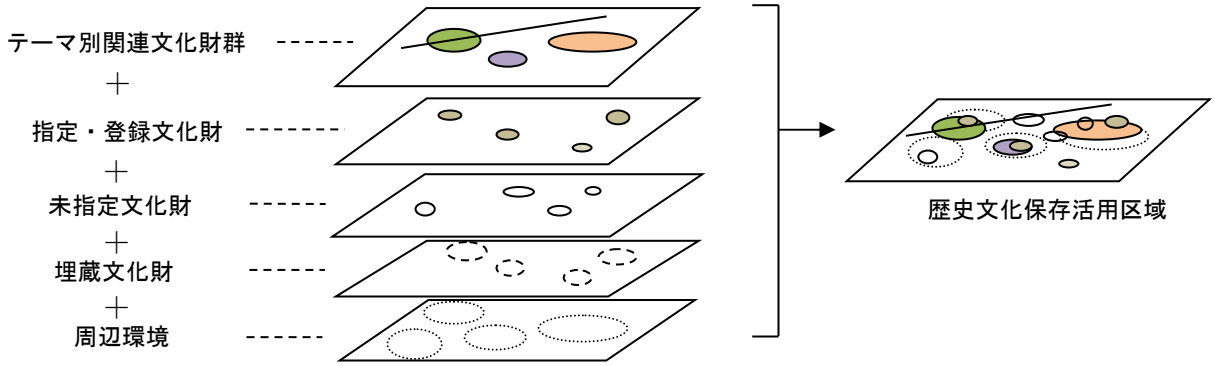
第６章　歴史文化保存活用区域の考え方

１．区域の基本的な考え方

（１）区域の必要性とその要件

中心的な文化財とその周辺環境を一体的に保存活用の対象として捉えるために、一定の区域を定めると、具体的な保存活用（管理）計画をたてやすく、その効果も分かりやすい。これらは、本構想において「歴史文化保存区域」として位置付けることができる。

多久市の歴史的特徴を表すテーマに沿った文化財が集積した地区、関連する文化財をつなぐ範囲などを基に、その核となる指定・登録文化財を中心として、その文化財の周辺地域にある関連した未指定文化財などと、人を含めた周辺環境をまとめて、多久の歴史文化の特徴を示す区域を設定するものである。



資料 6-1　区域抽出の考え方

（２）歴史文化保存活用区域とその位置

資料 6-2　テーマ別関連文化財群の主要構成要素と所在地

テーマ別関連文化財群	主要な構成要素	所在地
石器づくりの大遺跡群	茶園原遺跡　多久石器原産地遺跡群	多久町下鶴・東の原・中野
	三年山遺跡	多久町東の原
多久領主の文化遺産	梶峰城跡　御屋形跡　多久(若宮)八幡神社 多久神社　等覚寺　専称寺　武家屋敷　西の原大明神 肥前陶器窯跡（唐人古場窯跡）	多久町東の原 多久町西の原
	前多久氏館跡　高野神社　延寿寺	南多久町西ノ谷・中小路・庄
	妙覚寺	南多久町桐野
	唐津往還とその宿・駅 伊万里往還	国道 203 号と東多久町別府・北多久町多久原 県道 25 号沿線地域
儒学を中心とした里づくり	多久聖廟とその関係文化財　聖廟周辺区域 東原庠舎(宿泊研修施設)　東原庠舎跡	多久町東の原
	西渓公園　多久市立東原庠舎西渓校	多久町西の原、東の原
旧往還の沿道景観	商家(木下家住宅・別府民家群)	東多久町別府
	商家(多久原民家群)	北多久町多久原
	くど造り民家(川打家・森家、他)　幡船の里	西多久町宿・板屋下
炭都・多久	竪坑櫓跡	東多久町古賀
	ホッパー跡	北多久町砂原
	坑口跡	北多久町中山

関連文化財の主要な構成要素の所在地をもとに、近接している地区、同質の地区をまとめると、以下の 6 区域を選び出すことができる。

①鬼の鼻山山麓区域

②桐野区域

③西ノ谷区域

④唐津往還の沿道区域（東多久町古賀宿から北多久町番所まで）

⑤伊万里往還の沿道区域（西多久町宿・板屋下）

⑥多久聖廟・多久（若宮）八幡神社とその周辺区域

資料 6-3　各区域と関連文化財群の主要構成要素との関係

テーマ / 区域	石器づくりの大遺跡落群	多久領主の文化遺産	儒学を中心とした里づくり	旧往還の沿道景観	炭都・多久
鬼の鼻山山麓区域	茶園原遺跡 多久石器原産地遺跡群				
桐野区域		妙覚寺			
西ノ谷区域		前多久氏館跡 高野神社　延寿寺			
唐津往還の沿道区域		唐津往還とその宿・駅		商家（木下家住宅・別府民家群） 商家（多久原民家群）	竪坑櫓跡 ホッパー跡 坑口跡
伊万里往還の沿道区域		伊万里往還		くど造り民家（川打家・森家、他） 幡船の里	
多久聖廟・多久（若宮）八幡神社とその周辺区域	三年山遺跡	梶峰城跡　御屋形跡 多久（若宮）八幡神社 武家屋敷　多久神社 等覚寺　専称寺 西の原大明神 肥前陶器窯跡（唐人古場窯跡） 多久市郷土資料館（立葵蒔絵螺鈿箏・多久家資料及び後藤家文書）	多久聖廟及び関係文化財 聖廟周辺　西渓公園 東原庠舎（宿泊研修施設） 多久市立東原庠舎西渓校 多久市郷土資料館（石製先家君自安先生墓誌）		

①鬼の鼻山山麓区域

旧石器～縄文時代にかけての石器づくりの大遺跡群が、多久市南部に位置する鬼の鼻山の斜面に分布している。国内でも最大級の規模を誇る遺跡で多久市の原始を代表するものである。

②桐野区域

平安時代に行基によって勅願寺として創建され、多久市で最も古いとされる妙覚寺を中心とした山間の集落である。かつては多くの修行堂があり、近世の城下に東原庠舎ができるまでは多久の教育の場であった。山門には仁王像もあり、歴史的な趣のある場所である。

③西ノ谷区域

前多久氏の館城があった場所で、前多久家石造供養塔など文化財も多い。盆地の中心にある坊山の丘陵部麓の農村集落である。

④唐津往還の沿道区域（東多久町古賀宿から北多久町番所まで）

近世の往還道沿いで、国登録の木下家住宅をはじめ、古い町屋の町並みが残っている。旧往還の

沿道景観であるが、領主多久氏の頃に駅や宿が置かれた歴史もある。旧往還南北には近現代に炭鉱でも栄えた場所であり、現在も竪坑櫓跡やホッパー跡も存在し、山笠などの行事も行われている。

⑤伊万里往還の沿道区域（西多久町宿・板屋下）

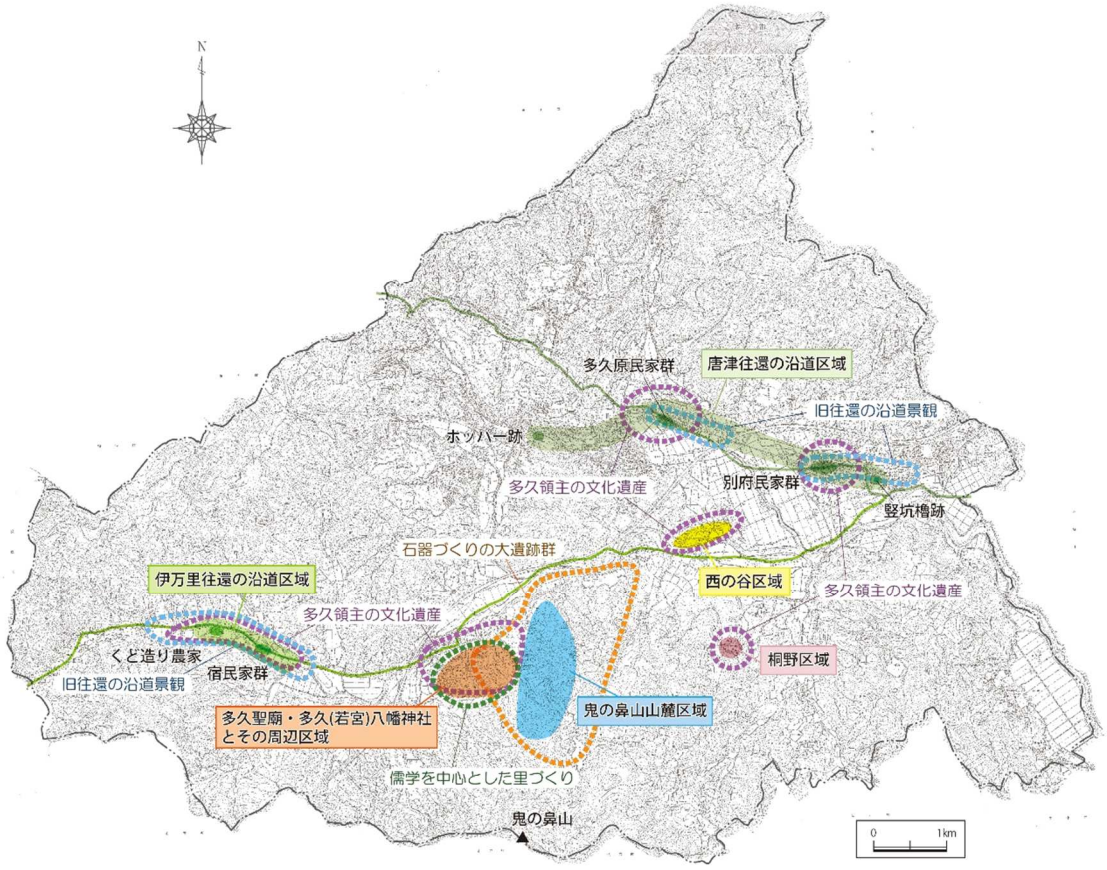
東多久で唐津往還から分岐し、伊万里へと向かう近世の往還で、西多久にはくど造り民家の川打家住宅や森家住宅があり、ふるさと情報館「幡船の里」もある。主要県道の線形は旧往還のそれに近いため古くからの農村景観が見られる。

⑥多久聖廟・多久（若宮）八幡神社とその周辺区域

旧多久領の中心的な場所で、政治をはじめ多久聖廟を中心とした文教の場所である。儒学を中心とした里づくりのテーマである、多久聖廟や孔子像などの文化財をはじめ、多久領主の文化遺産として、肥前陶器窯跡や梶峰城跡、武家屋敷や多くの神社などがある。

5 つのテーマに沿った主要構成要素は、比較的狭い範囲に集中するものと、広い範囲に存在するものがある。それぞれのテーマを基に区域を設定するが、区域によっては複数のテーマの構成要素が存在している。なお、これらの区域には、関連文化財群の他にも、指定・登録文化財や未指定文化財も存在しており、周辺環境と共にそれらを一体的なとして歴史文化の保存活用の対象として取り扱うことができる。

それぞれのテーマに沿った整備やまちづくり、担い手同士の交流は区域を超えて行われることが求められ、複数のテーマが重複する相互の区域内におけるテーマ同士の連携や調整など、担い手同士の交流が広がることが予想される。人々の交流はしだいに区域の枠を超え、全市的に広がることも期待され、新たな文化財の掘り起しや、地域のまちづくりにつながることも期待される。



資料 6-4　歴史文化保存活用区域の位置

（３）各区域の概要

資料 6-5　歴史文化保存活用区域のキーワード・時代・広がり

区域名	区域を表すキーワード	区域形成の主な時代	区域の広がりの特徴
鬼の鼻山山麓区域	大型尖頭器遺跡群	旧石器時代　縄文時代	面的に広がっている
桐野区域	多久の仏教普及・再興の地	平安時代　安土桃山時代	集落を中心としている
西ノ谷区域	多久氏下向の地	鎌倉時代初期	集落を中心としている
唐津往還の沿道区域	多久の交通路・沿道景観 炭都・多久の遺構	（平安、安土桃山時代） 江戸時代　近代	集落を線状につないでいる
伊万里往還の沿道区域	多久の交通路・沿道景観	（平安時代～）江戸時代	集落を線状につないでいる
多久聖廟・多久（若宮）八幡神社とその周辺区域	旧多久領の治政・文教の中心地	（鎌倉時代～）江戸時代	面的に広がっている

多久市の歴史文化保存活用区域は、尖頭器遺跡群、仏教文化、多久氏、交通、治政・文教、炭鉱をキーワードとして捉えることができる。これらは、多久の歴史・文化を語る上で、欠かすことのできないものとなっている。

それらの形成された時代は、旧石器時代から近代までと長期にわたっているが、最も多久の文化が華やいだ近世がその中心となっている。

また、区域の広がりは、大型尖頭器の遺跡群は斜面一体の広範囲に広がり、多久聖廟・多久(若宮)八幡神社とその周辺については、御屋形や東原庠舎などを中心に城下を形成し、面的な広がりを持つ。

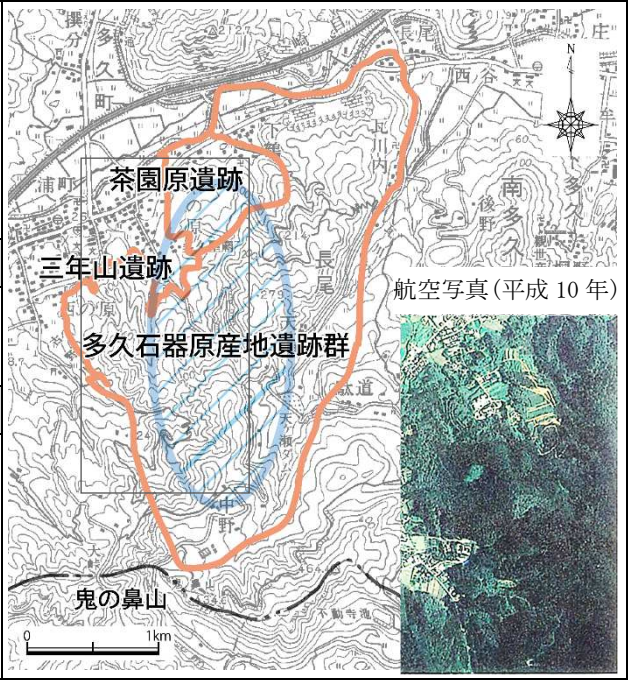
桐野や西ノ谷は妙覚寺を中心とした集落や、前多久氏館跡の集落など、集落単位の広がりもみられる。

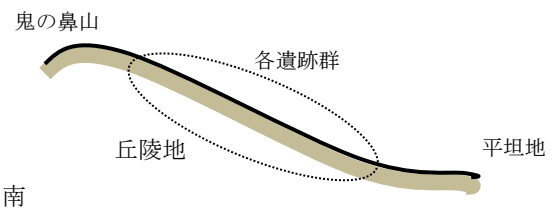
唐津往還や伊万里往還の沿道は宿場跡や民家などを線でつないでおり、その沿道に文化財が存在している。また、唐津往還の一部は炭鉱跡としての文化財も存在することから、一体の地区として捉えることができる。

２．歴史文化保存活用区域の特徴

（１）鬼の鼻山山麓区域

～大型尖頭器遺跡群（多久町下鶴・東の原・中野）

関連文化財群と構成要素	周辺環境	歴史文化分布図
石器づくりの大遺跡群 茶園原遺跡（散布地） 多久石器原産地遺跡群（散布地） 三年山遺跡（散布地）	北斜面 一部緩やかな場所もあるが大半は急傾斜地 林地	
その他の文化財	**周辺環境**	
鬼の鼻山伝説	山地	
地形断面イメージ		

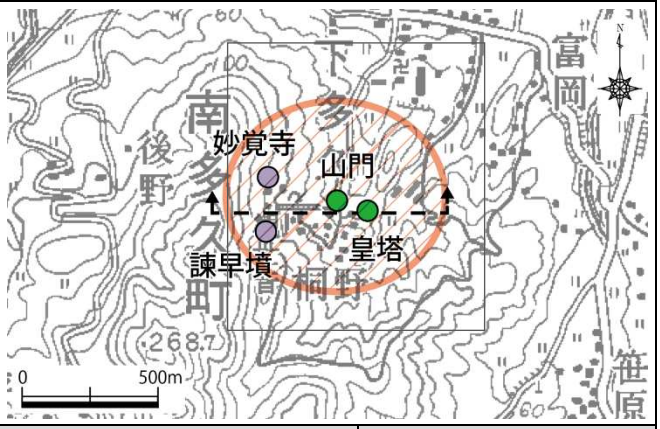


（２）桐野区域

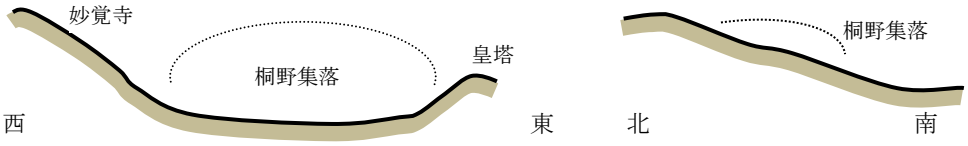
～多久の仏教普及・再興の地（南多久町桐野）

関連文化財群と構成要素	周辺環境
多久領主の文化遺産	
妙覚寺	集落の西の山腹
市】妙覚寺の刻像青面金剛石祠	境内の墓地内
市】諫早墳	丘陵地
妙覚寺山門と門内の木造仁王像	集落内道路
その他の文化財	周辺環境
県】両界曼荼羅図	妙覚寺内
市】皇塔	集落東の丘陵地
石造物群	集落入口

歴史文化分布図



地形断面イメージ



航空写真（平成 10 年）

（３）西ノ谷区域

～多久氏下向の地（南多久町西ノ谷・中小路・庄）

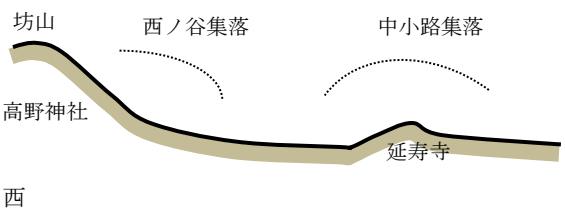
関連文化財群と構成要素	周辺環境
多久領主の文化遺産	丘陵地と平坦地
市】前多久家石造供養塔	延寿寺境内
市】高野神社石造肥前鳥居	高野神社
前多久氏館跡	中小路集落南
延寿寺	庄集落の南入口
高野神社	坊山を背に西ノ谷集落の南
伝説　多久太郎直宗と陣内城	
伝説　鎮西八郎為朝の矢の根石	
その他の文化財	周辺環境
高野神社春祭り・秋祭り	農村集落

歴史文化分布図

航空写真（平成 10 年）

前多久家石造供養塔

地形断面イメージ



（４）唐津往還の沿道区域

～多久の交通路・沿道景観、炭都の遺構（東多久町別府、北多久町多久原・砂原）

<table>
<tr><th colspan="2">関連文化財群と構成要素</th><th>周辺環境</th><th>その他の文化財</th><th>周辺環境</th></tr>
<tr><td>旧往還の沿道景観
国登録】木下家住宅
別府の民家群
多久原の商家群
国道 203 号</td><td>多久領主の文化遺産
唐津往還
別府の民家群（かつての駅）
多久原の商家群（かつての宿）</td><td>丘陵地沿い平坦地
往還沿いに民家が隣接</td><td rowspan="2">国】肥前佐賀の酒造用具
大工田 6 号古墳
市】大工田 6 号古墳出土遺物一括(多久市郷土資料館にて保管展示)</td><td rowspan="2">平坦地
酒造場内</td></tr>
<tr><td colspan="2">炭都・多久
竪坑櫓跡　ホッパー跡　坑口跡
多久山笠</td><td>道路に近接して立地
JR 唐津線と多久駅</td></tr>
<tr><td colspan="5">歴史文化分布図</td></tr>
<tr><td colspan="5">
</td></tr>
</table>

（５）伊万里往還の沿道区域

～多久の交通路・沿道景観（西多久町宿・板屋下）

<table>
<tr><th colspan="2">関連文化財群と構成要素</th><th>周辺環境</th><th>その他の文化財</th></tr>
<tr><td rowspan="2">旧往還の沿道景観
国】川打家住宅（くど造り民家）
市】森家住宅（くど造り民家）
宿の農家群
県道 25 号
ふるさと情報館「幡船の里」
宝満山公園</td><td>堂（野間口薬師堂）</td><td>丘陵地と丘陵地沿いの平坦地
農家が隣接集合している農地</td><td>無指定の石造物等</td></tr>
<tr><td>多久領主の文化遺産
伊万里往還</td><td>
</td><td> </td></tr>
<tr><td colspan="2">歴史文化分布図</td><td colspan="2">航空写真(平成 10 年)</td></tr>
<tr><td colspan="2">
</td><td colspan="2"> </td></tr>
</table>

（６）多久聖廟・多久（若宮）八幡神社とその周辺区域

～旧多久領の治政・文教の中心（多久町東の原・西の原）

関連文化財群と構成要素

儒学を中心とした里づくり

①国】多久聖廟
②国】聖龕（多久聖廟内）
③国登録】多久市西渓公園寒鶯亭
④県】多久聖廟釈菜（多久聖廟）
　市】石製先家君自安先生墓誌
⑤市】青銅造孔子像（多久聖廟内）
⑥多久聖廟周辺区域
⑦多久茂文像（東原庠舎跡）
⑧多久市物産館「朋来庵」（歴史公園内）
⑨聖廟展示館（歴史公園内）
⑩歴史散歩道（聖堂大路）
⑪多久市立東原庠舎西渓校
⑫東原庠舎（宿泊研修施設）
聖廟お火焚き
孔子祭り（釈菜）　孔子の里紅葉まつり
論語カルタ大会
〇多久市郷土資料館（墓誌等）
□多久市先覚者資料館（廟山文庫・草場佩川の資料等）
伝説　多久聖廟と龍

多久領主の文化遺産

⑬国】肥前陶器窯跡
⑭県】若宮八幡宮神殿
⑮市】若宮八幡宮の三本杉
　県】多久家資料及び後藤家文書（多久御構内小路絵図）
　県】立葵蒔絵螺鈿箏
⑯市】西の原大明神一字一石経一括資料
⑰梶峰城跡　⑱若宮（多久）八幡神社
⑲武家屋敷　⑳多久神社　㉑天徳天神
㉒西の原大明神
㉓専称寺　㉔等覚寺　㉕聖光寺
諸田賢順を偲ぶ会（専称寺）
〇多久市郷土資料館（筑紫琴・陶片・文書等）
伝説　林姫哀話　兵糧小路　金ケ江三兵衛

石器づくりの大遺跡群

①三年山遺跡
〇多久市郷土資料館（石器等）

炭都・多久

〇多久市郷土資料館（炭鉱資料展示）

周辺環境

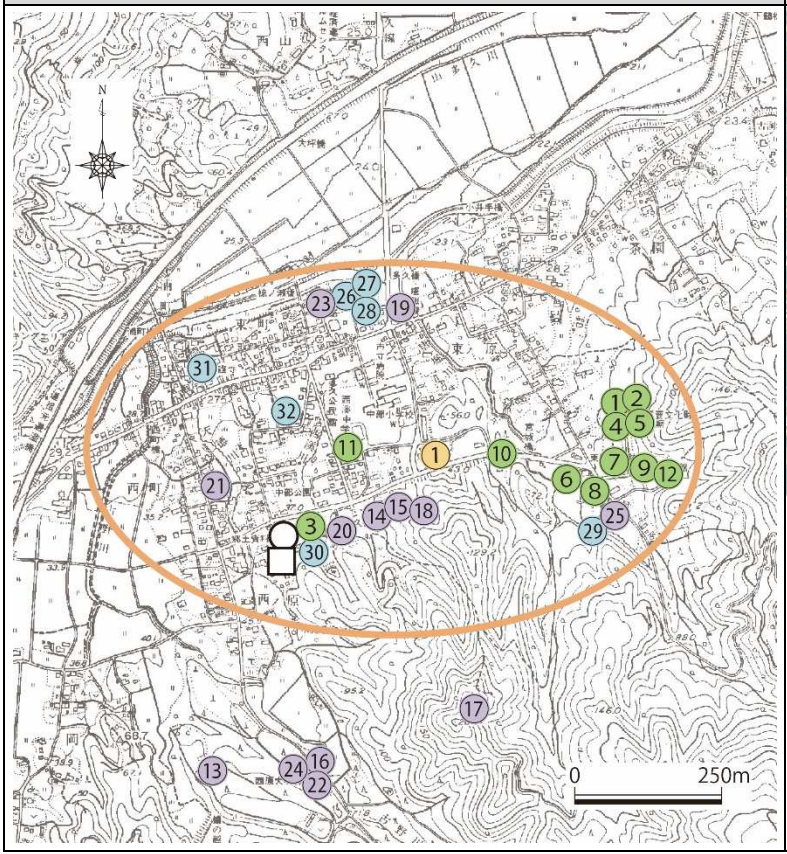
北緩斜面と平地
丘陵地（梶峰城跡）
林地または市街地
マキの生垣
現代にのこる近世絵図にしるす道筋・地割

その他の文化財

㉖市】少弐政資・資元の墓（専称寺）
㉗市】専称寺大つつじ
㉘市】木造阿弥陀如来坐像（専称寺）
　市】青銅製雲版
㉙聖光寺二千年ハス
㉚桜の花見（西渓公園）
㉛顕証寺
㉜万福寺

〇多久市郷土資料館（出土土器等）

歴史文化分布図



航空写真（平成 10 年）

御構内と丹邱の里案内

３．歴史文化保存活用区域の保存活用の方向性

（１）関連行政計画における区域の扱い

６つ区域は点的なものや面的に広がりをもつものなど様々であるが、多久市で既に策定された関連する計画では、既にまちづくりや観光振興など、整備を含めた計画があげられている。本歴史文化基本構想においては、これらの計画と整合性をとりながら、区域ごとのまちづくりや、担い手育成などを含めたハード整備やソフト施策を関連部署と連携して推進する。

資料 6-6　関連行政計画の区域の扱い

	鬼の鼻山山麓区　域	桐野区域	西ノ谷区　域	唐津往還の沿道区域（東多久町古から北多久町砂原まで）	伊万里往還の沿道区域（西多久町宿・板屋下）	多久聖廟・若宮八幡神とその周辺区域
多久市都市計画マスタープラン（平成 16 年）	－	－	**里山を活用した地域づくり** **運動広場の整備**	**市街地景観の保全** **回遊ルートの設定**	**グリーンツーリズム拠点の形成** 交流拠点の設置 くど造り民家の保全・活用 週末型・滞在市民農園の整備等	**聖廟を活かすまちづくり** **景観の保全** **都市計画区域の見直し** **西渓公園の魅力向上** **梶峰城遺構周辺整備**
多久市観光振興計画（平成 23 年）	－	－	－	－	－	**孔子の里の観光振興** 多久聖廟・東原庠舎 西渓公園 聖廟・西渓公園周辺
多久市環境基本計画（平成 26 年）	－	－	－	－	－	**景観整備事業の推進** 寒鶯亭の充実 多久聖廟周辺合同美化活動
多久市過疎地域自立促進計画（案）（平成 28 年）	－	－	－	－	－	**公益財団法人孔子の里事業への支援** **多久聖廟周辺の歴史的雰囲気の醸成**

多久聖廟・多久（若宮）八幡神社とその周辺区域は、４つの関連計画の全てに述べられている。多久市観光振興計画では、グリーンツーリズムの推進、お宝絵図・観光コースづくりの記述があり、そのなかに文化財を含んだ区域を配することは可能である。

（２）区域の保存活用の方向性

全体の方向性を以下に示す。

○文化財とその周辺を含む環境の質の向上

指定文化財は法的にも保護されるものであるが、未指定の文化財は所有者や地域で守られてきたものが大半で、中には忘れ去られ、管理が不十分で破損してしまったものや、消失してしまったものも多いと思われる。それらの文化財を護るために、文化財自体の維持管理、定期的修理・補修を図る。

また、文化財の周辺環境を整えるとともに、文化財周囲の景観の保全・保存に取り組む。

○保存活用のために必要な施設等の整備

文化財ごとの保存を図りながら、広く一般に公開することも検討する。そのための条件や環境整備、施設整備が必要なものも考えられる。また、文化財を中心とした様々な活動や交流の場の創出のためにも拠点的な施設の整備を図る。

○情報発信・案内等に係るサービスの充実

文化財の存在を広く発信し、区域間や地域間の交流や連携を図る。そのためにも、文化財に関する情報を発信するとともに、案内や移動に関するサービスの充実を図る。

○保存活用と地域のまちづくりの連動

地域に残る文化財は、地域の誇りとなるものであり、文化財を護ることから地域内における交流や地域間の交流につながるものである。文化財を核として里山管理などの地域活動や周辺環境整備などを進め、まちづくりと連動させる。

○人づくり

文化財は個人的に管理されるものや、地域や地区で管理されるものもある。それぞれの文化財を護り、後世に伝えて行くためには、管理を行う担い手の育成が必要である。地域活動や各種団体の連携を推進し、多くの人に関わってもらうなかで、次につなげる人材の育成を行う。

資料 6-7　各区域の保存活用の方向性

	環境の質の向上	施設等の整備	情報発信・案内・交通等のサービスの充実	まちづくりとの連動	人づくり
鬼の鼻山山麓区域	・各遺跡の保存 ・周辺環境の保全	・展望台、休憩施設等の設置 ・遊歩道の整備	・見学と案内サービスの充実を目指す	・山林の保全	・案内ボランティアの育成
桐野区域	・各文化財と周辺環境の保存	・休憩施設等の設置 ・遊歩道の整備	・見学公開と案内サービスの充実を目指す ・お宝絵図（仮称）への記載	・山林、里山の保全 ・集落景観の維持と空き家対策	・地域活動や地域間交流による人材育成 ・案内ボランティアの育成
西ノ谷区域	・各文化財と里山などの周辺環境の保存	・各文化財と里山をめぐる回遊ルートの設定と整備	・見学公開と案内サービスの充実を目指す ・お宝絵図への記載	・里山の維持管理活動による地域づくり ・集落景観の維持	・地域活動や地域間交流による人材育成 ・案内ボランティアの育成
唐津往還の沿道区域 （東多久町古賀から北多久町砂原まで）	・民家群、竪坑櫓、ホッパーの保存と維持・管理 ・周囲沿道景観の形成	・回遊ルートの設定 ・民家を観光拠点として整備 ・新たな視点場の設置	・見学公開と案内サービスの充実を目指す ・お宝絵図への記載	・空き家対策など ・沿道景観の形成	・地域活動や地域間交流による人材育成 ・案内ボランティアの育成
伊万里往還の沿道区域 （西多久町宿・板屋下）	・民家群の保存と維持・管理 ・周囲の沿道景観形成	・幡船の里、宝満山公園など整備済 ・市民による農地・農園の利用	・くど造り民家は公開 ・幡船の里は情報館として活用されている ・お宝絵図への記載	・グリーンツーリズムの拠点の形成を図る ・空き家対策など	・地域活動や地域間交流による人材育成 ・案内ボランティアの育成
多久聖廟・多久（若宮）八幡神社とその周辺区域	・聖廟を含む整備された周辺区域の維持・管理 ・多久(若宮)八幡神社とその周辺の景観形成 ・四季を通じて再訪したい魅力ある環境へ	・梶峰城跡見学の遊歩道等の整備 ・バリアフリーを目指す整備 ・新日本歩く道紀行100 選認定ウォーキングコースの整備	・さらなる公開の推進 ・郷土資料館、東原庠舎からのさらなる情報発信 ・案内板等の統一 ・まち歩きマップの作成	・市街地形成の適切な規制誘導 ・駐車場の適切な設置 ・多久市の中心的観光拠点としての魅力の向上を目指す	・地域活動や地域間交流による人材育成 ・案内ボランティアの育成

既に、多久市には一体的に整備され、公開されている文化財も多くあり、地域の歴史や文化の魅力を発信しているが、歴史文化保存活用区域における各区域の保存活用の方向性を検討することによって、テーマ別関連文化財群のより具体的な保存活用計画や、個別の保存活用計画に活かすことができ、基本方針で示した「文化財を受け継ぎ、活かした多久の魅力の向上」につなげることができる。

（３）各区域の保存活用の担い手

区域を含む行政区の区長・嘱託員、有志、行政担当者などが中心となって、保存活用のための検討会を区域ごとに組織する。そこで保存活用（管理）の方向性を踏まえた今後の計画への参画、区域住民への説明会の開催と意見の集約、文化財の継続調査や諸事業の協力依頼、各活動団体との連携、などを担って区域内の保存活用を推進していく。

区域ごとにその検討会の規模は異なると想定され、活動拠点を、区域が所在する各町の公民館に置くなどして（ただし、複数の町にまたがる場合は中央公民館）、区域住民がアクセスしやすいようにする。また、区域の文化財を受け継ぐ次世代の担い手の育成も求められる。

第７章　保存活用（管理）計画の考え方

１．基本的な考え方

本来、文化財の価値を保存し、その活用についてまとめられる保存活用（管理）計画とは、文化財を総合的に保存･活用するために必要とされる詳細な計画であり、本構想とは別に策定する必要がある。

本構想では、対象となる文化財（群）、保存活用（管理）計画を作成する主体、文化財（群）とその周辺環境に関する整備の方針、その他の保存活用（管理）計画に定めることが望ましい事項等についての考え方を示すものとする。

（１）基本的枠組み

具体的な計画策定を進めていくために、まず以下の項目の検討が必要となってくる。

・計画対象となる文化財の総合的な把握
・文化財の計画策定の主体
・文化財の保存活用（管理）の方針
・周辺環境の整備方針
・体制整備の方針
・具体的な事業計画

文化財を総合的に把握するために、それぞれの文化財の現状や課題、保存対策や活用の方向性を把握するための「文化財カルテ（仮称)」を作成する。また、活動団体（個人）実績の情報を入手・整理して、データベース化の推進を図る。データベースから各文化財の活用と活動団体のマッチングを行い、埋もれていた文化財も有効に活用できるようにする。

資料 7-1　保存活用（管理）計画のための文化財カルテの項目一覧

名　称	所在地と地図	分類と写真
指定・登録、未指定等	成立・設立時期	所有者・管理者
公開非公開、アクセス	周辺環境	関係団体・個人
情報発信状況（担い手・内容等）	調査の履歴（時期・内容等）	学校教育・生涯学習との関連
まちづくりとの関連	その他（対象独自の内容に関連して、課題等）	
関連行事、清掃・見回り等（時期・回数・内容等）	修理・補修の履歴（時期・内容等）	周辺環境整備の状況（時期・内容・担い手等）
参加人数	開催時期・頻度	開催場所
装置・道具・衣装等	費用	維持されている主な理由
テーマ別関連文化財群	歴史文化保存活用区域	カルテ作成者と情報提供者・作成時

：文化財共通　：主に有形文化財の場合　：主に無形・民俗文化財の場合　：関係している場合（テーマ名・区域名）

資料 7-2　保存活用（管理）計画のための活動団体（個人）の活動実績の項目一覧

名称	主要メンバーとその世代	主な対象文化財
設立時期	主な活動内容（何を、どのくらい、どのように）	会合頻度・場所
他団体との連携の有無	活動費（どのように、いくらくらい）	情報発信状況
存続している主な理由	その他（問題と課題、今後の計画）	作成者・作成時・連絡先

（２）保存活用（管理）計画を策定する主体

主に有形文化財の保存活用（管理）計画を策定する主体者と、その主体に応じた進め方として以下の表にまとめることができる。ここで民間とは個人または組織となり、その意向が重視されるが、公共からの積極的な文化財の保存活用の協力依頼が求められる。

無形文化財の場合は、下表のように考えることができる。

資料 7-3　有形文化財の所有・管理別の計画策定主体と進め方

所有者	管理者	計画作成主体	作成の進め方
公共	公共	公共	・公共内の優先順位 ・関係団体を取り込む
公共	民間	公共	・管理者と協議
民間	公共	民間か公共か	・主体の調整が必要
民間	民間	民間	・公共からの働きかけと依頼 ・メリットの提示と計画策定費用の検討

資料 7-4　無形文化財の主催者別の計画策定主体と進め方

主催者	計画作成主体	作成の進め方
公共	公共	・公共内の優先順位 ・関係団体を取り込む
民間	民間	・公共からの働きかけと依頼 ・メリットの提示と計画策定費用の検討

民間のメリットとしては、その所有する文化財の保存活用（管理）計画を策定した場合、公共からの管理・維持費等の負担の補助や、広報活動の支援による集客力増加等の協力も得やすいと考えられる。

また、文化財群として捉える場合は、個々の文化財の計画主体による相互調整が必要となる。

（３）文化財（群）とその周辺環境の整備方針

既に実施された整備情報整理と評価、関連行政計画における今後の周辺環境整備に関する情報収集などを行い、整備方針に関する前提条件を整理する。

整備方針では、目的、方法、主体と関係部局、時期、予算措置などを明確にして、今後の保存活用（管理）計画の基本的な条件を示す。

共通の整備方針として、文化財（群）の価値を周辺環境とともに高めていき、多久市のまちづくりと魅力の向上につなげるものとする。

多種多彩に存在している多久市の文化財（群）のうち、特に、本構想において検討してきたテーマ別関連文化財群、歴史保存活用区域での整備方針と保存活用（管理）計画を優先して進め、新たな施設を整備や既存施設に手を加えることによって、魅力ある地域の空間へと変化させることが可能となる。これらは実感できる効果が期待され、先導的なモデルとなる。

他にも、公開可能、学校教育・生涯学習、観光振興に寄与しやすい文化財（群）を選定して、整備方針を優先的に進めることで、まちづくりのための多くの拠点を設けることができる。

２．関連文化財群と歴史保存活用区域の保存活用（管理）計画に関わる事項

前項（１）で述べた基本的な考えの他に、本構想の関連文化財群及び歴史保存活用区域に関して、特に検討すべき事項を以下に掲げる。

（１）関連文化財群の保存活用（管理）計画に関わる事項

・計画策定の主体の設定

文化財別に計画作成の主体を検討することにより、主体が関連文化財群のなかで策定が可能な文化財を選定して計画をすすめていく。まず、行政が中心となって、先行して計画を策定し、他の個人や団体のモデルとなることが望ましい。

・テーマを活かす保存活用（管理）計画

保存活用（管理）計画にあたっては、関連文化財群のテーマを活かすことを基本とする。多久市の独自の歴史、文化の特徴を表すテーマは、保存活用（管理）計画の重要な柱となる。

・調査の推進、普及啓発、まちづくりへの関与

保存活用（管理）計画において、関連文化財群とその周辺環境の今後の調査の推進、それらの普及啓発、まちづくりへの関与を含めることが求められる。

（２）歴史保存活用区域の保存活用（管理）計画に関わる事項

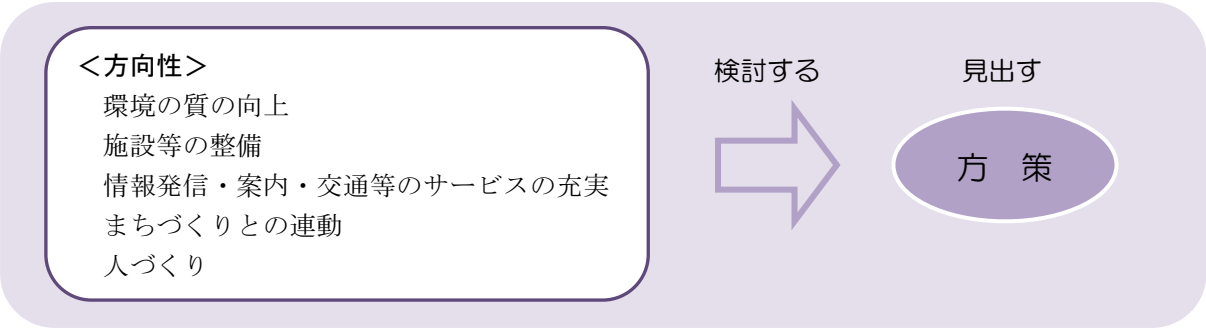
・区域の特徴をまとめる

本構想の記述をもとに、さらに以下を明確にして、計画の前提条件を整理する。

区域の設定
歴史文化の特徴
社会状況の概要

・保存活用の５つの方向性と方策を検討する

区域の特徴と本構想で示した保存活用の方向性をもとに方策を検討する。



・区域の保護措置を検討する

保護措置のための認定基準、運用方法等を検討する場を設ける。

・区域の住民と協議する

区域が含まれている地域で住民説明会を行い、文化財（群）の保護、保存活用のあり方とその計画について協議を行い、情報の共有化、地域の協力を得て計画の実現を推進していく。

・区域での保存活用（管理）計画の情報発信をしていく

第８章　文化財の保存・活用を推進するための体制整備の方針

文化財の保存・活用を推進するためには、行政を含む関係団体や個人がこれまでの活動を基礎としつつ、さらに地域において、相互の連携・協力体制を構築していくことが重要となってくる。そのためには、各活動を推進するための中心となる組織の確立が求められる。本章では、各関係団体の活動、中心となる組織、行政の役割をまとめ、体制整備に向けての連携の考え方を提示する。

１．関係団体の活動

現在、多久市内には下表に示すように、地域の文化財の保存・活用に関係する団体がある。その他にも多久市内にはまちづくりや地域活動を行っている多様な団体があり、これらの団体との連携や団体相互の活動の連携を行い、保存・活用を推進することを図る。

資料 8-1　文化財に関する主な団体の活動　　HP:ホームページ

名　　称	主な活動	情報の発信
多久市郷土資料館	文化財を含む資料の収蔵・管理・公開	多久市 HP
多久市民俗資料館	民俗資料の収蔵・管理・公開	多久市 HP
多久市先覚者資料館	先覚者資料の収蔵・管理・公開	多久市 HP
多久市ふるさと情報館「幡船の里」	西多久町の紹介 西多久で採れた特産品・土産品の販売	多久市 HP パンフレット
公益財団法人 孔子の里	多久聖廟の維持・管理 研修宿泊施設東原庠舎の運営管理 たく市民大学ゆい工房の主催	独自 HP 講座案内 パンフレット
一般社団法人 たく 21	多久市まちづくり交流センター「あいぱれっと」の管理運営 まちづくりに関する調査研究　他	多久市 HP
多久市立義務教育学校東原庠舎 東部校・中央校・西部校	孔子の教えを受け継ぐ学校行事や学習内容	多久市 HP
多久市郷土研究会	歴史・文化・先人顕彰	多久市 HP
西多久を考える会	美化活動まちづくり宝満山公園管理 七郎神社祇園祭　鬼火焚き　七草粥会など	多久市 HP
多久市文化連盟	歴史・文化・先人顕彰	多久市 HP
孔子の里観光ボランティアガイド会	観光ボランティア	多久市 HP
多久美化クラブ	聖廟の美化活動　さらに聖堂川沿いの植樹・鯉のぼり・イルミネーションなど	多久市 HP
関係寺院（妙覚寺・通玄院・妙海寺・延寿寺・専称寺・円通寺・正善寺・正蔵寺）	指定文化財の所有・管理	特に無し
関係神社（両子神社・高野神社・多久（若宮）八幡神社・西の原大明神）	指定文化財の所有・管理	特に無し
多久古文書の村	古文書の研究・解読	書籍出版
多久市観光協会	観光情報発信・イベントの開催	協会 HP

その他多久市ホームページに掲載されている各種団体のほとんどが多久市観光振興協議会の加入団体であり、内容は、グリーンツーリズム、美化活動、まちづくり、食に関する活動、絵本の読み聞かせ等他にも様々な活動を行っている。

これらは、いずれも多久市観光振興協議会の加入団体である（一般社団法人たく 21、関係社寺を除く）。

公的な組織では、多久市郷土資料館、多久市ふるさと情報館「幡船の里」、多久市立義務教育学校東原庠舎など教育委員会や商工観光課が所管するものがある。他に行政区レベルで嘱託員会があり、各区の活動のとりまとめ、行政との連絡の役割を担っている。

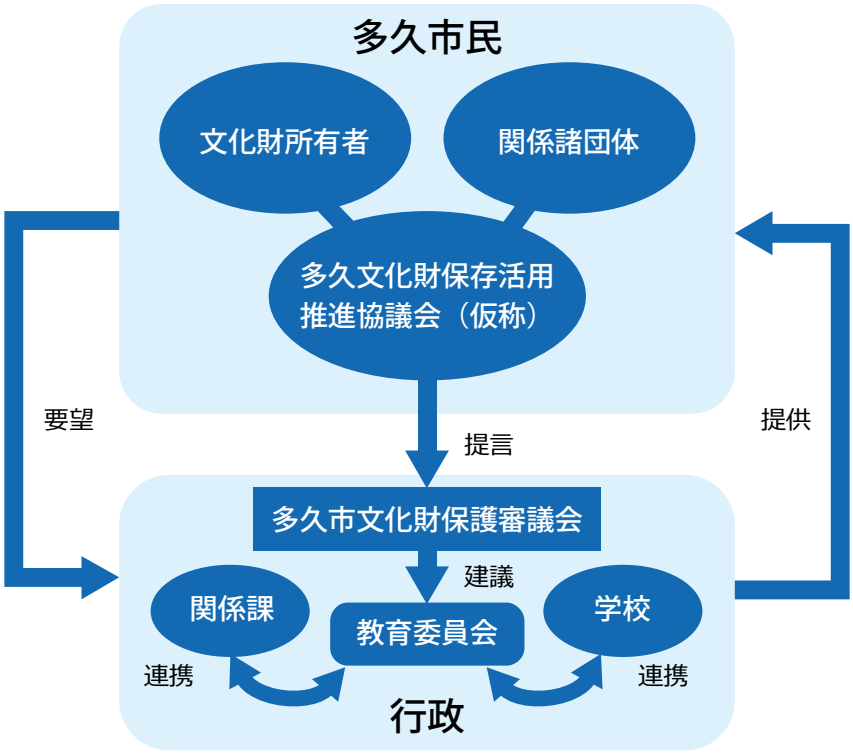
なお、多久市の行政部局には、教育委員会教育振興課の他に、総合政策課、情報課、商工観光課、都市計画課、学校教育課などの各課が関係している。

２．中心組織の必要性と役割

文化財の保存・活用の効率的な推進に当たっては、関連活動団体との調整を行いとりまとめる組織が求められる。その役割は、諸団体の活動を把握、人材育成の支援、市民からの窓口、行政との連携、新しい団体づくりの支援などが考えられ、そのための情報の収集と効果的な発信を行うとともに、諸団体の連携を推進していくことが望まれる。

特に、「多久文化財保存活用推進協議会（仮称）」において、テーマ別関連文化財群、歴史文化活用区域に存在している文化財（群）とその周辺環境の保存活用の活動が期待される。

本協議会には専門家・学識経験者を含め、多久市民のみならず、他地域のサポーターを募り、内外からの協力を得ると視野が広がると考えられる。



資料 8-2　多久文化財保存活用推進協議会（仮称）を中心とする連携イメージ

３．行政の役割

文化財の保存活用の体制整備に向けて、行政、特に文化財担当部局の役割は以下の通りである。

・多久市行政内の横断的な体制づくり

各文化財の積極的な保存活用を推進するためには、担当する文化財担当部局の体制整備を行う必要がある。さらに関連する総合政策をはじめ、都市計画と連携した景観保全や、建設や農業振興部局などと連携し、公共事業などから文化財とその周辺の環境を守る。また、観光関連部局等との連携によって文化財を活用した観光や新日本歩く道紀行 100 選ウォーキングコースの整備、古民家の活用など地域振興を推進する行政内の横断的な体制づくりを行う。

・文化財の継続的な調査研究

指定文化財については、これまでの調査研究成果の蓄積を基に継続的に調査研究を進める。未指定文化財については、存在自体が市民に認識されていないものもあるため、調査研究を行い成果の情報を発信する。学術調査については、大学などの研究機関や専門家のほか、市民グループなどとも連携を図り多方面からの調査も検討する。

・文化財を活かす学校教育プログラムの検討

学校教育では「多久学」を導入し、次代を担う子どもたちは多久の歴史等を学んでいる。さらに郷土愛を育む教材として様々な文化財を活用するため、学校教育部局と連携する。

・文化財を活かす生涯学習プログラムの検討

「ふるさと多久学」を基に市民活動や各種講座が行われており、文化財や歴史の理解をさらに深めるなど市民の学習機会の充実を図るため生涯学習部局と連携する。

・他市町の文化財保存活用に関わる情報収集

街道や往還、炭鉱関連など周辺市町とつながる文化財は多久市内に限らず、周辺市町等との情報交換を行い、広域的な文化財の保存活用を図る。

・関係機関との連携

文化財の適切な保存管理や活用整備など、施策や技術的な情報を把握するため、文化庁や佐賀県などとも連携する。

・「多久文化財保存活用推進協議会（仮称）」の発足

文化財の保存や活用を効率的に行うため、市民主導による組織的な体制として、文化財所有者や伝承者、学識者、地域住民、企業等民間団体、専門家などで構成する「多久文化財保存活用推進協議会（仮称）」の立ち上げを推進する。

・文化財とその保存活用情報の情報収集と発信、データベース化

これまでの文化財調査や本基本構想の基礎調査で得られた情報、各文化財の担い手の情報などもベータベース化する。それらを情報発信することで共有し、今後の保存管理方法の検討をはじめ、観光資源や地域活性化などに利用する。

・『多久市歴史文化保存活用計画（地域計画）』の策定

本基本構想を受けて実際に文化財を保存管理し、整備活用に向けた行動の指針となる計画を策定する。

・保存活用のための予算・制度の検討

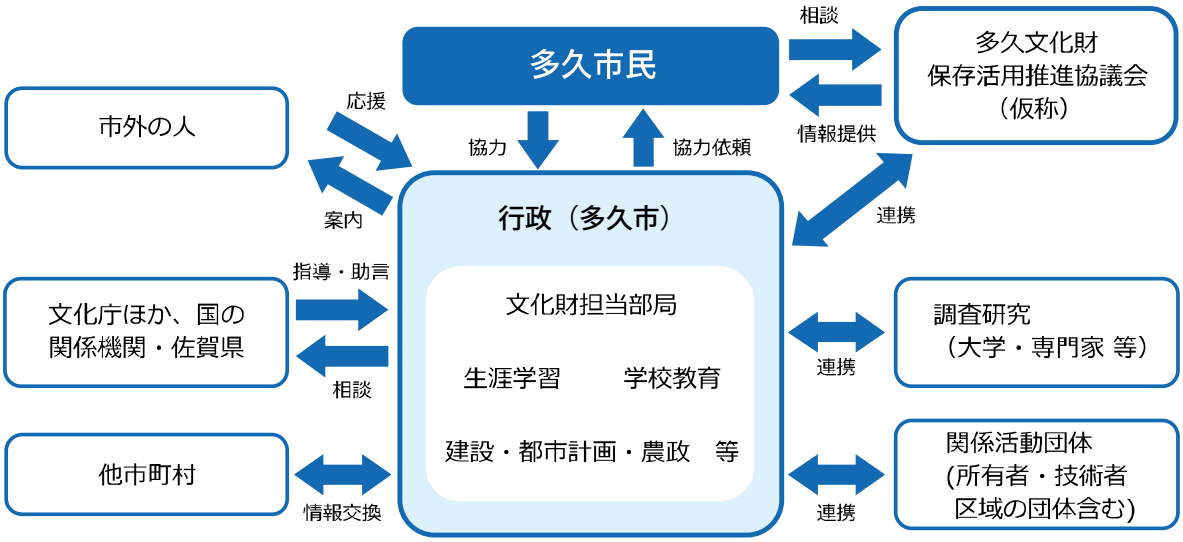
文化財の保存活用を継続的に推進するため、今後の事業を実施継続するための予算措置や必要な制度等を検討する。

４．学校の役割

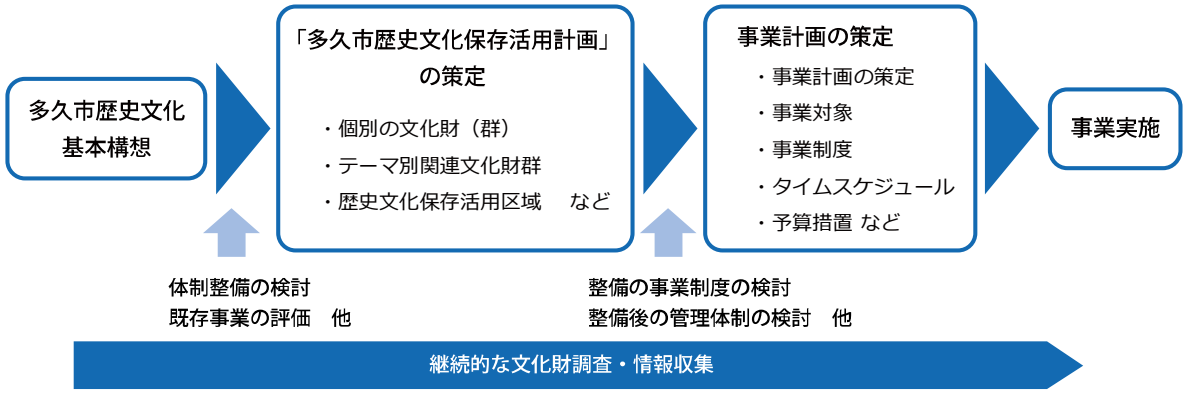
多久の歴史文化を学習し、その後継者となる人材を育成する。

５．市民の役割

居住地・周辺地域の歴史文化の見守り、またそれを活用した地域づくりの実践。



資料 8-3　行政（多久市）を中心とした連携イメージ



資料 8-4　行政の今後の主な取り組み

関　係　資　料

［第２章　２．歴史環境（補足）］　資料1～9

［第２章　３．歴史文化の現況（補足）］　資料10～24

関係資料

資料１　多久市遺跡表　佐賀県遺跡地図より

旧石器時代

番号	名称	分類
2	平古場遺跡	（散布地）
3	綿打遺跡	（散布地）
16	八天山遺跡	（散布地）
22	経ノ峯遺跡	（散布地）
23	湯端遺跡	（散布地）
34	長尾遺跡群	（散布地）
35	長尾開拓遺跡	（散布地）
44	犬殺遺跡	（散布地）
46	山王遺跡	（散布地）
48	岡遺跡	（散布地）
49	梅野遺跡	（散布地）
51	三年山遺跡	（散布地）
54	梶峰城跡	（散布地）
55	茶園原遺跡	（散布地）
56	多久石器原産地遺跡群	（散布地）
58	後野遺跡	（散布地）
60	山頭遺跡	（散布地）
72	宝蔵寺溜池遺跡	（散布地）
126	飛石遺跡	（散布地）
132	平古場南遺跡	（散布地）
137	櫨ノ越池南方遺跡	（散布地）
138	西原大明神南東遺跡	（散布地）
139	鬼ノ鼻山遺跡	（散布地）
142	三宝山古墳群	（散布地）
145	御園遺跡	（散布地）

縄文・弥生時代

番号	名称	分類
3	綿打遺跡	（散布地）
4	板屋上遺跡	（散布地）
5	板屋遺跡	（散布地）
6	板屋桜田遺跡	（散布地）
8	吉野尾遺跡	（散布地）
10	深砂遺跡	（散布地）
16	八天山遺跡	（散布地）
17	四下大丹遺跡	（集落跡）
22	経ノ峯遺跡	（散布地）
27	牟田遺跡	（散布地）
28	撰分遺跡	（散布地）
30	八溝遺跡	（散布地）
34	長尾遺跡群	（散布地）
37	井手山遺跡	（散布地）
38	長尾倉富遺跡	（散布地）
40	十井手遺跡	（散布地）
41	野間口遺跡	（散布地）
43	涼木遺跡	（散布地）
44	犬殺遺跡	（散布地）
45	桐岡遺跡	（散布地）
46	山王遺跡	（散布地）
47	西の原西遺跡	（散布地）
48	岡遺跡	（散布地）
49	梅野遺跡	（散布地）
50	本多久郭内遺跡	（散布地）
54	梶峰城遺跡	（散布地）
55	茶園原遺跡	（散布地）
56	多久石器原産地遺跡群	（散布地）
60	山頭遺跡	（散布地）
62	建長寺遺跡	（散布地）
65	今出川A遺跡	（散布地）
66	今出川B遺跡	（散布地）
67	原田遺跡	（集落跡、墳墓）
71	鴻ノ巣遺跡	（散布地）
74	宝蔵寺遺跡	（散布地）
76	出口A遺跡	（墳墓）
80	射場谷遺跡	（散布地）
82	池平遺跡	（散布地）
88	赤子谷遺跡	（散布地）
89	築地遺跡	（散布地）
91	中小路遺跡	（散布地）
92	多久氏館跡	（散布地）
97	大工田遺跡	（散布地）
98	上田町遺跡群	（散布地）
99	別府遺跡	（集落跡）
100	桜木遺跡	（集落跡）
102	羽佐間遺跡	（墳墓、集落跡）
103	柳原遺跡	（散布地）
107	牟田辺遺跡	（墳墓、集落跡）
112	笹原遺跡	（散布地）
115	納所天山遺跡	（散布地）
118	納所天山石棺出土地	（墳墓、集落跡）
122	平合遺跡	（散布地）
124	大田柄遺跡	（散布地）
126	飛石遺跡	（散布地）
127	北坊遺跡	（散布地）
130	合六遺跡	（散布地）
133	名草山遺跡	（散布地）
134	馬神峠遺跡	（散布地）
135	西野遺跡	（散布地）
140	大野遺跡	（散布地）
141	山ノ神遺跡	（散布地）
143	裏納所遺跡	（散布地）

古墳・飛鳥・奈良・平安時代

番号	名称	分類
20	広田遺跡	（集落跡）
32	宮ノ浦遺跡	（集落跡）
33	山崎経塚跡	（経塚）
36	山崎古墳群	（古墳）
38	長尾倉富遺跡	（散布地）
59	瓦川内古墳群	（古墳）
61	相ノ浦左近城跡	（散布地）
63	野田姫塚古墳	（古墳）
64	大工田古墳	（古墳）
65	今出川A遺跡	（集落跡）
66	今出川B遺跡	（集落跡）
69	相ノ浦須恵器窯跡	（窯跡）
70	相ノ浦古墳群	（古墳）
71	鴻ノ巣遺跡	（散布地）
72	宝蔵寺溜池遺跡	（散布地）
73	宝蔵寺古墳群	（古墳）
74	宝蔵寺遺跡	（散布地）
75	西出口遺跡	（集落跡）
76	出口A遺跡	（集落跡）
78	仁位所遺跡	（散布地）
79	向野古墳群	（古墳）
80	射場谷遺跡	（古墳）
81	山の上古墳群	（古墳）
83	古賀山古墳群	（古墳）
84	古賀山1号墳	（古墳）
85	小城炭鉱跡古墳	（古墳）
86	皆木古墳群	（古墳）
87	渋木古墳群	（古墳）
91	中小路遺跡	（散布地）
92	多久氏館跡	（散布地）
93	中小路古墳	（古墳）
94	増富遺跡	（集落跡）
95	摺ヶ本遺跡	（集落跡）
97	大工田遺跡	（散布地）
99	別府遺跡	（集落跡）
106	牟田辺古墳群	（古墳）
107	牟田辺遺跡	（古墳）
108	桐野古墳群	（古墳）
110	高岡古墳	（古墳）
111	牟田辺須恵器跡	（窯跡）
113	羽佐間古墳群	（古墳）
115	納所天山遺跡	（散布地）
116	納所天山経塚跡	（経塚）
117	納所天山古墳	（古墳）
120	穴大師古墳	（古墳）
121	柳瀬古墳群	（古墳）
123	松瀬古墳群	（古墳）
126	飛石遺跡	（散布地）
127	北坊遺跡	（古墳）
128	北坊古墳	（古墳）
129	北平古墳群	（古墳）
130	合六遺跡	（散布地）

鎌倉・室町・安土桃山時代

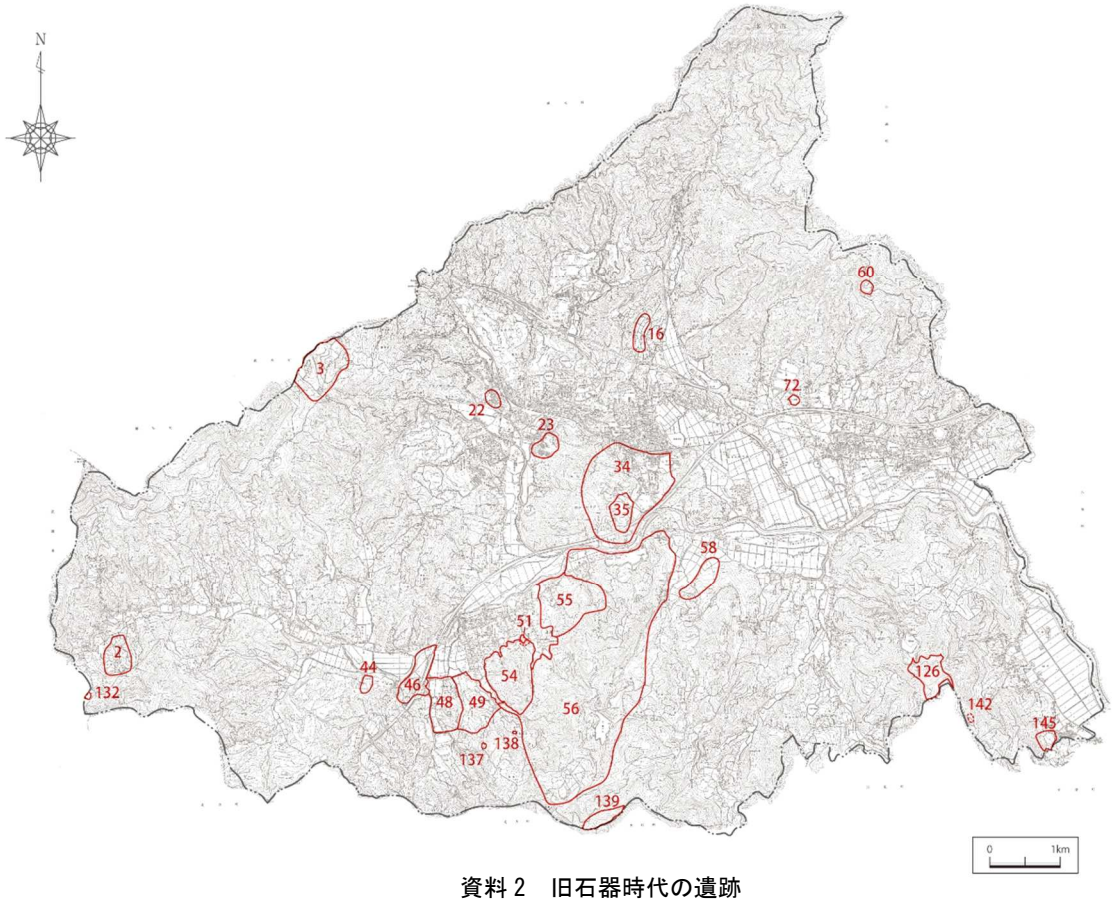
番号	名称	分類
4	板屋上遺跡	（集落跡）
7	山下柵跡	（城館跡）
10	深砂遺跡	（集落跡）
11	小侍遺跡	（散布地）
13	土橋城跡	（城館跡）
14	山犬原城跡	（城館跡）
17	四下大丹遺跡	（集落跡）
18	申川内城跡	（城館跡）
20	広田遺跡	（集落跡）
21	高木川内遺跡	（集落跡）
26	板屋反田城塞跡	（城館跡）
29	撰分B遺跡	（集落跡）
32	宮ノ浦遺跡	（集落跡）
34	長尾遺跡群	（散布地）
39	倉富城跡	（城館跡）
50	本多久郭内遺跡	（城館跡、集落跡）
54	梶峰城跡	（城館跡）
55	茶園原遺跡	（散布地）
61	相ノ浦左近城跡	（城館跡）
68	相ノ浦右近城跡	（城館跡）
74	宝蔵寺遺跡	（散布地）
75	西出口遺跡	（集落跡）
77	名越田遺跡	（集落跡）
90	西ノ谷遺跡	（集落跡）
91	中小路遺跡	（集落跡、城館跡）
92	多久氏館跡	（城館跡）
94	増富遺跡	（集落跡）
95	摺ヶ本遺跡	（集落跡）
96	下多久太刀遺跡	（城館跡）
101	羽佐間四反田遺跡	（集落跡）
102	羽佐間遺跡	（集落跡）
105	古賀陣ノ浦遺跡	（城館跡）
107	牟田辺遺跡	（集落跡）
109	桐野中世石塔群	（散布地）
114	羽佐間城跡	（城館跡）
119	納所天山陣所跡	（散布地、城館跡）
125	両子山陣所跡	（城館跡）
130	合六遺跡	（城館跡）
131	秋田氏館跡	（散布地、城館跡）
147	相ノ浦遺跡	（集落跡）

江戸時代

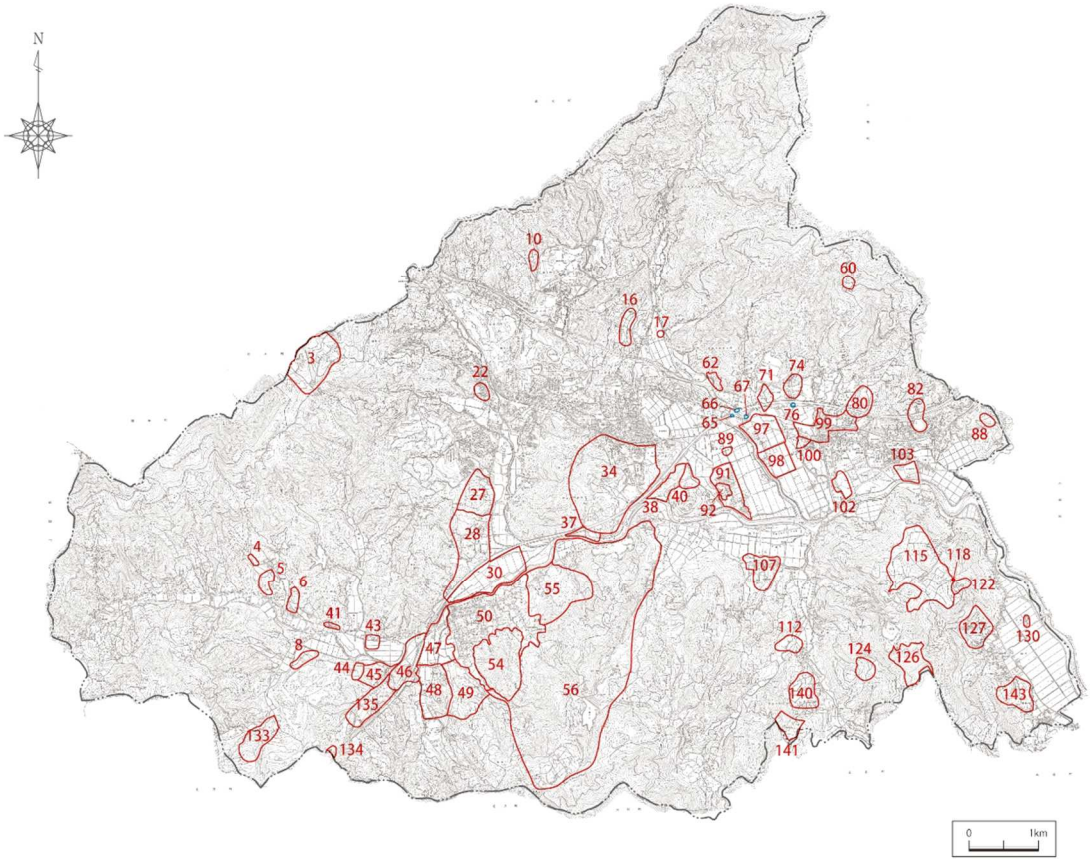
番号	名称	分類
1	高麗谷古窯跡	（窯跡）
9	小侍番所跡	（役所跡）
12	前田窯跡	（窯跡）
15	唐津往還跡	（街道跡）
19	小伝塚遺跡	（墳墓）
21	高木川内遺跡	（集落跡）
24	大山新窯跡	（窯跡）
25	大山古窯跡	（窯跡）
31	唐人古場窯跡	（窯跡）
42	保四郎窯跡	（窯跡）
50	本多久郭内遺跡	（城館跡、集落跡）
52	東原庠舎跡	（学校跡）
53	多久聖廟	（社寺跡）
54	梶峰城跡	（城館跡）
56	多久石器原産地遺跡群	（散布地）
57	伊万里往還跡	（街道跡）
77	名越田遺跡	（集落跡）
104	杵島水道	（水利施設）
136	西原大明神経塚	（経塚）
146	横土井遺跡	（堤防跡）
147	相ノ浦遺跡	（集落跡）

近代

番号	名称	分類
12	前田窯跡	（窯跡）

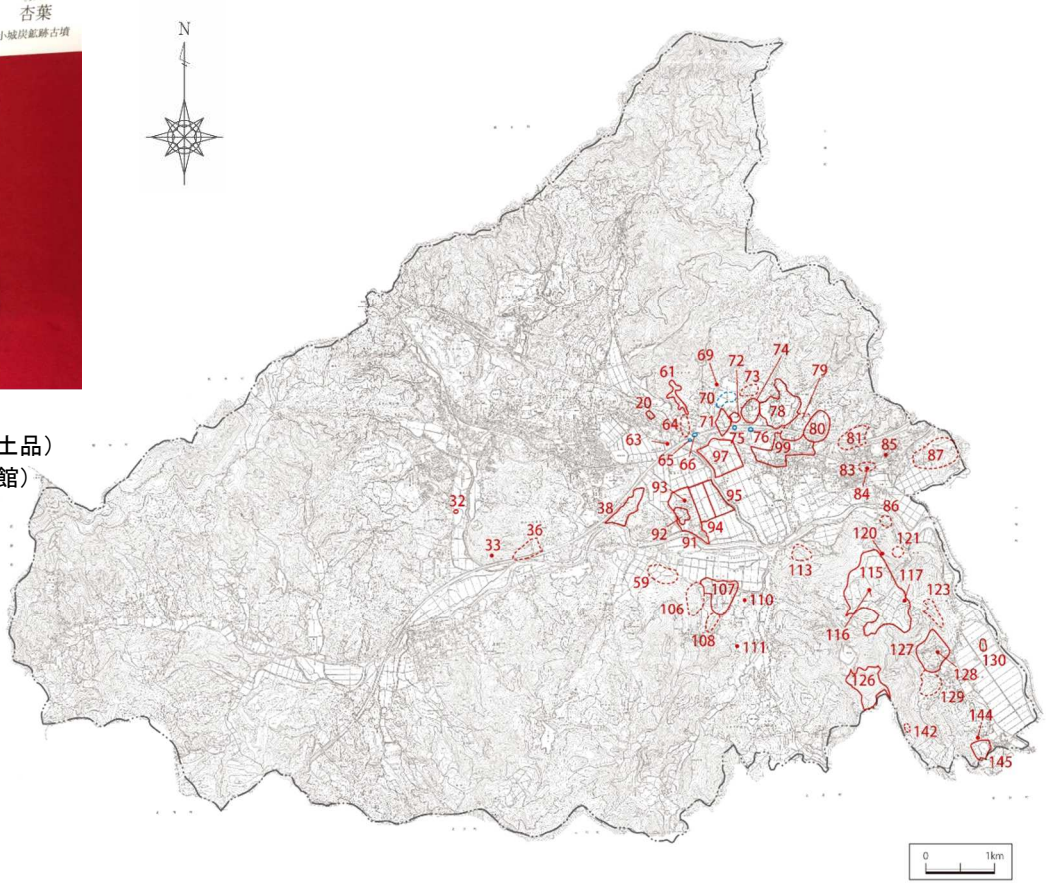


資料２　旧石器時代の遺跡



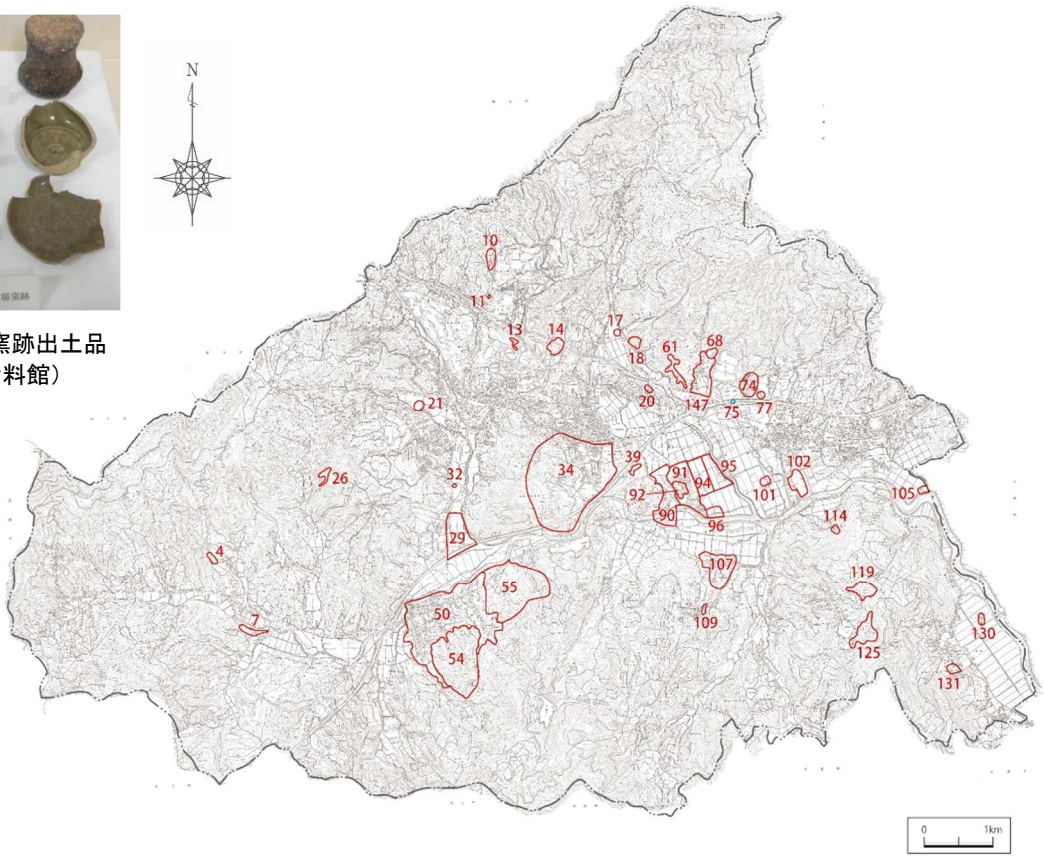
資料３　縄文・弥生時代遺跡

写真１　杏葉
（小城炭坑跡古墳出土品）
（多久市郷土資料館）

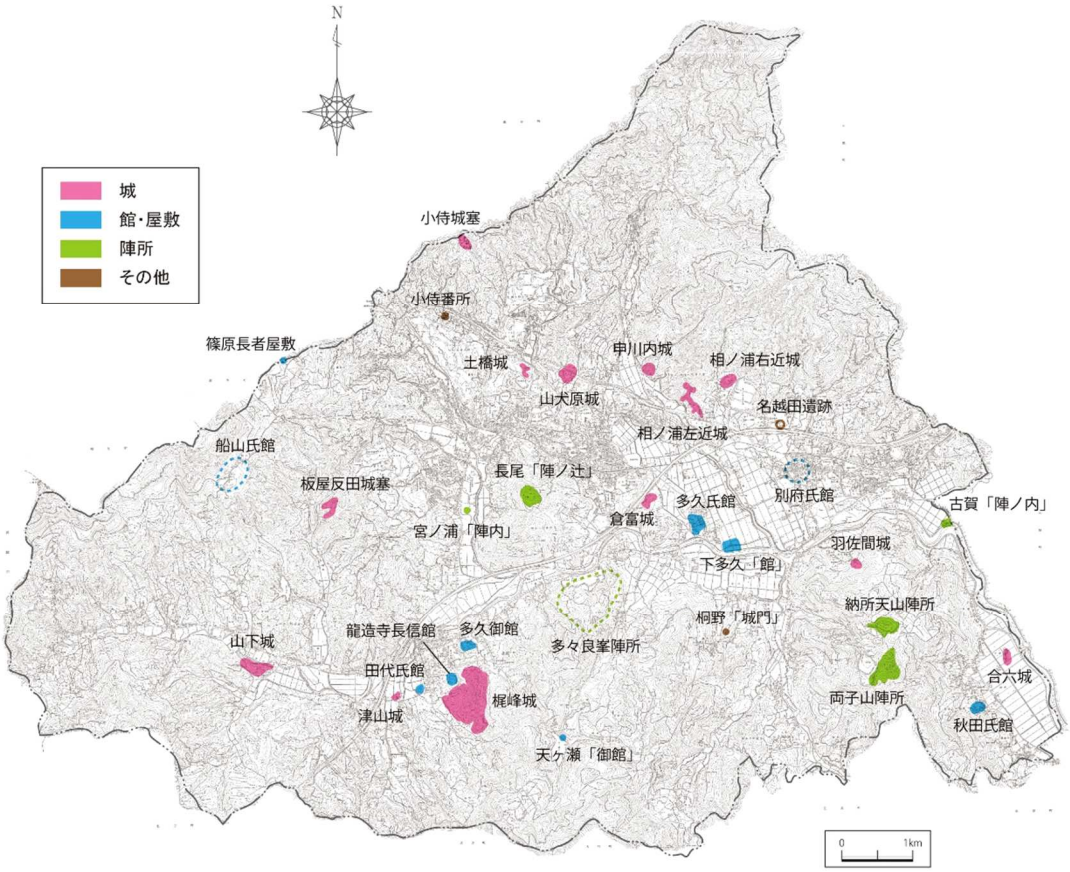


資料４　古墳・飛鳥・奈良・平安時代遺跡

写真２　唐人古場窯跡出土品
（多久市郷土資料館）



資料５　鎌倉・室町・安土桃山時代遺跡



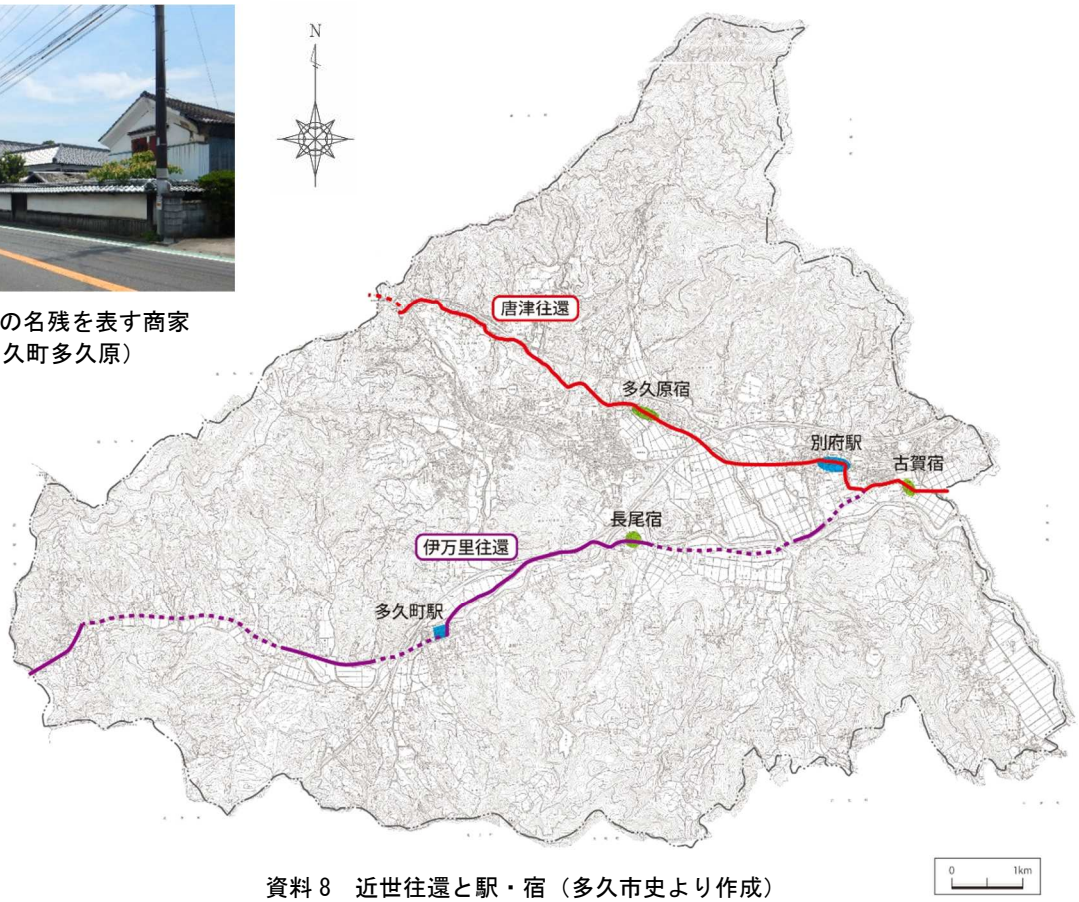
資料 6　中世近世城郭

写真 3　旧武家屋敷
（多久町東の原）

写真 4　保四郎窯跡出土品
（多久市郷土資料館）

資料 7　江戸時代遺跡

写真 5　宿の名残を表す商家
（北多久町多久原）



資料 8　近世往還と駅・宿（多久市史より作成）

多久市炭坑一覧
（昭和20年前後の多久地区の炭坑分布）

1	明治鉱業所立山炭鉱
2	柚木原炭鉱組合川崎鉱→北島鉱
3	柚木原炭鉱組合北島炭鉱
4	中央炭鉱
5	佐々木炭鉱
6	柚木原炭鉱組合鳥越鉱
7	柚木原炭鉱組合鳥超鉱
8	柚木原炭鉱組合小林鉱→松南炭鉱
9	多久鉱業所多久炭鉱二坑
10	柚木原炭鉱組合吉原鉱
11	柚木原炭鉱組合畑瀬鉱
12	柚木原炭鉱組合東島鉱
13	柚木原炭鉱組合川内鉱
14	柚木原炭鉱組合北島鉱
15	多久鉱業所多久炭鉱排気坑
16	番所炭鉱
17	多久鉱業所多久炭鉱三坑
18	多久鉱業所多久炭鉱砂原鉱
19	三菱鉱業所古賀山炭鉱
20	北島炭鉱
21	中山炭鉱＝川副炭鉱
22	多久原炭鉱
23	山犬原炭鉱
24	蜂谷炭鉱
25	明治鉱業所明治佐賀炭鉱
1'	山口鉱山小城炭鉱
2'	山口鉱山別府炭鉱
3'	三菱鉱業所古賀山炭鉱

資料：多久市史第4巻現代編より

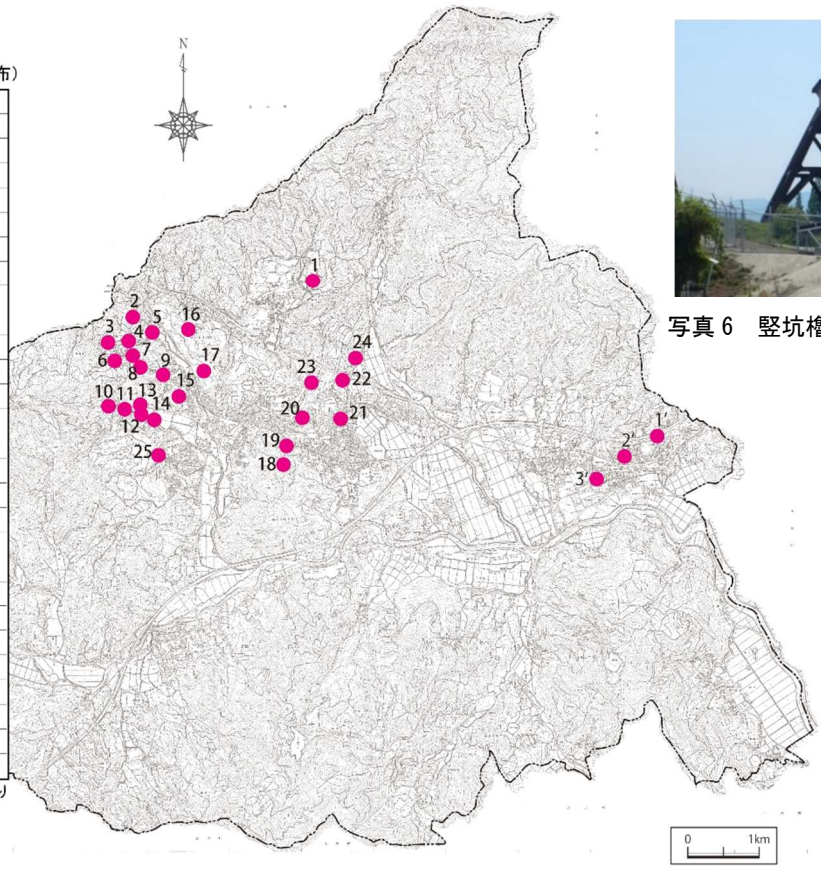
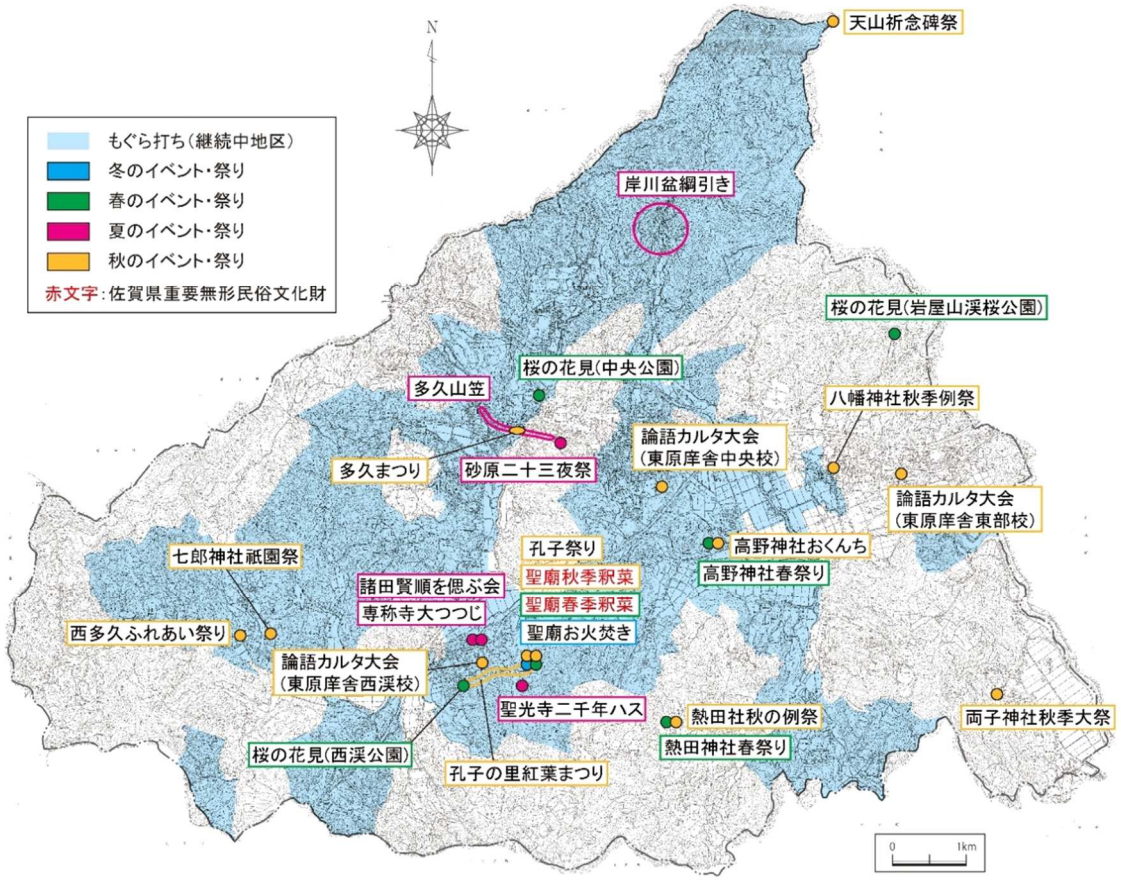


写真 6　竪坑櫓跡（東多久町）

資料 9　炭坑図（多久市史より作成）

資料 10　多久市の主なイベント・祭り一覧

分類	名称	時期	場所
イベント	七草がゆ会	1月上旬	川打家住宅、森家住宅
無形文化財	もぐら打ち	1月14日	各地
イベント	桜の花見	3月下旬	西渓公園、中央公園、岩屋山渓桜公園
無形文化財	聖廟春季釈菜	4月18日	多久町東の原
無形文化財	高野神社春祭り	4月9日	南多久町西ノ谷
無形文化財	熱田神社春祭り	4月21日	南多久町後野・平原
イベント	専称寺大つつじの見ごろ	6月10日前後	多久町東の原
イベント	聖光寺二千年ハスの見ごろ	6月下旬～7月中旬	多久町東の原
イベント	諸田賢順を偲ぶ会	7月13日	多久町東の原（専称寺）
無形文化財	砂原二十三夜祭	7月23日	北多久町砂原
無形文化財	多久山笠	8/15.16	北多久町多久駅周辺を巡行
無形文化財	岸川盆綱引き	8/15、2年に一度	北多久町岸川
無形文化財	七郎神社祇園祭	9月15日	西多久町板屋
イベント	天山祈念碑祭	10月第一土曜日	北多久町岸川（天山山頂）
無形文化財	八幡神社秋季例祭	9月23日	東多久町別府
無形文化財	聖廟秋季釈菜	10月第4日曜日	多久町東の原
イベント	孔子祭り	10月第4日曜日	多久町東の原
無形文化財	高野神社おくんち	10月19日	南多久町西ノ谷
無形文化財	両子神社秋季大祭	10月19日	東多久町平林
無形文化財	熱田社秋の例祭	10月21日	南多久町後野・平原
イベント	多久まつり	10月下旬～11月上旬	北多久町多久駅周辺、他
イベント	西多久ふれあい祭り	11月第2日曜日	西多久板屋
イベント	論語カルタ大会	11月	義務教育学校体育館（3つ学校の回り持ち）
イベント	孔子の里紅葉まつり	11月中旬～	西渓公園～聖廟
イベント	聖廟お火焚き	12/31～元旦	多久町東の原

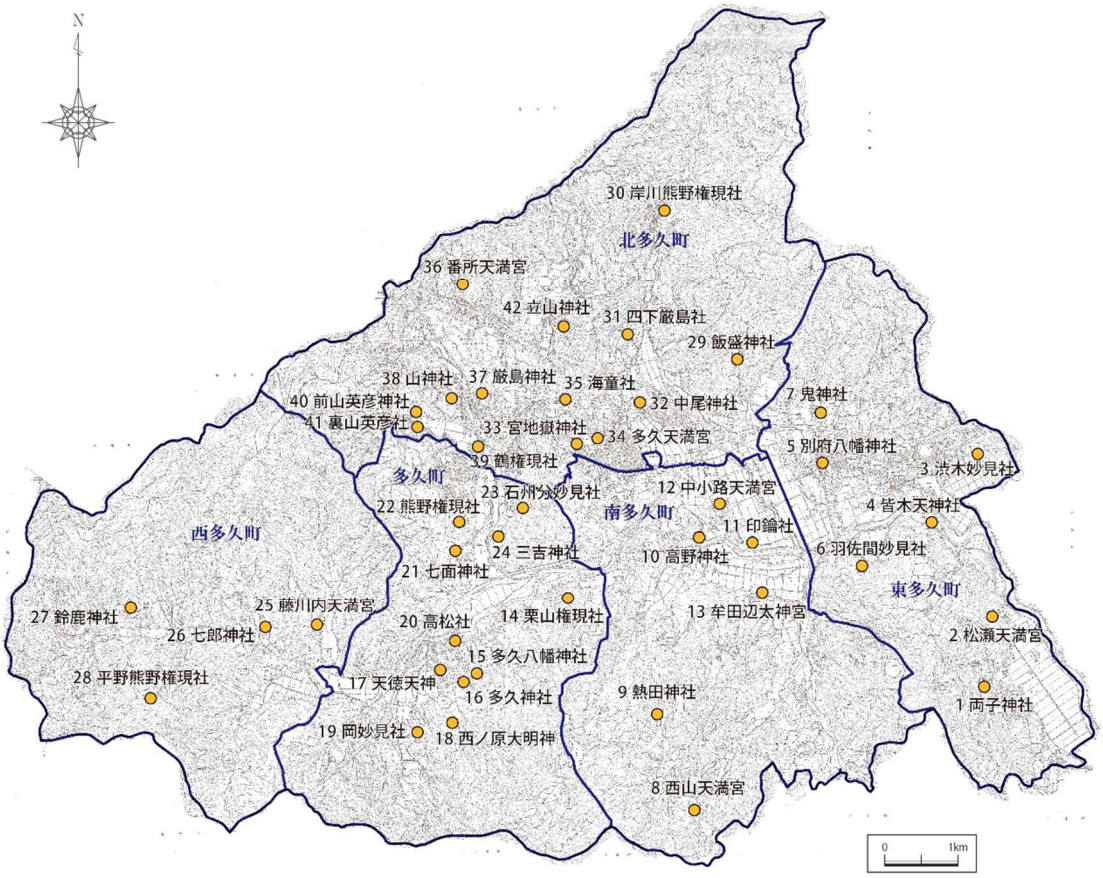


資料 11　多久市の主なイベント・祭り一覧

資料 12　多久市内の神社一覧

多久市史第 5 巻民俗編より作成

	名称	祭神	所在地	概要
1	両子神社	大山咋命・伊邪那美命・事解男命・速玉男命・天照皇大神	東多久町平林	明治43年、両子山王権現社（995年創建）と湯峯山熊野権現社（957年）が合併し、五神とした。
2	松瀬天満宮	菅原道真	東多久町松瀬	境内には1561年に造立された経典供養塔などがある。
3	渋木妙見社	北斗七星	東多久町渋木	多久家家臣鴨打家胤1589年創建。
4	皆木天神社	菅原道真･同夫人･同世子	東多久町古賀一区	元禄以前より存在する。
5	別府八幡神社	応仁天皇・神功皇后・武内宿祢・少童命	東多久別府二区	1528年龍造寺家兼が宇佐八幡宮より分霊させ祭祀。その後明治14年現在の地に遷座される。
6	羽佐間妙見社	北斗七星	東多久町羽佐間	1573年田中土佐泰慶が創建。明治40年移築。
7	鬼神社	鬼鍛冶大明神	東多久仁位所	1470年（或いは807年）鬼を退治する太刀の鍛冶を祀る。
8	西山天満宮	菅原道真・御嫡子・吉祥女	南多久町西山	二代目多久茂辰夫人の天性院（1667年没）の嫁入りに持参する田があった時に創建。
9	熱田神社	日本武尊・天叢雲劒・素戔嗚尊・簀姫命・伊弉諾尊・宇賀御魂命	南多久町平原	尾張名古屋築城の横山の住人が帰国する際に、熱田の小祠を持ち帰り創建した、1614年大坂冬の陣出陣の際に創建したとも言われる。
10	高野神社	紀州丹生都比売命・水罔象命・暗雄霊神・田心姫命・市杵島姫命・他	南多久町西ノ谷	1191年多久太郎宗直が紀州高野明神を勧請したと伝わる。龍造寺長信が朝鮮帰陣の時に再建し、多久領の宗廟とする。
11	印鑰社	国府の印と鑰(大己貴神か)	南多久町庄	創建時不明、1816年には存在し、一説には佐賀の国府が一時的に別府に移されたとき、その国府の鍵を保管したとの意見もある。
12	中小路天満宮	菅原道真	南多久町中小路	1784年建立の鳥居は下多久を采地とした中西氏が奉納している。
13	牟田辺太神宮	天照皇大神・豊受大神	南多久町牟田辺	神殿は1658年伊勢講衆15名によって造立された石祀である。
14	栗山権現社	熊野権現	多久町下鶴	棟札により1644年創建と定まる。
15	多久(若宮)八幡神社	応仁天皇・仁徳天皇・神功皇后・比賣大神・大山津見命・少彦名尊・三女神・大己貴命	多久町東の原	1193年多久太郎宗直が鎌倉の鶴岡八幡宮の若宮八幡を勧請して創建したとされ若宮八幡宮と称し、1572年龍造寺長信が神殿を再建。
16	多久神社	剛健霊神(龍造寺山城守家兼)・元心霊神(龍造寺長信)・浄祐霊神(多久安順)・多久茂族・多久茂文・西南戦争以後の戦死者155柱	多久町西の原	1844年多久茂族は先祖の家兼、長信、安順を祭祀するための新宮を創建、梶峰社と名付け、京都よりご神躰を遷座して遷宮式を行った。昭和26年多久神社と改めた。
17	天徳天神	菅原道真・同世子・吉祥女	多久町西の原	初め、多久安順・徳寿院が小祠を建立し、その後1814年多久茂鄰が宮殿造に再建した。
18	西ノ原大明神	西原大明神(養心院)	多久町西の原	1837年、多久茂澄が、多久茂堯の娘・養心院の霊を供養するために創建した。
19	岡妙見社	北斗七星	多久町岡	1735年建立された妙見大菩薩石祀が神殿、鳥居は1836年再建。
20	高松社	熊野権現	多久町東町	1759年町中から志を募り石鳥居を建立する。これは現存している。
21	七面神社	都土明神社の時は七郎権現	多久町撰分	前身の都土明神が1614年に再建されているから、創建はそれ以前。
22	熊野権現社	熊野本宮の神（家津御子大神、天神地祇13柱）	多久町宮ノ浦	往古石州分にあり大社であったと伝わり、牛馬に乗って通れば落ちるということから宮ノ浦に潜在された。1691年には存在していた。
23	石州分妙見社	北斗七星	多久町石州分	神殿となる石祀は1614年造立で、玉垣が廻らされている。
24	三吉神社	伏見稲荷大明神	多久町石州分	明治時代に病弱な子供のために京都伏見の稲荷大明神を勧請して祭祀した。
25	藤川内天満宮	菅原道真・吉祥女・菅原道真世子	西多久町藤川内	1710年銘の鳥居には4代領主多久茂文の名のもとに藤川内村の民が天満宮の鳥居を建てた。
26	七郎神社	平戸志自岐神（稚武王命）・海童神	西多久町板屋	1561年に板屋村の名頭が平戸から神霊を勧請して社殿を建立したと伝わる。
27	鈴鹿神社	大比古命・坂上田村麿・鈴鹿御前	西多久町谷	創建時は不明、小石祠は1669年、造立した阿弥陀如来種子が刻まれたものである。
28	平野熊野権現社	熊野権現	西多久町平野	朝鮮出陣の折、社殿山から昇竿を差出した由緒より武具林と申伝わり、1592年には社殿が存在し、文禄期以後、武運祈願の社となった。
29	飯盛神社	熊野権現（伊弉冉尊）	北多久町相の浦	下松浦の相神浦城主相神浦堅が多久に移り住んだ1179年に相神浦（現佐世保市）の飯盛権現を勧請し創建したと伝わる。
30	岸川熊野権現社	熊野権現（伊弉諾尊）丹邱邑史に記述あり。「初高所にあり、参詣不便利とて今の処に遷座なしたり、後略」	北多久町岸川	創建に豊臣秀吉の逸話がある。
31	四下厳島社	市杵島姫命	北多久町四下	神殿横の石造物群に1682年造立された弁財天石祀があり、本社創建の基本と考えられる。
32	中尾神社	中は素盞嗚尊、東は八王子五男三女、西は稲田姫命	北多久町多久原	1646年三代領主多久茂矩が京都祇園神を勧請し、多久原宿の氏神として創建した。
33	宮地嶽神社	神功皇后	北多久町中山	明治24(1891）年中尾神社の神官の発起により多久原区と中山区が合同で神殿を造営。
34	多久天満宮	菅原道真	北多久町中の原	神殿内に祭祀されている石祀は昭和11(1936）年の建立で、天満宮と刻まれている。
35	海童社		北多久町山犬原	鳥居は明治27(1894)年建立された。山犬原八龍社、山犬原愛宕社、弁財天社、がある。
36	番所天満宮	菅原道真・同夫人・同世子	北多久町番所	石祀には天満大自在天神と刻まれ、1688年造立されている。
37	厳島神社	田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命	北多久町荒原	1387年、当地の住民の代表数名が安芸国宮島弁財天に参詣し、分霊を乞うて創建したと伝わるが、社内の石祀には、1729年開基とある。
38	山神社	大山祇命	北多久町高木川内	厳木ダム建設に伴い、同町西宇土から昭和54年移築された。神殿の部材には1689年の墨書がある。
39	鶴権現社	熊野の神（伊弉諾尊・伊弉冉尊）	北多久町高木川内	鳥居の造立は1678年で、三代領主多久茂矩と四代領主多久茂文の名が刻まれている。
40	前山英彦神社	熊野権現	北多久町高木川内	丹邱邑史に、宝殿、拝殿などの記述がある。
41	裏山英彦社	熊野権現か	北多久町高木川内	参道には明治29(1896)年に造立された鳥居がある。
42	立山神社	越中立山神（伊弉諾尊・伊弉冉尊）	北多久町東原	神霊をこの地に奉祀して、生息していた大蛇の害を免れた。丹邱邑史に、宝殿、拝殿の記述がある。

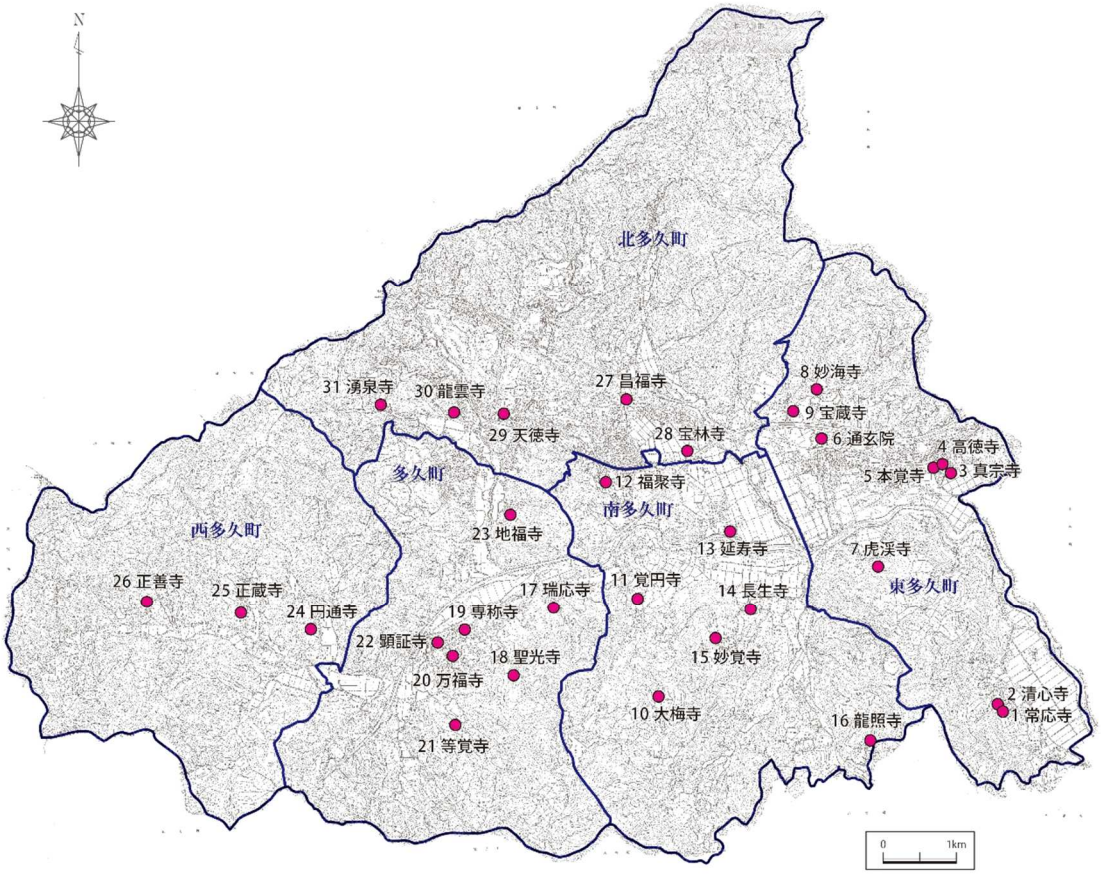

N
30 岸川熊野権現社
北多久町
36 番所天満宮
42 立山神社
31 四下厳島社
29 飯盛神社
38 山神社
37 厳島神社
35 海童社
32 中尾神社
7 鬼神社
40 前山英彦神社
41 裏山英彦社
33 宮地嶽神社
34 多久天満宮
5 別府八幡神社
3 渋木妙見社
39 鶴権現社
多久町
23 石州分妙見社
12 中小路天満宮
22 熊野権現社
南多久町
4 皆木天神社
西多久町
11 印鑰社
24 三吉神社
10 高野神社
6 羽佐間妙見社
21 七面神社
東多久町
27 鈴鹿神社
25 藤川内天満宮
20 高松社
14 栗山権現社
13 牟田辺太神宮
26 七郎神社
2 松瀬天満宮
15 多久八幡神社
28 平野熊野権現社
17 天徳天神
16 多久神社
9 熱田神社
1 両子神社
19 岡妙見社
18 西ノ原大明神
8 西山天満宮
0
1km

資料 13　神社位置図

資料 14　多久市内の寺院一覧

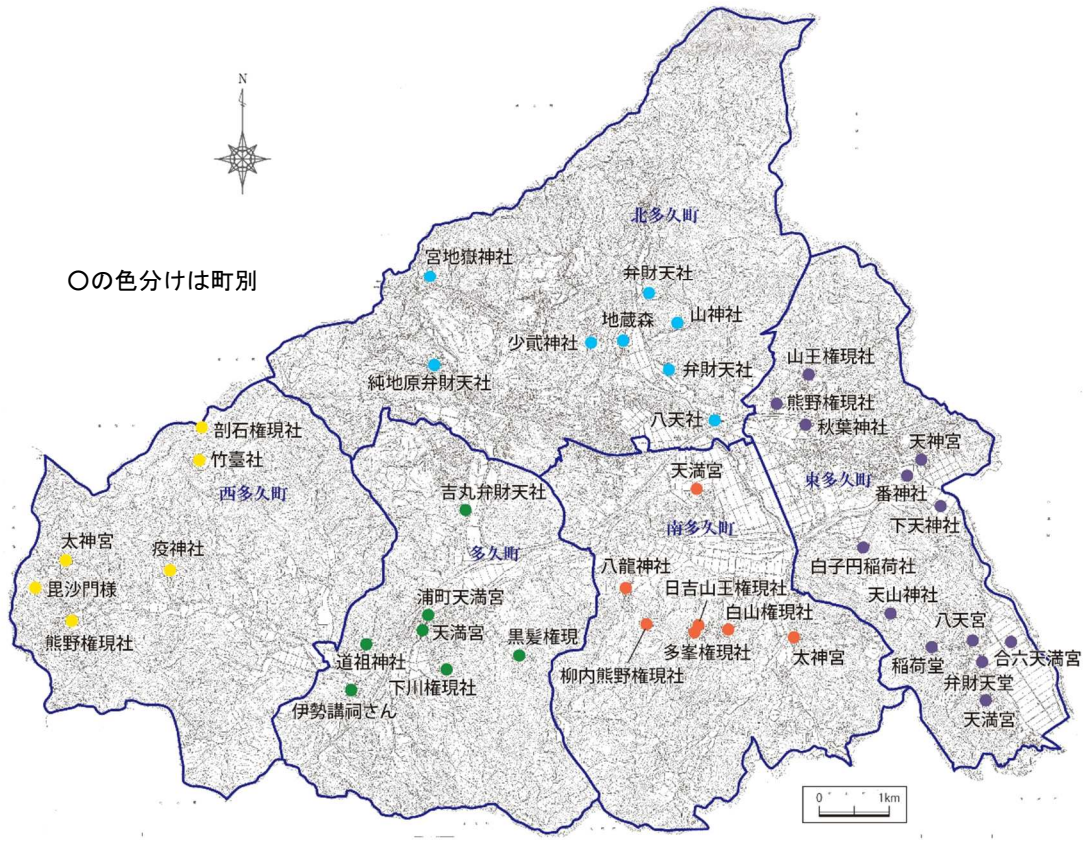
多久市史第 5 巻民俗編より作成

	名称	宗派	所在地	概要
1	歓喜山 常応寺	臨済宗 南禅寺派	東多久町大門	納所次郎豊次が菩提寺として建立、天台宗の寺院が、荒廃し、1596年再興して禅宗に改めた。
2	佛頭山 清心寺	曹洞宗	東多久町大畑	松永兵馬豊和が創建し、開山は鎮叟守宅和尚（1619年没）、龍澤寺（江北町）の末寺であった。
3	無量寿山 真宗寺	浄土真宗 本願寺派	東多久町渋木	各地から就労してきた炭鉱労働者の真宗門徒衆から建立を求められ創建した。
4	松岡山 高徳寺	真言宗	東多久町古賀二区東	大師堂として祈祷寺を創建、本尊は弘法大師（廃寺）。
5	吉谷山 本覚寺	日蓮宗	東多久町古賀二区東	1416年皆木の豪族吉谷氏が皆木村に堂を建て、開山後1888年現在地に移転。
6	慈雲山 通玄院	臨済宗 南禅寺派	東多久町別府二区	多久二代領主茂辰が島原の乱戦死者の霊を弔うために創建。
7	慈音山 虎渓寺	臨済宗 南禅寺派	東多久町羽佐間	円通寺二世石菴大和尚（1313年入寂）が開山、1501～1503年に再興。
8	浦寺山 妙海寺	日蓮宗	東多久町仁位所	当初は妙覚寺住持の隠棲の寺、山岳仏教の中継地、1442年日蓮宗に改め開基
9	長栄山 宝蔵寺	日蓮宗	東多久町宝蔵寺	開山は日軍上人と伝わり、深川勝妙寺末寺である。
10	仙桂山 大梅寺	曹洞宗	南多久町平原	多久茂順が開基、開山は諸説あり、横山多久家の菩提寺。
11	龍野山 覚円寺	浄土真宗 本願寺派	南多久町瓦川内	当初は一向宗の末寺として創建し、その後現瓦川内に移転
12	見性山 福聚寺	黄檗宗	南多久町長尾	三代領主多久茂矩が開基し、開山は桂厳和尚で、初め鹿苑寺と称す。
13	安国山 延寿寺	臨済宗 南禅寺派	南多久町庄	多久宗直が梶峰城を創建したのに伴い、旧居館陣内城を廃し創建したと伝わる。
14	永喜山 長生寺	臨済宗 南禅寺派	南多久町牟田辺	小城円通寺の末寺として創建、笑菴和尚が開山と伝わる。
15	桐野山 妙覚寺	天台宗	南多久町桐野	行基により勅願寺として創建され、その後荒廃し、勅命によって再興されたという。
16	東岳山 龍照寺	曹洞宗	南多久町田柄	三世東傳融丘大和尚が開山、創建したと伝わる龍澤寺（江北町）末寺
17	庭木山 瑞応寺	臨済宗 南禅寺派	多久町下鶴	開山は月珠和尚で上多久にあったが、1772年下鶴に移転。
18	杉尾山 聖光寺	真言宗	多久町東の原	龍造寺長信が梶峰城入城に際し、鬼門にあたることから、京都愛宕権現の本地勝軍地蔵を勧請して創建した神仏混淆の密教寺院。
19	光明山 専称寺	浄土宗	多久町東の原	行基が下多久平瀬に創建、初め天台宗であったが、1190年代に多久太郎宗直が梶峰城を築いた際に、現在地に移り、時宗となり、1545年頃浄土宗に改めた。
20	普応山 万福寺	曹洞宗	多久町西の原	覚養和尚が開山で、二世宅翁（1659年没）時には、既に曹洞宗であった。
21	西原山 等覚寺	日蓮宗	多久町西の原	渋木多久家祖が皆木に創建し、開山は日傳上人、1837年現地の東に移転。昭和7年現在地に移転。
22	福田山 顕証寺	浄土真宗 本願寺派	多久町浦町	開山は宗玄で、旧本町北裏にあったとされ、豊臣秀吉の名護屋出陣の折、縁があり河内顕證寺と同じ寺号に改める。
23	石州山 地福寺	曹洞宗	多久町石州分	円通寺5世玉室融椿大和尚（1479年没）が開山とされ、創建はそれ以前と思われる。
24	大応山 円通寺	曹洞宗	西多久町藤川内	1010年代に火災消失、真言密教の寺院。多久太郎宗直によって再建、玉翁融林和尚が曹洞宗開山一世になり、龍造寺長信が再興した。
25	法眼山 正蔵寺	曹洞宗	西多久町板屋	円通寺末寺で、開山は13世鶏山和尚、多久家より子孫繁栄と領内平安を依頼された。
26	慈雲山 正善寺	曹洞宗	西多久町谷	女山多久家（龍造寺長信従弟康房が初代）の菩提寺、江戸時代初め、康房の孫が再建し、曹洞宗に改める。
27	慈雲山 昌福寺	浄土真宗 本願寺派	北多久町多久原	顕証寺の末寺として小侍村に創建され、当時は菴室、1719年に現名に改め、1888年現地に移転。
28	東光山 宝林寺	曹洞宗	北多久町両の原	明暦3年（1657）以前の創建と思われるが、1695年開山の説もあり、初め下多久中小路に創建されたが、1880年現地に移転される。
29	高野山 天徳寺	真言宗 大覚寺派	北多久町筋原	地域の発展の核とするために地元有志によって大師堂、山門が完成する。
30	鴻源山 龍雲寺	曹洞宗	北多久町高木川内	円通寺二世一渓和尚が開山し、初め中多久村砂原の円通寺末寺であったが、1887年現在地に移転。
31	朝日山 湧泉寺	日蓮宗	北多久町高木川内	初め瀧の観音堂、のち朝日教会と称し、昭和27年現在地に新築し、現名として再興される。


N
北多久町
西多久町
多久町
南多久町
東多久町
31 湧泉寺
30 龍雲寺
29 天徳寺
27 昌福寺
28 宝林寺
8 妙海寺
9 宝蔵寺
6 通玄院
4 高徳寺
3 真宗寺
5 本覚寺
12 福聚寺
23 地福寺
13 延寿寺
7 虎渓寺
26 正善寺
25 正蔵寺
24 円通寺
17 瑞応寺
19 専称寺
22 顕証寺
18 聖光寺
20 万福寺
21 等覚寺
11 覚円寺
14 長生寺
15 妙覚寺
10 大梅寺
16 龍照寺
2 清心寺
1 常応寺
0
1km

資料 15　寺院位置図

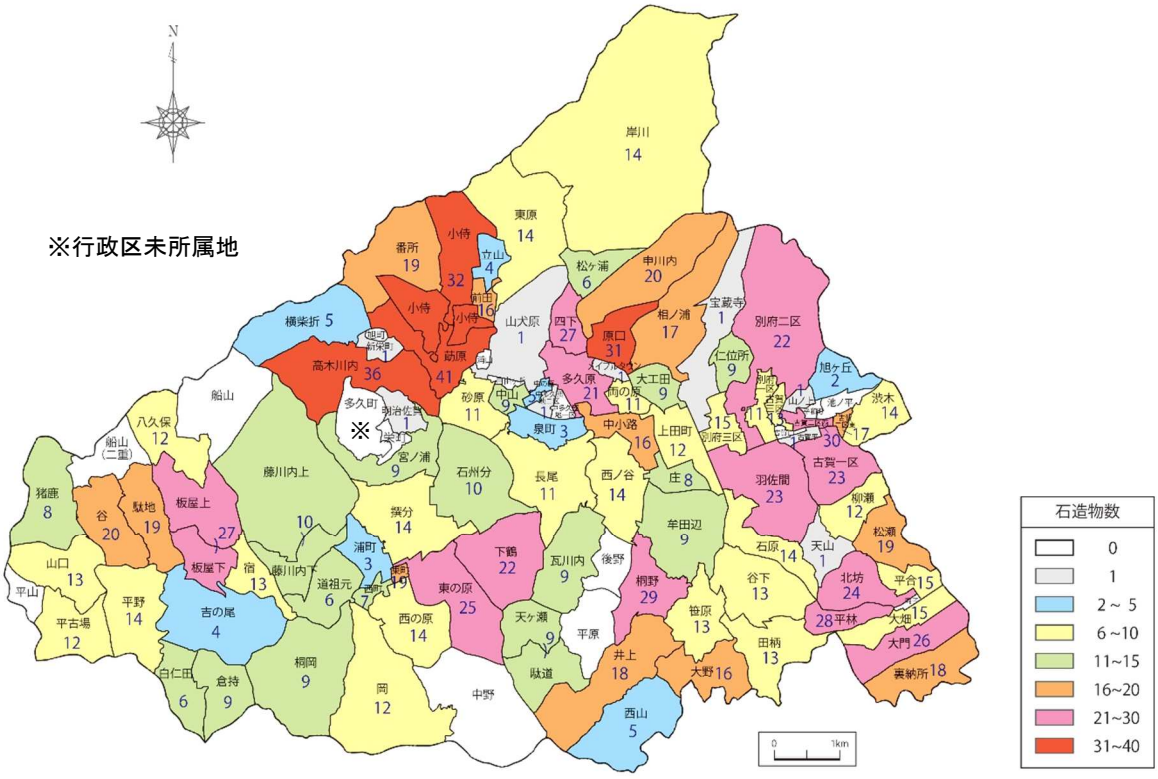
資料 16　堂位置図



資料 17　社位置図

石造物

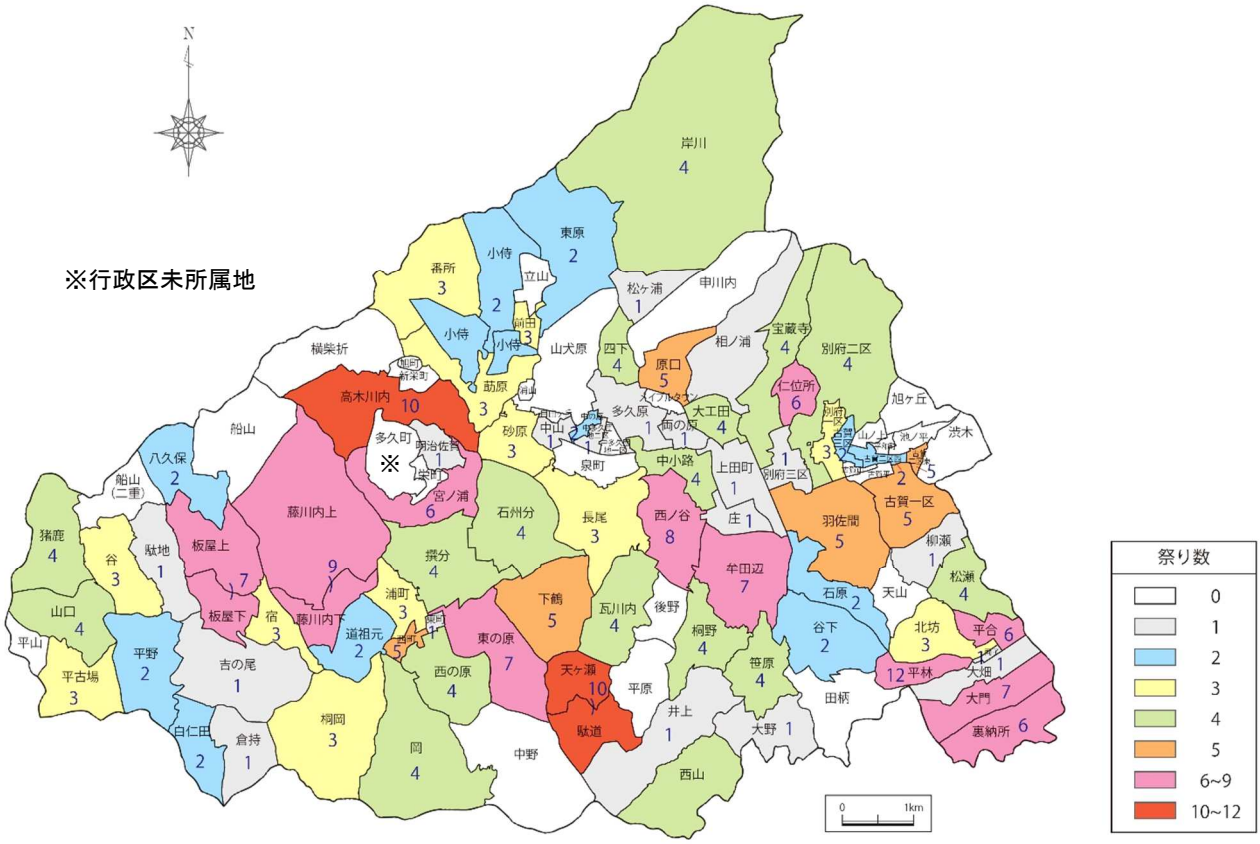
形態	名称など
塔	地主大明神塔　地神塔　中央塔　中央大日如来塔　刻像弁財天塔　山神宮塔　猿田彦大神塔 船山霊神塔　太良嶽大権現石塔　文字蛭子塔　西之宮大明神塔　刻像大黒天塔　多聞天王塔 宇佐八幡神社塔　七地蔵塔　毘沙門天像塔　妙見大菩薩像塔　穀神之主塔　諏訪大明神塔 八天宮塔　五穀神塔　豊満宮塔　宝満社塔　庚申塔　庚申六地蔵塔　青面金剛塔　五輪塔 木花開耶姫命塔　名号塔　天照皇太神宮塔　大日如来像日待塔　二十三夜塔　観音講塔 百万遍念仏塔　題目塔　層塔　読涌塔　一字一石塔　写経塔　逆修供養塔　三界万霊塔 南無観世音菩薩塔　子安観音塔　馬頭観世音塔　地蔵菩薩塔　六地蔵塔　慈眼視衆生観音塔 四仏塔　三十番神塔　鬼子母神塔　宝篋印塔　他
石祠	天満宮石祠　中央神石祠　水神社石祠　弁財天石祠　厳島神社石祠　龍王石祠　山王社石祠 龍王三蛇石祠　風大明石祠　金毘羅大権現石祠　金毘羅神社石祠　沖大明神石祠　山神石祠 白山大権現石祠　観音講石祠　宮地嶽三柱神石祠　宮地嶽神社石祠　英彦神社石祠 天山社石祠　合祀大黒天石祠　稲荷社石祠　八幡大神社石祠　八幡宮石祠　愛宕神社石祠 毘沙門天石祠　摩利支尊天石祠　妙見大菩薩石祠　黒髪権現石祠　疱瘡神石祠　疫神社石祠 八天狗社石祠　秋葉神社石祠　秋葉大権現石祠　諏訪大明神石祠　二十三夜石祠 太神宮石祠　子安観音石祠　十一面観音石祠　大日如来石祠　他
像	恵比須像　大黒天像　弾丸除観音像　聖徳太子像　観世音菩薩像　十一面観音像　狐像 六体地蔵像　三十三観世音菩薩像　新四国八十八ヵ所観世音菩薩像　西国三十三所観音像 石原空照師像　薬師如来像　　新四国八十八ヵ所の諸仏像　新四国八十八ヵ所不動明王像 新四国八十八ヵ所アワ一番弘法大師像と釈迦如来　猪像　山王(猿)像　他
碑	天照皇太神宮碑　大宝聖林碑　兵糧小路舊跡碑　番所関所跡碑　斗南雀田君碑　紀念碑 板碑　鎮魂之碑　在日朝鮮人帰国記念樹の碑　草場佩川生誕地碑　農会設立五十年記念碑 耕地整理記念碑　多久茂族碑　日露戦争凱旋記念碑　他
殿	天満宮石殿　山王社石殿　熊野大権現石殿　道祖神石殿　他
鳥居	肥前鳥居　折衷型鳥居　小型鳥居　明神鳥居　他
その他	仰高門　石門　灯籠　肥前狛犬　水盤　丁石　道標　番号石　真言十三仏　石敢當　力石 石橋　西国三十三所観音の諸仏　蚕神社石祠　道祖神　他



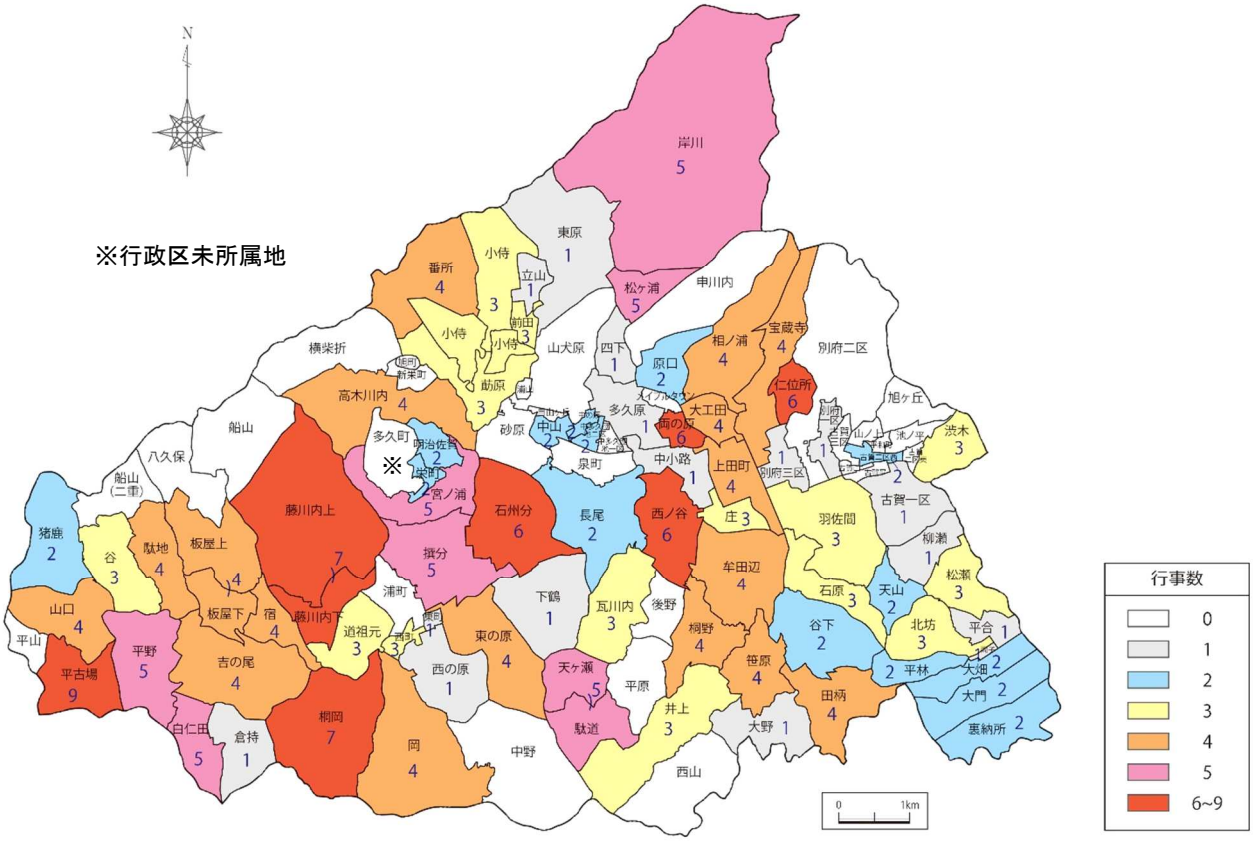
資料 18　行政区別の石造物数

祭りと行事

祭り **291 件**	宝満社祭　大般若さん祭り　恵比寿祭り　春の祈願祭　六体地蔵尊祭　水神祭り　風祭り　ムラ祭り 壱日祭り　薬師寺祭り　地蔵さん祭　彼岸祭り　十三日祭り　天山社祭り　巳て祭り　大黒天祭り 弁財天祭り　鬼子母神祭り　龍王さん祭り　ぼんたん祭り　満手餅祭り　むつごろう夏祭り　春祭り 阿弥陀様祭　風通夜祭　ナマス祭り　水の出口弁財天祭り　厄神さん祭り　12 月 15 日祭り 大神宮祭り　初祭り　暮祭り　八天祭り　二十五祭り　勘太郎慰霊祭　天神さん祭り　大黒さん祭り 宝満祭り　阿弥陀様祭　兵糧小路祭り　観音さん祭り　宝満宮祭り　八天さん祭り　ふれあい夏祭り 子供みこし祭り　天神祭り　八大龍祭り　社日　村祈祷・祇園祭り　五穀神祭り　五穀神さん　先祖祭り 風神祭り　権現さん祭り　十五日祭り　　中尾神社年末・年始祭　毘沙門天祭り　木村さん祭り 若宮さん祭り　土橋さん祭り　厄神さん祭　少弐さん祭り　宝満さん祭り　風神様祭り 立山神社例祭　金毘羅神社祭り　宝満社御田祭り　他
行事 **255 件**	もぐら打ち　灯篭付け　村祈祷　風籠り　鬼火焚き　さなぼり　彼岸籠り　権現さんお籠り　花煎り 宝満さんお籠り　天山さん籠り　風通夜　両子神社供日　風籠り灯夜　風透夜　お供日　花煎り十五夜 地蔵さん祇園　豆茶籠　彼岸道作り　春酒盛り　大般若さん　虫祈祷　お彼岸　お茶や　秋の彼岸籠り 岡相撲踊　おくんち　シメ縄作り　江隅墓地無縁仏供養　田植籠り　お日待 さなぼりさん　お茶講　神待ち　二百十日風籠り　村祈祷と新年会　神待ち透夜　お大師さん茶講 うどん打ち　宮地嶽供日　つくりあがり籠り　春餅搗き　彼岸行事　早苗ぶり　天満宮さん灯夜　阿弥陀さん灯夜　彼岸山道つくり　田植仕舞い御籠り　夏祭り子供みこし　盆踊り大会　他



資料 19　祭りの件数（行政区別）



資料 20　行事の件数（行政区数）

多久市の伝説（概要）

【鬼の鼻伝説】

昔この一帯に沢山の鬼が住み、村里に来ては村人に乱暴を働いた。村の鎮守の神様は鬼たちに提案した。「一晩のうちに富士山より高くて美しい山を築くことができたら、ここをお前たちにやる。できなかったら、ここを出ていけ。」

それを聞いた鬼たちは二手に分かれて東から西から、大きな掛け声とともに土や石をどんどん積み上げていった。鬼たちの力は強く、2 つの山はたちまち 1 つの大きな山になり始めた。神様は何か妙案はないかと考え、一番鶏に化けて大きな声で鳴くと、鬼たちは夜が明け始めたと思い逃げていった。鬼がつくりかけた山は、上を向いた顔のように見え、東の聖岳が額にあたり、西の山が尖った鼻に見えるため鬼の鼻山と呼ばれている。

【松浦佐用姫と長者原】

大伴狭手彦と松浦佐用姫の伝説は日本三大哀話として知られる。今から 1400 年も昔、朝廷は朝鮮半島の任那に援軍を送ることになり、狭手彦を指揮官に数千の兵が派遣された。松浦に滞在した狭手彦の身辺のお世話をしたのが長者原（北多久町横柴折）の篠原長者という豪族の娘松浦佐用姫だった。豪族の屋敷は花が咲き乱れお花屋敷と呼ばれていた。狭手彦は佐用姫と互いに好意を寄せたが、任務のため任那へ出発し、佐用姫は狭手彦との別れを嘆き悲しみ石になってしまったと伝える。

【百合稚伝説と鬼神社】

百合稚は松浦佐用姫伝説の中で、松浦に来ていた大伴狭手彦と、篠原長者の娘佐用姫の間に生まれ、長じて別府（東多久町）辺りを所領した。

ある時、百合稚は朝廷の命によって筑前国の異賊征伐（鬼退治）に向かい、慣れない船軍の戦いに疲れ、玄界島で寝入ってしまった。これを見た家臣の別府太郎宗冬は、主人百合稚を玄界灘の孤島に置き去りにして別府に帰り、百合稚の館を奪い居住した。別府川の付近には別府殿屋敷の地名が残るという。

鬼神社は百合稚が鬼退治のおり、鍛冶に太刀をつくらせたことから鍛冶を祀り、最初は鬼鍛冶社といったが、誤って鬼神社と伝えられた。

【核割れ梅】

少弐（武藤）氏は、建久 7（1196）年に源頼朝から太宰少弐の役と、筑前・豊前の守護職を任ぜられ、北部九州の政治、軍事の実権を握った。

少弐氏 13 代政資の時、周防の大内義興に敗れ、逃れた政資は、妻桔梗の父、梶峰城の多久宗時を頼るが叶えられず、ついに専称寺の境内で最期の時を迎えた。政資は本堂前の石に腰をかけ、辞世の一首を「花ぞ散る　思へば風の科ならず　時至りぬる春の夕暮れ」とのこすと、梅の実を噛み割って地に投げつけたのち自刃を遂げた。投げつけた梅の実はのちに芽吹き実をつけたが、その核は政資の噛み痕の名残か割れ目があったという。専称寺本堂前の梅の木をそれから核割れ梅といい、そばの石は政資が腰をおろした血曳きの石という。

政資の子、14 代資元も多久で最期を迎えており、父子の墓（少弐政資・資元父子の墓[市重文]）は専称寺墓地にある。

【柴折峠】

天正元（1573）年、武雄の後藤貴明の軍が志久村に進軍したとき、多久勢龍造寺長信軍の若武者与七郎は、物見として峠にさしかかり、後藤勢の八右衛門に出会った。与七郎は峠が血に染まるほどの死闘の末敗れて死んだ。与七郎の遺骸は放置されていたので、峠を行く人々が憐れみ柴を折って遺骸を覆い、与七郎の冥福を祈った。それから柴折峠と呼ばれたという。

【太閤の腰掛け水】

豊臣秀吉が朝鮮出兵のおり、名護屋城に向かう途中の渋木（東多久町）で喉が渇き、休息して腰掛け、槍で地面を突いたら水が湧き出したといい、太閤の腰掛け水と呼ばれている。現在の自動車学校そばの井戸のことである。

【金ケ江三兵衛伝説】

朝鮮出兵の際、鍋島直茂軍は道に迷い韓人に道案内を頼んだ。その韓人の姓は李といった。帰国の時、直茂は彼を連れ帰ることにし、多久安順の船に同船した縁で安順が預かることとなった。多久に帰り、安順が彼に祖国での職業を尋ねると、焼き物を焼いていたと言うので、窯を築かせたのが西の原の唐人古場窯跡（肥前陶器窯跡[国史跡]）と伝える。その後、山口（西多久町）の高麗谷や、藤川内（西多久町）の大山で窯を築いたが満足いかず、山を越え有田に行った。そこで陶石を発見し、磁器を焼いて今日の有田焼の基礎を築いたと伝える。彼は郷里の金江島にちなみ、日本名を金ケ江三兵衛に改めたといわれる。有田の地では、陶祖李三平と伝える。

【孝子吉之助と目達原仇討ち】

瓦川内（南多久町）の百姓与四兵衛は、佐賀城下で藩士の体に触れてしまい手打ちにされた。与四兵衛の息子で 16 歳になる吉之助は嘆き、仇討ちを決意、ちょうど武雄に剣豪宮本武蔵が滞在していると聞き、訪ねて教えを乞い弟子となった。

5 年の剣の修行に励んだ吉之助は、武蔵の口添えで鍋島直茂から侍の身分と、目達原（神埼郡吉野ヶ里町）で仇と立ち合うことが許され、武蔵直伝の唐竹割をあびせみごと仇を討ったという。

【多久聖廟と龍】

多久聖廟[国史跡・重文]に多久家の絵師、御厨夏園が描いた蟠龍と呼ばれる大きな龍の天井画がある。聖廟の創建から間もない頃、その龍は夜、池の水を飲みに天井を抜け出して村人を驚かせていた。

村人は龍が絵から抜け出さないようにうろこを一枚だけ剥がしたところ、それ以来、龍は天井におさまったという。

【林姫哀話】

江戸時代、多久 7 代領主茂堯の娘林姫は、身分の違う家臣の息子と恋に落ちて身籠った。流産することで不問にしようと計らった父茂堯であったが、送った使者たちはその意図をくめず、責められた林姫は 19 歳の若さで自害し、後に相手の男も切腹した。

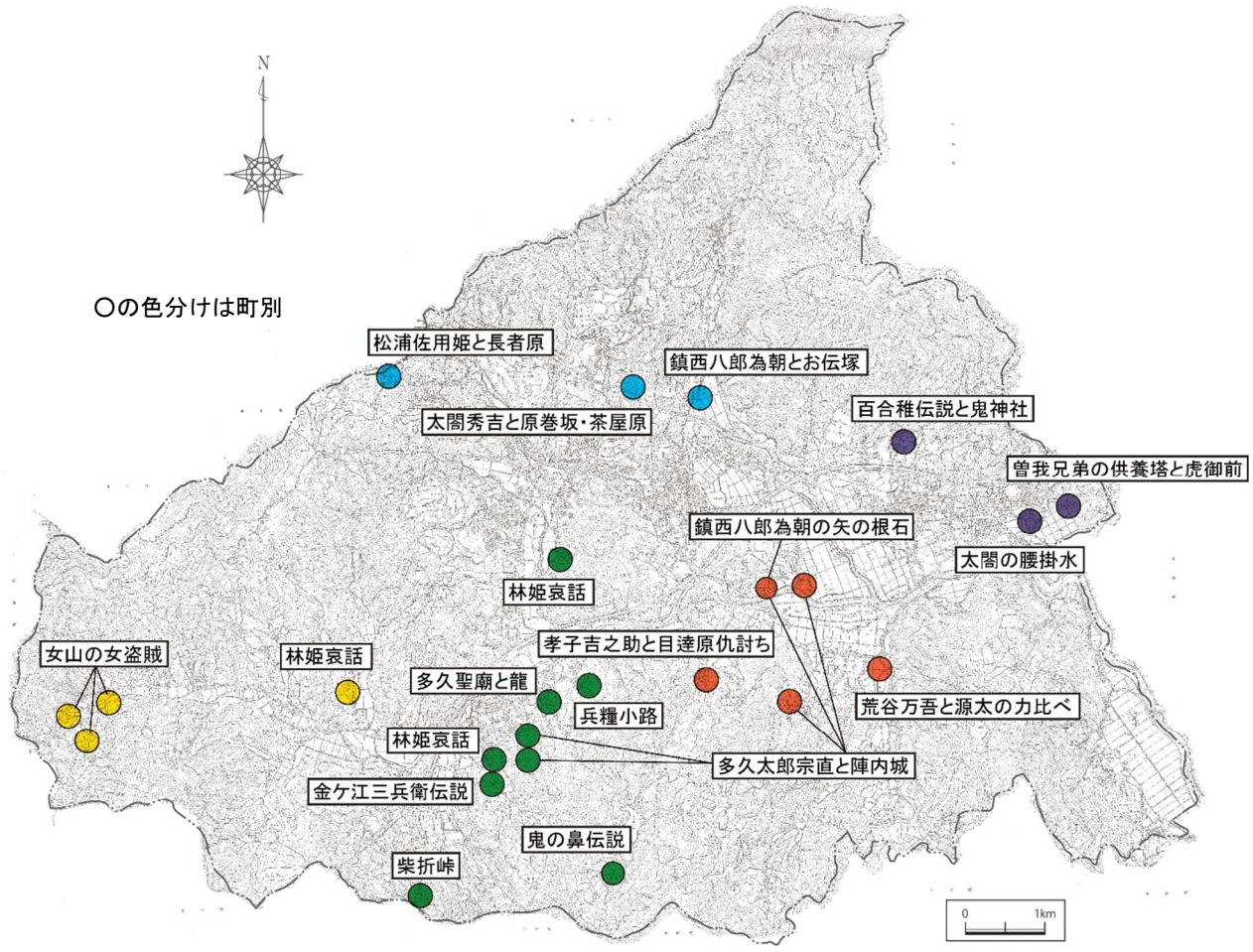
やがて多久家には凶事が相次ぐようになり、これを林姫の怨念と考えた 10 代茂澄は、高名な僧を招いて祈祷を行なったところ、林姫の霊が現れ「自分の霊はいまださまよっていたが、西の原に堂を建て祀れば、多久家の繁栄と女性の安産を守護する」と誓ったことから、同地に堂を建て、法華経を墨書し

た一字一石経[市重文]とともに林姫の遺骨を供養したのが、西の原大明神の始まりと伝える。現在も妊婦の安産祈願は絶えない。

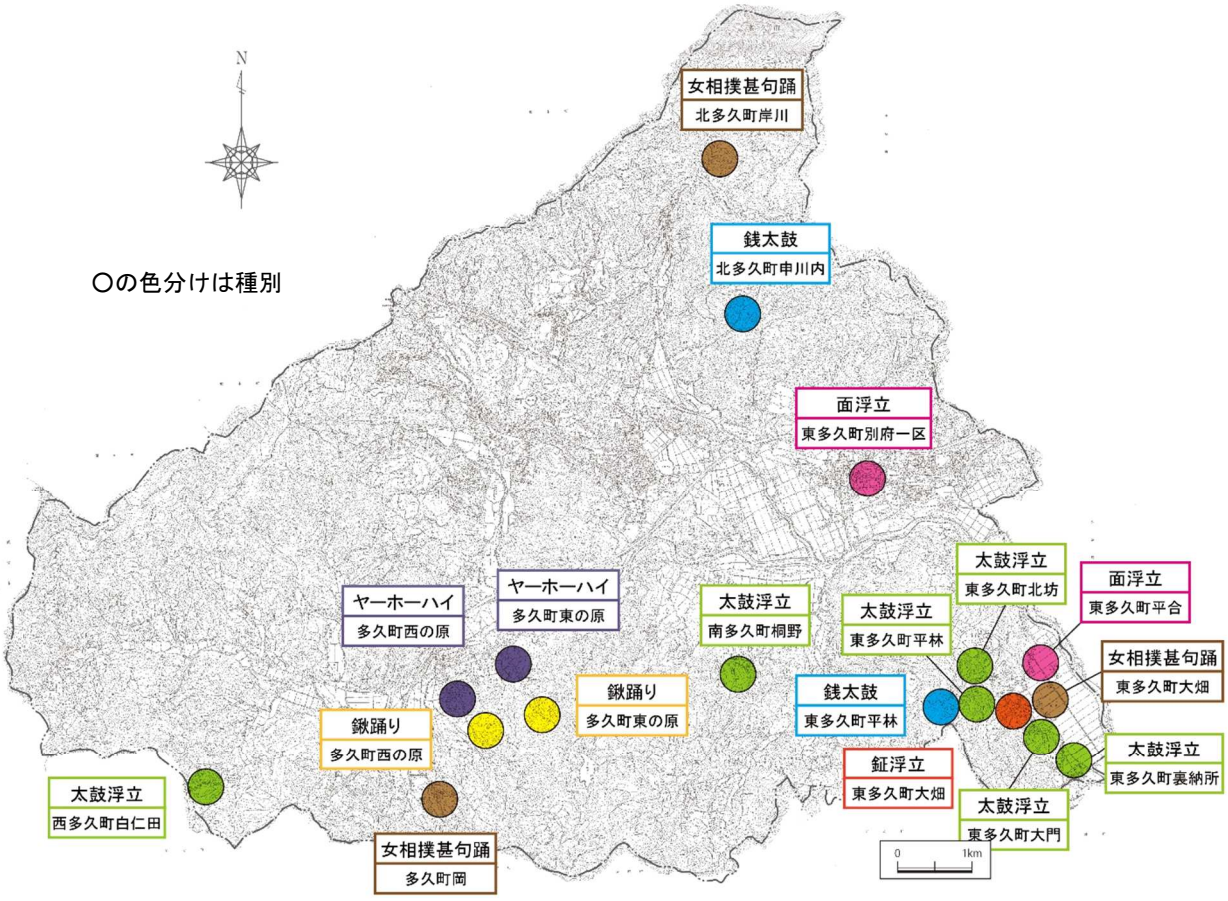
【女山（おんなやま）の女盗賊】

伊万里へと向かう女山峠には女盗賊が出没し、旅人を襲い恐れられていた。女盗賊の名はおつるといい、母は幼い頃に死に男手で育てられた。おつるが 16 歳の時、父は大金を借り、おつるを芸者屋奉公に出した。父は迎えに来るといったがなかなか来ず、やがておつるは身籠り、店を逃げ出し女山峠で盗賊となった。

盗賊で子どもを育てるには十分な蓄えができ、最後の仕事にと通り掛かった年寄りに短刀を振りかざしたとき、その年寄りはおつると呼んだ。お前に殺されてもいいという父におつるがすがりつくと、父は観音菩薩の姿になった。おつるはすべてを悔い改め、尼になりこれまで手をかけた人たちの菩提を弔ったという。



資料 21　伝説の場所



資料 22　郷土芸能開催場所

資料 23　アンケート調査結果

歴史文化に関するアンケート

平成 29 年　7 月　27 日
多久市教育委員会 教育振興課

本アンケートは、多久市歴史文化基本構想策定に伴う、昨年からの調査結果に基づいて、各行政区の実情をお聞きするものです。
よりよい基本構想策定に向けてお手数ですが、ご回答のほどよろしくお願い致します。

行政区名（　　）　嘱託員（回答者）ご氏名（　　）

1．地区の祭り・行事が年々減少していく傾向ですが、その理由を教えて下さい。
該当する場合に、カッコ内に○をお付けください（複数回答可）。

①祭り・行事の担い手が不足しているため　（　　）

②祭り・行事の関連施設、用具などが老朽化し利用できにくいため　（　　）

③祭り・行事を開催する費用が不足しているため　（　　）

④祭り・行事の技術、手法などが伝承されなかったため　（　　）

⑤その他　（　　）

2．地区において、何か工夫や新たな試みによって祭り・行事が維持・継承されている際、該当するカッコ内にその祭り・行事名をお書きください（複数回答可）。

①回数・頻度を考慮して実施している（回数を少なくするなど）。　（　　）

②主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）。　（　　）

③規模を縮小して実施している。　（　　）

④その他　（　　）

3．地区の歴史文化を維持・継承していくため何が必要だとお考えでしょうか。
ご自由にご記入をお願いいたします。

（　　）

以上です、ご協力ありがとうございました。

歴史文化に関するアンケート結果　（集計 H29/9/7 現在）

行政区 107 地区　嘱託員 104 人　回答 80 人（76.9%）

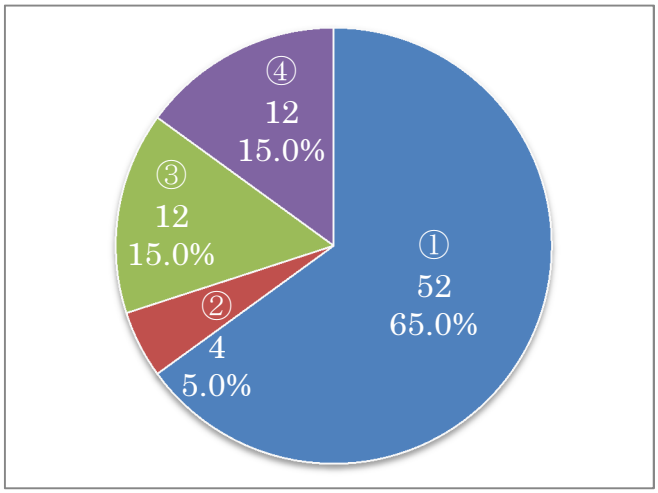
問 1

①担い手不足　52 件（65.0%）

②関連施設･用具等の老朽化　4 件（5.0%）

③費用不足　12 件（15.0%）

④伝承途絶　12 件（15.0%）



問 2

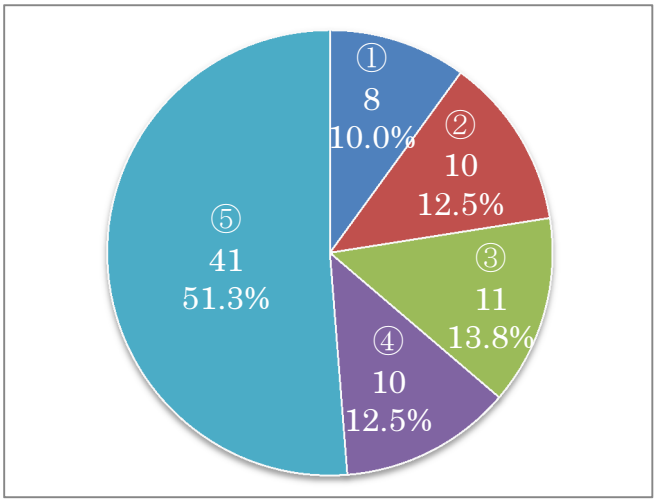
①回数･頻度を考慮　8 件（10.0%）

②主催団体改変　10 件（12.5%）

③規模縮小　11 件（13.8%）

④その他　10 件（12.5%）

⑤無回答　41 件



問３　祭り・行事の維持継承への工夫

町名	行政区名	祭り・行事の維持継承への工夫
東多久町	平合	八天山、天神さん→主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）
	松瀬	規模を縮小して実施
	古賀一区	規模を縮小して実施
	古賀三区	伝統行事である恵比須まつり（形骸化しているため）に子供の参加行事を増やす。 スイカ割・花火・かき氷つくり・願い事、笹の奉納
	別府一区	メンバーを他地域からも集っている
	別府三区	もぐら打ち→主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）
	仁位所	回数・頻度を考慮して実施している（回数を少なくするなど） 主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）
	旭ヶ丘	主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）
南多久町	長尾	4年生以上の男子で行っていた行事を全児童で行う。1年生女子も含めて
	西ノ谷	女性が仕事に行く様になったから時代の流れではないか
	庄	日時限定の祭りとか、日曜日に変更したりで、参加者の確保を行っている。 村祈祷、風ごもり、彼岸道つくり。
	笹原	祇園祭→規模を縮小して実施
多久町	下鶴	祇園祭・権現神社祭・兵糧小路祭→規模を縮小して実施
	東の原	開催日を→祝日、日曜日　合同祭→聖光寺冬祭り、黒髪神社祭り
	撰分	地区総会・地区懇親会→回数・頻度を考慮して実施している（回数を少なくするなど） 堤草払い→主催団体を変えて実施している（合同で行うなど） 区有林の下刈り→規模を縮小して実施
	栄町	規模を縮小して実施
西多久町	板屋上	規模を縮小して実施
	板屋下	回数・頻度を考慮して実施している
	船山	回数・頻度を考慮して実施　　村祈祷、日曜日　祇園祭
	谷	規模を縮小して実施　駄地疫神社祇園祭、彼岸ごもり年2回
	平古場	祇園祭、神待ち→青年団が担当していたものを全戸から3戸ずつで担当
	吉の尾	彼岸ごもり春→回数・頻度を考慮して実施している（回数を少なくするなど） 祇園祭り→規模を縮小して実施
北多久町	相の浦	主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）
	原口	木村祭→主催団体を変えて実施（合同で行うなど）
	岸川	盆綱引→隔年に
	四下	子供クラブ主催から区と子供クラブ合同主催へ
	中の原	子供みこし→回数・頻度を考慮して実施（回数を少なくするなど）
	東原	主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）してみたい
	番所	彼岸籠り、宝満社御田祭、田植え仕舞い御籠→規模を縮小して実施
	横柴折	行事は日曜日に実施

地区の歴史文化を維持・継承していくための重要なこと、自由意見

・祠までの取り付け道路がいのしし等により、崩壊して来ているため、行事実施が困難になってきている。（平合）
・担い手の育成（古賀一区）
・古賀平は、自治会が発足して歴史が浅く、古来からの祭典、伝統的な行事がない。（古賀平）
・歴史文化を維持し確実に伝承していく人が少ない。（山ノ上）
・歴史文化を理解される担い手が増加すれば良い。（別府一区）
・担い手の発掘、育成が重要。地区全体がかかわる事（別府三区）
・地区の役員がそれらを充分に理解して行事等を継続する努力をすることが重要。（仁位所）
・祭り、行事を維持、継承してゆくことが重要であると人々が思う心を育むこと。（池ノ平）
・当地区には祭、行事はありませんが、他区での実情を見て記入させていただきました。（旭ヶ丘）
・当部落に手は、神社、仏閣、歴史施設等、皆無の為活動無し（古賀山）
・納所の両子神社は昔ながらの風習に基づき従来通り神事を引き継いでおりますが今後の問題は多数あります。住民相互の理解と協力だと思います。私達の両子区は、もともと多久市外から転入して来たばかりの地区で、伝承できる文化も歴史遺産などもありません。25 年以上前、多久市に来た当初、区のコミュニケーション作りや仲間作りの為にママさんバレーチームを作ったりして友達同士のつながりを強くしていきました。そんな中、納所地区の太鼓浮立に出会い地元の伝承芸能に活動し、自分たちの区でもやっていこうと市の補助金やコミュニティ事業補助金を頂き、現在でも続いております。
※残念なことに多くの子供たちは市外、県外に出ており保存会を、続けていってほしい気持ちは、報われそうにもありません。大変残念に思いますが今のメンバーが永く続けられる様頑張って参ります。（両子）
・区民の減少傾向が問題である。若者流出がネックとなっている。（西山）
・人手が必要。若い方が、住みたいと思うのか。小集落は、人数が少ない上に役員の数が多くてすべての方が役員という形です。若い人が…子供…仕事の方も、市外に出られてます。（井上）
・地区、行事に関しては、幸いにもなんとか維持継承出来ているとおもいますが、区民の皆さんの理解が必要と思います。（瓦川内）
・地域住民の理解と応援が必要と考える。又、地域行事の広報のあり方等。（長尾）
・少子化で子供がおらず伝えられない。（上田町）
・歴史、文化の継承はもちろん必要だが、少しは現代風に中味を変えて、実施する事も必要と思う。（西の原）
・子供達に地区の歴史文化を継承していきたい。（浦町）
・地区や班ごとの懇親会等の飲方が少ない（撰分）
・地区の班長、月番さん方に協力してもらって普通どおりに行っていく。（宮ノ浦）
・住人が減少している為にこれから先、行事の実行が、難しくなる可能性がある。（明治佐賀）
・地元の歴史を学ぶ→子供達が地区の老人達と一緒に学ぶ。地区の氏神様が高所に祭られている為、地区住人の高齢化にともない行事のほとんどが地区公民館で行っている。以前は各班毎に、区の行事を当番制にして回していたが、区民の減少で、むずかしくなっている。（山口）
・祭り・行事のいわれが伝承されていない（文書化等）ため、その必要性が理解されていない。再度、地区の歴史・行事のいわれ等を文書化することが重要と考える。（平山）

・規模を縮小してでも、地域全体で何とかやっていくべき。普段から若い人へ伝承していくことが必要である。（平古場）
・区の人員が少なくなったため、行事ができない。（倉持）
・人口を増やす（相の浦）
・年間行事表により現在実施しているが、参加する人(高齢化している為)が少なくなっている。費用の問題等（松ヶ浦）
・歴史の事が余り理解されていない。立山神社を基本に於いて実施してはどうかと考えている。（東原）
・小侍区北方の「不動院：オタキ」への参拝者が全くない状況となっている。お堂も老朽化している、参道の清掃も難しく、「お観音さん」境内へ移設(石造物 6 体)を検討中です。なお、移設すれば、市教育振興課へ小侍区よりご連絡いたします。（小侍）
・住民の協力（高木川内）
・夏祭りを現在、どうにか維持しているが、継承に不安である。（住民の高齢化）（中多久団地一区）
・区民の理解と協力が全て（泉町）

資料 24　多久市の先覚者一覧

東原庠舎（多久郷校）教授陣（教諭など含む）

姓　号(名)	名	通　称	字	号	生　没　年	生没年(西暦)
河浪　自安	道忠	忠兵衛	信甫	自　安	寛永12 ～ 享保 4	1635 ～ 1719
毛利　一閑	由昌	彦十		一　閑	貞享 2 ～ 宝暦 6	1685 ～ 1756
鶴田　省菴	精	平兵衛	極夫	省　菴	正保元 ～ 享保16	1644 ～ 1731
河浪　質斎	道義	所左衛門	路甫	質　斎	寛文12 ～ 享保19	1672 ～ 1734
尾形　石可	惟重	彌三郎	復夫	石　可	承応元 ～ 元文元	1652 ～ 1736
山田　柴菴	昌相		成伯	柴　菴	寛文 2 ～ 元文 4	1662 ～ 1739
鶴田　松山	忠	九郎太夫		松　山	天和元 ～ 延享 2	1681 ～ 1745
尾形　(惟精)	惟精	七郎兵衛			生没年未詳	生没年未詳
深江　(順正)	順正	三太夫	純孝		貞享元 ～ 宝暦 9	1684 ～ 1759
原　花村	浄忠	市右衛門	忠重	花　村	貞享 3 ～ 明和 2	1686 ～ 1765
原　花祭	五	五太夫	士岳	花　祭	享保元 ～ 明和 6	1716 ～ 1769
石井　鶴山	有	有助	仲車	鶴　山	延享元 ～ 寛政 2	1744 ～ 1790
尾形　洞淵	惟民	彦右衛門	忠顕	洞　淵	享保10 ～ 文化 2	1725 ～ 1805
石丸　苔石	良篤	十兵衛		苔　石	寛延 8 ～ 文化 4	1750 ～ 1807
石丸　亀峰	良幹		礼介	亀　峰	享保20 ～ 文化 9	1735 ～ 1812
吉岡　(久寛)	久寛	源太郎のち平左衛門			明和 5 ～ 文政11	1768 ～ 1828
古賀　衡南	榮猷	形右衛門	子温	衡　南	寛政 8 ～ 天保 5	1796 ～ 1834
徳永　慎斎	恒	純右衛門		慎　斎	宝暦 3 ～ 天保 7	1753 ～ 1836
相浦　梅渓	宗敬	五平太	子輿	梅　渓	宝暦 4 ～ 天保 9	1754 ～ 1838
深江　簡斎	順房	三太夫	伯良	簡　斎	明和 8 ～ 弘化 5	1771 ～ 1848
福地　黙斎	忠利	鹿之助	君夏	黙　斎	文政元 ～ 嘉永 4	1818 ～ 1851
西　鼓岳	賛	賛三郎・在三郎	叔襄	鼓　岳	享和 3 ～ 安政 4	1803 ～ 1857
大島　楷村	坤	五郎兵衛	元吉	楷　村	文政10 ～ 安政 6	1827 ～ 1859
高取　虚白堂	厚	量三郎のち大吉郎	延博	虚白堂	？　～ 慶応元	？　～ 1865
副島　擇里	紀備	秀九郎のち四郎兵衛	公漢	擇　里	文化 6 ～ 安政 6	1809 ～ 1859
石丸　魯哉	良連	十兵衛	子湖	魯　哉	天明 6 ～ 慶応 3	1786 ～ 1867
草場　佩川	韡	瑳助	棣芳	佩　川	天明 7 ～ 慶応 3	1787 ～ 1867
藤崎　静所	熊	小左衛門	西祥	静　所	文化10 ～ 明治 4	1813 ～ 1871
南里　石鼎山人	舜民	四郎右衛門	君風	石鼎山人	享和 2 ～ 明治 8	1802 ～ 1875
鶴田　鶴陰	凞	羽左衛門	淳甫	鶴　陰	文化 6 ～ 明治10	1809 ～ 1877
南里　松童	質夫	圭一郎のち藏太	君樸	松　童	文政 8 ～ 明治11	1825 ～ 1878
江口　烏水	帆	平之進	萬里	烏　水	？　～ 明治11	？　～ 1878
副島　地潜	本格	益三郎のち本格	仲知	地　潜	天保10 ～ 明治13	1839 ～ 1880
鶴田　嫩坨	斌	平治のち十郎兵衛	仲斌	嫩　坨	寛政12 ～ 明治14	1800 ～ 1881
於保　古江	貞夫	武十のち貞夫		古　江	？　～ 明治15	？　～ 1882
澤井　梅野	咸	泰助	季山	梅　野	文化 7 ～ 明治17	1810 ～ 1884
草場　船山	廉	立太郎	立大	船　山	文政 2 ～ 明治20	1819 ～ 1887
鶴田　斗南	皓	豫太郎のち彌太郎	玄縞	斗　南	天保 5 ～ 明治21	1834 ～ 1888
須藤　悟山	忠模	修助	楷甫	悟　山	天保 2 ～ 明治22	1831 ～ 1889
田上　湖南	綽俊	馬之助	子裕	湖　南	天保 2 ～ 明治26	1831 ～ 1893
深江　帆崖	順暢	左馬之允	有美	帆　崖	文政10 ～ 明治26	1827 ～ 1893
馬場　鵞渓	亨		子宏	鵞　渓	天保元 ～ 明治27	1830 ～ 1894
古賀　種竹	静修	助太郎	景因	種　竹	弘化 3 ～ 明治29	1846 ～ 1896
徳永　桐岡	彰	八郎左衛門	其常	桐　岡	文化14 ～ 明治33	1817 ～ 1900
徳永　南塘	強	晋太郎	子南	南　塘	天保10 ～ 明治34	1839 ～ 1901
鶴田　飛陵	暢	喜八	静懐	飛　陵	嘉永 3 ～ 明治36	1850 ～ 1903
柴田　鶯谷	勝永	小太郎	思郷	鶯　谷	天保 3 ～ 明治35	1832 ～ 1902
中島　龍墟	亮平			龍　墟	天保10 ～ 明治37	1839 ～ 1904
石井　湯崖	忠亮	新平	子弼	湯　崖	天保 4 ～ 明治40	1833 ～ 1907
梶尾　虚舟	清		子潤	虚　舟	天保11 ～ 明治42	1840 ～ 1909
相浦　藍崖	宗惟	武兵衛	世允	藍　崖	天保 7 ～ 明治42	1836 ～ 1909
蒲原　素洞	政標	武七	伯表	素　洞	天保元 ～ 大正 5	1830 ～ 1916
福地　紫海	隆春	得三のち隆春	子詢	紫　海	天保12 ～ 大正 6	1841 ～ 1917
鳥越　東里	剛樸	廉蔵	子近	東　里	弘化元 ～ 大正 8	1844 ～ 1919
徳永　峡村	鉉	鼎	鼎郷	峡　村	文政11 ～ 大正 9	1828 ～ 1920

育　む

＜藩　校＞

弘道館（佐賀藩校）教授・教諭など

姓　号(名)	名	通称	字	号	起　用　年
石井 鶴山	有	有助	仲車	鶴山	天明元（1781）
石丸 亀峰	良幹		礼介	亀峰	天明 4（1784）
深江 簡斎	順房	三太夫	伯良	簡斎	寛政13（1801）
草場 佩川	韡	瑳助	棣芳	佩川	天保 6（1835）
袋（久平）	久平		允中		明治 2（1869）

鹿島学館（鹿島藩）教授

姓　号(名)	名	通称	字	号	起　用　年
相浦 梅渓	宗敬	五平太	子輿	梅渓	寛政元（1789）
石橋 琴潭	潤	平蔵	子牧	琴潭	天保11（1840）

田代学館（元厳原藩）教督

姓　号(名)	名	通称	字	号	起　用　年
草場 船山	廉	立太郎	立大	船山	明治 3（1870）

＜私塾の創設＞

名　称	所在地	創設者	創設年
千　山　樓	多久	草場 船山	嘉永 4（1851）
本　立　堂	大川野	草場 船山	明治 5（1872）
鶴陰学舎	須古	安住 百太郎	?
邛　須　舎		田上 綽俊	明治13（1880）
丹邱義塾	多久	田上 綽俊ほか	明治13（1880）
猶　興　舎	北方	石井 忠亮	?

＜官立学校＞

東京英語学校教員

姓　名	通　称	字	号	起　用　年
多久 茂穀	乾一郎			明治 9（1876）

東京大学助教授

姓　名	通　称	字	号	起　用　年
飯盛 挺造				明治14（1881）

（第四高校教授・東京師範学校教授）

東京電信学校教授

姓　名	通　称	字	号	起　用　年
鶴田　暢	喜八	静懐	飛陵	明治20（1887）

東京帝国大学工科教授

姓　名	通　称	字	号	起　用　年
志田 林三郎				明治20（1887）

（東京電信学校長）

第四高校教授

姓　名	通　称	字	号	起　用　年
高安 右人				明治21（1888）

（金沢医学専門学校長）

名古屋高等工業学校教授

姓　名	通　称	字	号	起　用　年
草場 季彦				明治38（1905）

（第七高等学校造士館教授・同志社大学豫科教授）

巣　立　つ

＜江戸後期入門者＞

弘道館（佐賀・藩校）

姓　号(名)	名	通称	字	号	進　学　年
深江 簡斎	順房	三太夫	伯良	簡斎	寛政 7（1795）
草場 佩川	韡	瑳助	棣芳	佩川	文化元（1804）
西　鼓岳	賛	賛三郎	叔襄	鼓岳	?
川浪 芦洲	道遠			芦洲	?
南里 格平	格平				?
多久 茂穀	茂穀	乾一郎			?

昌平黌（江戸・幕府）

姓　号(名)	名	通称	字	号	進　学　年
草場 佩川	韡	瑳助	棣芳	佩川	文化 6（1809）
西　鼓岳	賛	賛三郎	叔襄	鼓岳	文政 8（1825）
草場 船山	廉	立太郎	立大	船山	天保12（1841）
草場 西山	襲生	大次郎	仙客	西山	嘉永元（1848）

咸宜園（日田・広瀬淡窓）

姓　号(名)	名	通称	字	号	進　学　年
野口(貫一)	貫一		士梅		文政 8（1825）
藤崎 静所	熊	小左衛門	西祥	静所	天保 8（1837）
福地 黙斎	忠利	鹿之助	君夏	黙斎	天保12（1841）
音成(岩五郎)	岩五郎				天保12（1841）
松崎(雲岱)	雲岱				嘉永元（1848）
柴田 鶯谷	勝永	小太郎	思郷	鶯谷	嘉永元（1848）
横尾(太平)	太平				嘉永 3（1850）
良　(俊)	俊				安政 2（1855）
光吉(清連)	清連				文久元（1861）
成富(与市)	与市				文久元（1861）
森　(秀三)	秀三				文久 2（1862）
僧　(鉄心)	鉄心				文久 4（1864）
釋　(鉄翁)	鉄翁				元治元（1864）
釋　(智雲)	智雲				元治元（1864）

適々斎塾（大阪・緒方洪庵）

姓　号(名)	名	通称	字	号	進　学　年
尾形(良益)	良益				嘉永 2（1849）
西　(春涛)	春涛				安政 6（1859）

象先堂（江戸・伊東玄朴）

姓　号(名)	名	通称	字	号	進　学　年
山口(元逸)	元逸				嘉永 3（1850）
鶴　(蔵六)	蔵六				嘉永 3（1850）
尾形(良益)	良益				嘉永 3（1850）
岡橋(賢道)	賢道				嘉永 7（1854）
深江 帆崖	順暢	左馬之允	有美	帆崖	安政 3（1856）

＜明治初年入学者＞

長崎英学校・東京開成校

姓　名	通　称	字	号	進　学　年
袋　久平		允中		明治 2（1869）
鶴田　雄	揆一			明治 2（1869）
古賀 静修	助太郎	景因	種竹	?
鶴田　進				?

昌平大学

姓　名	通　称	字	号	進　学　年
多久 茂穀	乾一郎			明治 2（1869）
於保 貞夫	武十		古江	明治 2（1869）
副島 本格	益三郎	仲知	地潜	明治 2（1869）

（「巣立つ」続き）

工部省　寮

鉱山寮

姓　名	通　称	字	号	進　学　年
高取 伊好	生三郎	好郷	西渓	明治 5（1872）

電信寮

姓　名	通　称	字	号	進　学　年
石井 理一				?
鶴田　暢	喜八	静懐	飛陵	?

工学寮

姓　名	通　称	字	号	進　学　年
志田 林三郎				明治 5（1872）

外務省　洋語学所

姓　名	通　称	字	号	進　学　年
飯盛 挺造				明治 4（1871）

慶応義塾

姓　名	通　称	字	号	進　学　年
大塚 達徳		三甫		明治 4（1871）
高取 伊好	生三郎	好郷	西渓	明治 4（1871）

東京外国語学校

姓　名	通　称	字	号	進　学　年
高安 右人				明治 9（1876）
草場 謙三郎	謹三郎	士行	金台	明治10（1877）

海　を　越　え　て

海外留学・視察

姓　名	通　称	字	号	留学年・留学先
袋　久平		允中		明治 3（1870） 独・英・仏
鶴田　雄	揆一			明治 3（1870） 英・仏
多久 茂穀	乾一郎			明治 4（1871） 米
森　誠太郎				明治 4（1871） 米
鶴田　皓	豫太郎	玄縞	斗南	明治 5（1872） 欧
志田 林三郎				明治13（1880） 英 （グラスゴー大学）
飯盛 挺造				明治17（1884） 独 （フライブルグ大学）
石井 理一				明治23（1890） 欧
高安 右人				明治32（1899） 独

『多久市史第二巻近世編』『人物編』『重要文化財 多久聖廟』「儒林」及び、『東原庠舎創設三百年記念 東原庠舎と湯島聖堂』平成11年 多久市郷土資料館を参考に作成。

同書の参考文献

『多久聖廟沿革』　　大正 8年　大塚巳一著
『舊多久邑人物小志』　昭和 6年　舊多久邑史談会編
『佐賀県教育史第一巻』平成元年　佐賀県教育委員会編

文化庁
平成 29 年度文化芸術振興費補助金
（文化遺産総合活用推進事業）

多久市歴史文化基本構想

平成 30 年 3 月

発行　多　久　市
〒846-8501　佐賀県多久市北多久町大字小侍 7 番 1
協力　株式会社修復技術システム
〒812-0023　福岡市博多区奈良屋町 5 番 10 号